

三雲・井原遺跡Ⅺ

—三雲番上・石橋地区の調査—

糸島市文化財調査報告書

第 21 集

2019

糸島市教育委員会

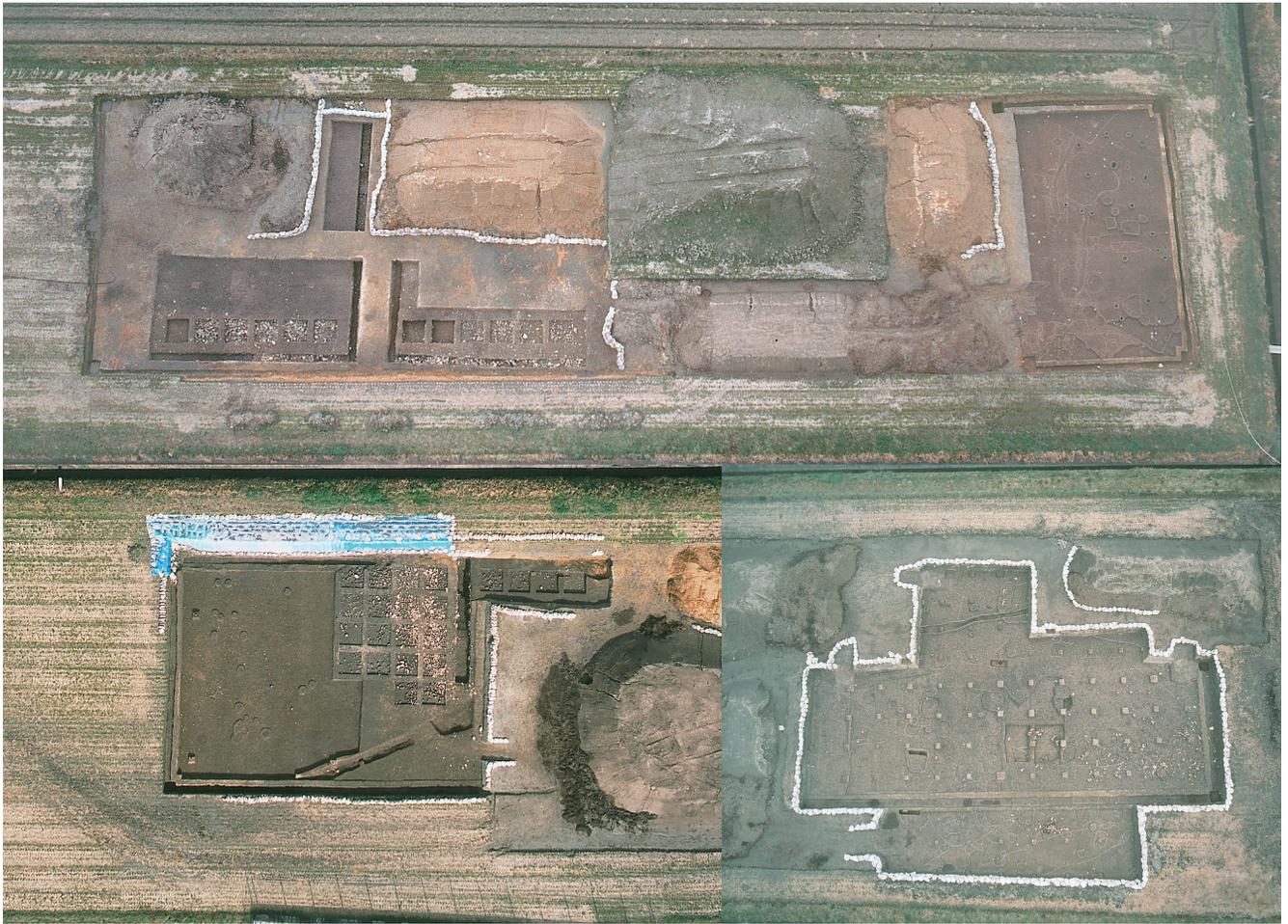


1-1 三雲番上330番地1次調査区から北を望む



1-2 三雲番上330番地2次調査区から端山古墳を望む

巻頭図版 2



2-1 三雲番上地区調査区配置図（上；332番地 左下；330番地1次、右下330番地2次）



2-2 三雲番上330番地1次調査土器溜り検出状況



3-1 板石硯（表面）



3-2 板石硯（裏面）

巻頭図版 4



4-1 石橋地区160番地全体写真（真上から）



4-2 11号箱式石棺墓床面検出状況（南から）

序

本書は平成17年と26～28年度に、三雲・井原遺跡において実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

三雲・井原遺跡が所在する糸島市は3世紀の歴史書『魏志』倭人伝に登場する伊都国が所在地に比定されており、古来より、中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点として我が国の文化形成に重要な役割を果たしてきました。

糸島市教育委員会では、平成6年度から三雲・井原遺跡の確認調査を継続的に行い、王に次ぐ有力者層の墳墓群や居館の濠を髣髴させる方形区画などの確認、板石硯などを確認し、これまでに知られていた三雲南小路王墓と合わせて、国史跡の指定を目指した取り組みを進めてきましたが、平成29年10月13日に市内8カ所目の国史跡として指定されました。今後は、市内に数多くの点在する貴重な文化財とともに、歴史と自然が息づく素晴らしい景観を含めて、その保護と活用が必要であり、本書が歴史解明の一助となれば幸いです。

なお、末筆となりましたが、三雲・井原遺跡等発掘調査指導委員会の委員の皆様、ご理解とご協力を頂きました地権者および周辺地域の方々、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご協力を頂きました関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成31年3月31日

糸島市教育委員会

教育長 家宇治 正 幸

例 言

1. 本書は糸島市に所在する三雲・井原遺跡で平成17年度と26～28年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書は平成30年度の国庫補助事業をうけ作成した。
3. 遺構の実測は調査を担当した江崎靖隆・平尾和久が行った。
4. 遺構の写真は空中写真を(有)空中写真企画・諫山広宣に委託し、その他は江崎・平尾が撮影した。また巻頭図版3は牛嶋茂氏撮影で、図版21の板石硯の赤外線写真撮影は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏にご協力頂いた。
5. 遺物の復元・実測・製図にあたっては、江崎・平尾のほか藤野さゆり・田中阿早緑・内山久世・蔵田和美・稲富良子が行った。
6. 本書の執筆は江崎と平尾が分担し、それぞれの本文末尾に執筆者の氏名を記している。
7. 玉類の分析と所見について、福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏に執筆頂いた。
8. 三雲・井原遺跡における調査区は小字と地番を用いた表記とする。
9. 出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下のとおり。

10. 本書で用いる座標は世界測地系である。
11. 本書の編集は平尾が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 位置と環境	2
I. 地理的環境	2
II. 歴史的環境	2
第3章 調査の記録	11
I. 番上地区332番地（平尾和久）	11
II. 番上地区330番地1次調査（平尾）	90
III. 番上地区330番地2次調査（平尾）	151
IV. 石橋地区160番地（江崎靖隆）	167
第4章 まとめ	195
I. 番上土器溜りについて	195
II. 番上地区出土の楽浪系土器・三韓系土器について	195
III. 板石硯について	196
IV. 鉄製品について	199
第5章 科学分析	202
三雲・井原遺跡番上地区出土ガラス小玉の保存科学的調査（比佐陽一郎）	202

挿図目次

第1図 糸島市の所在地	2	第11図 三雲番上332番地西側調査区2 Bグリッド出土遺物実測図3 (1/2・1/3)	17
第2図 糸島市主要遺跡分布図	3	第12図 三雲番上332番地西側調査区5 B～7 Bグリッド土器出土状況実測図(1/30)	18
第3図 三雲・井原遺跡を中心とした遺跡分布図	5	第13図 三雲番上332番地西側調査区3 B～7 Bグリッド出土遺物実測図 (1/2・1/3)	19
第4図 三雲・井原遺跡調査区配置図(1/7, 500)	7	第14図 三雲番上332番地西側調査区9 B～11 Bグリッド土器出土状況実測図(1/30)	20
第5図 本報告調査区配置図 (1/2, 500)	9	第15図 三雲番上332番地西側調査区9 Bグリッド出土遺物実測図1 (1/3)	22
第6図 三雲番上332番地西側調査区全体図(1/200)	11	第16図 三雲番上332番地西側調査区9 Bグリッド出土遺物実測図2 (1/2・1/3)	23
第7図 三雲番上332番地西側調査区全体図(1/150)	12	第17図 三雲番上332番地西側調査区9 Bグリッド出土遺物実測図3 (1/2)	24
第8図 三雲番上332番地西側調査区2 B～4 Bグリッド土器出土状況実測図(1/30)	14		
第9図 三雲番上332番地西側調査区2 Bグリッド出土遺物実測図1 (1/3・1/6)	15		
第10図 三雲番上332番地西側調査区2 Bグリッド出土遺物実測図2 (1/3)	16		

第18図	三雲番上332番地西側調査区10Bグリッド出土遺物実測図1 (1/3)……	25	第33図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図5 (1/3)……	43
第19図	三雲番上332番地西側調査区10Bグリッド出土遺物実測図2 (1/2・1/3)……	26	第34図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図6 (1/3)……	44
第20図	三雲番上332番地西側調査区12B～14Bグリッド土器出土状況実測図(1/30)……	27	第35図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図7 (1/3)……	45
第21図	三雲番上332番地西側調査区11・12Bグリッド出土遺物実測図(1/2・1/3)……	29	第36図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図8 (1/3)……	46
第22図	三雲番上332番地西側調査区12Bグリッド出土遺物実測図(1/2)……	30	第37図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図9 (1/3)……	48
第23図	三雲番上332番地西側調査区13・14Bグリッド出土遺物実測図(1/2・1/3)……	31	第38図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図10 (1/3)……	50
第24図	三雲番上332番地西側調査区南北土層断面図(1/60)……	32	第39図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図11 (1/3)……	51
第25図	三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ(東)出土遺物実測図1 (1/3)……	33	第40図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図12 (1/3)……	52
第26図	三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ(東)出土遺物実測図2 (1/2・1/3)……	34	第41図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図13 (1/3)……	53
第27図	三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ(西)出土遺物実測図1 (1/3)……	35	第42図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図14 (1/3)……	54
第28図	三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ(西)出土遺物実測図2 (1/3)……	36	第43図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図15 (1/3)……	55
第29図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図1 (1/3)……	37	第44図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図16 (1/3)……	56
第30図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図2 (1/3)……	38	第45図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図17 (1/2・1/3)……	57
第31図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図3 (1/3)……	40	第46図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)サブトレ①～③出土遺物実測図(1/2・1/3)……	58
第32図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図4 (1/3)……	41			

第47図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）サブトレ④・⑤出土遺物実測図（1/2・1/3）……………60	第63図	三雲番上332番地東側調査区8・9号住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3）……………80
第48図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図1（1/3）……………63	第64図	三雲番上332番地東側調査区4・7～10号住居跡実測図（1/60）……………81
第49図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図2（1/3）……………64	第65図	三雲番上332番地東側調査区1号溝出土遺物実測図（1/3）……………82
第50図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図3（1/3）……………65	第66図	三雲番上332番地東側調査区1～4号土坑実測図（1/30）……………83
第51図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図4（1/3）……………66	第67図	三雲番上332番地東側調査区1～4号土坑出土遺物実測図（1/2・1/3）…84
第52図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図5（1/3）……………67	第68図	三雲番上332番地東側調査区包含層出土遺物実測図1（1/2・1/3）……………85
第53図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図6（1/2・1/3）……………68	第69図	三雲番上332番地東側調査区包含層出土遺物実測図2（1/2）……………87
第54図	三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図7（1/2）……………69	第70図	三雲番上332番地東側調査区黒褐色包含層出土遺物実測図（1/2・1/3）…88
第55図	三雲番上332番地西側調査区包含層出土遺物実測図（1/2・1/3）……………70	第71図	三雲番上332番地東側調査区排水溝出土遺物実測図（1/2・1/3）……………89
第56図	三雲番上332番地北側調査区出土遺物実測図1（1/3）……………71	第72図	三雲番上330番地1次調査区全体図（1/150）……………91
第57図	三雲番上332番地北側調査区出土遺物実測図2（1/3）……………73	第73図	三雲番上330番地1次住居跡実測図（1/100）……………92
第58図	三雲番上332番地北側調査区出土遺物実測図3（1/2・1/3）……………74	第74図	三雲番上330番地1次土器集中区1・2出土遺物実測図（1/2・1/3）……………93
第59図	三雲332番地東側調査区全体図（1/100）……………76	第75図	三雲番上330番地1次土器集中区2・3出土遺物実測図（1/3）……………94
第60図	三雲番上332番地東側調査区1～3、5、6号住居跡実測図（1/60）……………77	第76図	三雲番上330番地1次土器溜グリット配置図（1/100）……………95
第61図	三雲番上332番地東側調査区1～3号住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3）……………78	第77図	三雲番上330番地1次グリット出土遺物実測図1（1/2・1/3）……………96
第62図	三雲番上332番地東側調査区4～7号住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3）……………79	第78図	三雲番上330番地1次グリット出土遺物実測図2（1/3）……………97
		第79図	三雲番上330番地1次土器溜南北トレンチ土層断面図（1/60）……………98
		第80図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図1（1/3・1/4）……………99
		第81図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図2（1/3）…100
		第82図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図3（1/3・1/4）……………101

第83図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図4 (1/3) … 102	第102図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図6 (1/2) … 121
第84図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図5 (1/2) … 103	第103図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区中層出土遺物実測図1 (1/3) … 122
第85図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図1 (1/3) … 104	第104図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区中層出土遺物実測図2 (1/3) … 123
第86図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図2 (1/3) … 105	第105図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区中層出土遺物実測図3 (1/2・1/3) … 124
第87図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図3 (1/2・1/3) … 106	第106図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区下層出土遺物実測図1 (1/3) … 125
第88図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図4 (1/2) … 107	第107図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区下層出土遺物実測図2 (1/3) … 126
第89図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図1 (1/3) … 108	第108図	三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図1 (1/3) … 127
第90図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図2 (1/3) … 109	第109図	三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図2 (1/3) … 128
第91図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図3 (1/3) … 110	第110図	三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図3 (1/3) … 129
第92図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図4 (1/2・1/3) … 111	第111図	三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図4 (1/2) … 130
第93図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図1 (1/3) … 112	第112図	三雲番上330番地1次南北トレンチC区中層出土遺物実測図 (1/3) … 131
第94図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図2 (1/3) … 113	第113図	三雲番上330番地1次北側東西トレンチ出土遺物実測図 (1/2・1/3) … 132
第95図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図3 (1/3) … 114	第114図	三雲番上330番地1次1号溝実測図 (1/60) … 133
第96図	三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図4 (1/2・1/3) … 115	第115図	三雲番上330番地1次1・2号溝出土遺物実測図 (1/2・1/3) … 134
第97図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図1 (1/3) … 116	第116図	三雲番上330番地1次灰褐色包含層出土遺物実測図1 (1/2・1/3) … 135
第98図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図2 (1/3) … 117	第117図	三雲番上330番地1次灰褐色包含層出土遺物実測図2 (1/2) … 136
第99図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図3 (1/3) … 118	第118図	三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図1 (1/3) … 137
第100図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図4 (1/3) … 119	第119図	三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図2 (1/3) … 138
第101図	三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図5 (1/2・1/3) … 120	第120図	三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図3 (1/2) … 139
		第121図	三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図4 (1/2・1/3) … 140
		第122図	三雲番上330番地1次排水溝出土遺物実測図1 (1/3) … 141

第123図 三雲番上330番地 1次排水溝出土遺物 実測図 2 (1/2)……………	142	第144図 三雲番上330番地 2次オリーブ褐色土 出土遺物実測図 (1/2)……………	165
第124図 三雲番上330番地 2次調査区全体図 (1/150)……………	143	第145図 三雲番上330番地 2次排水溝出土遺物 実測図 (1/2・1/3)……………	166
第125図 三雲番上330番地 2次 1号住居跡実測 図 (1/60)……………	144	第146図 三雲石橋160番地調査区全体図(1/150) ……………	168
第126図 三雲番上330番地 2次 1号住居跡出土 遺物実測図 1 (1/3)……………	145	第147図 三雲石橋160番地 9号箱式石棺墓平断 面実測図 (1/20)……………	169
第127図 三雲番上330番地 2次 1号住居跡出土 遺物実測図 2 (1/2・1/3)……………	146	第148図 三雲石橋160番地 9号箱式石棺墓出土 遺物実測図 (1/1)……………	169
第128図 三雲番上330番地 2次大型掘立柱建物 実測図 (1/80)……………	147	第149図 三雲石橋160番地10号箱式石棺墓平断 面実測図 (1/20)……………	170
第129図 三雲番上330番地 2次大型掘立柱建物 出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	148	第150図 三雲石橋160番地10号箱式石棺墓出土 遺物実測図 (1/3)……………	170
第130図 三雲番上330番地 2次土坑実測図 (1/40)……………	149	第151図 三雲石橋160番地11号箱式石棺墓平断 面実測図 (1/20)……………	171
第131図 三雲番上330番地 2次 1～3号土坑出 土遺物実測図 (1/3)……………	150	第152図 三雲石橋160番地11号箱式石棺墓出土 遺物実測図 (●は1/1、1/3)……………	172
第132図 三雲番上330番地 2次 4～8号土坑出 土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	151	第153図 三雲石橋160番地 2号溝平断面実測図 (1/20)……………	174
第133図 三雲番上330番地 2次 3号溝全体図・ トレンチ平面図・土層断面図 (1/20・ 1/60)……………	152	第154図 三雲石橋160番地 2号溝出土遺物実測 図 (1/3)……………	175
第134図 三雲番上330番地 2次 1～3号溝出土 遺物実測図 (1/2・1/3)……………	153	第155図 三雲石橋160番地 3号溝平断面実測図 (1/20)……………	177
第135図 三雲番上330番地 2次 3号溝出土遺物 実測図 (1/2・1/3)……………	154	第156図 三雲石橋160番地 3号溝出土遺物実測 図 1 (1/3)……………	178
第136図 三雲番上330番地 2次包含層 1A～2 C区出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	155	第157図 三雲石橋160番地 3号溝出土遺物実測 図 2 (1/3)……………	179
第137図 三雲番上330番地 2次包含層 2C～4B 区出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	156	第158図 三雲石橋160番地 3号溝出土遺物実測 図 3 (1/3)……………	180
第138図 三雲番上330番地 2次包含層 4B～6A 区出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	157	第159図 三雲石橋160番地 3号溝出土遺物実測 図 4 (1/1)……………	181
第139図 三雲番上330番地 2次包含層 6B～7C 区出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	159	第160図 三雲石橋160番地3号溝出土遺物実測図 5 (●は1/1、1/3)……………	182
第140図 三雲番上330番地 2次包含層 7G～8G 区出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	160	第161図 三雲石橋160番地 1・2号土坑平断面 実測図 (1/20)……………	184
第141図 三雲番上330番地 2次包含層 8G～12 C区出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	162	第162図 三雲石橋160番地 1・2号土坑出土遺 物実測図 (●は1/1、1/3)……………	185
第142図 三雲番上330番地 2次北側拡張区包含 層出土遺物実測図 (1/2・1/3)……………	163	第163図 三雲石橋160番地ピット出土遺物実測 図 (●は1/1、1/3)……………	185
第143図 三雲番上330番地 2次包含層他出土遺 物実測図 (1/2・1/3)……………	164	第164図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測 図 1 (1/3)……………	187

第165図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測 図2 (1/3)……………	188	第169図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測 図6 (1/1)……………	192
第166図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測 図3 (1/3)……………	189	第170図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測 図7 (●は1/1、1/3) ……	193
第167図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測 図4 (1/3、●は1/4) ……	190	第171図 三雲石橋160番地遺跡全体図 (1/200) ……………	194
第168図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測 図5 (1/3)……………	191		

付図 三雲番上地区調査区配置図 (1/200)

図 版 目 次

巻頭図版 1-1 三雲番上330番地1次調査区 から北を望む	図版 3-2 西側調査区土器溜り土器出土状況 (東側)
巻頭図版 1-2 三雲番上330番地2次調査区 から端山古墳を望む	図版 3-3 西側調査区南北トレンチ(西)と 7Bグリッド
巻頭図版 2-1 三雲番上地区調査区配置図 (上; 332番地 左下; 330番 地1次、右下330番地2次)	図版 3-4 9B・10Bグリッド完掘状況
巻頭図版 2-2 三雲番上330番地1次調査土 器溜り検出状況	図版 3-5 西側調査区南北トレンチ(西)遺 物検出状況
巻頭図版 3-1 板石硯(表面)	図版 3-6 北側調査区トレンチ
巻頭図版 3-2 板石硯(裏面)	図版 4-1 北側調査区土層断面(北側)
巻頭図版 4-1 石橋地区160番地全体写真(真 上から)	図版 4-2 北側調査区土層断面(南側)
巻頭図版 4-2 11号箱式石棺墓床面検出状況 (南から)	図版 4-3 西側調査区2Bグリッド遺物検出 状況
図版 1-1 三雲番上332番地調査区全景	図版 4-4 西側調査区4Bグリッド遺物検出 状況
図版 1-2 西側から高祖山を望む	図版 4-5 西側調査区5Bグリッド遺物検出 状況
図版 2-1 西側調査区全景	図版 4-6 西側調査区7Bグリッド遺物検出 状況
図版 2-2 東側調査区全景	図版 5-1 西側調査区9Bグリッド遺物検出 状況
図版 2-3 西側調査区2B~7Bグリッド	図版 5-2 東側調査区遺構検出状況(北側)
図版 2-4 西側調査区9B~14Bグリッド	図版 5-3 東側調査区遺構検出状況(南側)
図版 3-1 西側調査区土器溜り土器出土状況 (西側)	図版 5-4 東側調査区2・3号住居跡

- 図版5-5 東側調査区1号住居跡
- 図版5-6 東側調査区1号土坑
- 図版6-1 三雲番上330番地1次調査調査区
遠景
- 図版6-2 三雲番上330番地1次調査調査区
全景と浄水場(県調査番上II-6)
- 図版7-1 三雲番上330番地1次調査調査区
全景
- 図版7-2 三雲番上330番地1次調査グリッド
配置状況
- 図版8-1 住居跡検出状況
- 図版8-2 南北トレンチとグリッド遺物検出
状況
- 図版8-3 2Aグリッド遺物検出状況
- 図版9-1 2Bグリッド遺物検出状況
- 図版9-2 4Aグリッド遺物検出状況
- 図版9-3 4Dグリッド遺物検出状況
- 図版9-4 5Aグリッド遺物検出状況
- 図版9-5 5Cグリッド遺物検出状況
- 図版9-6 5Dグリッド遺物検出状況
- 図版10-1 三雲番上330番地2次調査調査区
と端山古墳
- 図版10-2 三雲番上330番地2次調査調査区
全景
- 図版11-1 掘立柱建物検出状況
- 図版11-2 1号住居跡
- 図版12-1 1号住居跡土器出土状況
- 図版12-2 掘立柱建物
- 図版12-3 掘立柱建物48号ピット半裁状況
- 図版12-4 掘立柱建物29号ピット半裁状況
- 図版12-5 掘立柱建物22号ピット半裁状況
- 図版12-6 1号溝トレンチ土器出土状況
- 図版13 三雲番上332番地出土遺物①
- 図版14 三雲番上332番地出土遺物②
- 図版15 三雲番上332番地出土遺物③、330番
地1次出土遺物①
- 図版16 三雲番上330番地1次出土遺物②
- 図版17 三雲番上330番地1次出土遺物③
- 図版18 三雲番上330番地1次出土遺物④、
330番地2次出土遺物①
- 図版19 三雲番上330番地2次出土遺物②
- 図版20 三雲番上330番地2次出土遺物③、
板石硯1
- 図版21 三雲番上板石硯2・3
- 図版22-1 石橋地区160番地全体写真①(真
上から)
- 図版22-2 石橋地区160番地全体写真②(東
から)
- 図版23-1 9号箱式石棺墓完掘状況(南から)
- 図版23-2 11号箱式石棺墓検出状況(西から)
- 図版23-3 11号箱式石棺墓床面検出状況(南
から)
- 図版23-4 11号箱式石棺墓ガラス小玉検出状
況(西から)
- 図版23-5 2号溝完掘状況(北西から)
- 図版23-6 2号溝土層断面状況(北から)
- 図版23-7 3号溝遺物出土状況(南西から)
- 図版23-8 3号溝土層断面状況(西から)
- 図版24 三雲石橋箱式石棺墓2・3号溝出
土遺物
- 図版25 三雲石橋3号溝出土遺物①
- 図版26 三雲石橋3号溝出土遺物②
- 図版27 三雲石橋土坑、ピット、包含層出
土遺物
- 図版28 三雲石橋包含層出土遺物①
- 図版29 三雲石橋包含層出土遺物②

第1章 はじめに

三雲・井原遺跡は弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡で、『魏志』倭人伝に記される伊都国の中心地と考えられる重要な遺跡である。遺跡は糸島市東部の瑞梅寺川と川原川に挟まれた微高地に立地し、南北約1,500m、東西約750mの平面二等辺三角形形状を呈し、面積は約60haと推定される。遺跡の発見は江戸時代の三雲南小路遺跡にはじまり、昭和40年代末から50年代中頃までに実施された圃場整備を契機とした福岡県教育委員会による発掘調査を経て、平成6年度より前原町（以後、前原市を経て、現糸島市）による国庫補助事業として遺跡の内容・範囲確認調査を平成28年度まで継続的に実施した。本報告では平成17年と平成26～28年度に実施した発掘調査の成果を報告する。

調査指導

三雲・井原遺跡等発掘調査指導委員会

委員長 西谷 正（海の道むなかた館館長、九州大学名誉教授）

委員 工楽 善通（大阪府立狭山池博物館館長）

柳田 康雄（國學院大學客員教授）

小西 龍三郎（株式会社修復技術システム代表取締役）

武末 純一（福岡大学教授）

難波 洋三（奈良文化財研究所）

糸島市教育委員会

平成30年度（報告書作成）

総括	教育長	家宇治 正 幸
	教育部長	泊 早 苗
	文化課長	岡 部 裕 俊
	課長補佐兼文化・図書館係長	古 川 秀 幸
	課長補佐兼文化財係長	村 上 敦
庶務	文化・図書館係主査	大 園 高 弘
	主事	岸 根 麗 華
報告書作成	文化課主幹	江 崎 靖 隆
		平 尾 和 久（編集）
	文化課文化財係主事	秋 田 雄 也

なお、報告書作成にあたり、文化庁、福岡県教育委員会のご指導・ご支援・ご協力を得ました。記して感謝申し上げます。（平尾和久）

第2章 位置と環境

I. 地理的環境

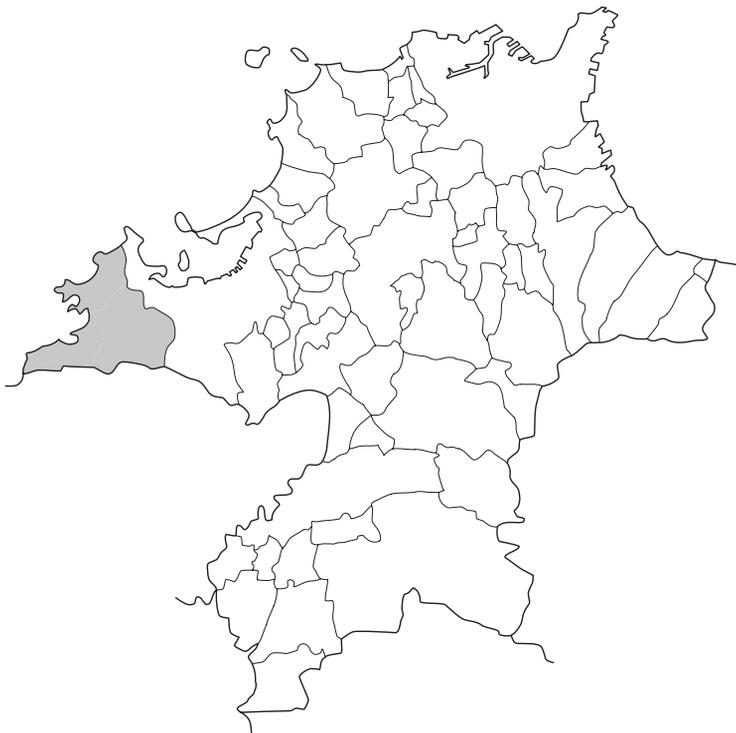
三雲・井原遺跡は福岡県西部の糸島市に所在する。糸島市は平成22年1月1日に前原市と二丈町、志摩町とが合併して誕生した市で、東は福岡市、西は佐賀県唐津市、南は佐賀市と接する。面積は216.15km²、人口101,493人（平成30年10月31日現在）の市で、近年は区画整理事業も進行するなど、福岡市近郊都市に見られるベッドタウン化が急速に進行している。人口の約半分が国道202号線沿いに集中し、残りの半分は田園地帯が多く残る市域全体に広がる。

糸島地域は地形的には南に井原山、雷山、羽金山、女嶽、浮嶽などの脊振山系の山々、東は高祖山と今津湾、北と西は玄界灘で画される比較的まとまった地域で、現在の行政区画では糸島市全域と福岡市西区の長垂山以西を含む。

地質的には、高祖山が花崗岩であるほかは、花崗閃緑岩で、低チタンの良質な砂鉄を多く含む。また、雷山山頂から飯場峠付近にかけては三郡変成岩が展開する。可也山や今山では頂上付近に玄武岩があり、後者では弥生時代初頭から前半期にかけて大型蛤刃石斧の材料として用いられた。

主な平野は怡土平野、一貴山・深江平野、糸島低地帯の三カ所であるが、糸島低地帯の大半は近世の干拓事業によって形成された新しい平野である。怡土平野には雷山および井原山の裾部から舌状に延びる数本の段丘があり、平原遺跡などは中位段丘に所在する。本書で報告する三雲・井原遺跡は市の中央を東西に横断する国道202号線から、南へ約3kmの場所に位置し、瑞梅寺川水系の瑞

梅寺川と川原川に挟まれた標高30～44mの肥沃な扇状地上に所在する。



第1図 糸島市の所在地

II. 歴史的環境

1. 糸島地域の歴史的環境

弥生時代は水稻農耕を主とした生産経済の時代で、博多湾を中心とする玄界灘沿岸が始まる。本市でも石崎曲り田遺跡、新町支石墓群など弥生時代開始期の遺跡が認められるが、縄文時代後・晩期にも一定の遺跡の展開が認められる。特に、後の伊都国の王都と位置付けられる三雲・井原遺跡においては、その北東部に位置する石



- 1. 酒地頭給遺跡 2. 潤中町遺跡 3. 潤神社古墳 4. 潤吉丁田遺跡 5. 御床松原遺跡 6. 一の町遺跡 7. 木舟の森遺跡 8. 木舟・三本松遺跡
- 9. 深江・井牟田遺跡 10. 塚田遺跡 11. 石崎・曲切田遺跡 12. 車下田遺跡 13. 東五反田遺跡 14. 上籠子遺跡 15. 蔵持境遺跡
- 16. 蔵持古屋敷遺跡 17. 蔵持遺跡 18. 志登支石墓群 19. 志登松本遺跡 20. 波多江丹波守屋敷遺跡 21. 波多江遺跡 22. 平原遺跡
- 23. 三坂七尾遺跡 24. 三雲南小路遺跡 25. 井原鏡溝遺跡 26. 潤番田・潤古屋敷遺跡
- A. 潤地遺跡群 B. 東遺跡群 C. 東五反田遺跡群 D. 茨浦遺跡群 E. 筒井町遺跡群 F. 北新地遺跡群 G. 北本町遺跡群 H. 上町向原遺跡群
- I. 浦志遺跡群 J. 泊遺跡群 K. 志登遺跡群 L. 波多江遺跡群 M. 蔵持遺跡群 N. 三雲・井原遺跡

第2図 糸島市主要遺跡分布図

橋地区やサキノ地区で長期間にわたる遺跡の形成が確認されており、弥生時代の遺跡形成との連続性の有無等の確認が必要である。当該期における継続的な遺跡の形成は三雲・井原遺跡のほかに福岡市西区周船寺や大原で認められ、短期的なものとしては広田遺跡や大坪遺跡、岐志元村遺跡などが存在する（宮地2012）。

弥生時代開始期の集落遺跡はこれまで曲り田遺跡のほかに確認されていなかったが、近年では上深江小西遺跡から5棟の掘立柱建物、大坪遺跡2次調査で水田跡が確認され、糸島西部の石崎地区遺跡群周辺が初期農耕の拠点であることが明らかになりつつある。墳墓は新町支石墓、長野宮ノ前遺跡、志登支石墓群などで支石墓や甕棺墓、土壙墓が確認され、三雲・井原遺跡においても加賀石地区や三雲石ヶ崎支石墓で同時期と思われる支石墓が認められ、副葬品として柳葉形磨製石鏃や碧玉製管玉が出土している。

弥生時代前期になると、上深江海老ノ峯遺跡で2軒の円形住居跡が確認されている。板付Ⅱ式から前期末にかけては遺構が増加傾向にあり、甕棺墓は新町遺跡、広田遺跡、今宿遺跡、周船寺遺跡等で確認され、集落は三雲・井原遺跡のほかに周船寺遺跡10次調査で板付Ⅱa式段階の溝、13次調査で円形と方形の住居跡が8軒検出されている。三雲・井原遺跡の南方に位置する井原横枕地区で板付Ⅱa式段階の掘立柱建物が確認されている。また、東縄手遺跡では丘陵を直線的に切る幅2m、深さ1.5mのV字溝と円形住居跡が確認されている。

弥生時代中期の墳墓は久米遺跡、広田遺跡、木舟三本松遺跡、篠原新建遺跡、三坂七尾遺跡、高上石町遺跡、志登支石墓群、潤地頭給遺跡などで甕棺墓が確認されている。特に潤地頭給遺跡では370基もの甕棺墓が検出され糸島地域で最大規模の密度を誇る。また、久米遺跡6号甕棺墓で細形銅剣、同23号甕棺で細形銅戈、潤地頭給遺跡299号甕棺墓から円環型銅釧5点など副葬品を持つ墓も散見される。なお、三雲・井原遺跡では出土状況等は不明ながらも井原赤崎遺跡で細形銅剣が1点出土している。中期の集落は御床松原遺跡、一の町遺跡、泊リュウサキ遺跡、元岡・桑原遺跡、今宿五郎江遺跡、潤古屋敷遺跡などがあり、沿岸部に集落が形成されるところが目される。御床松原遺跡は弥生時代中期から古墳時代中期まで規模の拡大縮小を繰り返しながら継続する。海に面する立地から土錘や石錘などの漁撈関係遺物が多いが、貨泉や半両銭、後漢鏡片など一般集落では見られない遺物も含まれていることから、糸島地域の対外交流の玄関口＝海村との認識も提示されている（武末2009）。糸島地域にはこのほかにも深江井牟田遺跡や今宿五郎江遺跡など同様な性格が想定される遺跡が存在し、伊都国の対外交流を支える遺跡として位置付けられる。

弥生時代後期にはいと北部九州全域で甕棺墓が激減するが、糸島地域は数を減らしながらも継続的に甕棺墓が営まれる。ただ、墓群を形成するのは三雲・井原遺跡のほかに神在遺跡、飯氏遺跡など少数で、単独墓が増加する傾向がある。そのような中、頸部を打ち欠く壺を組み合わせた飯氏遺跡7号甕棺では雲雷文内行花文鏡が出土し、唐津市桜馬場遺跡の上甕も糸島型とされる（久住2017）。また、後期後半になると木棺墓・土壙墓が増加し、終末期～古墳時代初頭には箱式石棺墓も出現する。後期の集落は中期から継続する御床松原遺跡、一の町遺跡、今宿五郎江遺跡のほかに吉井水付遺跡、曲り田遺跡、志登遺跡群、上罐子遺跡群などで確認される。一の町遺跡では弥生時代後期後半の身舎面積100㎡を越える2号大型建物が検出されている。吉井水付遺跡では後期後半



- | | | | | |
|------------|------------|------------|--------------|------------|
| 1. 三雲・井原遺跡 | 7. 今宿五郎江遺跡 | 13. 上町向原遺跡 | 19. 高上町遺跡 | 25. 元岡桑原遺跡 |
| 2. 飯氏遺跡 | 8. 今山遺跡 | 14. 志登支石墓群 | 20. 高祖榎町遺跡 | 26. 山ノ鼻1号墳 |
| 3. 飯氏二塚古墳 | 9. 井原1号墳 | 15. 篠原新建遺跡 | 21. 泊リュウサキ遺跡 | 27. 若八幡宮古墳 |
| 4. 怡土城跡 | 10. 浦志遺跡 | 16. 上鑑子遺跡 | 22. 西堂古賀崎古墳 | 28. 平原遺跡 |
| 5. 今宿遺跡 | 11. 濁地頭給遺跡 | 17. 周船寺遺跡 | 23. 丸隈山古墳 | |
| 6. 今宿大塚古墳 | 12. 御道具山古墳 | 18. 銭瓶塚古墳 | 24. 三坂七尾遺跡 | |

第3図 三雲・井原遺跡を中心とした遺跡分布図

の住居跡4軒が確認され、包含層からは鏡片3点、青銅製鋤先、L字形石杵などが出土している。上罐子遺跡では後期初頭から後半の住居跡が42軒確認され、湧水を伴う谷部からは大量の木製品が出土している。潤古屋敷遺跡では弥生時代後期前半の掘立柱建物が南北方向に3棟整然と並んで検出され、港湾に面した倉庫群の可能性が指摘される。調査区が南北にのびるトレンチ状であり東西の広がりには未確認であるが注目される遺跡である。

また、遺構の再検討により沿岸部の志登遺跡から南の三雲・井原遺跡に向かう道路の存在が指摘されている(久住1998)。近年、やや離れた東高田遺跡でも弥生時代後期前半の道路状遺構の存在が指摘され(岡部2010)、伊都国の先進性の証ともされる(久住2018)。今後は比恵・那珂遺跡で確認されているように、調査段階での検出・検討が必要である。

なお、弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、三雲・井原遺跡のような拠点集落と御床松原遺跡や深江井牟田遺跡のような海浜部の遺跡で、三韓系や楽浪系などの半島系土器が出土しており、弥生時代の糸島地域が果たした対外交流の窓口としての役割を示す資料として重要である。

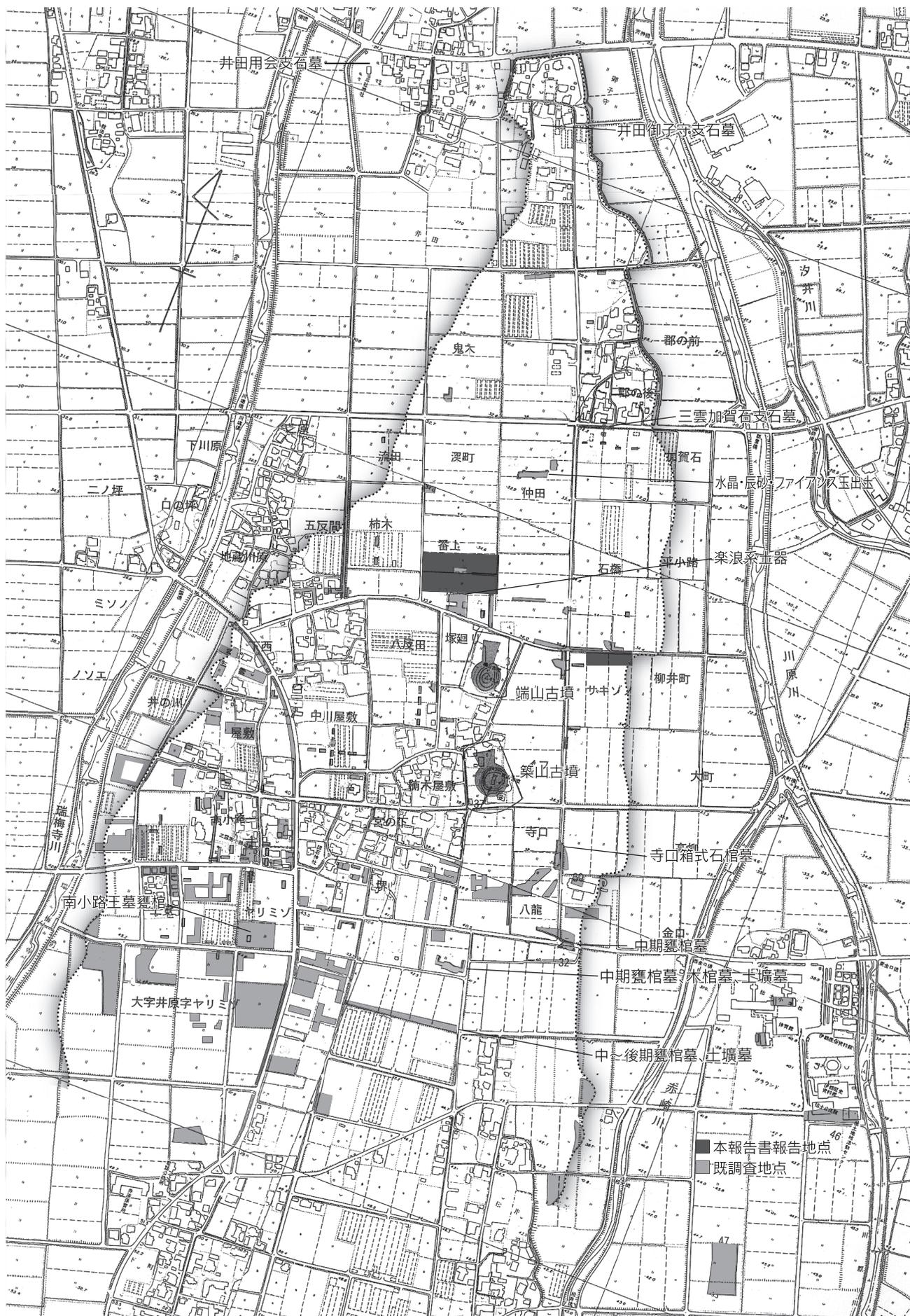
2. 三雲・井原遺跡の歴史的環境

弥生時代以降の三雲・井原遺跡では、遺跡内の居住域の変遷はあるものの古墳時代中期まで確実に集落が継続する。

弥生時代初頭には西北九州で支石墓が確認されるが、三雲・井原遺跡の北側には井田用会支石墓、井田御子守支石墓、三雲加賀石支石墓が築かれる。これらの支石墓の上石は2m前後と大型で、柳葉形磨製石鏃や碧玉製管玉が副葬されるなど、一般的な支石墓とは異なることから、特定個人墓の萌芽とされる(柳田2002)。加賀石支石墓の周囲には前期の集落と甕棺墓が確認されており、直径130mほどの範囲に居住域と墓域が展開する。

前期後半になると遺跡の中央部や南部でも集落や墓域が確認される。番上地区では住居跡のほか弥生時代前期中頃～終末期にかけての土器溜りが確認され、長期的な集落の形成が始まる。このほか南部では寺口地区と堺地区で甕棺や土壇墓、八龍地区で土坑が確認される。前期末には加賀石地区で貯蔵穴、石橋地区で甕棺が確認されるものの規模は小さく、番上地区を除くと継続性はない。この頃から今山遺跡の両刃石斧の大量生産が本格的に始まり、二日市地峡帯など北部九州の広い範囲で確認されるようになる(森2017)。この石斧流通の管理主体が三雲・井原遺跡の首長にあり、再配分される過程で形成された流通網を活かして、大陸・半島文化の受容の窓口としての役割を果たすと同時に、王墓に位置付けられる三雲南小路遺跡の出現の契機となったとする見解もあるが(武末1993)、前期末段階では、調査の多寡もあるものの吉武高木遺跡3号木棺墓のような厚葬墓は確認されておらず、番上地区で集落が形成され継続性を見せるものの、規模はそこまで大きなものではないと考えられる。

中期初頭になると北部の加賀石地区で住居跡が検出され、前段階からの継続性が認められる。中央部の柿木地区では甕棺墓などの墓群が認められる。当期の居住域は不鮮明であるが、南西部の南小路地区で、遺跡の西側を北流する瑞梅寺川と接合すると思われる幅3m程度の大型の溝が開削されていることから、未確認の集落が展開するものと判断される。



第4図 三雲・井原遺跡調査区配置図 (1/7,500)

中期前半は先述した南小路地区で確認された大溝が埋没する。前半～中頃にかけて加賀石地区で住居が確認されるほか、甕棺などの墓域が散見されるが規模等は大きくない。しかし、中期後半～末になると居住域は北部の仲田地区から、中央部の柿木、八反田地区を経て、南部の堺地区にまで広がる。また、幅100mほどと推定される谷部を隔てて、西南部の屋敷、上覚、井原ヤリミゾ、井原上学地区にも居住域が展開され、おおよそ、弥生時代後期後半まではその規模が維持される。また、中期末には下西で一辺50mほどの方形区画溝が掘削される。この区画溝は長期間維持されており、埋没、再掘削ののち、最終的には終末期～古墳時代初頭に完全に埋没する。その内部の調査には及んでいないが首長の居館の可能性が高い。また、瑞梅寺川の氾濫原に接する南小路465番地では中期後半の1間×2間の掘立柱建物が複数確認されており倉庫群として位置付けられる。その東側には中期後半以前に開削され、埋没・再掘削のあと最終的に古墳時代中期に土石流で埋没する大溝が北流しており、瑞梅寺川より取水する用水路本流としての機能のほかに、西側を倉庫群域として区画するための機能をもたせた可能性もある。

墓域は前代から続く堺～八龍地区のほか、三雲ヤリミゾ地区、狭義の三雲・井原遺跡の外側にあたる井原塚廻遺跡で確認される。甕棺は小型棺が主体で、大型棺は少ない状況で、弥生時代中期末から後期前半は木棺墓が主体となった可能性が指摘されている（江崎2013）。その例外的存在が三雲南小路で確認された2基の甕棺である。

三雲南小路1号甕棺の発見は文政5（1822）にさかのぼり、多くの副葬品を発見するに至り、その詳細は青柳種信の『柳園古器略考』に記される。その後の発掘調査で1号甕棺の北側に2号甕棺が確認されている。現在は東西32m、南北28mの周溝に囲まれた方形の墓域に大型甕棺墓が2基のみ存在し、それぞれ数十面の前漢鏡を中心とした副葬品を納めることから、王墓として位置付けられている（柳田2002）。なお、周辺の調査で北西部と南側に時期を前後する方形を呈すると思われる周溝が確認されたことは注目される。地理的環境として弥生時代中期中頃まで集落や墓域が営まれた地区と谷を隔てた丘陵の北端に位置する下西地区に中期末頃に方形居館が築かれ、その200mほど南側の三雲ヤリミゾ428・429番地で中期後半段階のL字形に屈曲する溝で、おそらく方形の周溝になるもの（主体部不明）、その南西側20mで先述した三雲南小路王墓、その10mほど南の上覚439番地で後期初頭の方形周溝が位置する。上覚439では主体部は未確認であるが、周溝より鉄矛が出土していることから、墳墓として位置付け可能であろう。このように丘陵の北端に方形居館が営まれている間に、方形周溝をもつ墳墓は居館の南側を南下しながら継続的に築かれていく風景が復元できる。上覚439の方形周溝の5mほど南側には掘立柱建物が確認され調査区外に延びている。主軸が周溝と合うことから墳墓祭祀関係の建物と判断する（平尾2018）。（平尾和久）



第5図 本報告調査区配置図 (1/2,500)

【参考文献】

江崎靖隆2013「墓域」『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集

岡部裕俊2010「長野川流域の弥生～古墳時代の遺跡と遺物－東地区周辺の遺跡と博物館収蔵資料から－」『伊都国歴史博物館紀要』5

久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』74

久住猛雄2017「北部九州からみた楯築弥生墳丘墓の時代の考古編年の併行関係と実年代」『楯築墓成立の意義』考古学研究会例会シンポジウム記録11

久住猛雄2018「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・糟屋南部・二日市地峡北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳動態Ⅰ』第21回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集

角 浩行2013「総括」『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集

武末純一1993「交易はどのように行われたか」『新視点日本の歴史』1 原始編

武末純一2009「三韓と倭の交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』151

平尾和久2018「三雲・井原遺跡の掘立柱建物について」『三雲・井原遺跡Ⅹ』糸島市文化財調査報告書第17集

柳田康雄2002『九州弥生文化の研究』学生社

第3章 調査の記録

I. 番上地区332番地

1. 調査の概要

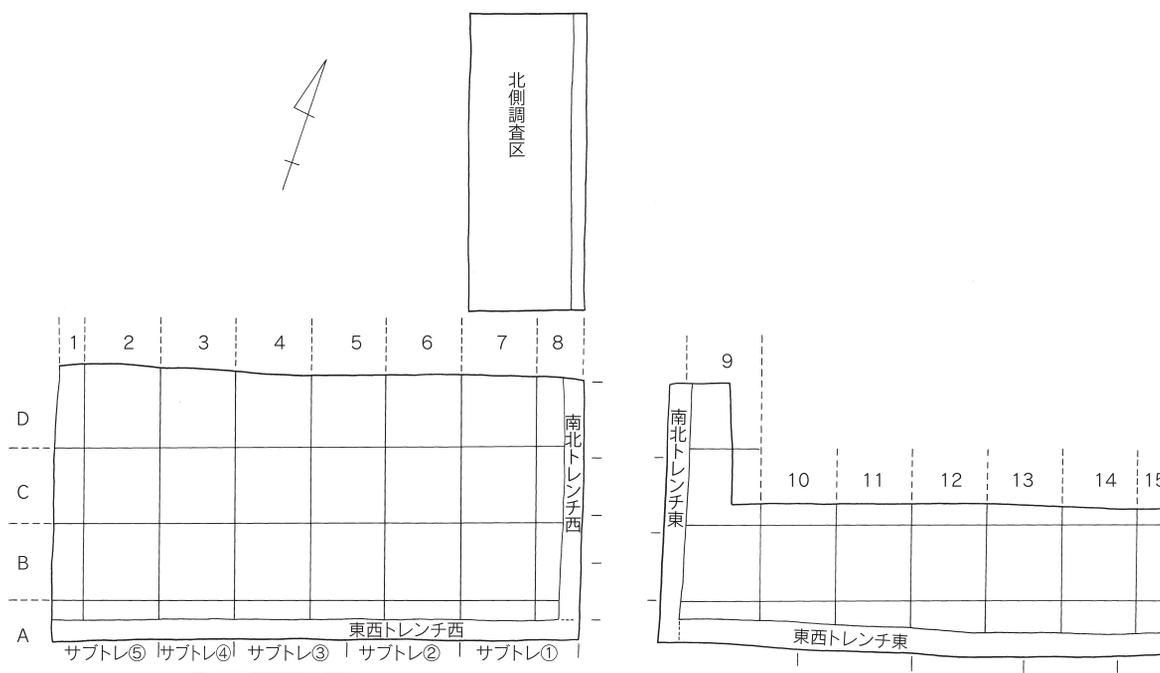
平成24・25年度にかけて三雲・井原遺跡南西部の発掘調査を実施した結果、遺跡の範囲確認ならびに倉庫群が確認されたことで遺跡の縁辺部の性格を把握することができたため、平成26年度から、遺跡の中央やや北寄りに位置する三雲番上地区の調査を行うこととなった。

番上地区の調査は昭和49年度の三雲地区簡易水道施設工事に伴うⅡ-6地区と昭和52年度の圃場整備関連の水路工事に伴うⅡ-2・3・5地区の調査を嚆矢とする。

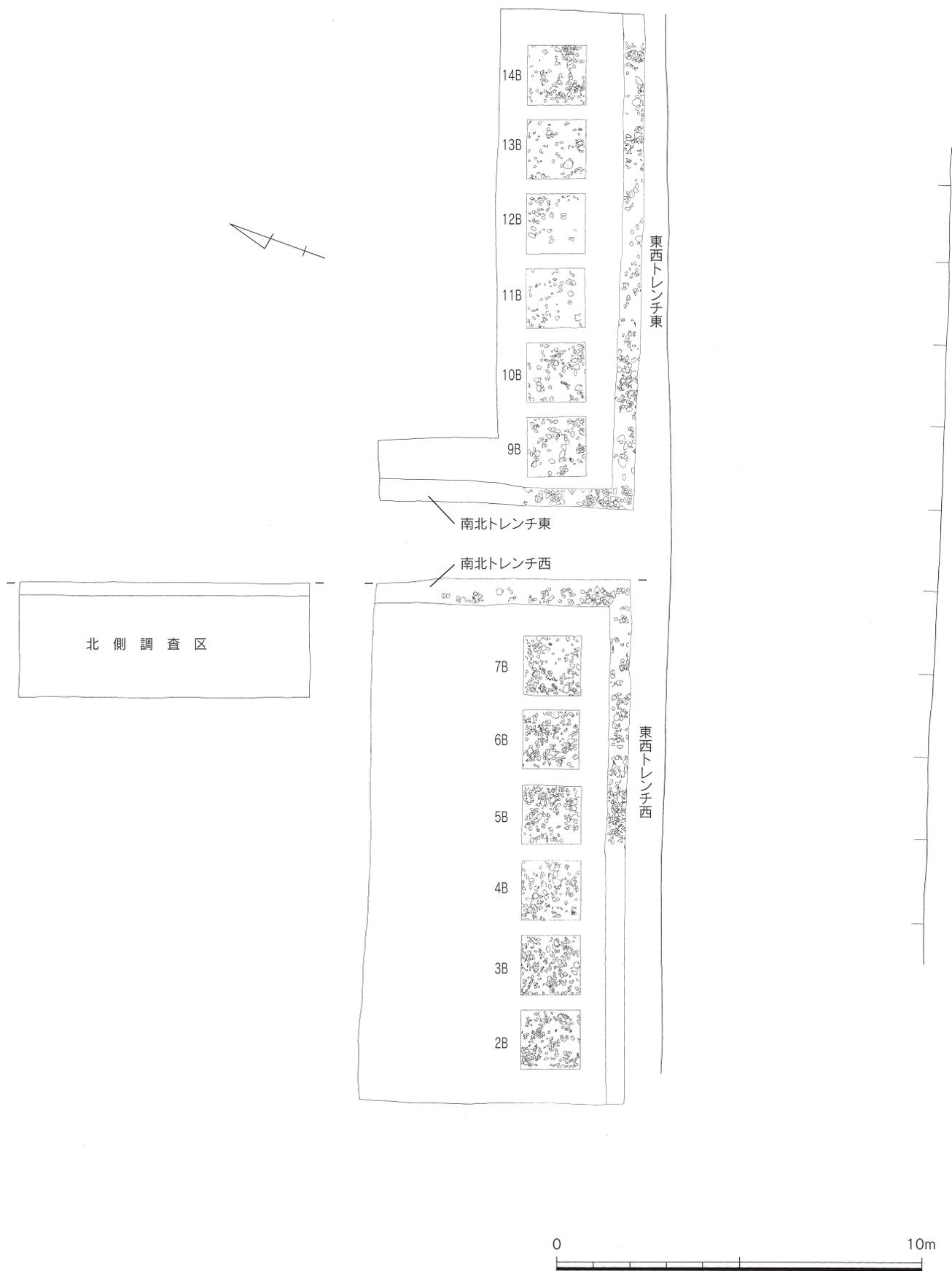
Ⅱ-6では弥生時代の遺構として切り合いが激しい住居跡19軒、土器溜り1基が確認された。出土遺物は弥生土器や打製石鏃や石斧、石庖丁などの石器のほかに、鑄造鉄斧片や刀子、鉄鏃、鉄鎌など29点の鉄器が出土した。特に弥生終末期に位置付けられる6号住居跡から出土した素環頭刀子は注目される。なお、古墳時代の遺構は土器溜り1基のみである。

また、Ⅱ-2・3では南北方向に新設される水路に伴う調査で、弥生時代後期の住居跡と溝のほか、中世の遺構が確認されている。

Ⅱ-5は東西方向に新設される水路に伴う調査である。弥生土器が大量に出土する箇所を中心に20m×4mのトレンチにT字状に接する4m×2mのトレンチ調査が実施された。その結果、この遺構はゆるやかな窪地に土器類を廃棄した土器溜りと判断されている。土器溜りからは弥生時代中



第6図 三雲番上332番地西側調査区全体図 (1/200)



第7図 三雲番上332番地西側調査区全体図 (1/150)

期～後期を主体とする弥生土器が大量に出土するとともに27点の楽浪系土器が確認された。このように88㎡という狭い調査区で多量・多器種の楽浪系土器の出土は注目されるもので、楽浪系土器の出土傾向を三分類した武末純一氏はこの出土傾向を三雲番上型として、楽浪人の滞在が想定できるものとして評価している（武末1991）。

しかし、Ⅱ－5が東西に長いトレンチ調査であったことから、遺構の広がりや性格の把握に限界があった。また、楽浪郡からの使節が滞在する建物も近辺に存在すると想定され、その有無の確認のためにも調査の必要性が高まっていた。

2. 遺構と遺物

①西側調査区

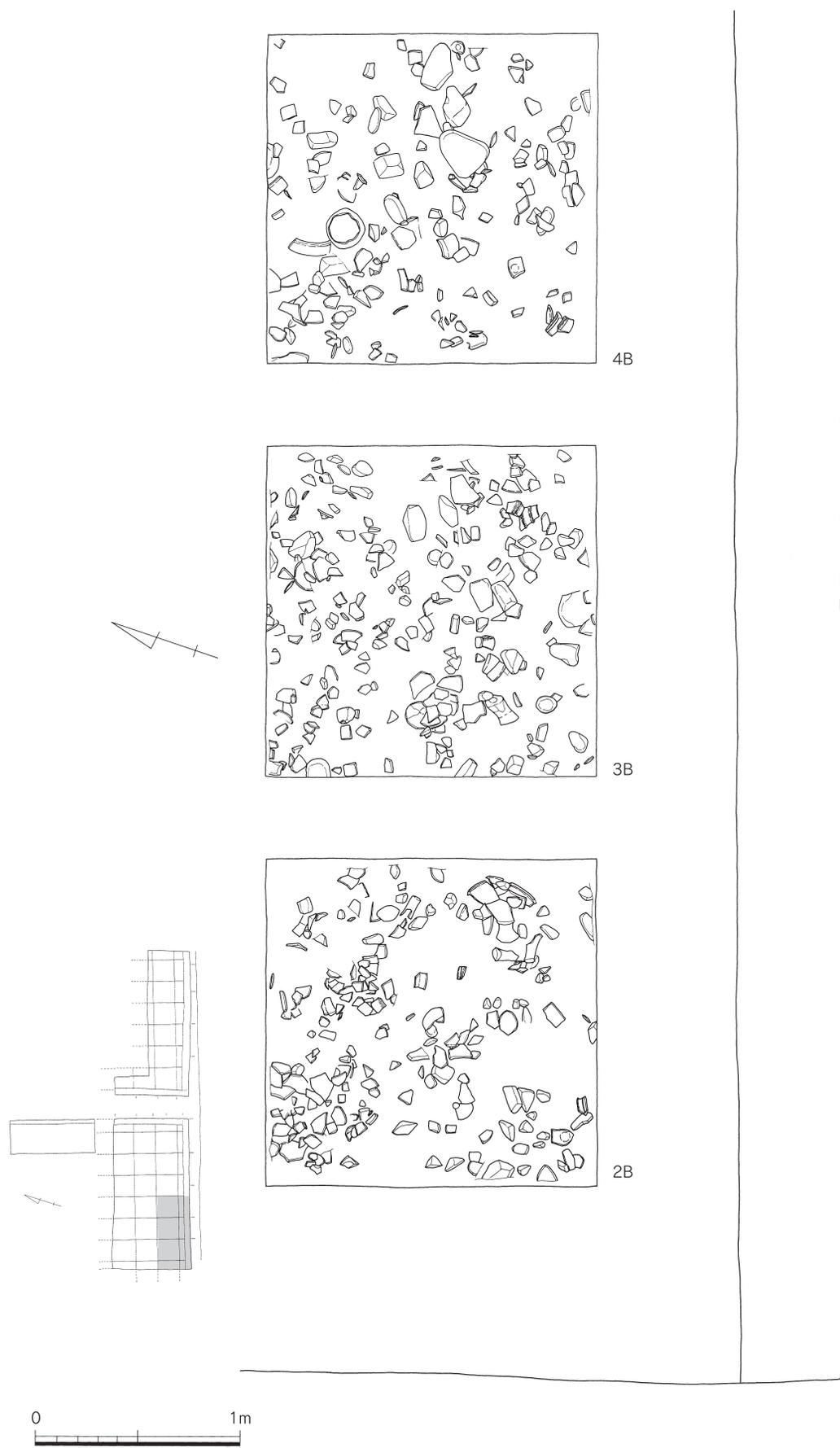
(1) グリッド出土遺物

西側調査区では福岡県教育委員会による水路掘削に伴う発掘調査（Ⅱ－5地区）で確認された土器溜りの北側の広がりが面的に検出された。そこで、中央に南北畦を残し、その東西に2m×2mのグリッドを設定した。グリッドは南北1区画（B）、東西15区画（1～15）設け、その表記は数字とアルファベットの組み合わせで行った。また、本遺構の調査は保存を優先したため、実際に掘り下げた箇所は2B、9B、10B、の3グリッドのみで、その他は遺物の検出段階で動いてしまったものや、遺構の性格を知るうえで必要なもののみを取り上げた。その他のものは、調査終了後真砂土を被せて埋め戻し、現在も現地に保存されている（第8・12・14・20図）。

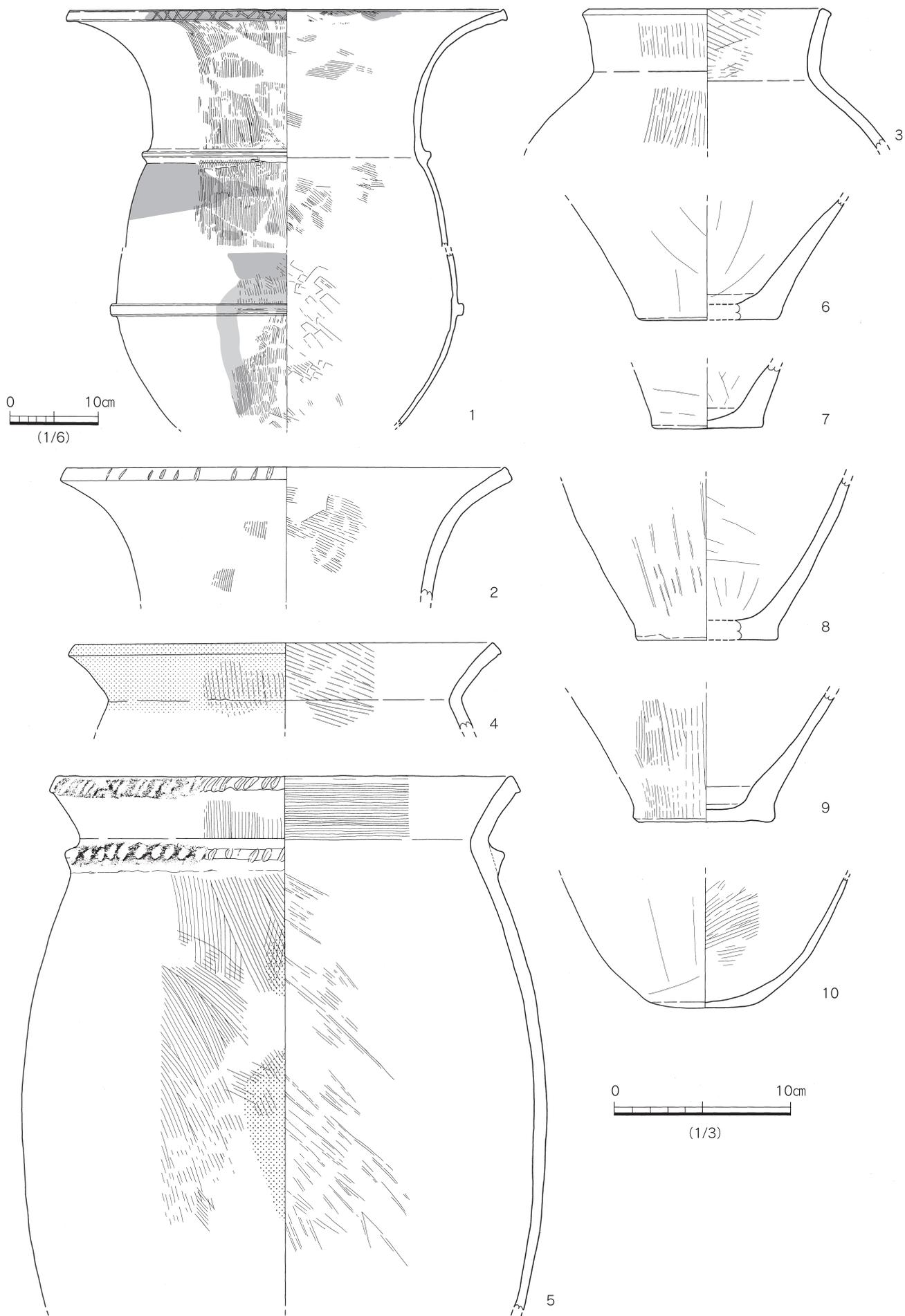
第9～11図は2Bグリッド出土遺物である。第9図1は大型の広口壺である。しまりのない頸部から大きく広がる口縁部をもち、やや肥厚させた口縁端部にはヘラで×印を刻む。頸部には方形突帯が巡り、張りのない胴部のやや下部に幅広の突帯を巡らせる。上半部と胴部は直接つながる箇所がないが、土器の質感や大きさがほぼ同じであることから同一個体とした。外面は縦ハケ、内面上位は斜～横ハケ、下位にはナデを施す。2は広口壺の口頸部である。口縁端部はやや肥厚し、方形を呈する口縁端部には刻目を施す。3は直口壺の上半部である。外面に縦ハケ、内面に斜ハケを施す。口縁はやや外傾し、端部は方形を呈す。4は断面「く」字形を呈する甕の口頸部である。内外面共に稜が入る。外面は縦ハケ、内面は斜ハケを施す。5は口縁端部と頸部に巡る三角突帯に刻目を施す長胴甕である。口縁はやや肥厚し、外面に斜ハケ、内面に横ハケを施す。6～10は底部である。6～9は平底で、10は凸レンズ底である。10は全体的に器壁が薄い。

第10図1・2は甕の上半部である。1は端部が垂れる口縁をもつ甕で、外面にススが付着する。外面に縦ハケを施す。2は口縁が強く外傾するもので、口縁部下に三角突帯が巡る。外面に縦ハケを施す。3は完形に復元される甕である。口縁部が外開きに立ち上がり、頸部に三角突帯が巡る。外面に横～斜ハケ、内面に横ハケを施す。外面にはススが付着する。4は坏部が深い高坏である。口縁は外傾し、口縁部下に三角突帯を巡らせる。短い脚部を伴い、脚裾端部は方形を呈する。坏部内面に横ミガキ、脚部外面に縦ミガキを施す。

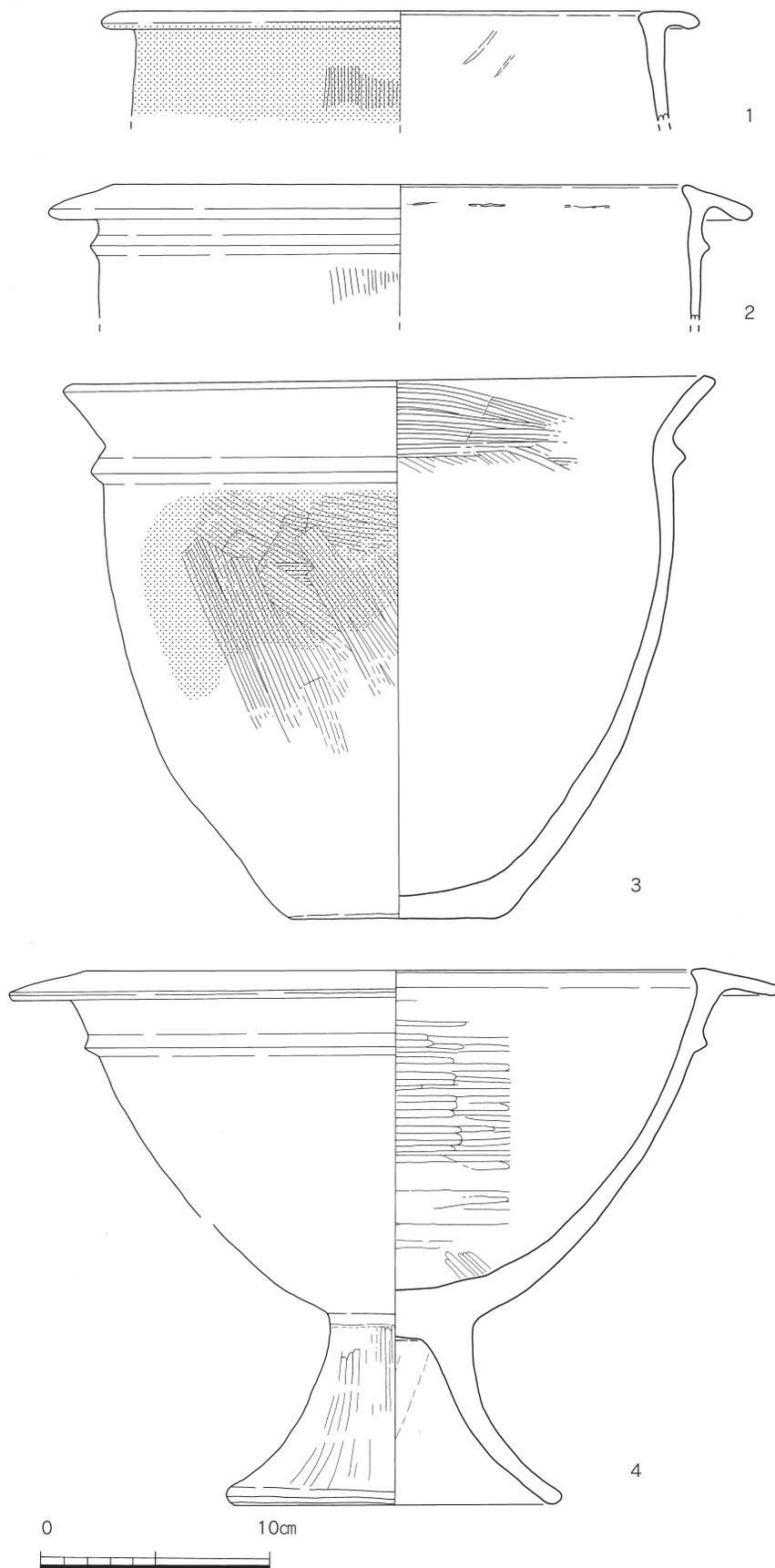
第11図1は高坏の坏部上半である。口縁は水平に広がり、口縁部下に三角突帯が巡る。外面にナデ、内面に横ミガキを施す。2は短脚を伴う鉢で、口縁部は広がりながら立ち上がる。3は楽浪系土器



第8図 三雲番上332番地西側調査区2B～4Bグリット土器出土状況実測図 (1/30)



第9図 三雲番上332番地西側調査区2Bグリッド出土遺物実測図1 (1/3・1/6)



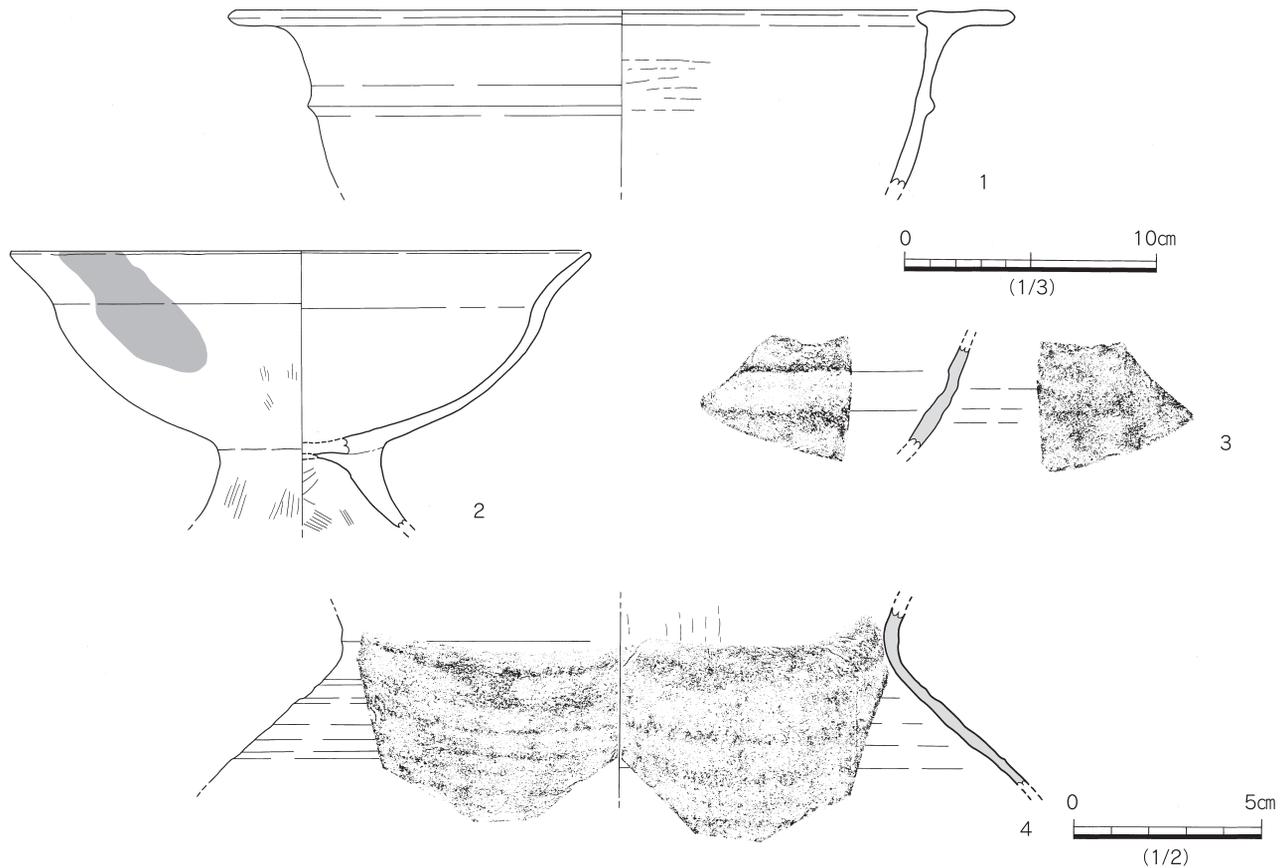
で壺の一部か。内外面共に回転横ナデを施すが、内面にナデ痕が強く残る。胎土は泥質で焼成は軟質。オリーブ灰色を呈する。4は楽浪系土器短頸壺の肩部である。内外面共に回転横ナデを施す。胎土は泥質で、焼成は軟質。外面は淡暗灰色、内面はオリーブ灰色を呈する。

第13図1～3は3Bグリッド出土遺物である。1は甕の上半部で、2は鉢の口縁部である。3は太型蛤刃石斧で、基部には敲打痕を残す。

4・5は4Bグリッド出土遺物である。4は甕の口縁部で、5は器台の脚裾部である。

6～10は5Bグリッドから出土したもので、6は口縁部の発達しない鋤先口縁壺である。7は甕の上半部で、8は高坏の

第10図 三雲番上332番地西側調査区2Bグリッド出土遺物実測図2 (1/3)



第11図 三雲番上332番地西側調査区2Bグリッド出土遺物実測図3 (1/2・1/3)

脚裾部である。9は石剣の未製品か。右側面は磨きで刃部状を呈するが、先端を欠く。10は片岩製の有溝石錘である。

11・12は6 Bグリッドから出土したものである。11は直口壺で、12は楽浪系土器の短頸壺か。外面に縄蓆文タタキ、内面にオサエ痕を残す。

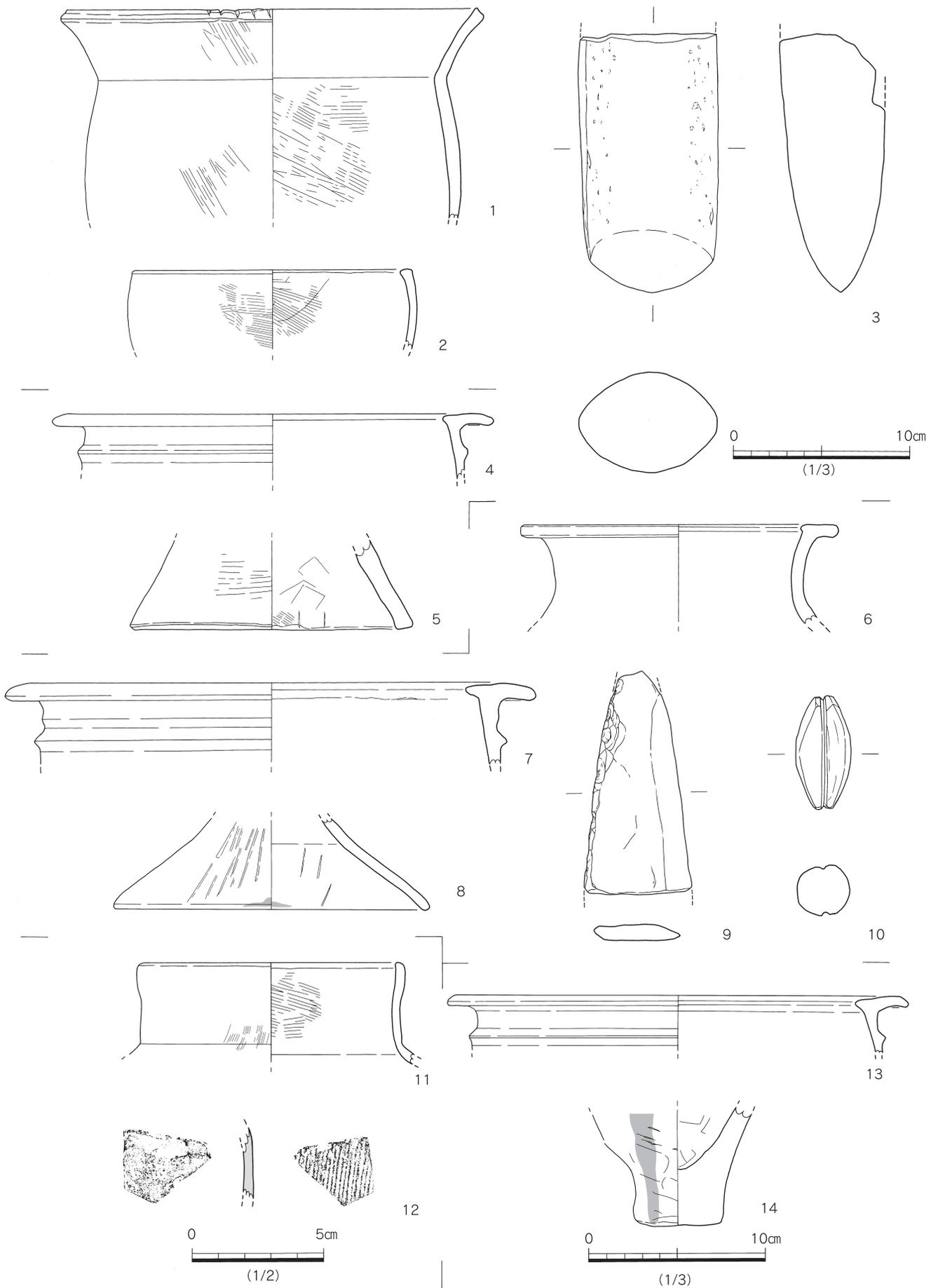
13・14は7 Bグリッド出土品である。13は甕の上半部で、14は手づくね土器の底部である。

第15～17図は9 Bグリッド出土遺物である。第15図1は複合口縁壺の口頸部である。しまりのない頸部から直線的立ち上がり、口縁部にむかって緩やかに広がる。反転部は丸みをもつが、明瞭な稜が入る。内面は横ハケとナデ、外面は横ハケと斜ハケを施す。全体的に器壁は薄い。2～6は壺の下半部である。2は底部中央を欠くもので、内湾して立ち上がるが、丸みを持ちながら広がる。外面はナデと縦ハケ、内面はナデを施す。3は直線的に広がりながら立ち上がるものである。外面に斜ハケ、内面にナデを施す。4は全体的に器壁の薄いもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。5も平底で、直線的に広がりながら立ち上がる。6は底部に焼成後穿孔をもつものである。穿孔部の平面は正円に近い。胴の張りは強く、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

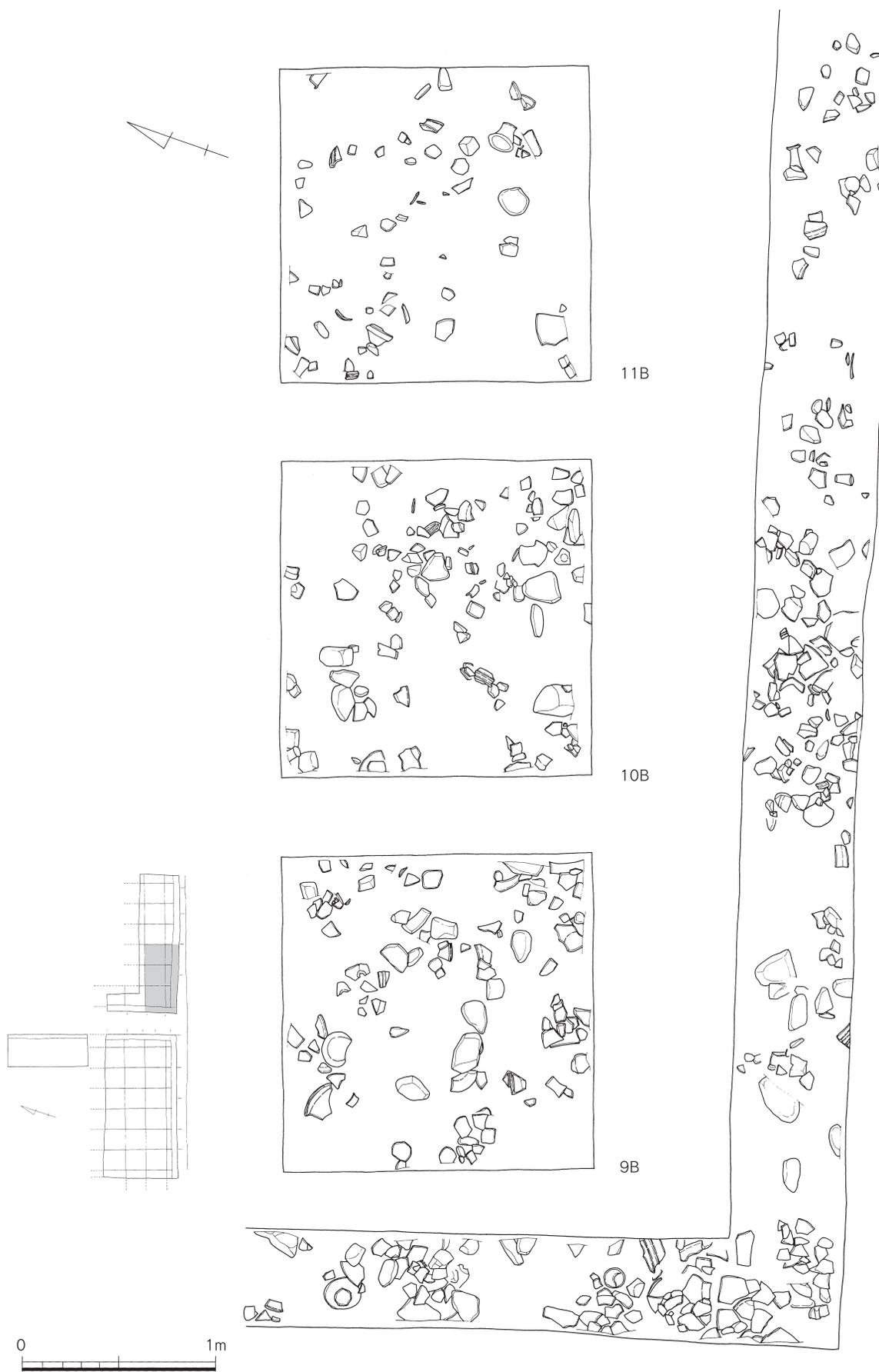
7～9は甕の上半部である。7はやや跳ね上げ気味の短い口縁をもつ。内面への突出は小さく、口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。8は内面への突出が大きい口縁をもつ甕で、口縁部の下には三角突帯が巡る。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9は断面「く」字形を呈する口頸部をもつ甕で胴の張りがある。外面に二次焼成痕が残り、内面は横ハケを施す。10と11は甕の底部で平底であ



第12図 三雲番上332番地西側調査区5B～7Bグリッド土器出土状況実測図 (1/30)



第13図 三雲番上332番地西側調査区3B～7Bグリッド出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第14図 三雲番上332番地西側調査区9B～11Bグリッド土器出土状況実測図 (1/30)

る。12はボタン状に底部が突出する甕の下半部で、内外面ともにナデを多用する。外面にススが付着する。13はミニチュア土器の下半部である。器壁が薄く、底部が突出する。内面にコゲが付着する。

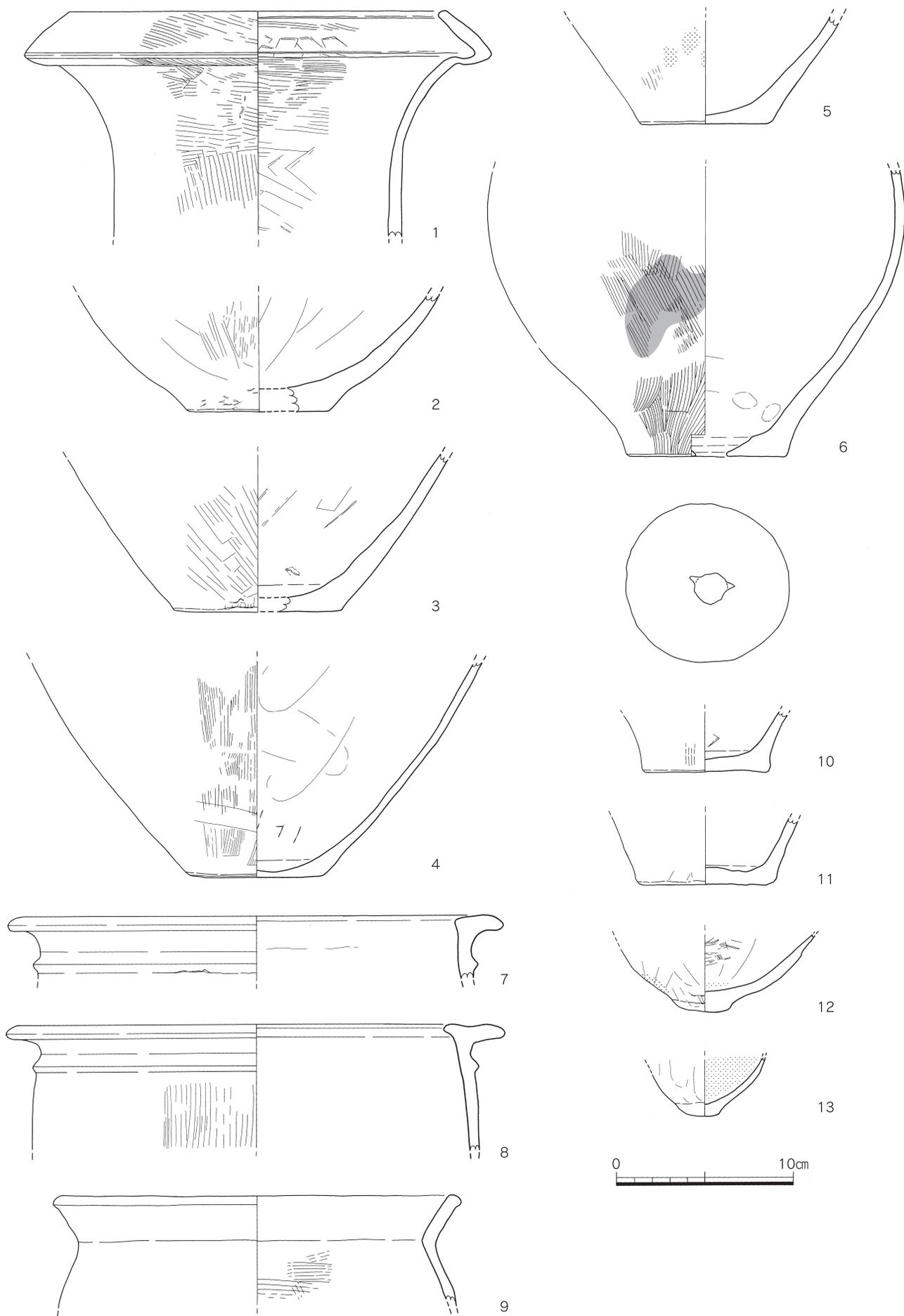
第16図1～5は甕の上半部である。1は受け口状の口縁部をもつが、やや小さめである。胴部は張り、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。2も受け口状の口縁部をもつ甕であるが、口縁部が丸みを持ち、器壁も薄い。胴の張りが弱く、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。外面口縁部付近に丹が付着する。3は断面「く」字状を呈する口縁部で、内面に横ナデを施す。頸部の内外面に稜が入る。4は口縁部がやや肥厚する断面「く」字状の口頸部をもつ甕である。外面に縦ハケ、内面に横ナデを施す。頸部内面のみ稜が入る。5も断面「く」字状の口頸部をもつ甕の上半部で、頸部の内外面に稜が入る。外面は縦ハケと斜ハケ、内面は横ハケと斜ハケを施す。6は高坏の坏部である。反転部は短く、口縁端部断面は丸く収める。内外面共にナデを施す。7は器台の上半部である。強く広がる口縁部を持ち、端部には刻目を施す。外面には縦ハケ、内面には横ハケを施す。8は口縁部を欠く大型の器台である。胴部にはタタキを施し、器壁を薄く仕上げ、脚部が裾開き状に広がる。外面は縦ハケとタタキ、内面はオサエの後に横ハケと斜ハケを施す。

9～12は楽浪系土器である。9・10は外面に縄蓆文のタタキを施し、内面にオサエ痕を残す。器壁は薄く、胎土は泥質である。9は内外面共に白灰色、10は外面灰色、内面オリーブ灰色を呈する。短頸壺か。11は内外面共に回転横ナデを施すもので、器壁は薄い。泥質で、外面暗灰色、内面黄灰色を呈する。壺か。12は鉢の底部片である。小片であるため径の復元はできない。内外面共に回転横ナデを施すが、裏面は剥離が著しく調整不明。

第17図1は長方形鉄板の両端を折り曲げて、木製耕起具の先端の装着する方形鍬先の破片である。図の右半部を欠き、左側も折り返し部の下半から刃縁を欠くため、刃縁部が直線か、丸みをもつものかは判断できない。現存長7.9cm、現存幅4.8cm。2は板状鉄片である。右側面のみ当初の形状を残す。厚さ0.5cm。

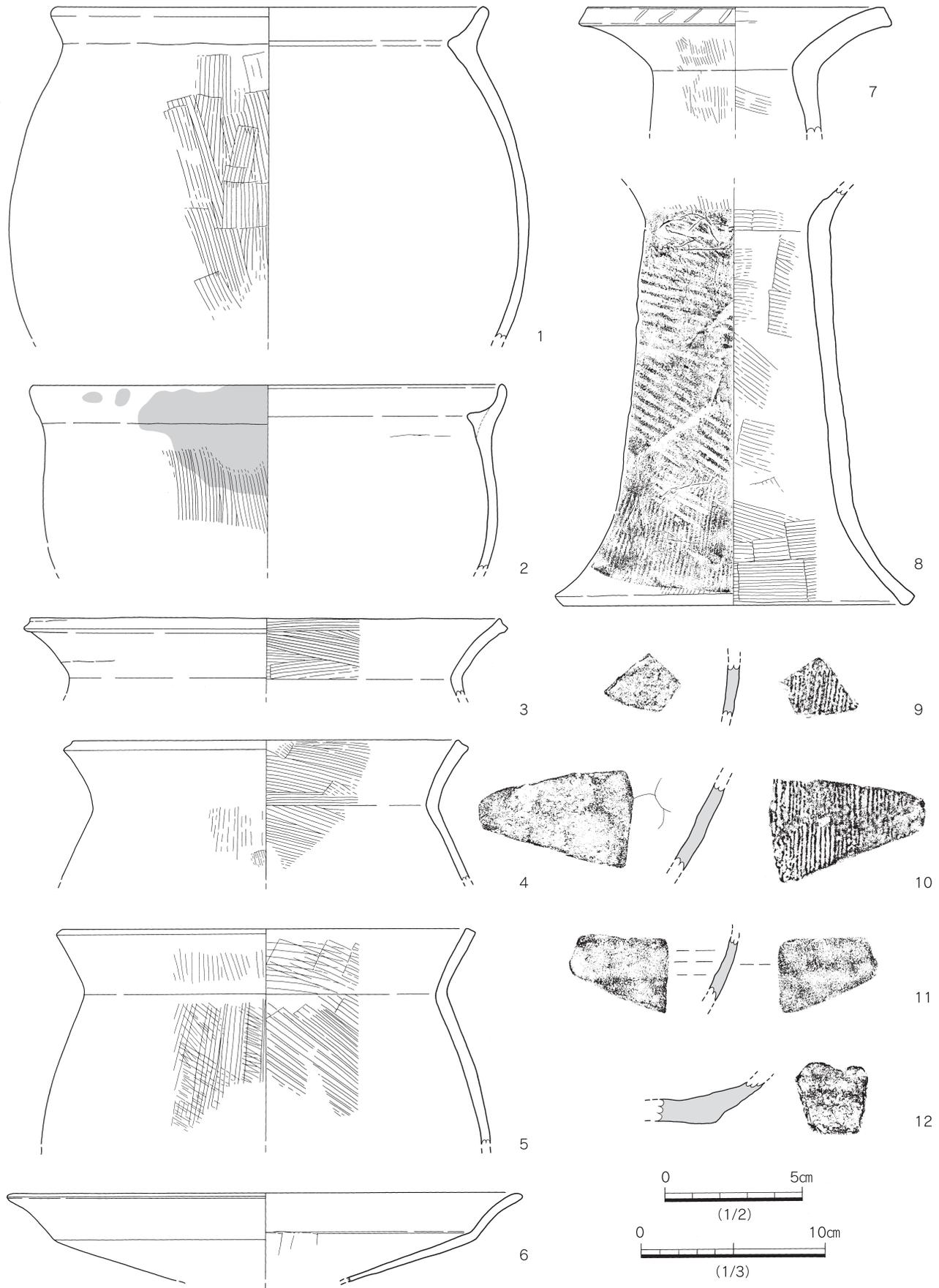
3は玄武岩の剥片を利用したスクレイパーである。平面形態は外湾刃石庖丁に類似するが、背部、裏表面ともに剥離面を残し、指が当たる部分のみ磨滅している。刃部は片刃である。長さ4.3cm、幅8.1cm、厚さ0.9～1.0cmである。4は磨製石剣を転用した偏平片刃石斧で、断面は凸レンズ状を呈す。石剣の刃部を面取りし、裏・表面全面に細かい研磨痕を残す。刃部は石剣の基部側に研磨して作られる。刃部の両隅と中央部を欠くが、使用によるものか。なお、基部も欠く。層灰岩製である。現存長4.4cm、幅3.6cm、厚さ0.65cm。5が両刃石斧の刃部片である。基部は研磨痕を残し、側面には稜が認められる。刃部には研磨痕を残さないが、端部に欠けが多い。細砂岩製。6は細砂岩製の石斧片である。基部から刃部へと向かう屈曲部の破片で全体に風化が進む。7は打欠石錘である。結晶片岩製の偏平石材の四側面を打ち欠き、紐のかかりとする。長さ9.2cm、幅7.1cm、厚さ1.3cm。

第18・19図は10Bグリッドから出土したものである。第18図1は広口壺の上半部である。しまりの緩い頸部から直立気味に広がり口縁部にいたる。口縁端部は方形に収める。頸部には低い三角突帯が巡り、胴部には斜ハケを施す。2は複合口縁壺の口頸部である。しまりの強い頸部から、ラッパ状に広がり口縁部にいたり、丸みを帯びた反転部をもつ。口縁部外面は横ハケ、頸部は縦ハケを施し、内面は横ハケを施す。3は頸部の短い複合口縁壺である。頸部には刻目を施した低い方形突

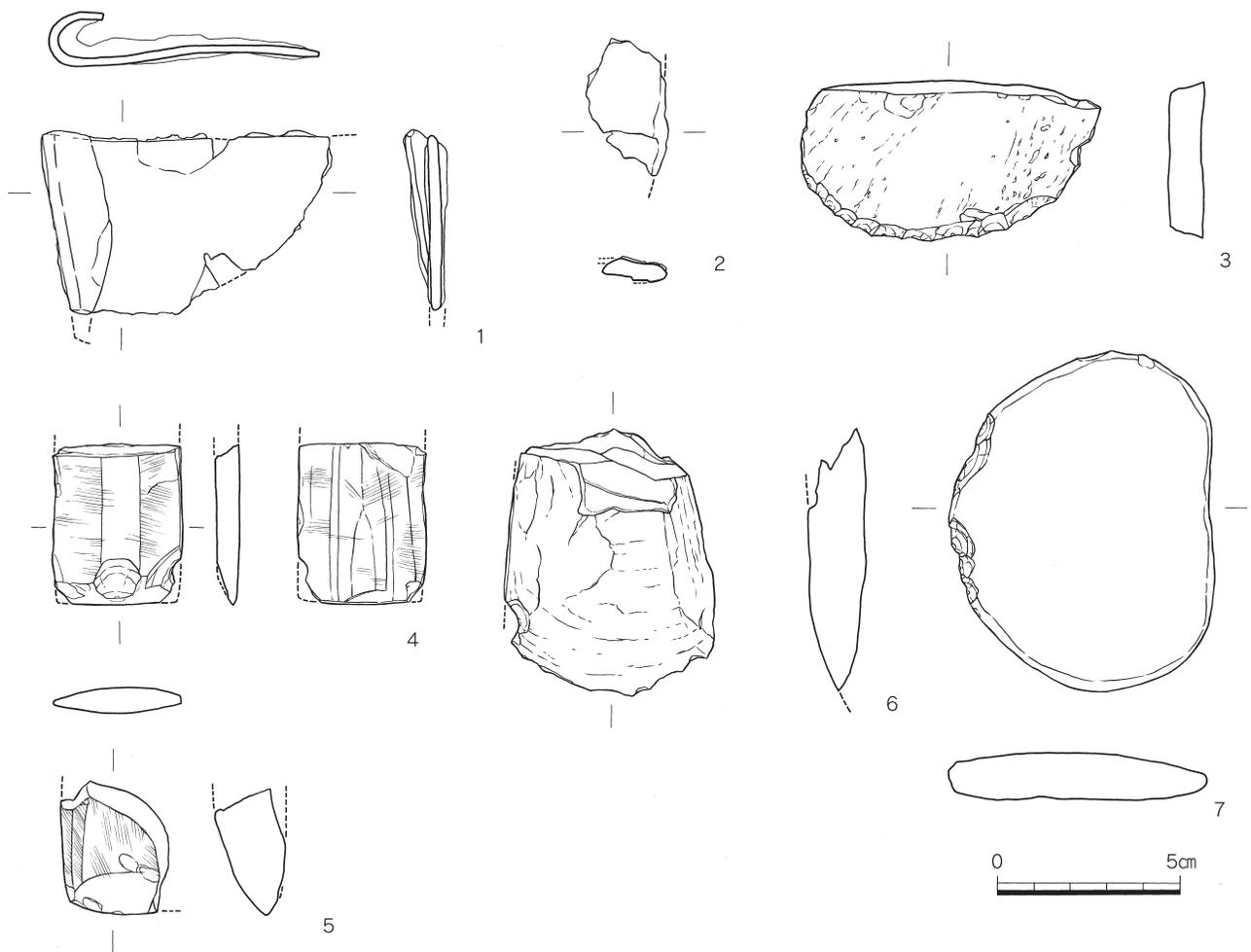


第15図 三雲番上332番地西側調査区9Bグリッド出土遺物実測図1 (1/3)

+



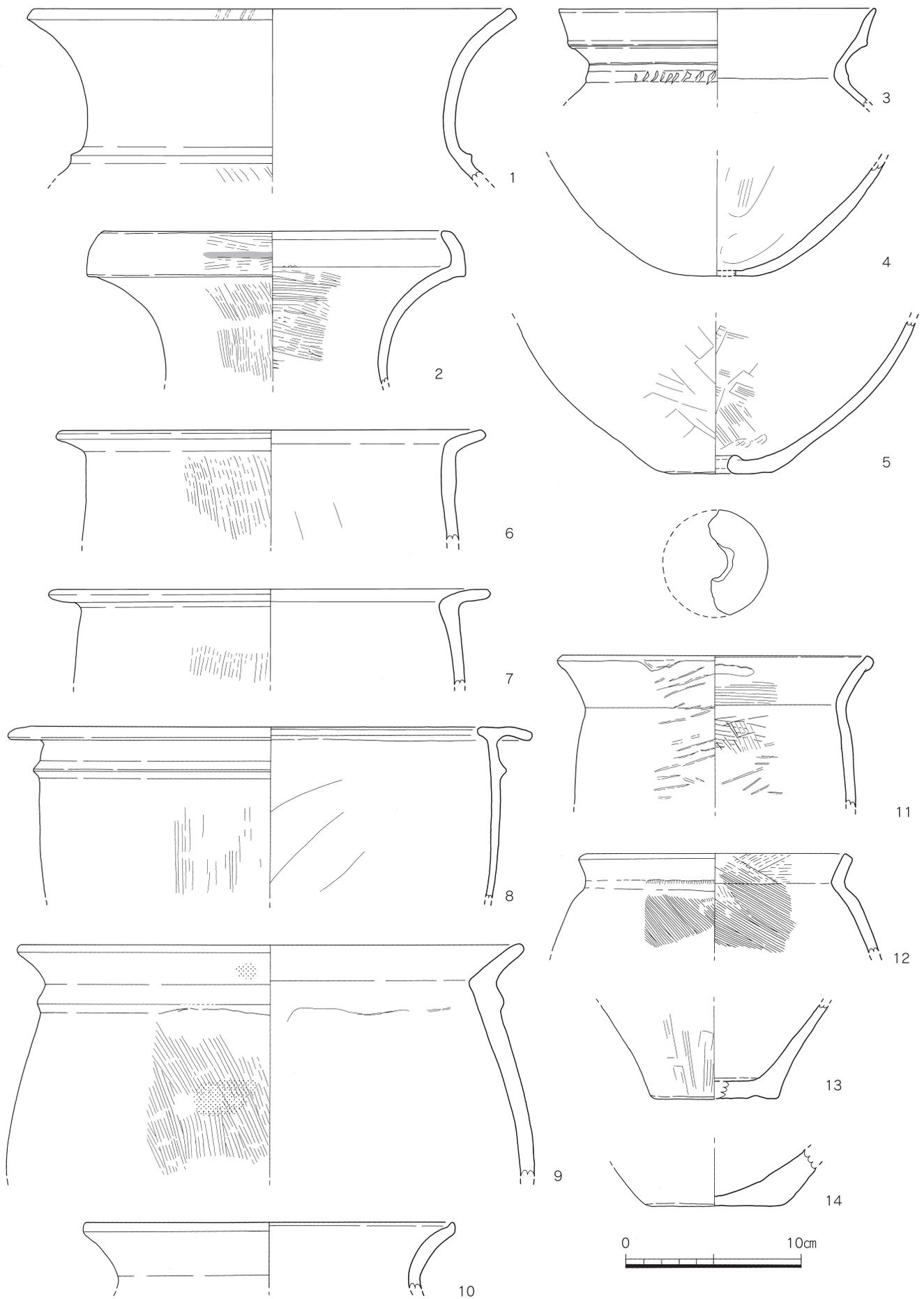
第16図 三雲番上332番地西側調査区9Bグリッド出土遺物実測図2 (1/2・1/3)



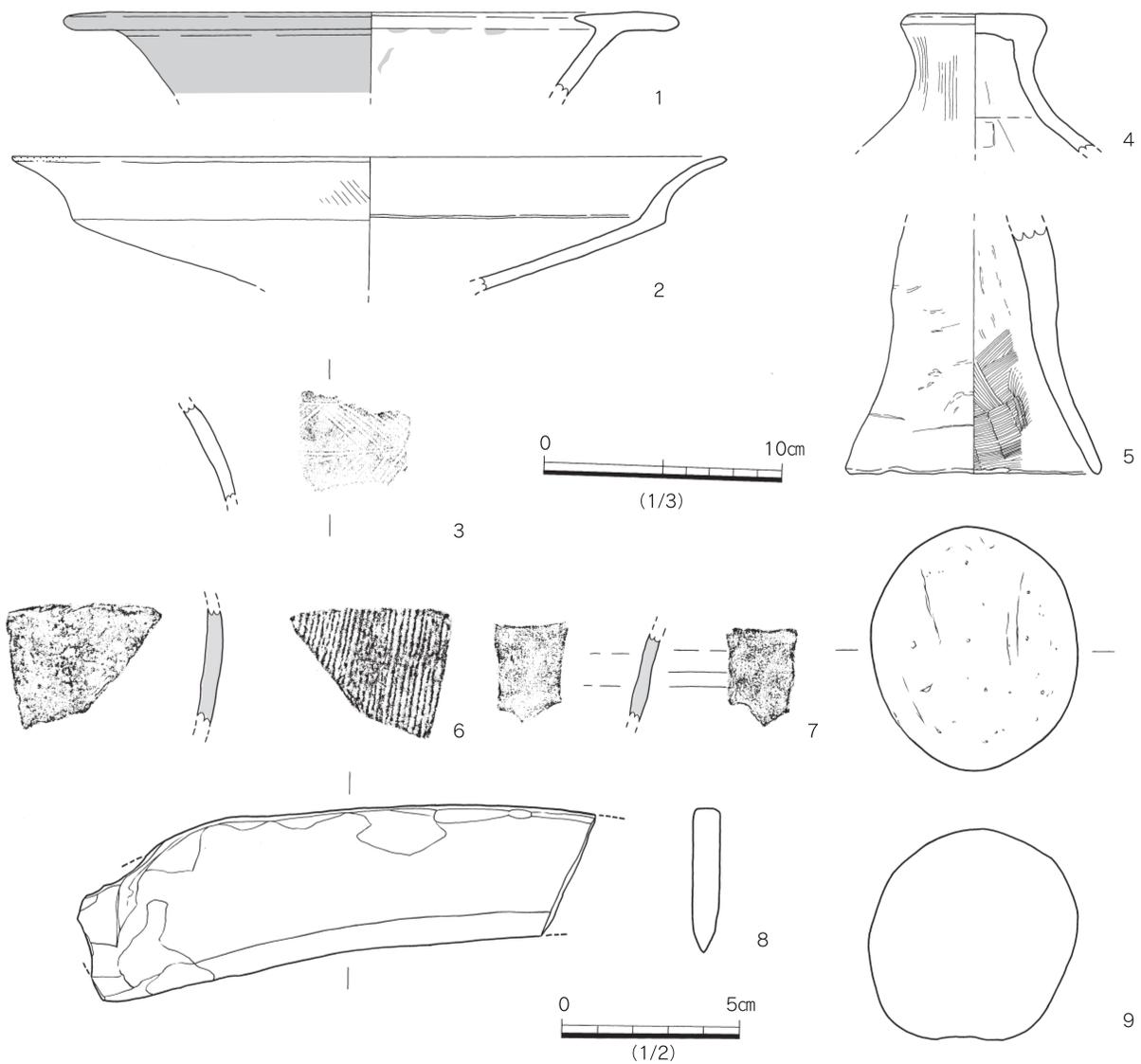
第17図 三雲番上332番地西側調査区9Bグリッド出土遺物実測図3 (1/2)

帯を巡らし、口縁部は屈曲部からさらに外に広がる。内外面ともにナデを施す。4と5は底部である。4は丸みの強い底部で、中央部を欠くが不安定な平底か。5は低部中央に外側から焼成前の穿孔を施す。外面は板状工具によるナデ、内面は斜ハケを施す。

6から12は甕の上半部である。6は口縁部が内傾する甕で、胴の張りがほとんどない。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7は丸みもちつつ内傾する口縁部をもつ甕である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8は器壁の薄い甕で、内側への突出が大きい口縁部の下に三角突帯を巡らせる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9は大型の甕で、「く」字状に屈曲する頸部に低い三角突帯を巡らせる。口縁端部は丸くおさめ、胴中位に向かってやや張り出す。外面に斜ハケ、内面にナデを施す。外面に肩部にはススが付着し、内面には接続痕を残す。10は内湾しつつ広がる口縁部片で、端部を上方につまみ出す。11は小型の甕である。張りのない胴部から、緩くしまる頸部を経て、口縁部にいたる。口縁端部は肥厚し、頸部の内外面に稜がはいる。外面はタタキ、内面は横、縦ハケを施す。12は頸部のしまる甕で、短い口縁部をもつ。端部は方形である。内外面ともに斜ハケを施す。13・14は底部である。13は平底で、外面に縦ハケを施す。14はやや径の大きな平底で、立ち上



第18図 三雲番上332番地西側調査区10Bグリッド出土遺物実測図1 (1/3)



第19図 三雲番上332番地西側調査区10Bグリッド出土遺物実測図2 (1/2・1/3)

がり部の器壁が厚い。

第19図1は鋤先口縁の高坏である。ほぼ水平の口縁部で、端部が若干垂下する。外面と口縁部内面まで丹塗りである。2は屈曲部をもつ高坏で、内湾しつつ口縁部にいたる。外面にハケメを残す。3は強い暗文状の線刻をもつ壺の肩部片である。線刻はまず、3本の水平線を引いた後に斜線を矢羽根状に充填する。斜線は部分的に向きを変えており、背を向けあう部分は菱形に空白部分が残る。類例は宗像市大井三倉遺跡のV字溝出土壺にあり、弥生時代前期中頃に位置づけられよう。

4は蓋の頂部である。器壁が薄く丁寧な作りである。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。5は器台の下部である。比較的器壁が薄く、内面下半は斜ハケを施す。

6・7は楽浪系土器である。6は外面に縄蓆文のタタキを施すもので短頸壺か。内面にオサエ痕を残すが、器表面の剥離が著しい。泥質で灰色を呈する。7は内外面ともに強い回転横ナデを施す。器壁は薄く、泥質で表面は黒灰色である。小片であるため、機種の特定は難しいが壺か。



第20図 三雲番上332番地西側調査区12B～14Bグリッド土器出土状況実測図 (1/30)

8は石鎌である。先端部を欠き、器表面の剥離が目立つが、肉厚で作りも丁寧である。現存長14.2cm、幅3.9cm、厚さ0.75cm。9が玄武岩製の敲石である。球状を呈し、下面が敲打によって窪む。

第21図1～5は11Bグリッド出土品である。1は甕の口縁部片である。やや跳ね上げ気味の短い口縁をもつ。2～4は楽浪系土器である。2は短頸壺の肩部である。外面は縄蓆文のタタキをナデ消し、内面にオサエ痕を残す。3・4は強い回転横ナデを施すもので、器種は不明である。壺か。5は石庖丁である。背は直線的で、平面は舟形を呈する。両面穿孔で、穿孔部から破損する。

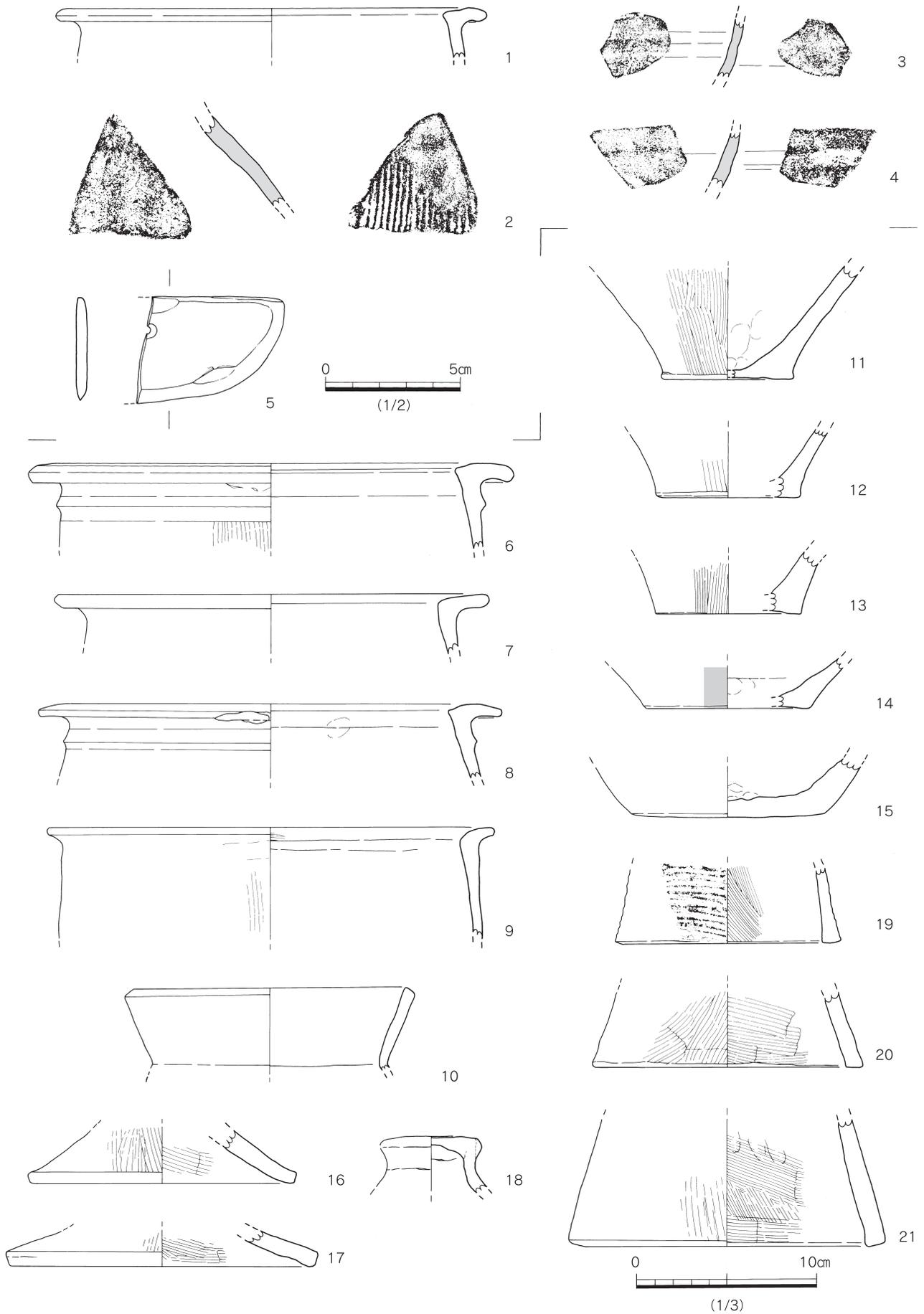
第21図6～21は12Bグリッド出土品である。6～10は甕の上半部である。6はやや肉厚な口縁部をもつ甕で、口縁部下に低い三角突帯を巡らす。外面に縦ハケを施す。7は断面逆L字形の口頸部をもつ甕で、口縁部がやや内傾する。8は口縁部が丸みをもつ甕で、口縁部下に低い三角突帯を巡らす。口縁部は打ち欠きを施す。9はつまみ出したような短い口縁部をもつ甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10は断面「く」字状を呈する口頸部をもつ甕である。小片のため、口径にやや不安がある。口縁端部断面は方形である。11～15は底部である。11は立ち上がり部が厚い底部で、直線的に広がる。外面に縦ハケ、内面にオサエを施す。12・13は底部を欠くが平底か。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。14は外面に丹塗りを施す底部片で、壺の底部の可能性はある。内外面ともにナデを施す。15は立ち上がり部が丸みをもつ甕で、径が大きい。16は高坏の脚部か。端部断面は方形で、外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。17も高坏の脚部か。やや径が大きい。端部断面は方形で、外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。18は蓋の頂部である。器壁は薄く、内外面にナデを施す。内面には接合痕を残す。19～21は器台である。19は外面にタタキ、内面に縦ハケを施すもので、器壁が薄い。端部が肥厚する。20は外面に斜ハケ、内面に横ハケを施す器台脚部で、端部断面は方形である。21は外面に縦ハケ、内面に縦・横ハケを施すもので、やや径が大きい。

第22図1は板石硯片である。三雲番上330番地の調査で、1例目が確認された後に、すべての石器を再点検したときに確認されたものである。12Bグリッドは掘り下げておらず、浮いた遺物のみ取り上げ、その中に含まれていた。そのことから土器溜りの最上層出土品といえる。現存長5.4cm、現存幅3.9cm、厚さは4.5～6.0mmで図の上部が薄い。石材は九州大学安立達郎氏により砂質頁岩とされ、そのうち泥質部分を硯面とする。硯面には肉眼で墨の痕跡は確認できず、赤外線でも強い反応はなかった。なお、窪みは明瞭である。また、無数の細かい擦痕と鉄器を磨いた砥石に見られる鋭い研磨痕がある。おそらく硯として用いた後に鉄器用の砥石に転用したのだろう。側面は内傾し、硯面との境は丸みを帯びる。裏面は敲打痕が残り、研磨等は見られない。2は紡錘車の破片である。

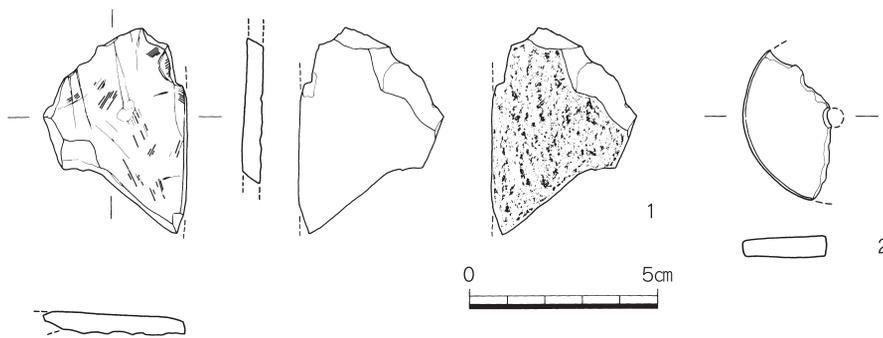
第23図1・2は13Bグリッド出土遺物である。1は丸みをもつ口縁部の甕である。2は立ち上がり部が肉厚な甕の底部で、中央部を欠くが平底である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

3～8は14Bグリッドから出土したものである。3は無頸壺である。短い口縁部をもち、しまりの強い頸部から、張りの強い胴部にいたる。頸部内面を欠く。4・5は甕の上半部である。4はほぼ水平に伸びる口縁部の下に三角突帯を巡らせる甕である、5はやや跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、口縁部下に低い三角突帯が巡る。6は甕の下半部である。全体的に器壁が薄く、外面は剥離痕を多く残す。底部はやや上げ底である。

7は大型の砥石である。実測図の上面と右側面のみに残っている。特に右側面の使用痕は明瞭であ



第21図 三雲番上332番地西側調査区11・12Bグリッド出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第22図 三雲番上332番地西側調査区12Bグリッド出土遺物実測図(1/2)

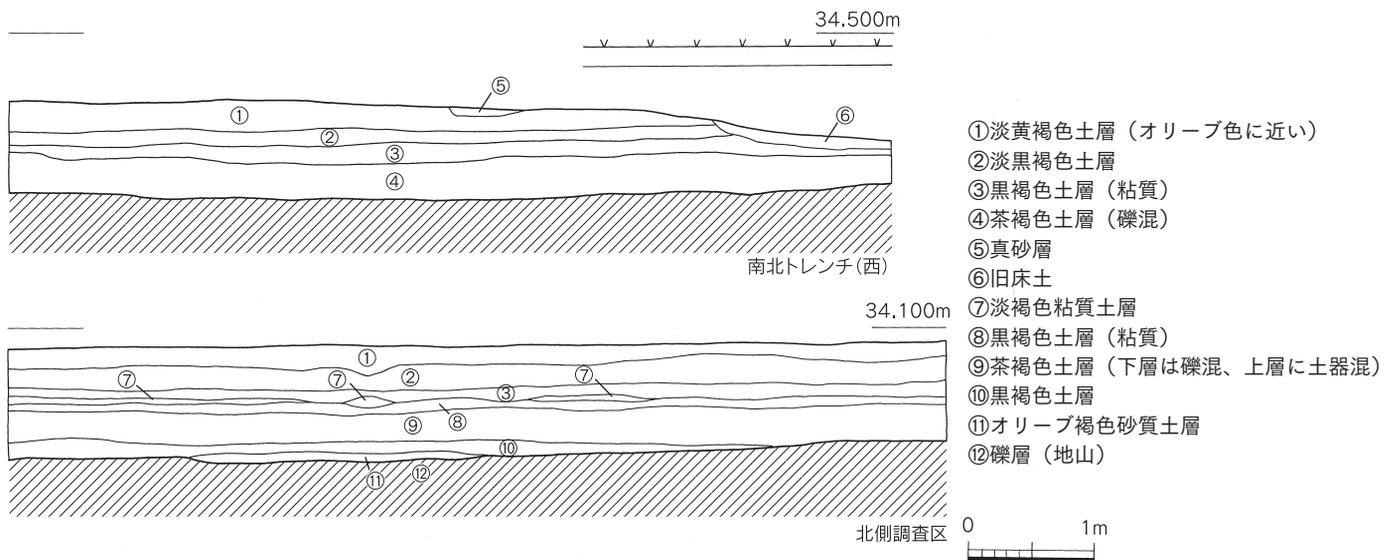
る。8は紡錘車の素材と思われる川床円礫で、加工痕はない。三雲・井原遺跡では結晶片岩の川床円礫が多く出土している。

(2) 南北トレンチ(東)出土遺物

第24図上は南北トレンチ(西)、下は北側調査区の土層断面図で、いずれも右が南側である。両者は4mの間を空けて、直線的に並ぶ。調査区は約20cmの耕作土の下に圃場整備に伴い真砂が30～90cm程度盛られており、真砂の下は南側に傾斜する。南端部には旧床土かと思われる粘性土がある。その下に第2層の淡黒褐色土、第3層の黒褐色土がつづき、第3層と第4層である茶褐色土の境に土器が集中する。ただ、土器の集中は南から4mまでで、それより北側には急激に減少するため、このあたりが土器溜りの北端と認識した。ただ、土層をみる限り、急激な落込み等は見られず、緩やかな窪地状になると考えられる。

第25・26図は南北方向に残した畦の東側に設定したトレンチからの出土品である。以下、南北トレンチ(東)と称する。第25図1は鋤先口縁壺の口頸部である。器壁は薄く、口縁部は若干垂れ下がる。口縁端部断面はM字状を呈する。頸部外面は暗文状のミガキを施す。内外面共に丹塗りである。2は口縁部を欠く壺である。平底で、胴の最大径の箇所到低い方形突帯が巡る。頸部の締まりは緩いが、胴部と頸部の境に低い三角突帯を巡らせる。頸部は内湾しながら立ち上がる。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。3・4は甕の上半部である。3の器壁は薄く、口縁部の内面への突出が大きい。口縁部はやや垂れ下がり、端部を丸く収める。口縁部の下は低い三角突帯が巡る。4は口縁端部がやや垂れる甕で、口縁部下に三角突帯を巡らせる。口縁端部にはススが付着し、内面には粘土の接続痕を残す。5～9は甕の底部である。5は中央部を欠くが平底である。外面に縦ハケを残し、強い二次焼成痕を全面に残す。6は上げ底の甕の底部で、裾が広がる。全体的に肉厚で、立ち上がり部に突帯を巡らせた痕跡を残す。7は若干内湾しつつ立ち上がる甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8は小型の甕の底部で直線的に広がりながら立ち上がる。内外面共にナデを施す。9は底部に外側からの焼成後穿孔を施す甕の底部で、直線的に立ち上がる。部分的に丹塗りの痕跡を残し、底部裏面にススが付着する。10は大型壺の下半部である。平底から丸みを持ちつつ立ち上がり、胴部下位に大型の三角突帯が二条巡る。

第26図1は口頸部が「く」字状を呈する大型の甕で、内外面に稜が入る。胴の張りが強く、頸部直下に低い三角突帯を巡らせる。外面上部は縦ハケ、斜ハケを施し、下半部に擦過痕を残す。2は口頸部が「く」字状を呈する甕の上半部で、外面に縦ハケ、内面に横ハケ、斜ハケを施す。3は甕の下半部で、長胴である。内外面ともに縦ハケを施す。全体的に二次焼成を強く受けており、外面にススが付着し、内面は剥離している部分もある。4は素口縁の甕である。器壁を薄く仕上げ、口



第24図 三雲番上332番地西側調査区南北土層断面図（1/60）

れるが、全体的に華奢な印象があり脚付鉢の可能性もある。全体的にススが付着する。10は大型の甕であるが、器壁は薄めである。平底で内外面ともに縦ハケとナデを施す。11は外面にタタキを施すが、器壁が厚い鉢である。底部を欠くが平底であろう。12は小型の鉢である。器壁は薄く、底部は面がある程度で不安定である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

第28図 1～10は器台である。1は完形に復元される器台で、くびれ部が上位に位置し、内外面ともに弱い稜が入る。口縁端部は方形を呈し、脚裾端部は丸くおさめる。外面はタタキの後に縦ハケ、内面はナデの後に縦ハケを施す。2はやや細身の器台である。くびれ部は上位に位置し、内面に明瞭な稜が入る。内外面ともにナデを施し、口縁端部は方形を呈する。3は器台の上半部で、くびれが明瞭で内外面に稜が入る。口縁端部は方形を呈し、ヘラで×印状に刻目を入れる。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。4は器壁の薄い器台で、頸部のしまりは緩い。口縁端部は方形で、端部にタタキを施す。外面はナデ、内面は横ハケとナデを施す。5は器台の上半部で、口縁端部は丸くおさめ、刻目を施す。頸部のしまりは緩い。外面上位に縦ハケ、下位にタタキ、内面は横ハケとナデを施す。6は袋状の口縁をもつ小型の器台であるが肉厚である。口縁端部は方形に、脚裾端部は隅丸方形におさめる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7は器台の下半部である。やや膨らみながら脚裾部にいたるもので、内外面ともに縦ハケを施す。8は小型の器台の脚裾部である。9は器台の下半部であるが、脚裾部は上げ底状を呈し、上部に向かいややすぼまりながら立ち上がる。10は器壁の薄い器台である。内面にススが付着する。

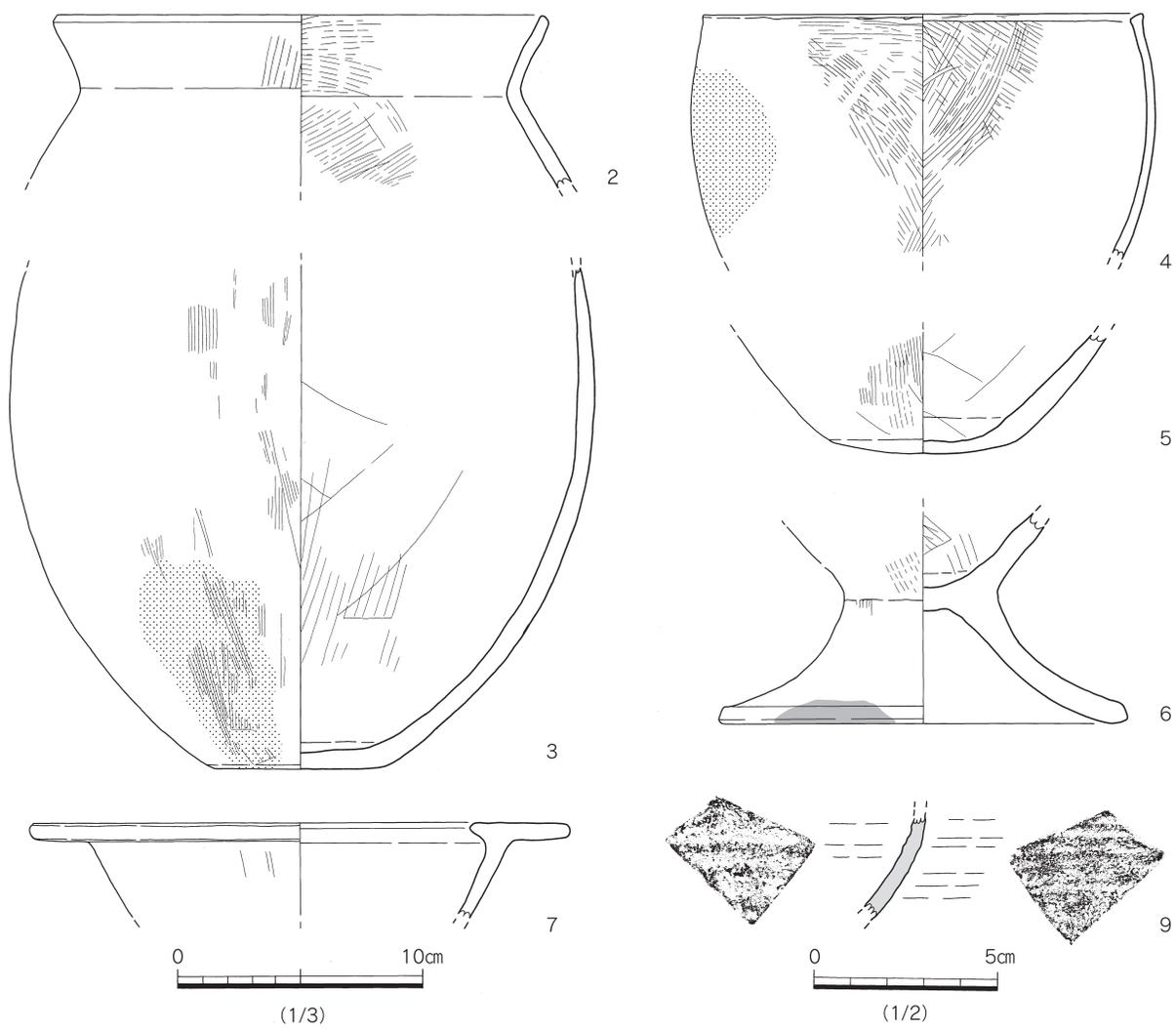
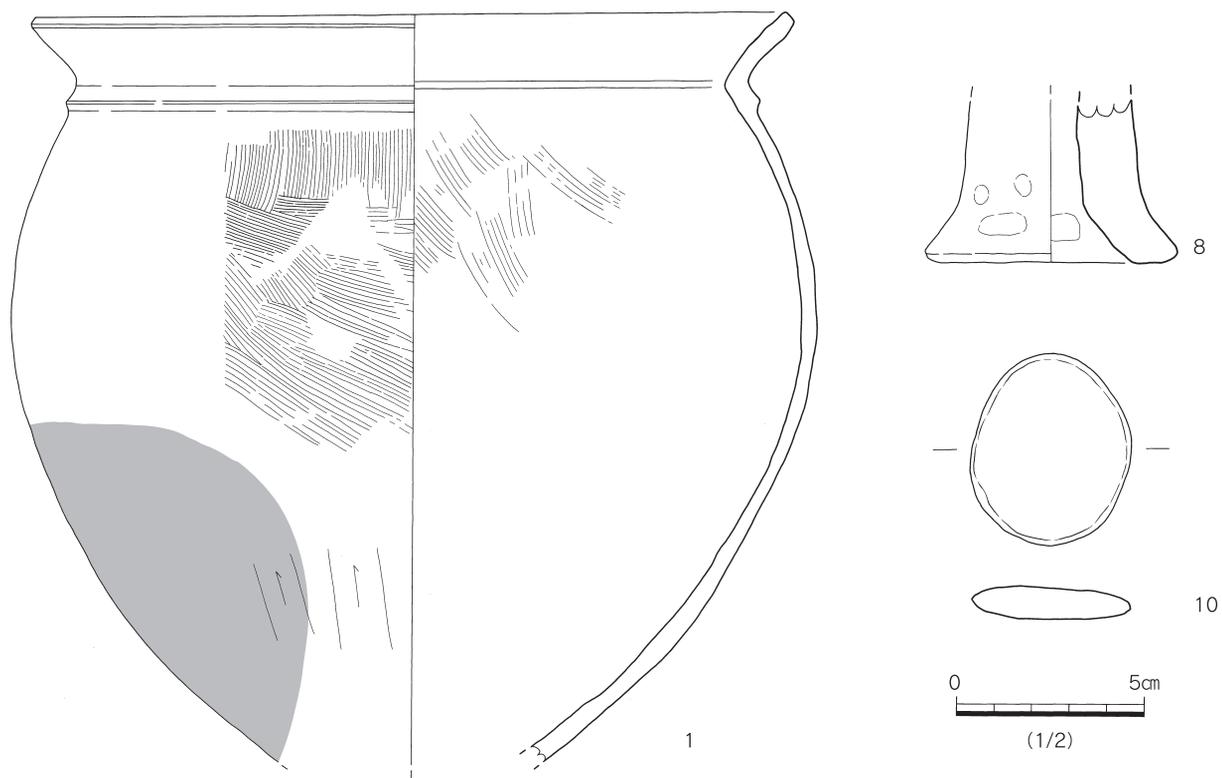
（4）東西トレンチ（西）出土遺物

土器溜りの広がりを確認するために、調査区南側に沿う形で東西に延びるトレンチを設定した。南北を主軸に設定した畦で東西に分け、それぞれ東西トレンチ（西）・東西トレンチ（東）とした。

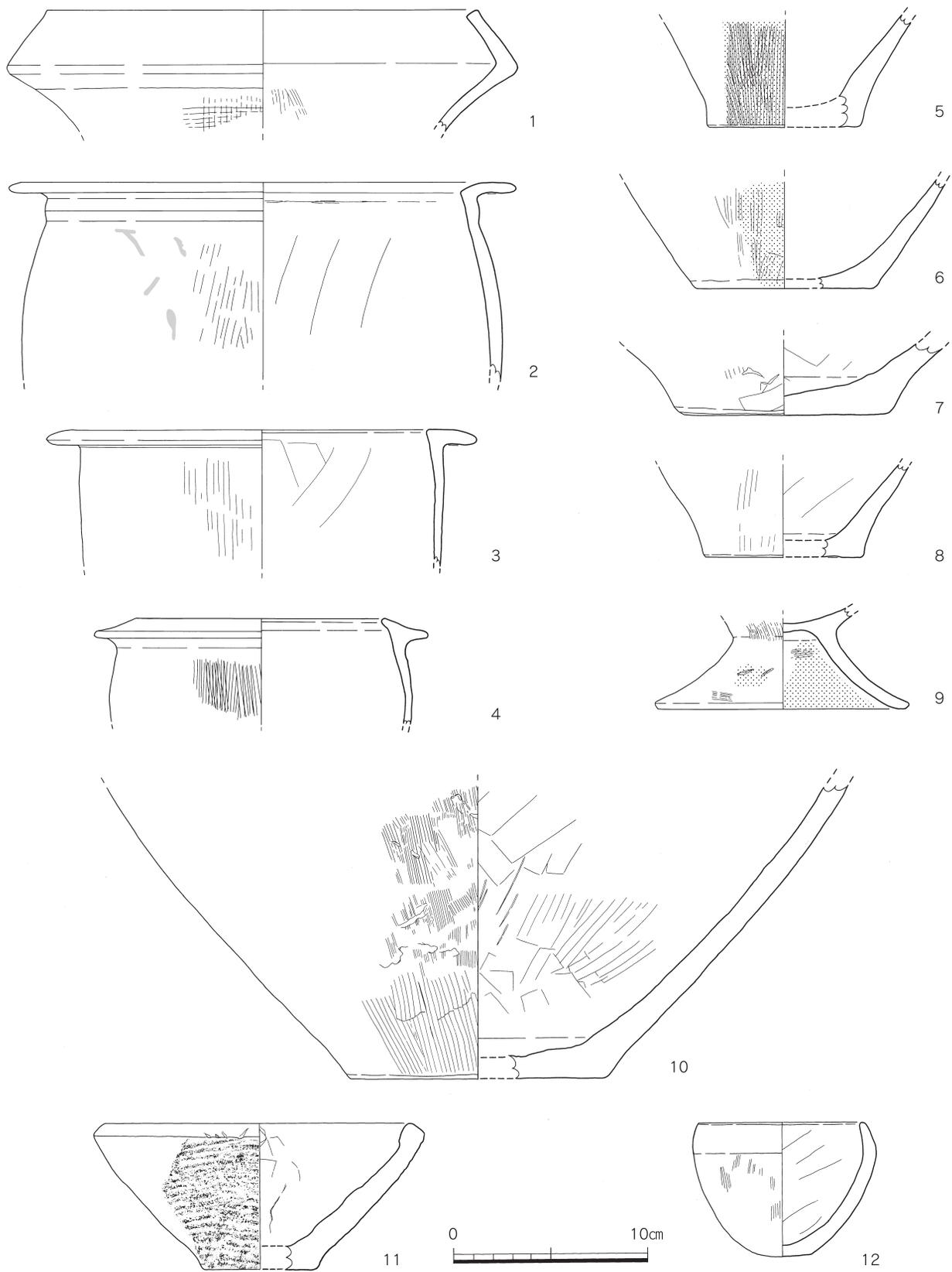
第29～45図は東西トレンチ（西）から出土した遺物である。



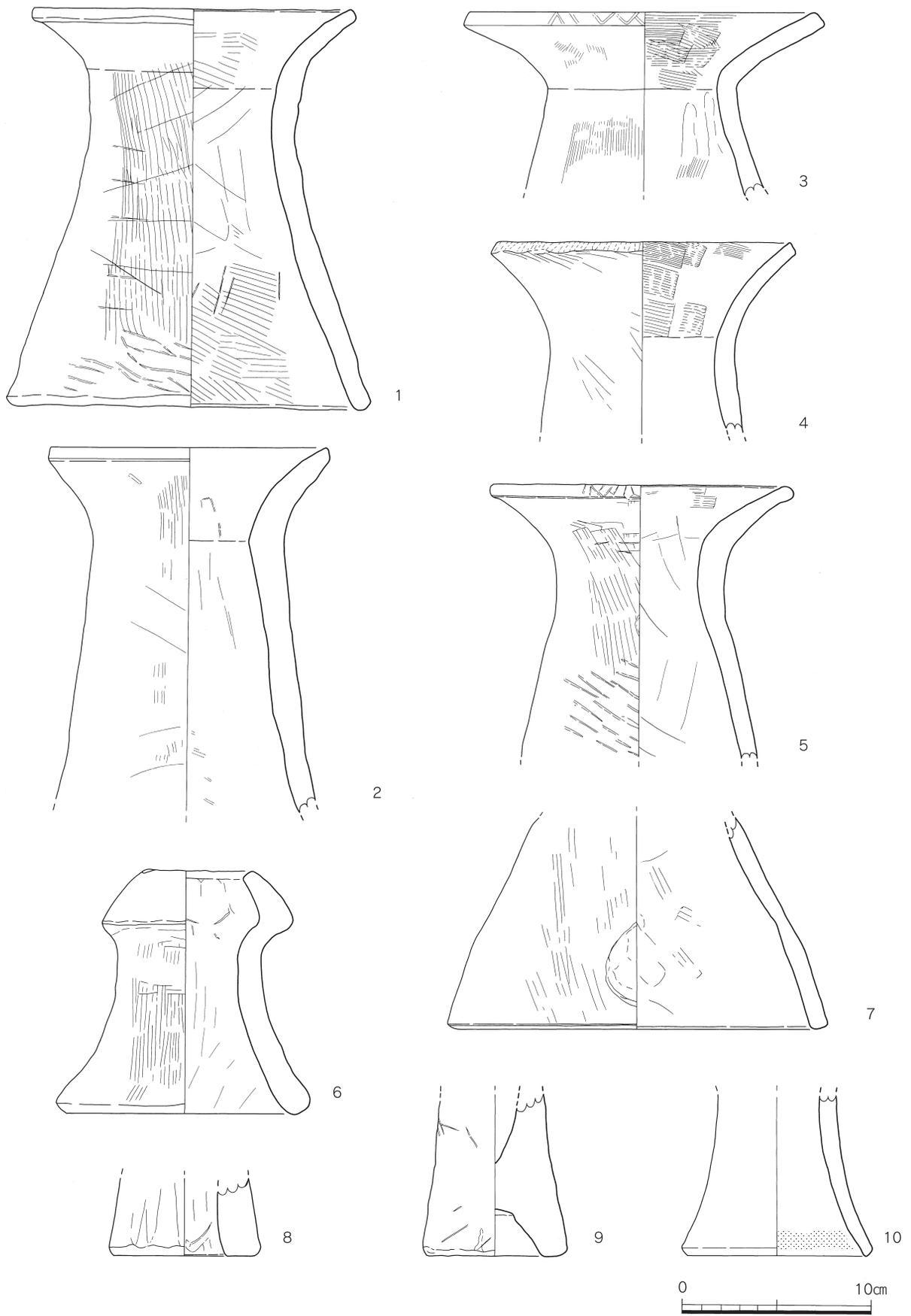
第25図 三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ（東）出土遺物実測図1（1/3）



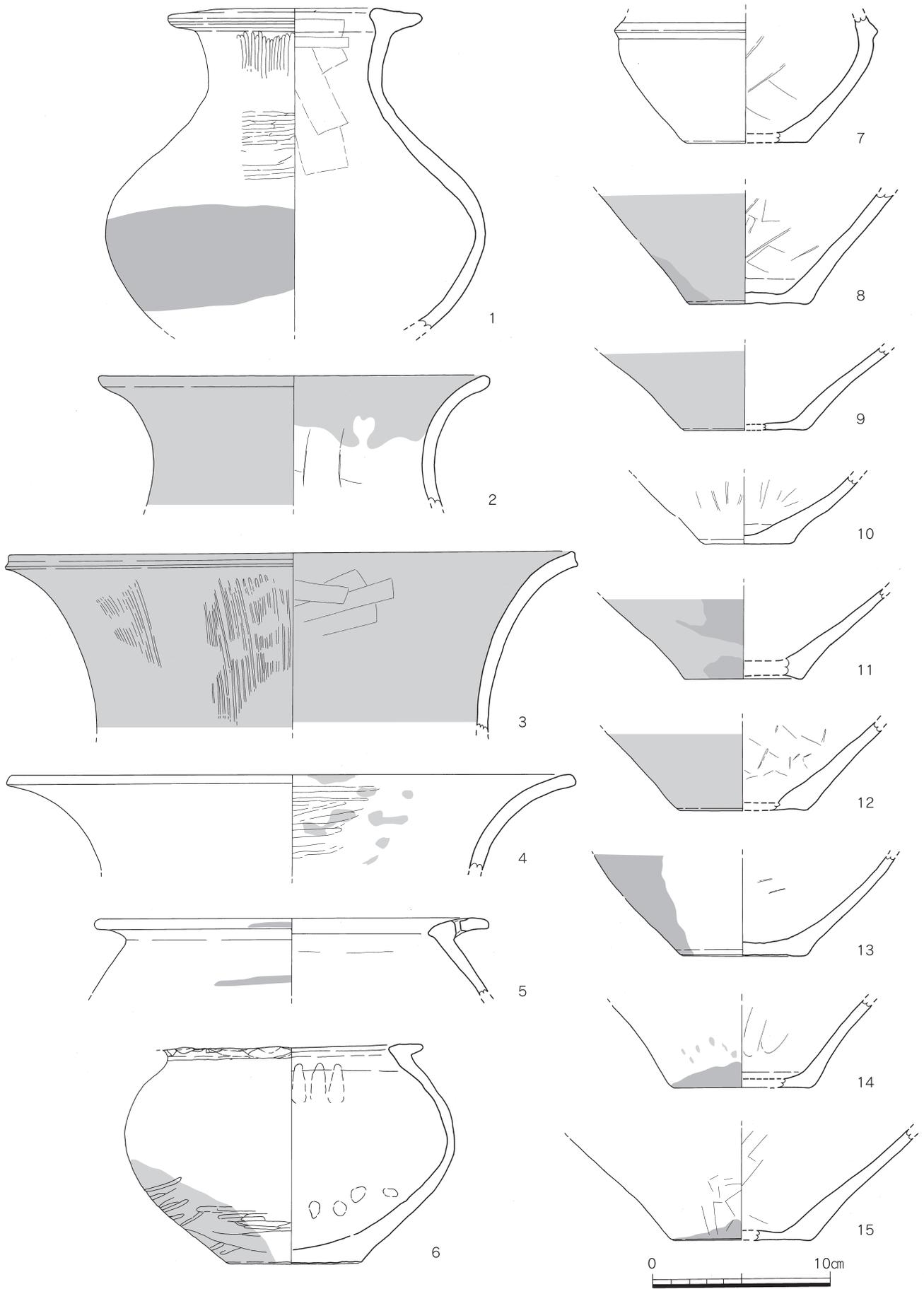
第26図 三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ（東）出土遺物実測図2（1/2・1/3）



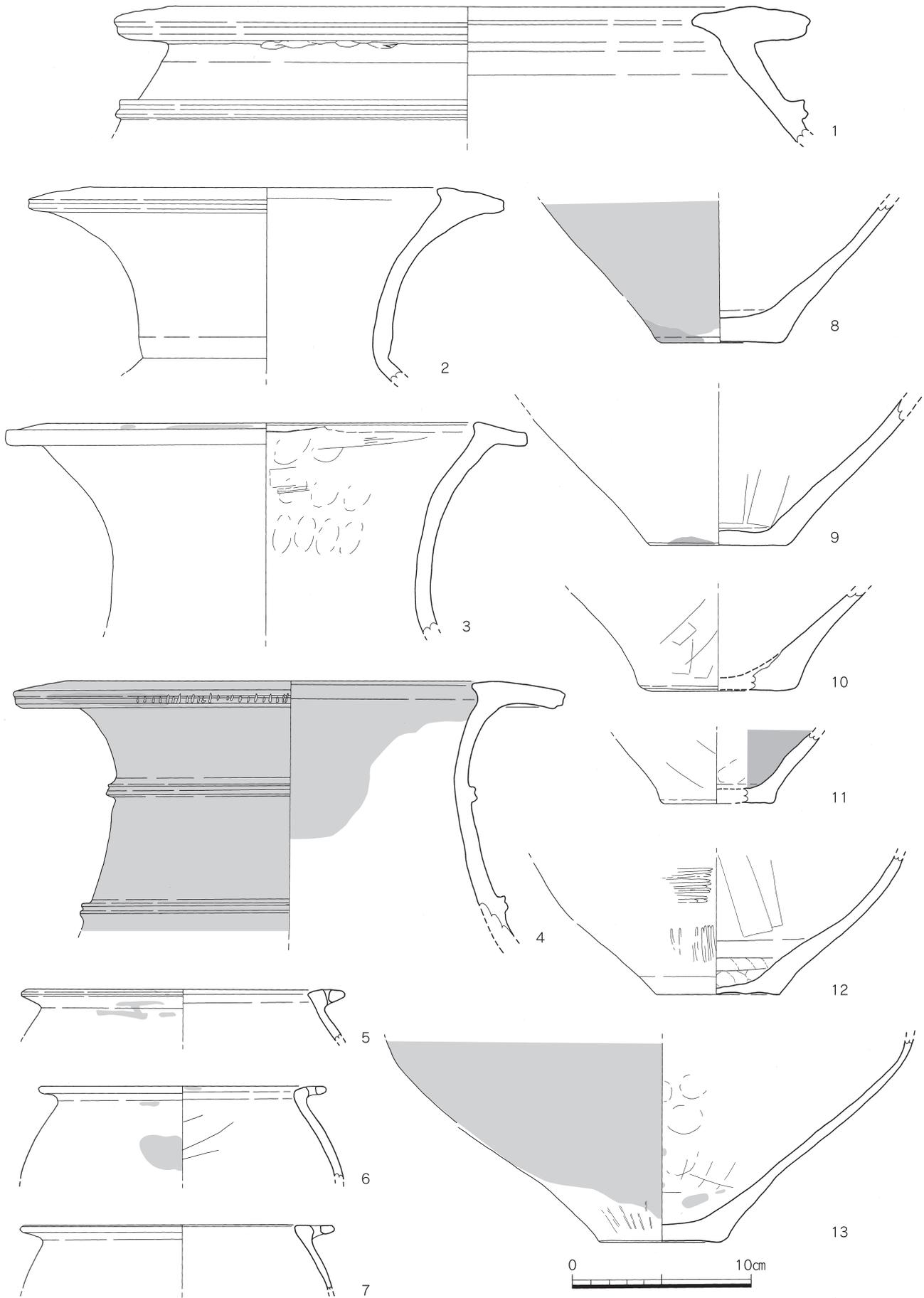
第27図 三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ（西）出土遺物実測図1（1/3）



第28図 三雲番上332番地西側調査区南北トレンチ（西）出土遺物実測図2（1/3）



第29図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図1（1/3）

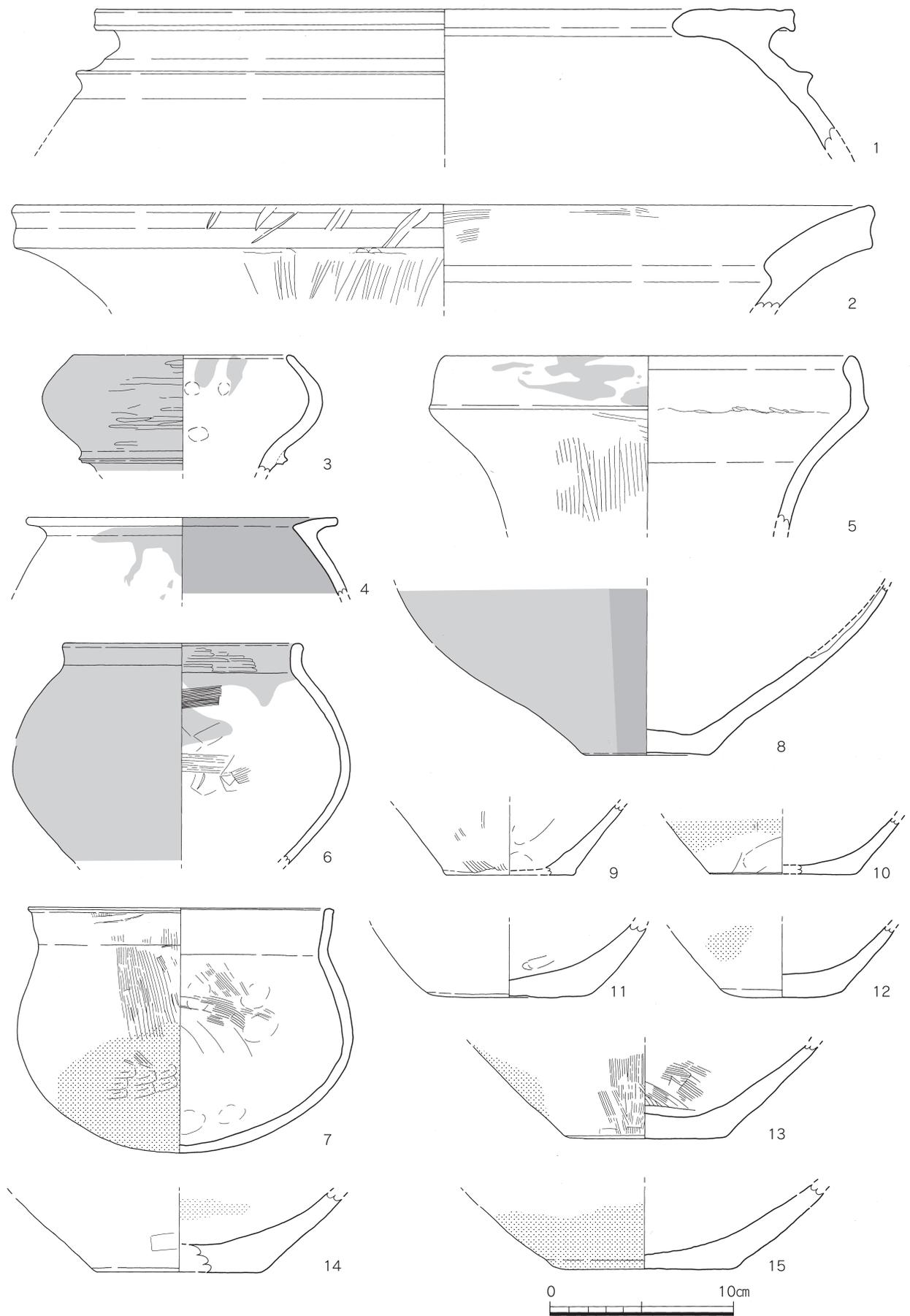


第30図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図2（1/3）

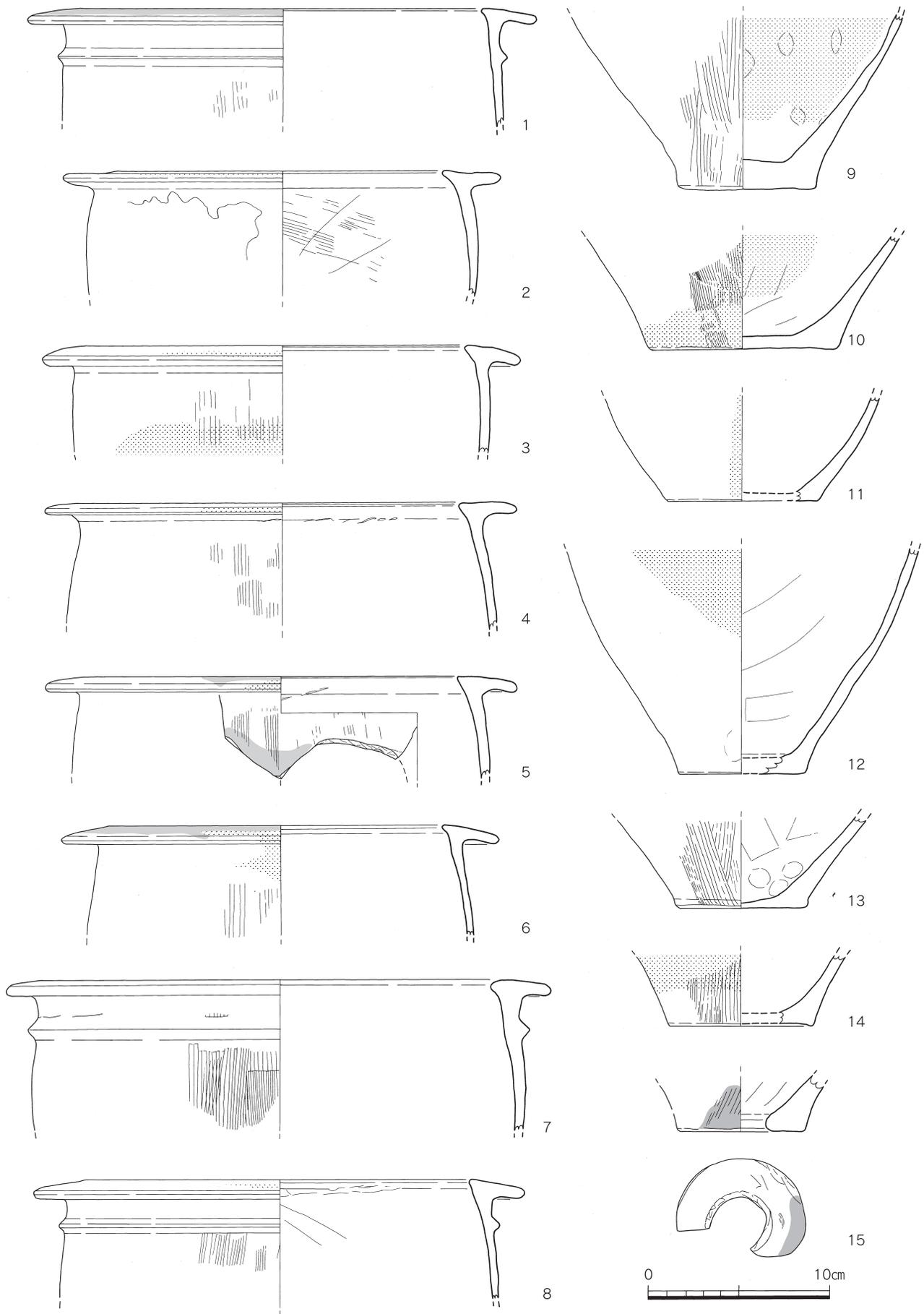
第29図1は小型の鋤先口縁壺である。頸部がしまり、外部への突出が小さい口縁をもつ。外面頸部に縦ミガキ、胴部に横ミガキを施し、内面にナデを施す。胴部外面に黒斑をもつ。2～4は広口壺の口頸部である。2は古式の広口壺で、口縁部の外への広がりが弱く、端部も丸みをもつ。内外面共に丹塗りを施すが、内面は口縁部上位までである。3は口縁が大きく広がり、端部断面はM字状を呈する。内外面共に丹塗りである。外面には約10本一単位で暗文状の沈線を施す。4も広がりが強い口縁部で内面に横ミガキを施す。内面には丹塗りの痕跡を残す。5・6は無頸壺である。5は大型のもので、口縁はやや跳ね上げ気味で、蓋と合わせる小孔をもつ。口縁部と胴部上位に黒斑が残る。6は小型のもので、口縁端部を打ち欠く。胴部は横ミガキを施し、全面丹塗りである。7は小型の壺である。胴部中位に最大径があり、低い三角突帯が巡る。8～15は壺の底部である。いずれも平底で、小さな底部から強く広がりながら立ち上がる。8・9・11・12の外面は丹塗りである。

第30図1は樽形土器の口縁部である。肉厚の口縁部で、端部断面はM字形を呈する。口縁部の下にはM字突帯を巡らせる。2は鋤先口縁をもつ広口壺である。頸部からラップ状に広がり、肉厚な口縁部に至る。3も広口壺で垂れ下がり気味の鋤先口縁をもつ。内面に指頭痕を多く残す。4は頸部のしまりの緩い鋤先口縁壺である。外面と内面口頸部に丹塗りを施す。口縁は垂れ下がり気味で、端部に細かい刻目を施す。頸部には二条のM字突帯が巡る。5～7は小型の無頸壺である。5は肉厚の口縁部をもち、頸部に明瞭な稜がはいる。6は丸みを帯びつつ屈曲する頸部をもつ。口縁端部は丸く収める。7は水平に広がる口縁をもつ。5～7はいずれも口縁部に2個一対の孔をもち、5・6は外面に丹塗りを施す。8～13は壺の底部である。8は平底から広がりながら立ち上がる底部で、外面に丹塗りを施す。9も同様の形態であるが丹塗りは認められない。10は中央部を欠くが平底で内湾しつつ立ち上がる。11も中央部を欠くが平底である。内外面共にナデを施し、内面には黒斑が残る。12は平底で張りのある胴部をもつ壺である。外面にミガキ、内面にナデを施す。13も同様の形態であるが、より張りが強く、器壁は薄い。外面は丹塗りである。

第31図1は甕棺に用いられる壺の口頸部である。口縁部は内部に大きく突出し、胴部に至るまでの張りが強い。頸部下には三角突帯が巡る。2は大型広口壺の口縁部である。口縁部には粘土を貼り付けて肥厚させ、内面に段がつく。口縁断面はゆるいM字を呈し、太い刻目を施す。外面に縦ハケ、口縁部内面には横ハケを施す。3は袋状口縁壺である。大型のもので、口縁上端がやや開き気味である。口縁の付け根には小さなM字突帯を巡らせる。外面は丹塗り、口縁内面にも丹が垂れている。4は無頸壺である。頸部がしまり、口縁部はやや跳ね上がる。外面は丹塗りである。5は複合口縁壺である。反転部は直立気味に立ち上がり、端部はやや肥厚する。頸部外面には縦ハケ、内面にナデを施す。6は無頸壺である。口縁は直立し、端部は丸く収める。口縁内面には横ミガキを施す。外面には丹塗りを施す。7も無頸壺である。口縁部は直立気味に広がり、張りの弱い胴部は中位に最大径をもつ。底部はケズリを施し丸くする。外面上位に縦ハケ、内面上位に斜ハケとナデを施す。8は壺の下半部で、上げ底気味の底部から内湾しつつ張りの強い胴部に至る。内外面共にナデを施す。外面は丹塗りで黒斑も残る。内面は剥離している。9～15は壺の底部である。9は中央部を欠くが平底であろう。外面に斜ハケを施す。10は平底で直線的に広がりながら立ち上がる。



第31図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図3（1/3）



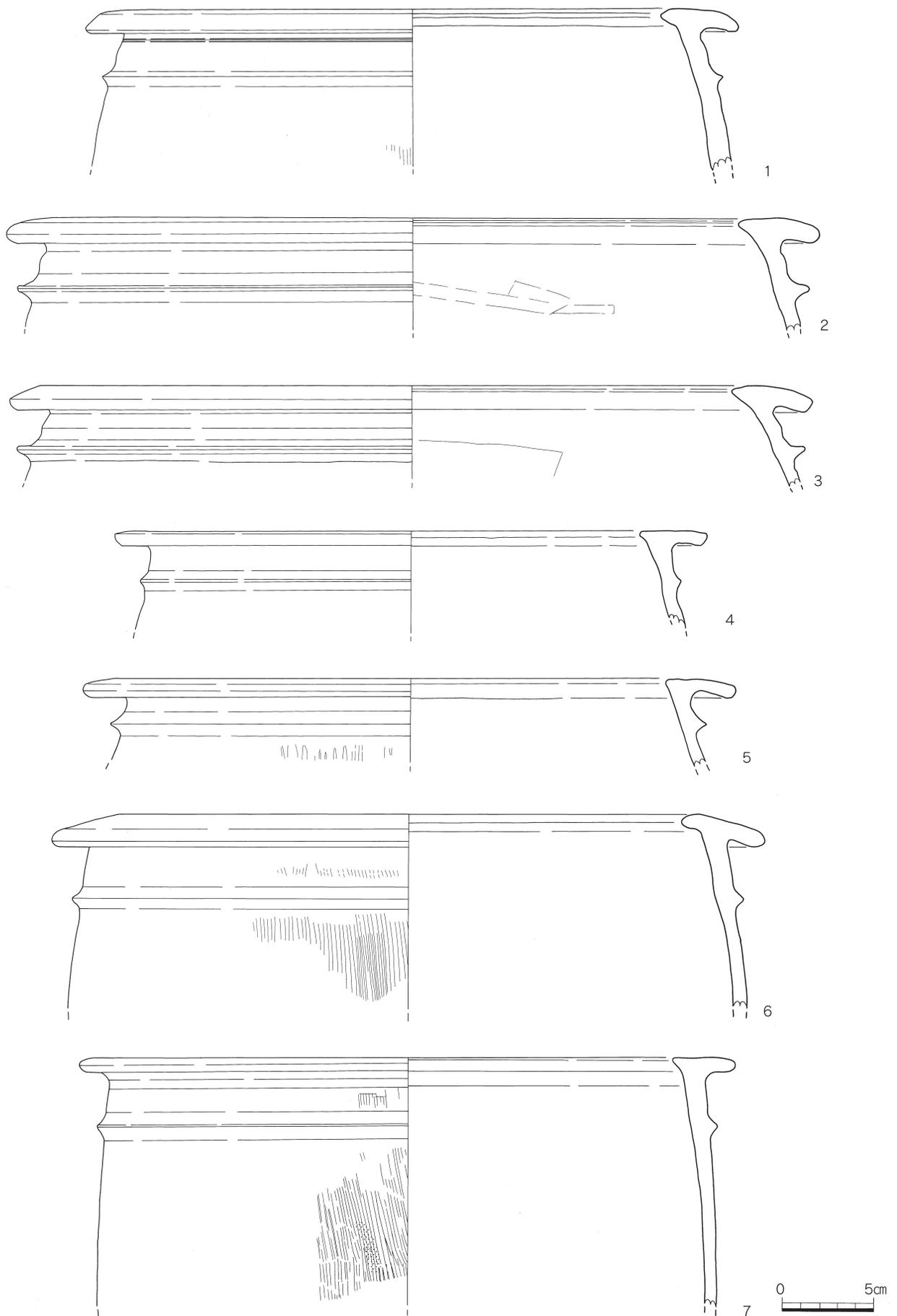
第32図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図4（1/3）

外面にススが付着する。11は不安定な平底で、丸みを持ちながら立ち上がる。12は凸レンズ状の底部である。外面にススが付着する。13は大型壺の底部で内外面共にハケメが残る。外面にススが残る。14は平底から直線的に広がるもので、内面にコゲが付着する。15も平底で外面にススが付着する。

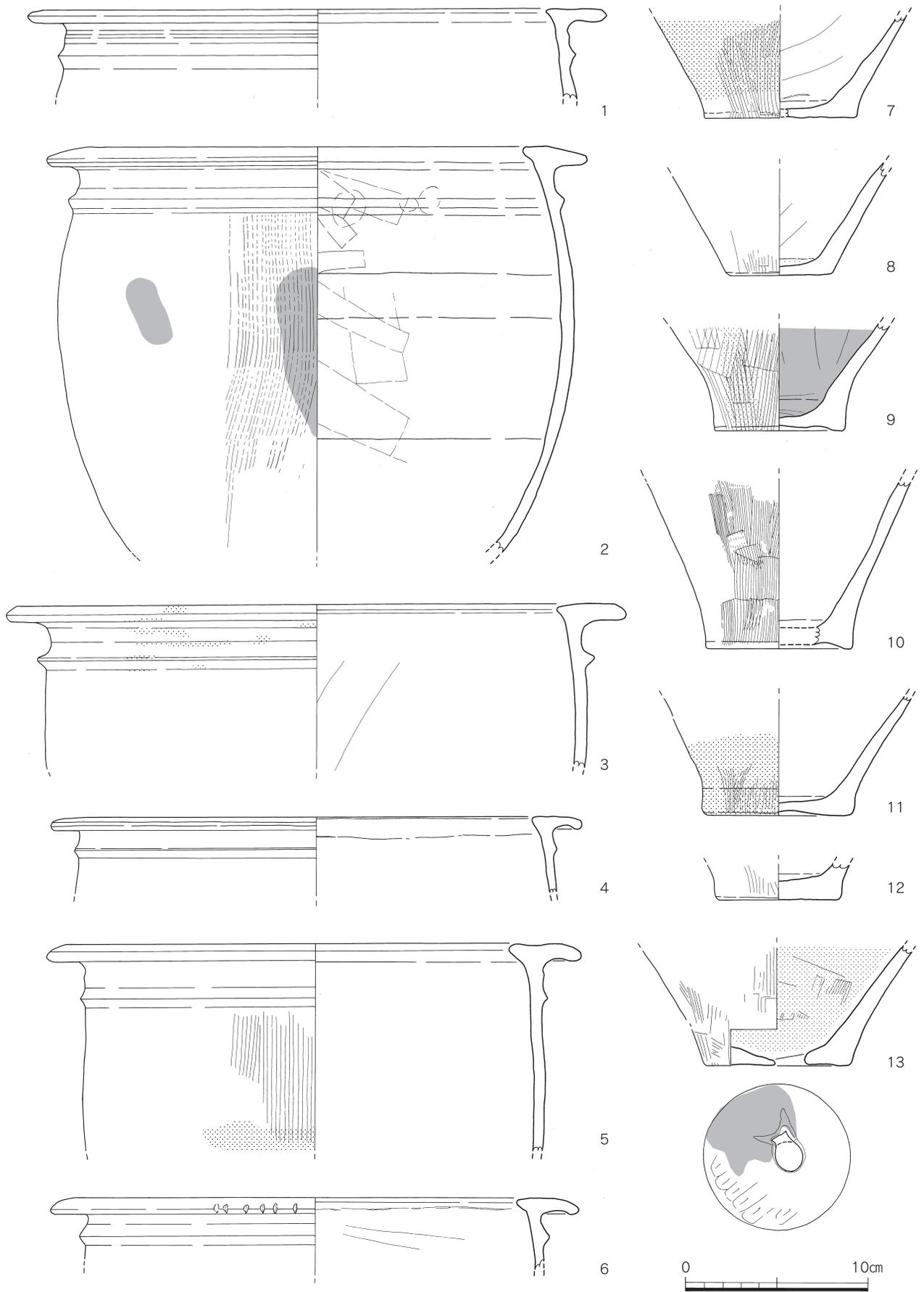
第32図 1～8は甕の上半部である。1の口縁は垂れ下がり、その下に三角突帯が巡る。口縁に丹が付着する。2は内側の突出がつよい口縁をもつ甕で、外面の広い範囲が剥離している。内面に斜ハケを施す。口縁端部にススが付着する。3は垂れ下がる口縁をもつもので、胴の張りは小さい。外面に縦ハケ、内面にナデを施し、外面にはススが付着する。4は口縁端部のみ下がる甕で、ススが付着する。胴部外面に縦ハケ、内面にナデを施す。5はやや垂れ気味の口縁をもつ甕で胴部に打ち欠きによってつくられた円形窓をもつ。外面丹塗りで、ススも付着する。6は口縁部が垂れ下がる甕で外面に縦ハケ、内面にナデを施す。口縁付近に丹とススが付着する。7は口縁下に三角突帯を巡らせる甕でやや肉厚である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8は垂れ下がる口縁をもつ甕で、口縁下に三角突帯が巡る。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。9～15は甕の下半部である。9は肉厚な底部から内湾しつつ立ち上がる甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10は径が大きい平底の甕で、器壁が薄い。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。外面底部にスス残り、内面にコゲが付着する。11は中央部を欠くが平底と思われ、丸みをもちつつ立ち上がる。内外面共にナデを施し、外面にススが付着する。12は甕の下半部で内外面にナデを施し、胴部外面にススが付着する。13は外面に縦ハケ、内面にナデを施すもので、底部の器壁が薄い。14は中央部を欠くが、やや上げ底気味の甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。外面にススが付着する。15は底部に焼成後穿孔を施すもので、直径3cmを測る。穿孔部の割口は丁寧に加工し、外面と底部に黒斑が残る。

第33図は中型～大型の甕の上半部である。1は全体的に肉厚で口縁が外傾する、口縁部下に低い三角突帯が巡る。2は大型の甕で頸部がやや締まる。口縁は垂れ下がり、口縁部下に三角突帯を巡らせる。3も2と同様の形態であるが、胴の張りが強い。4は中型の甕である。口縁は水平に広がり、端部は方形を呈する。5も中型の甕で口縁が外傾する。4・5共に口縁部下に三角突帯を巡らせる。6は大型の甕で、口縁部が強く外傾する。口縁部下に三角突帯を巡らせ、外面に縦ハケを施す。7は口径の小さな甕である。胴の張りは弱く、外面にはススが付着する。外面に縦ハケを施す。

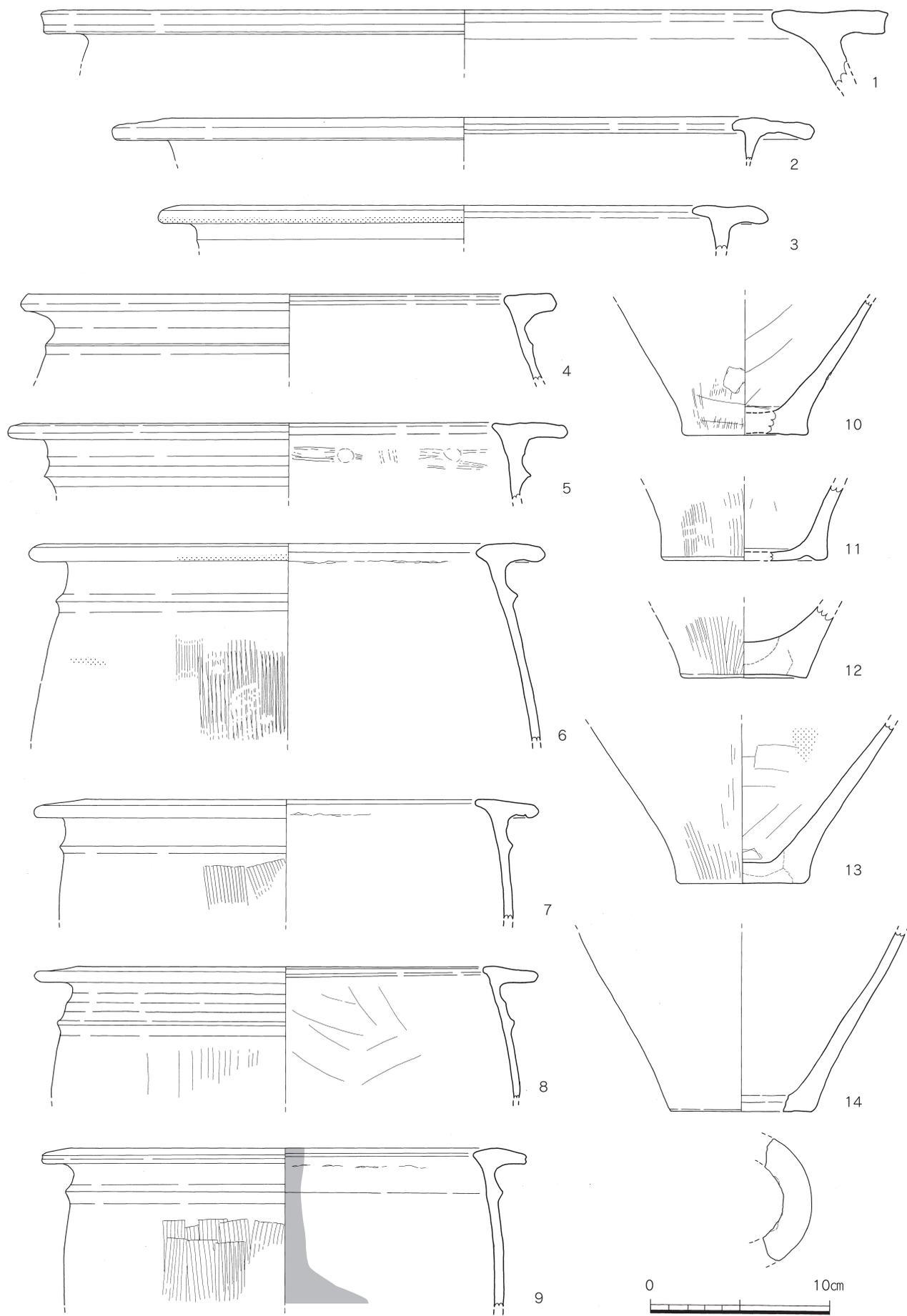
第34図 1はほぼ水平の口縁部をもつ甕で、口縁の下に三角突帯が巡る。2はやや垂れる口縁を持ち、内部の突起もやや大きい。口縁部下には三角突帯を巡らせる。胴部はやや張り、外面は縦ハケ、内面はナデを施す。3は跳ね上げ気味の口縁をもつ甕で、口縁部下に三角突帯を巡らせる。内外面ともにナデを施す。4は端部を摘み、垂下させる口縁をもつ甕で、口縁下に三角突帯を巡らせる。5はやや口縁部が垂れ下がる甕で、口縁の下に三角突帯が巡り、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。胴部の張りは弱い。6は口縁端部に刻目を施す甕で、口縁下に三角突帯を巡らせる。7～13は甕の底部である。7は外に縦ハケ、内面にナデを施すもので、外面にススが付着する。8は底径に不安があるもの、直線的に立ち上がる甕である。9は外面に縦ハケ、内面にナデを施す甕で、内面には黒斑が残る。底部はやや上げ底気味。10は中央部を欠く甕の底部で、傾きに不安があるものの、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。11は外面にススと二次焼成痕を残す甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。12は底部の小片である。13は焼成後の底部穿孔をもつ甕の底部である。穿孔は外か



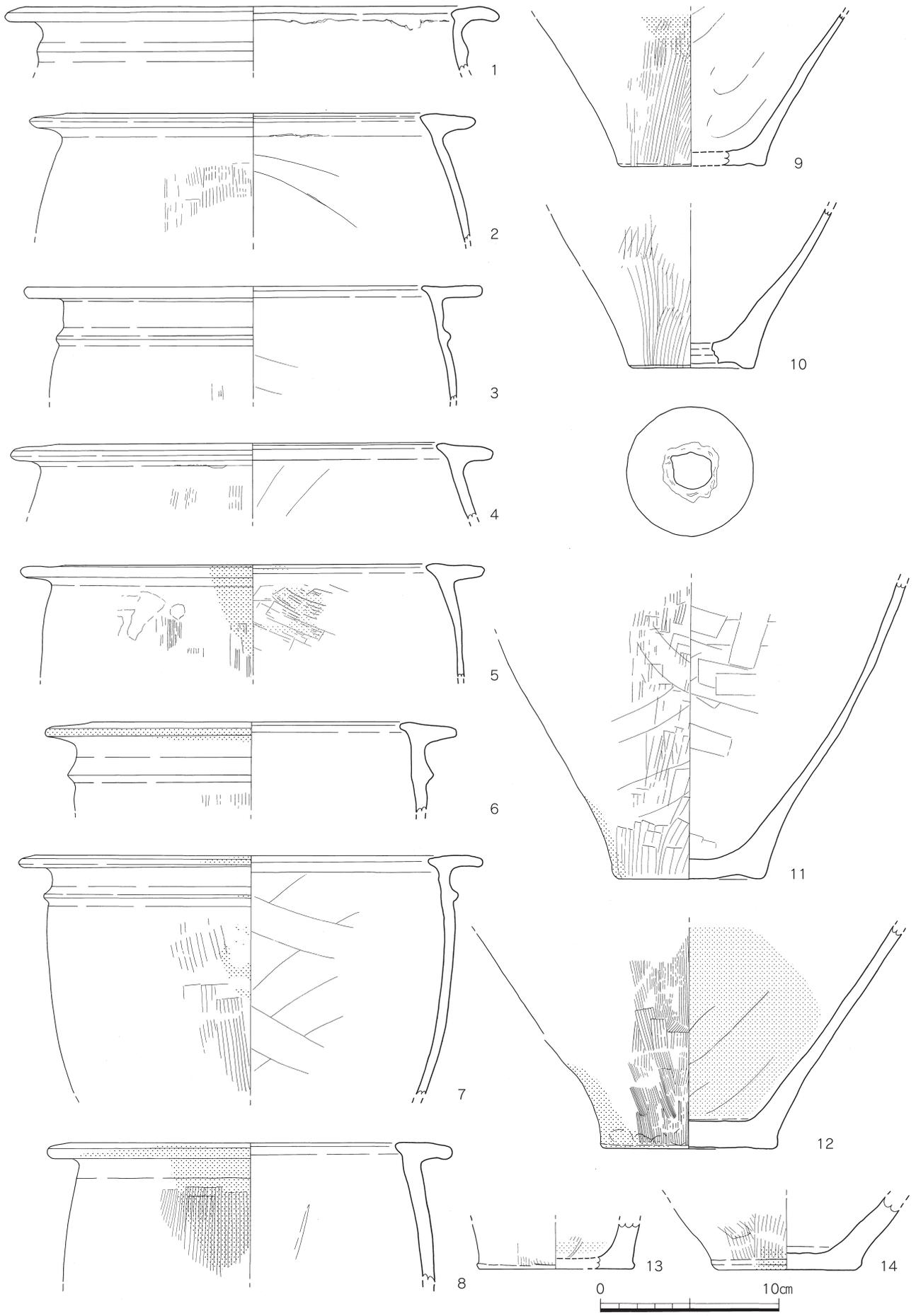
第33図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図5（1/3）



第34図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図6（1/3）



第35図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図7（1/3）



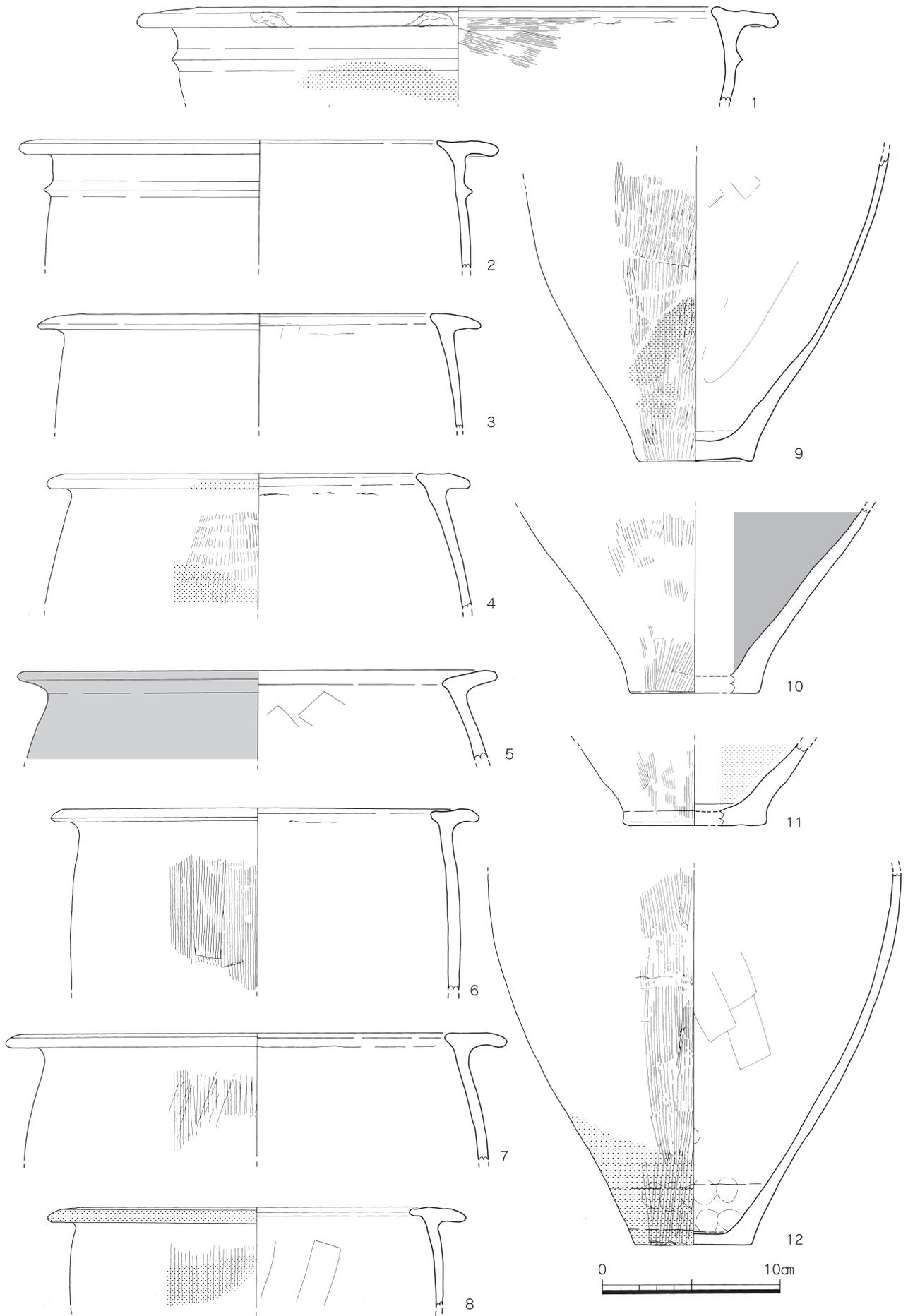
第36図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ (西) 出土遺物実測図8 (1/3)

ら施され、内面は剥離面を残す。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面にはコゲが付着する。

第35図 1 は大型甕の口縁部で、頸部が締まる。2 は大型甕の口縁部片である。器壁は薄く、やや垂れ下がる。3 はやや大型の甕の口縁部で、内部が大きく突出する。口縁端部にはススが付着する。4 は肉厚な口縁部をはりつけた甕で、5 は甕の口縁部で口縁部下に鋭い三角突帯を巡らせる。6 は甕の上半部である。口縁端部にはススが付着し、口縁下には三角突帯が巡る。胴部外面には縦ハケ、内面はナデを施す。7 は垂れ下がる口縁をもつ甕で、口縁下に三角突帯が巡る。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8 はやや垂下する口縁部をもつ甕で、口縁部下に三角突帯が巡るが口縁部との間に凹凸があり、稜がはいる。胴部外面は縦ハケ、内面はナデを施す。9 は短く収まる口縁をもつ甕で、口縁の下に三角突帯を巡らせる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面には黒斑が残る。10 ～ 14 は甕の底部である。10 はやや内湾しつつ立ち上がり、外面の一部は剥離する。11 は器壁が薄い甕で中央部を欠く。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。12 は器壁が厚く、やや上げ底である。13 は平底の底部からやや内湾しつつ立ち上がるもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。14 は甕の底部で裏面から焼成後の穿孔を施す。

第36図 1 ～ 8 は甕の上半部である。1 は跳ね上げ気味の口縁をもつ甕で、口縁部の下に低い三角突帯を巡らせる。2 は胴の張りがある甕で、口縁は外傾する。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。3 は水平に伸びる口縁をもつ甕で、口縁部の下に低い三角突帯を巡らせる。4 は外傾する口縁をもつもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。5 はやや外傾する甕の口縁部で、胴の張りは弱い。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。外面にススが付着し、内面にコゲが残る。6 は小型で器壁の厚い甕である。口縁端部にススが付着する。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7 は跳ね上げ気味の口縁をもつ甕で、口縁部下に三角突帯を巡らせる。器壁は薄く、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8 は肉厚で小型の甕である。外面にはススが付着し、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9 ～ 14 は甕の下半部である。9 は中央部を欠くが平底で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10 は焼成後に外から穿孔したもので、焼成後の調整がなく不整形円形を呈する。11 は平底で胴の張りが弱い甕で、外面に縦ハケとナデ、内面にナデを施す。外面にススが付着する。12 は胴の張りが強い甕で外面に縦ハケ、内面にナデを施す。外面にはスス、内面にはコゲが付着する。13 は底部から直立気味に立ち上がる甕で、内面にはコゲが付着する。14 は平底で広がりながら立ち上がる甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

第37図 1 ～ 8 は甕の上半部である。1 はやや大型の甕である。口縁端部が垂れ、一部打ち欠く。口縁部の下には低い三角突帯が巡り、胴の張りはほとんどない。突帯付近にススが付着する。2 は口縁部が内面に大きく突出する甕で、口縁端部が垂れ下がる。口縁部下には三角突帯を巡らせる。内外面ともにナデを施す。3 は外傾する口縁をもつ甕で、胴はほとんど張りが無い。4 は胴が少し張る甕で、口縁部は端部が少し垂れる。口縁端部と胴部にはススが付着する。5 は跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、胴の張りはやや強い。内外面共にナデを施し、外面に丹を塗る。6 は胴の張りが無い甕で、口縁部はつまんで丸みを帯びる。胴部外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7 の口縁部は水平にひろがり、端部が垂れる。胴の張りはやや強く、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8 は口縁部が内面に大きく突出する甕で、やや外傾する。口縁端部と胴部にはススが付着する。外面



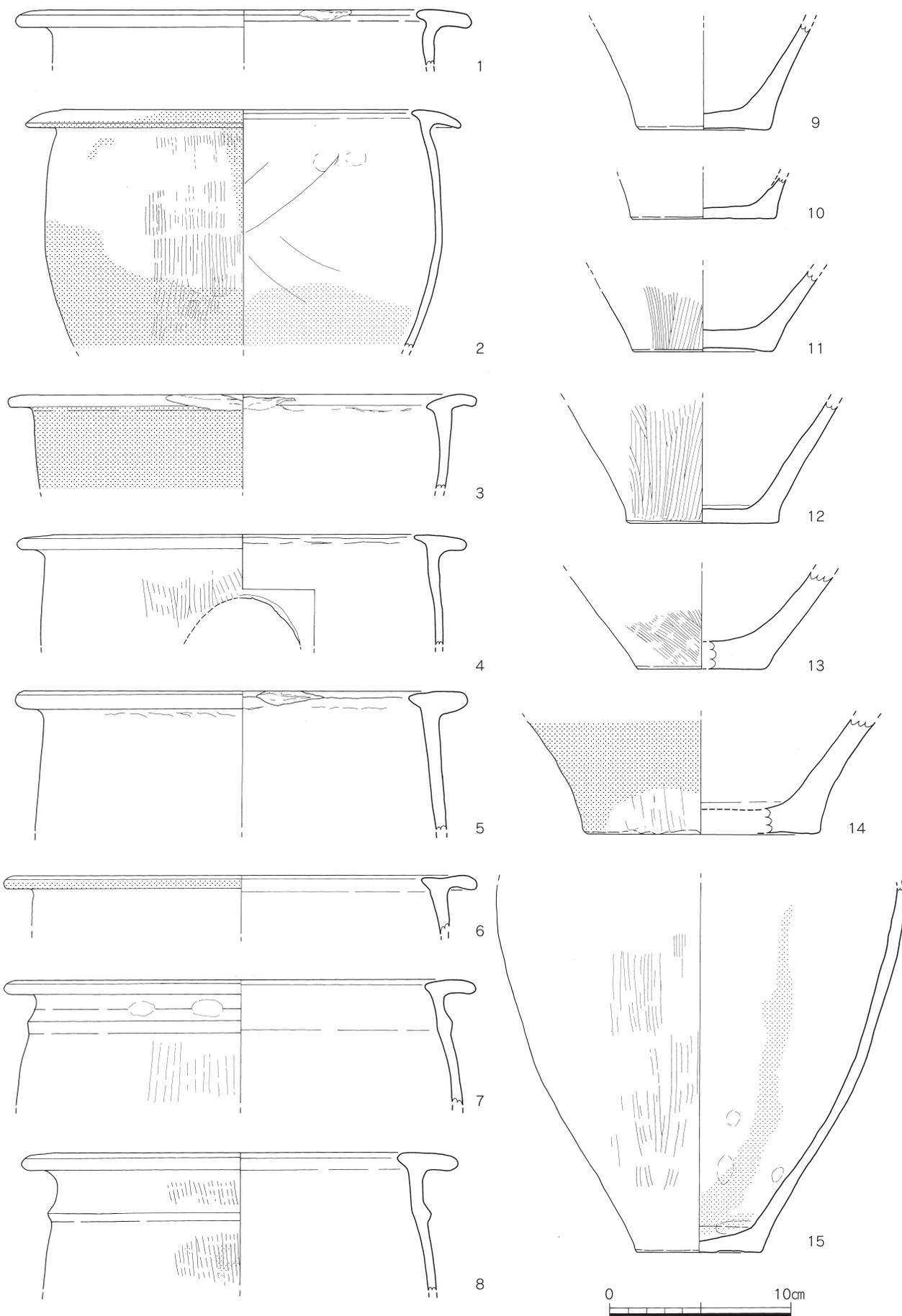
第37図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図9（1/3）

に縦ハケ、内面にナデを施す。9～12は甕の下半部である。9は平底から内湾しつつ立ち上がり、張りの弱い胴の甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10は中央部を欠くが平底の甕で、胴の張りが強い。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面には黒斑が残る。11も中央部を欠く平底の甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面にはコゲが付着する。12は平底で胴の張りがある甕である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

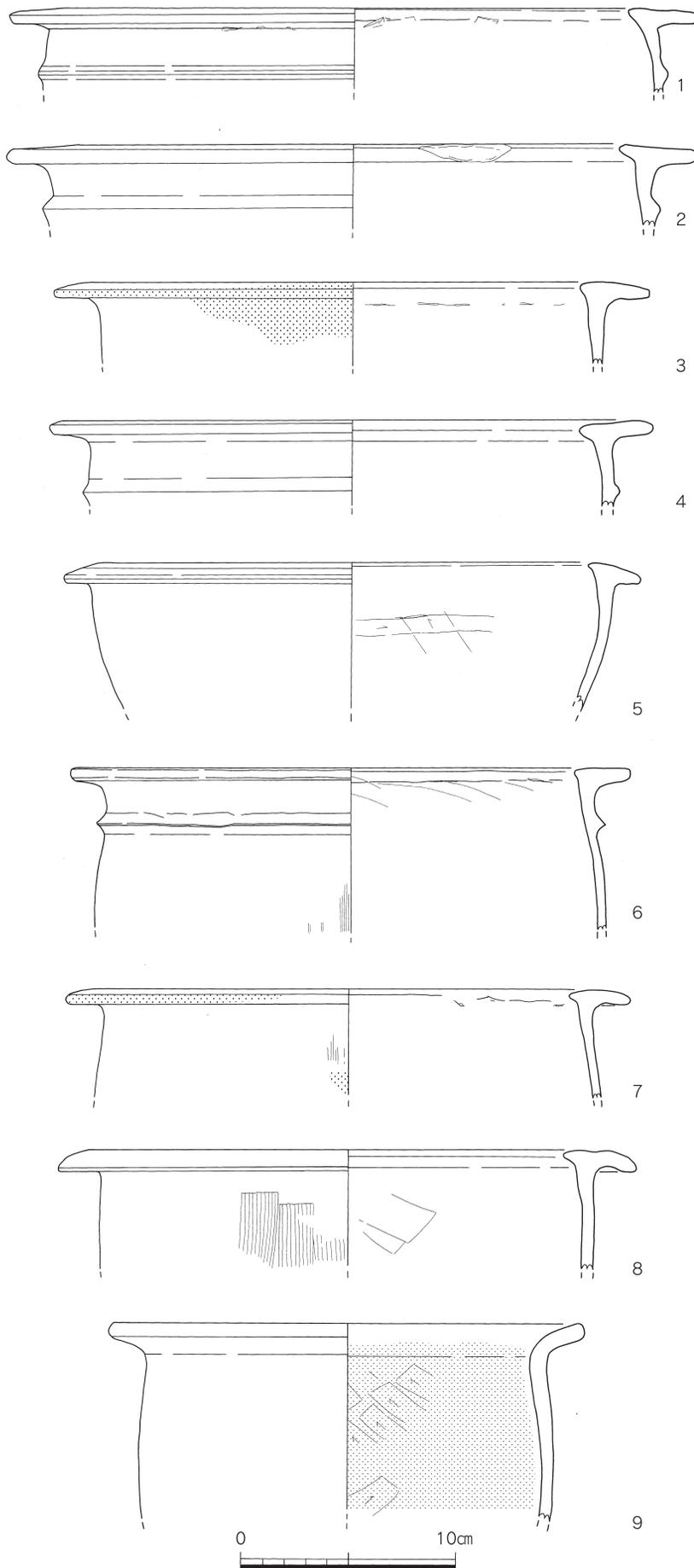
第38図1～8は甕の上半部である。1はやや肉厚な口縁部をもつ甕で、内面を打ち欠く。2はやや胴の張りが強い甕で、口縁部が垂れ下がる。端部は丸く収め、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。外面口縁部と胴部下半にはススが付着し、内面下半にはコゲが付着する。3は跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、口縁の端部と内面を打ち欠く。内外面共にナデを施し、胴部外面にはススが付着する。4は胴部に円形窓をもつ甕で、焼成後に開けられる。口縁部は外傾し、胴の張りはほとんどない。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。5は肉厚な口縁部をもつ甕で、胴の張りはない。口縁部内面を打ち欠き、内外面共にナデを施す。6の口縁部は摘んで丸みを帯びるもので、口縁端部にススが付着する。内外面共にナデを施す。7は跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕でやや胴が張る。口縁部下には低い三角突帯が巡り、胴部外面には縦ハケ、内面にはナデを施す。口縁部には二次焼成痕が残る。8は小型の甕で、外傾する口縁部をもつ。口縁部の下には低い三角突帯を巡らし、外面には縦ハケ、内面にはナデを施す。9～15は甕の下半部である。9・10は径の小さな平底で直線的に立ち上がる。11は上げ底気味の底部で外面に縦ハケ、内面にナデを施す。12は器壁が薄い平底で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。13は肉厚で径の小さい平底で、強く広がりながら立ち上がる。外面に斜ハケ、内面にナデを施す。14は大型の底部で、壺底部の可能性もある。中央部を欠くが全体的に肉厚で内外面共にナデを施す。外面にススが付着する。15は器壁が薄く仕上げられた甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。胴の張りは弱い。

第39図は甕の上半部である。1はやや外傾気味に広がる口縁をもつ甕で、口縁部の下に低い三角突帯を巡らせる。2も外傾気味の口縁部をもつ甕で、内面の突出が大きい。内面は一部打ち欠く。口縁部の下に低い三角突帯が巡る。3は外面にススが付着する甕で、垂れ下がり気味の口縁部をもつ。4は跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、口縁部の下に三角突帯を巡らせる。5は胴の張りが弱い甕で、口縁部も小さく垂れ下がる。6は水平に伸びる口縁をもつ甕で、口縁の伸びは小さい。口縁部の下には三角突帯が巡り、内面にはナデの痕跡を残す。7は丸みのある口縁をもつ甕である。口縁端部と胴部にススが付着する。8は丸みをもつ口縁をもつ甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9は跳ね上げ気味の口縁をもつ甕で、胴の張りは弱い。内面は下からのケズリが認められ、コゲが残る。

第40図1～6は甕の上半部である。1は肉厚の口縁部をもつ甕で、外面にやや垂れ下がる。口縁部下には低い三角突帯を巡らせる。2は底部を欠く甕で、垂れ気味の口縁部に、張りの弱い胴部が伴う。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。3は垂れ下がり気味の口縁をもつ甕で口縁部の下に三角突帯を巡らせる。4は短い口縁をもつ甕で、内面に接続痕を残す。5は肉厚で跳ね上げ気味の口縁をもつ甕で、全体的に肉厚である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6は垂れ下がる口縁をもつ甕で、口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。7は甕の下半部である。平底でやや内湾しつつ立ち上



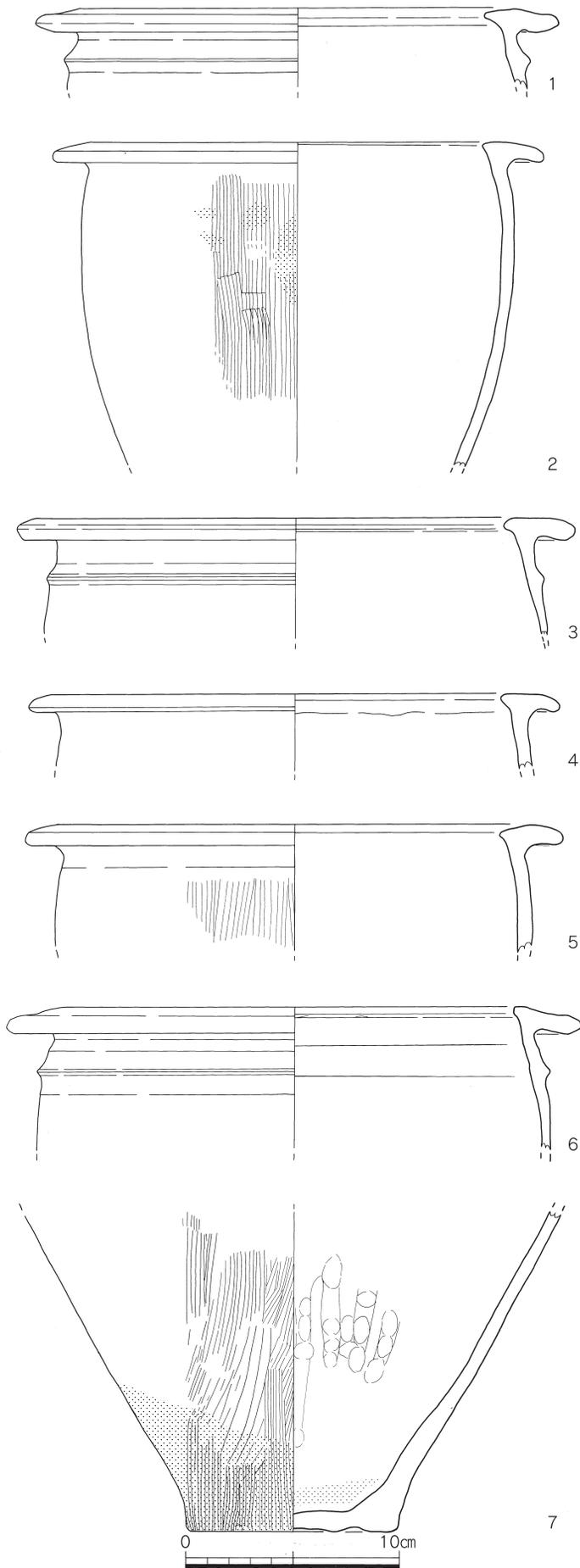
第38図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図10（1/3）



がる。外面に縦ハケ、内面に指オサエとナデを施す。

第41図 1～16は甕の上半部である。1は短い口縁をもつ甕で、口縁部の下に三角突帯を巡らせる。胴部外面には縦ハケ、内面にはナデを施す。2は内面への突出が大きい口縁をもつ甕で、外面は垂れ下がる。口縁部下には三角突帯を巡らせる。内外面ともにナデを施す。3は水平に伸びる口縁をもつ甕で、口縁部下に三角突帯が巡る。口縁端部には丹が残る。4はやや内径する口縁をもつ甕で口縁部下に三角突帯が巡る。内面には接続痕を残す。5はやや口径の小さい甕である。三角突帯の下には縦ハケを施す。6はほぼ水平に伸びる口縁部をもつ甕で、口縁部下に三角突帯が巡る。胴部外面には縦ハケ、内面にナデを施す。7はやや胴が張る甕で、丸みをもつ口縁部をもつ。口縁端部と胴部外面にススが付着する。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。8は外傾する口縁をもつ大型の甕である。図上復元のため口径にやや不安がある。9は丸みを帯びた口縁部をもつ甕で、口縁部下に低い三角突

第39図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図11(1/3)

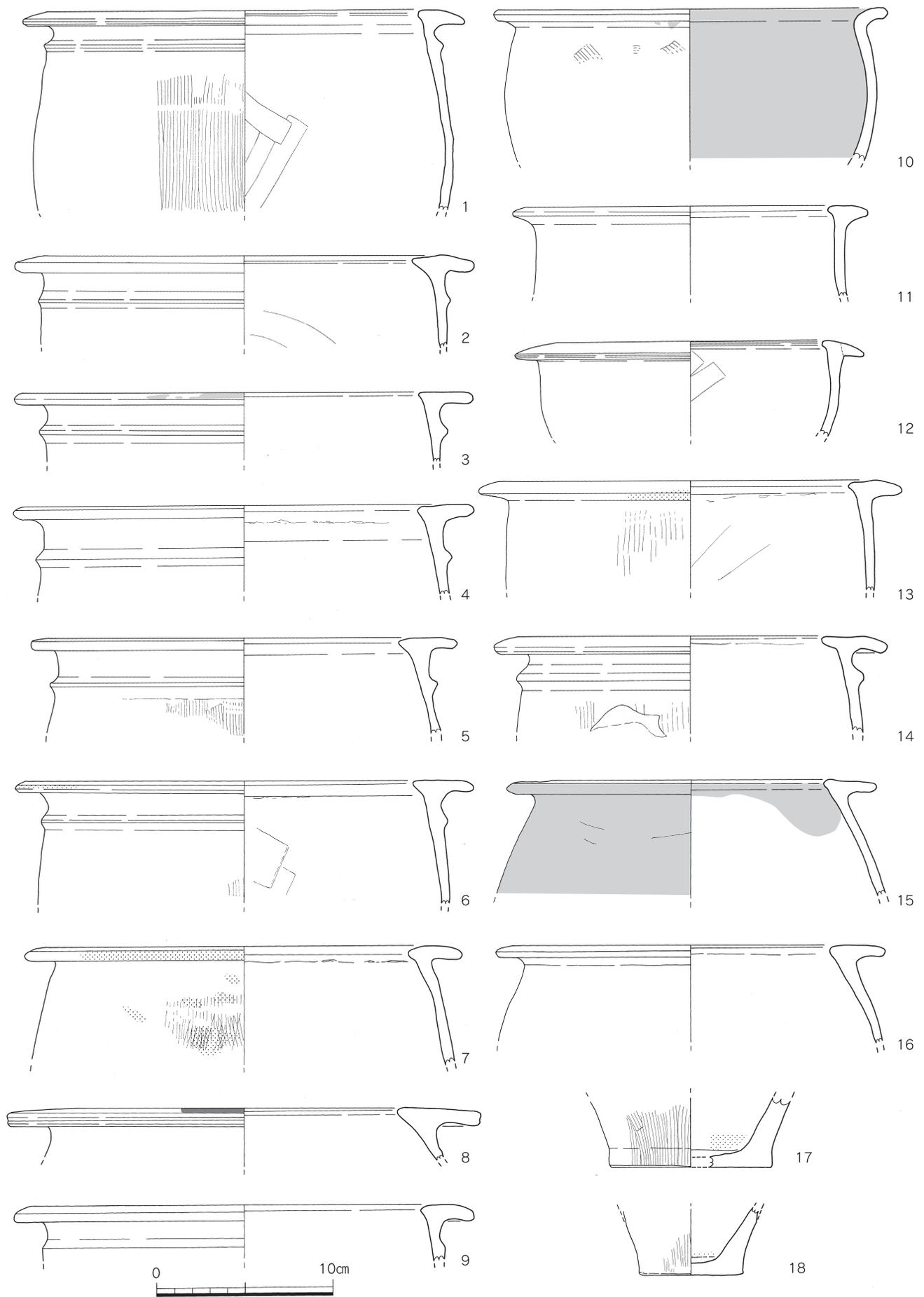


帯を巡らせる。10は頸部に丸みをもつ甕で、内外面ともに稜が入る。外面に縦ハケ、内面にナデを施し、内面は丹塗りである。11は短い口縁をもつ甕で、小片からの復元のため、壺の可能性もある。12は短く垂れ下がる口縁をもつ甕であるが、鉢の可能性もある。13は肉厚な口縁をもつ甕である。口縁端部にはススが付着する。胴部外面には縦ハケ、内面にはナデを施すが、接続痕も残る。14は内面への突出が大きく、口縁端部が垂れ下がる甕である。口縁部下には断面台形の突帯が巡る。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。15はやや外傾する口縁をもつ甕で、無頸壺ともいえるものである。器壁は薄く、外面と内面の一部に丹塗りを施す。16も15に近い形態の甕で、口縁部がやや肉厚である。

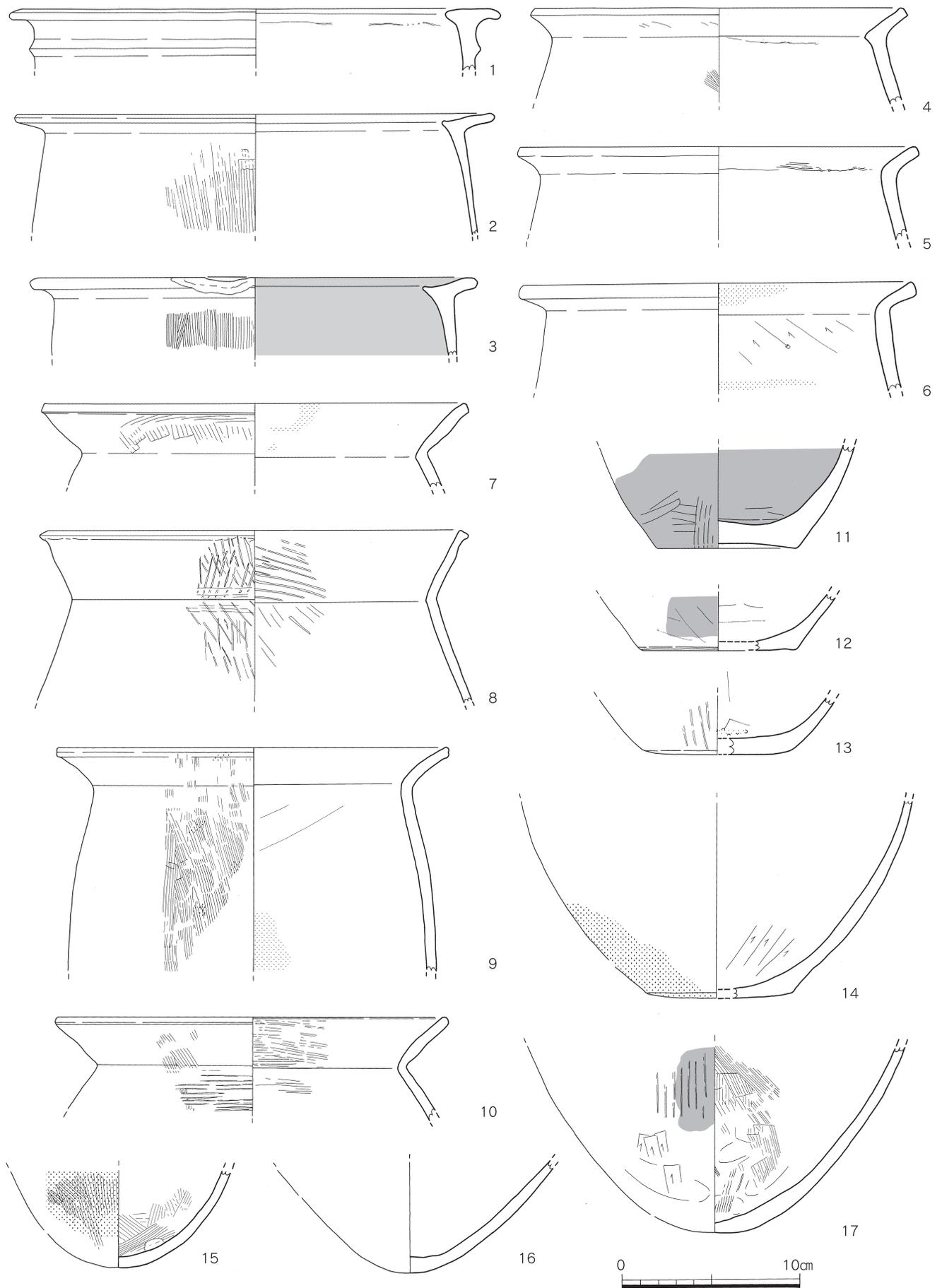
17・18は甕の底部である。17は平底で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面下部にはコゲがつく。18は復元底径に不安があるが、平底である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

第42図 1～10は甕の上半部である。1は口縁部が短い甕で、口縁端部が垂れ下がる。口縁部下には低い三角突帯を巡らせる。2は内傾する口縁をもつ甕で、口縁内側をつまみ出す。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

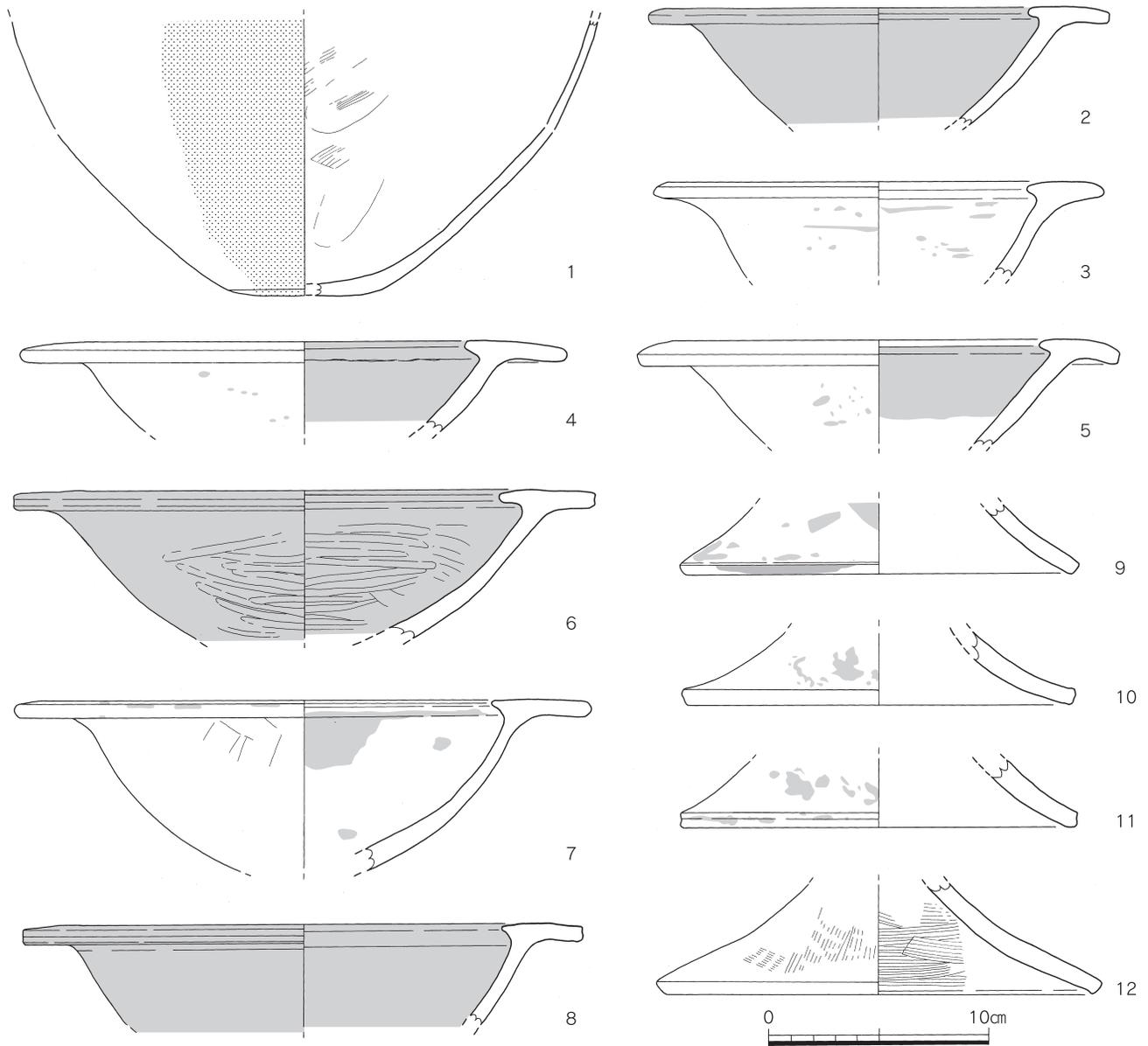
第40図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)出土遺物実測図12(1/3)



第41図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図13（1/3）



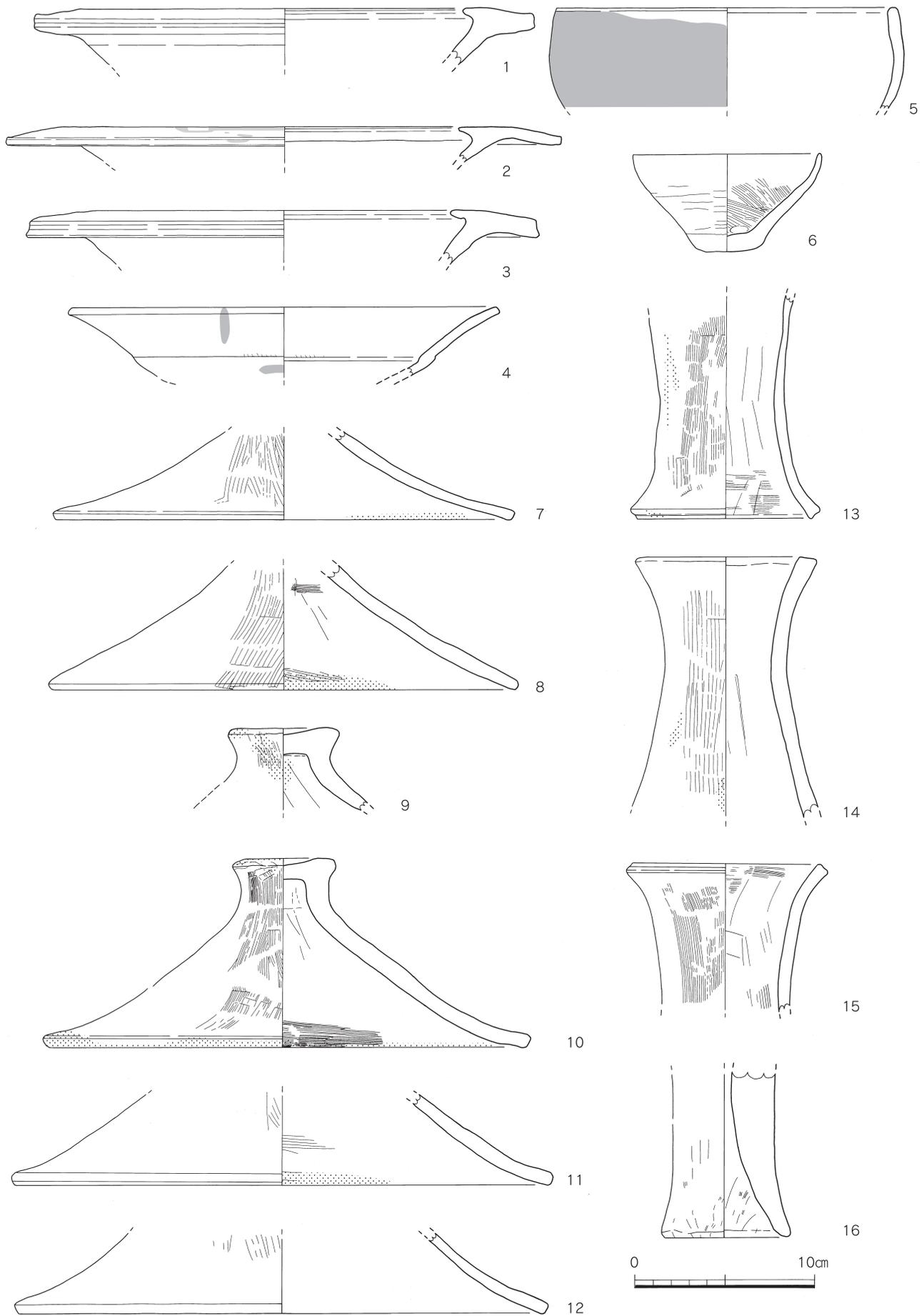
第42図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図14（1/3）



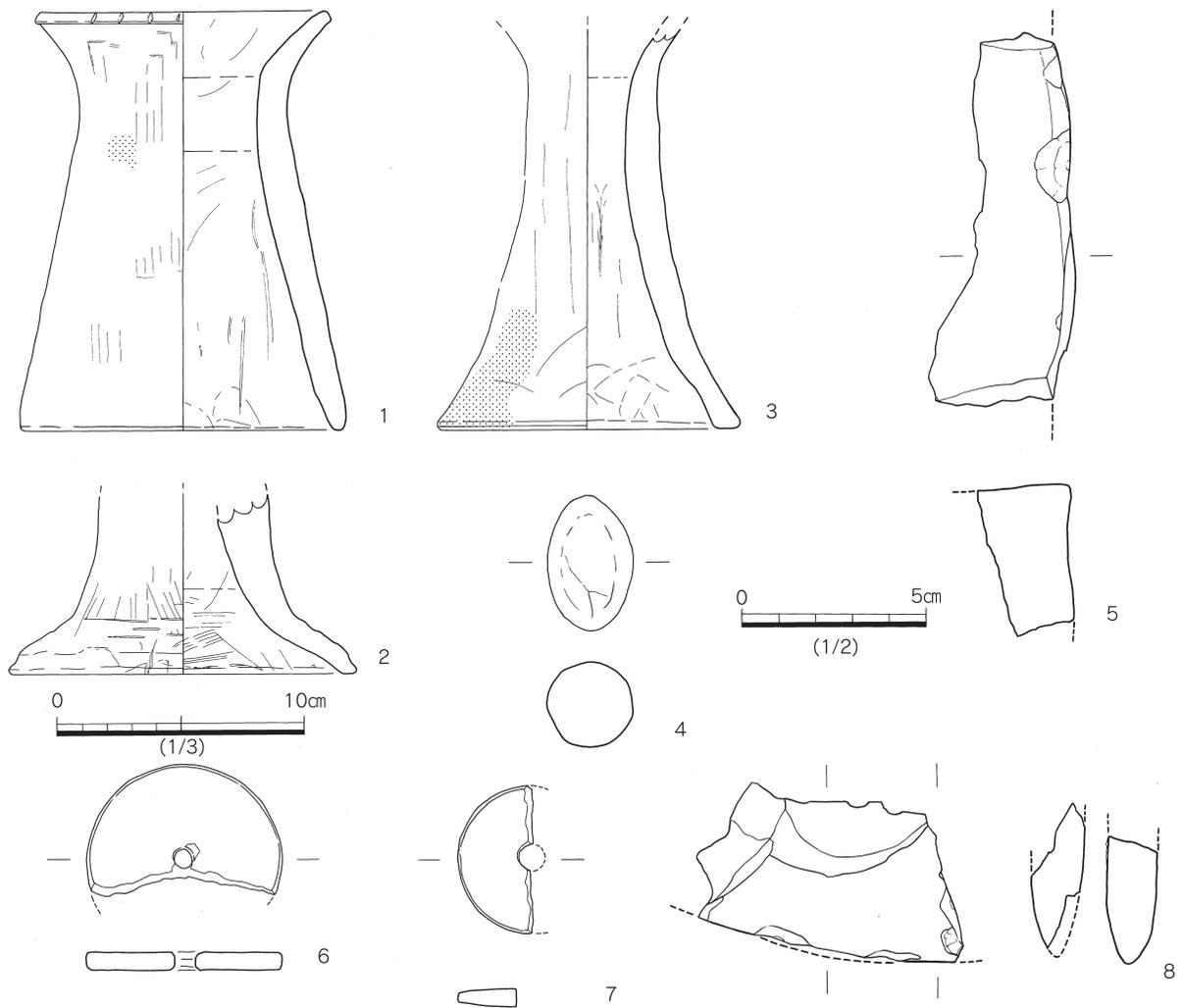
第43図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図15（1/3）

3は跳ね上げ気味の口縁をもつ甕で、内側をつまみ出す。口縁の一部は打ち欠く。外面に縦ハケ、内面にナデを施し、内面は丹塗りである。4は内傾度の強い甕の上半部である。5は頸部が湾曲する甕で、内外面ともに弱い稜が入る。6も頸部が湾曲する甕で、内外面ともに弱い稜が入る。内面にケズリを施し、口縁部と胴部にコゲが残る。7は断面「く」字状の口頸部をもつ甕で、口縁部が肥厚し、端部断面は方形を呈する。外面は縦ハケ、内面にナデを施し、口頸部にはコゲが付着する。8は頸部の内外面に明瞭な稜が入る甕で、外面に縦ハケ、内面に横ハケと斜ハケが入る。9は胴の張りが弱い甕で、頸部は湾曲するが、内外面ともに稜が入る。外面は縦ハケ、内面にはナデを施す。胴部外面にスス、内面にコゲが付着する。10は断面「く」字状の口頸部をもつ甕で、頸部内外面に明瞭な稜が入る。外面は斜ハケと横タタキ、内面は横ハケを施す。

11～17は底部である。11は黒斑が残る底部で、器壁が肉厚である。底部は上げ底気味で、外面には二次焼成痕を残す。外面にはヘラミガキを施す。12は底部中央を欠くが平底で、内外面ともに



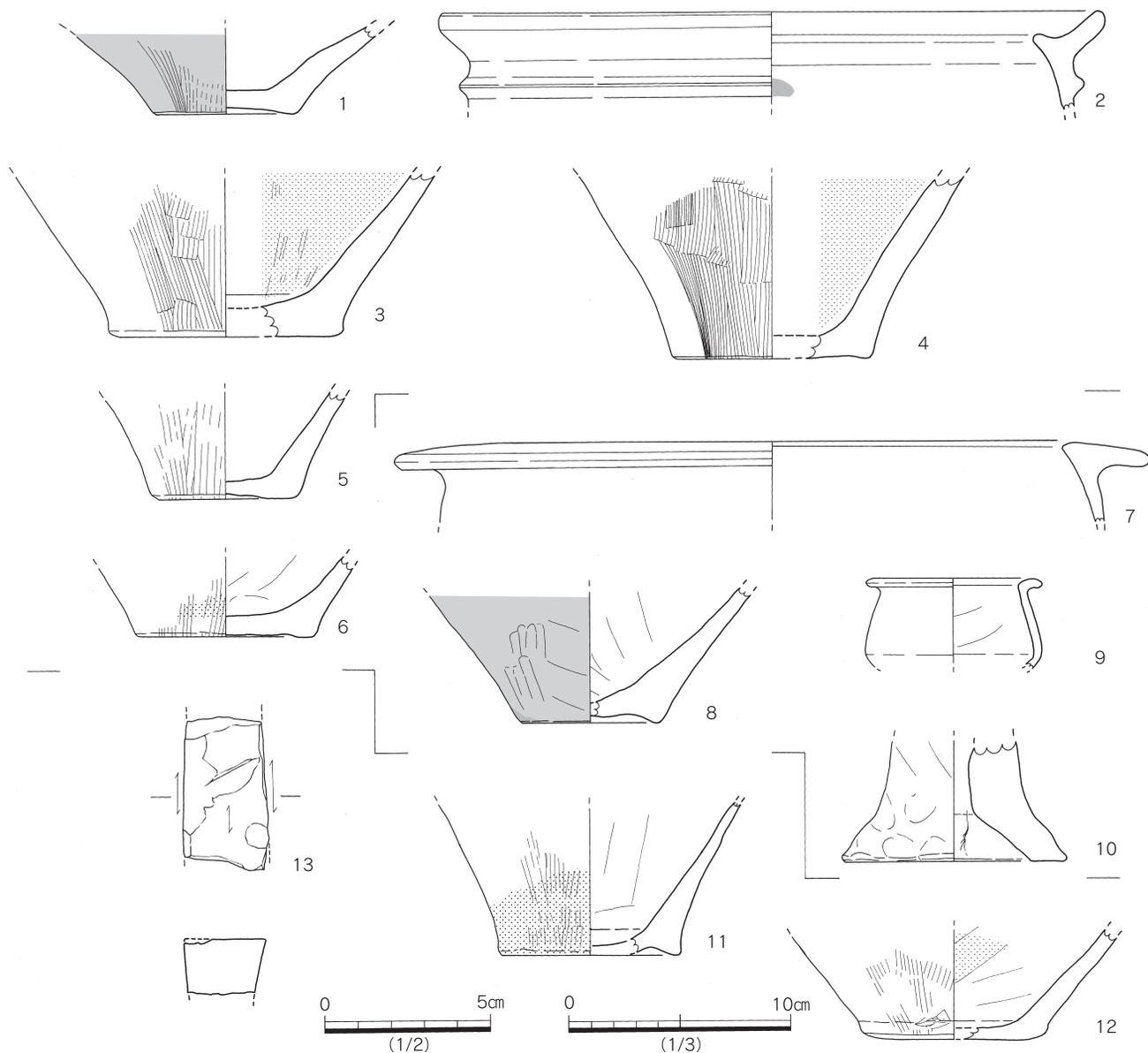
第44図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図16（1/3）



第45図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（西）出土遺物実測図17（1/2・1/3）

ナデを施す。13は凸レンズ底で、外面に縦ハケを施す。14も凸レンズ底の甕で、底部付近にススが付着する。15は丸底で、内外面ともに斜ハケを施す。16は尖り底で、内外面ともにナデを施す。17も尖り底で外面は縦ハケとナデ、内面は縦ハケを施す。

第43図1は甕の下半部である。底部中央を欠くが、凸レンズ底である。内外面ともにナデを施すが外面にはススが付着する。2～8は高坏の坏部である。2はほぼ水平であるが端部が下がるもので、内外面ともに丹塗りである。3はやや肉厚の高坏で、径が小さい。全体的に剥離が進むが、本来は内外面ともに丹塗りであろう。4は口縁部が外傾する高坏である。外面は剥離が進むが、内外面ともに丹塗りと判断される。5は丸みをもつ口縁部の高坏で、内外面ともに丹塗りである。坏部の丸みがほとんどない。6は内外面ともに横ミガキを施す高坏で、全面に丹塗りを施す。口縁端部はM字状を呈する。7は口縁部が水平に広がる高坏である。全体的に剥離が著しいが、本来は全面丹塗りと判断される。坏部は半球状を呈する。8も全面丹塗りの高坏である。口縁端部はM字状を呈する。9～12は高坏の脚部である。9～11は似た形態で脚裾端部は方形やM字状を呈する。い



第46図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)サブトレ①~③出土遺物実測図(1/2・1/3)

ずれも外面は丹塗りである。12は外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。脚裾端部は下面につまみ出す。

第44図1~4は高坏である。1は肉厚で、口縁端部の伸びが小さい高坏と判断したが、鋤先口縁壺の口縁部の可能性がある。2は薄手で口縁部が垂れ下がる。3は口縁部が肉厚で、鋤先口縁壺の口縁部の可能性がある。4は外反部が口径の1/3程度となる高坏で、口縁端部は方形を呈する。外面には黒斑をもつ。5は大型の鉢である。胴の張りは弱く、口縁端部は丸くおさめる。外面には黒斑が残る。6は小型の鉢である。全体的に器壁は薄い底部付近は肥厚する。全体的に逆三角形を呈し、外面にタタキ、内面に斜ハケを施す。7~12は蓋である。7・8は頂部を欠く蓋で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7の裾部内面にはススが付着する。9は蓋の頂部である。頂部は窪み、一度しまった後に裾部に向かって広がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10は完形に復元される蓋である。頂部は窪み、一度しまった後に裾部に向かってやや内湾しつつ裾部に向かう。

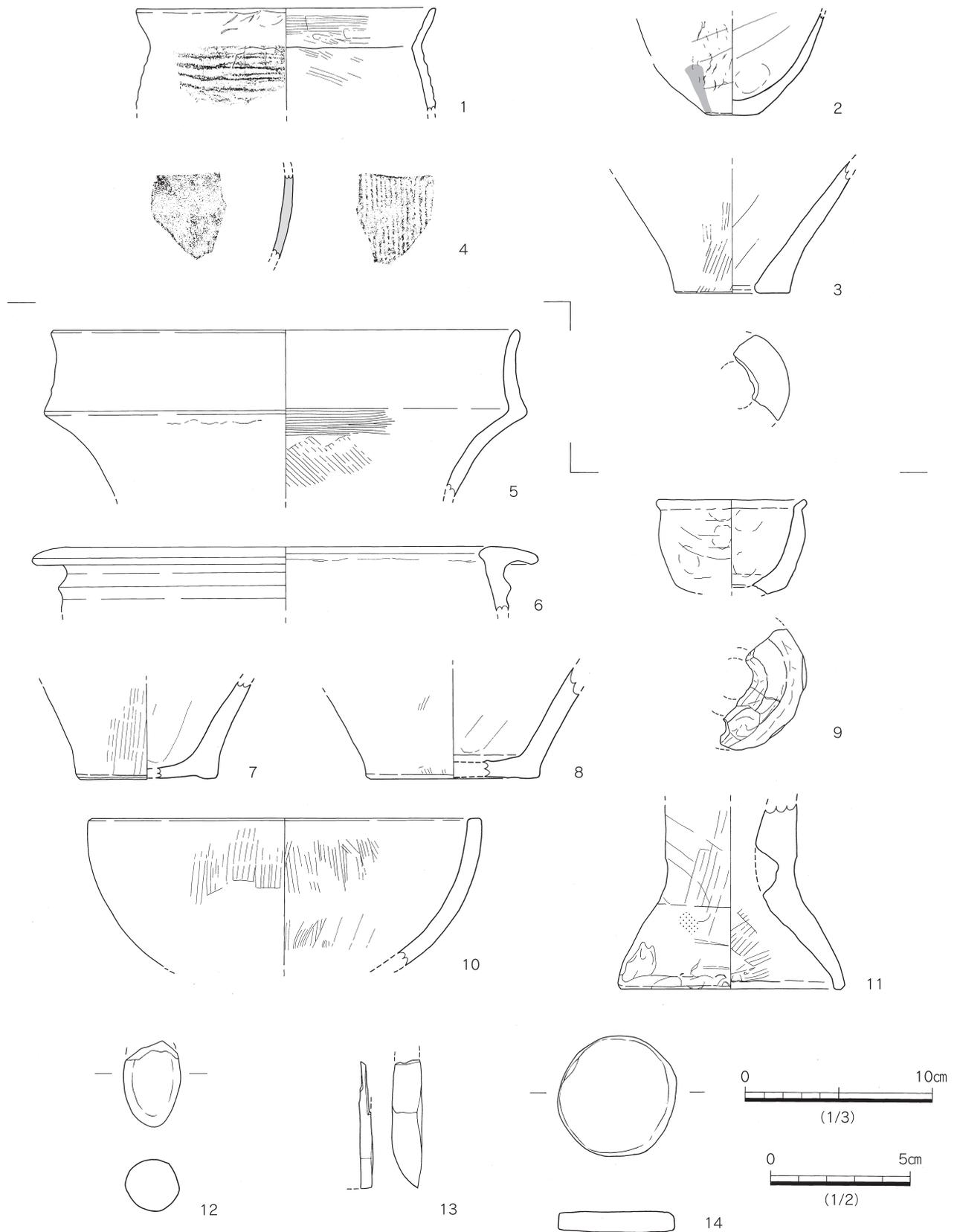
裾部は方形を呈し、外面にススが付着する。外面には縦ハケ、内面にはナデと横ハケを施す。11・12は蓋の裾部である。いずれも端部は方形を呈し、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。11の裾部内面にはススが付着する。13～16は器台である。13はくびれが不明瞭な器台で、器壁が薄く、裾端部は断面M字状を呈する。外面は縦ハケ、内面はナデと横ハケを施す。外面にはススが付着する。14はくびれがやや上位に位置する器台で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。15は器壁の薄い器台で、口縁断面はM字状を呈する。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。16は小型の器台で、肉厚である。内外面ともにナデを施す。

第45図1～3は器台である。1は上位にくびれがあるが、しまりはゆるい。口縁部は緩やかに開き、端部に刻目を施す。脚部にいたる開きも緩やかである。脚端部断面は丸く収める。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。2は器台の脚部である。脚部下半が大きく開く。外面に縦ハケとナデ、内面に横ハケとナデを施す。3は口縁部を欠く器台である。全体的に細く、脚部に向かってラップ状に広がる。内外面ともにナデを施す。4は投弾である。長さ3.7cm、直径2.3cm。5は砂岩製の砥石片である。現存長9.9cm、現存幅3.6cm、現存厚3.8cmである。上面と右側面に研いだ痕跡があり、線状痕も認められるため、鉄器の研磨に用いたものといえる。6は片岩製の紡錘車で直径5.3cm、孔径0.55cm、厚さ0.45cmで、薄手の紡錘車といえる。7も紡錘車で復元径4.0cm、厚さ0.3～0.5cmで孔付近が若干肥厚する。結晶片岩製である。8は用途不明の石製品である。両面共に光沢研磨を施すが、刃部は形成しない。石材は輝緑凝灰岩か。

東西トレンチ（西）は図化した面の下からも遺物が出土しており、東側から約2mごとに5つのグリッドを設定し、サブトレンチ①～⑤と表記した。第46図1～6はサブトレンチ①から出土した遺物である。1は壺の底部で、大きく広がりながら立ち上がる。外面は縦ハケが認められるが、丹塗りを施す。やや上げ底である。2は甕の上半部で、口縁は受け口状を呈する。口縁部の下には三角突帯が巡る。3は大型の甕の底部で底径も大きい。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。4は甕の底部で、中央部を欠くが平底である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面にはコゲが付着する。5はやや上げ底気味の平底で外面に縦ハケ、内面にナデを施す。底部から内湾しつつ立ち上がる。6も甕の底部である。やや広がりながら立ち上がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

7～10はサブトレンチ②出土品である。7はやや大型の甕の上半部で、口縁は外傾する。8はやや上げ底気味の底部で、外面に縦ミガキ、内面にナデを施す。外面には丹塗りを施し、底部からの立ち上がりが緩やかであることから壺の可能性もある。9は小型の無頸壺である。器壁は薄く丁寧な作られている。口縁部は丸みをもち、胴部下位に最大径があり、内外面に稜が入る。10は器台の下半部である。脚裾部が広がり、端部は面的に接する。内外面ともに指オサエとナデで調整する。

11～13はサブトレンチ③出土品である。11は甕の底部で、中央部を欠くが平底であろう。立ち上がり部が肉厚であるが、全体的に器壁は薄い。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。底部付近にススが付着する。12も甕の底部で、全体的に器壁が薄い。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面にはコゲが付着する。13は定形砥石である。上端と下端を欠き、図化した面の裏側も欠く。研ぎ減りの具合から、本来は平面図の面が側面にあたる可能性がある。裏面を除き、すべて砥石として利用している。目は細かい。



第47図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(西)サブトレ④・⑤出土遺物実測図(1/2・1/3)

第47図1～4はサブトレ④から出土した遺物である。1は小型の甕の上半部で、断面「く」字状の口頸部をもち、内面に稜が入る。口縁端部は丸くおさめ、全体的に器壁は薄い。外面胴部は

タタキ、内面は横ハケとナデを施す。2は小型の甕の下半部である。平底の底部は小さく不安定である。内外面ともにナデを施すが、外面には接続時の痕跡が多く残る。底部付近には黒斑がある。3は甕の下半部で、底部には焼成後に外側から施された穿孔がある。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。4は楽浪系土器片である。外面に縄蓆文タタキ、内面にオサエ痕を残す。軟質で白黄灰色を呈す。短頸壺か。

5～14はサブトレンチ⑤出土品である。5は壺の口縁部である。立ち上がり気味の複合口縁壺で、反転部は内湾する。外面の反転部下には接続痕が残る。外面にはナデ、内面には横ハケと斜めハケを施す。6は甕の上半部である。口縁は垂れ下がり、その下には低い三角突帯を巡らせる。7・8は甕の底部である。いずれも平底で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9は小型の甕で、手捏ねで整形し肉厚である。底部を円形状に欠くが、意図的なものではなく、剥離したものであろう。10は素口縁の鉢である。口縁端部は方形を呈し、内外面に縦ハケを施す。底部を欠くが、丸底か。11は器台の下半部である。脚裾部は丸みをもちながら広がり、脚端部は小さくおさめる。脚柱部は肉厚である。外面に縦ハケとナデ、内面に斜ハケとナデを施す。12は投弾である。上端部を欠くが、断面は正円に近い。表面にベンガラと思われる赤色顔料が付着する。13は偏平片刃石斧片である。石の目が刃部に対し垂直に入るため、薄く剥離している。石材は層灰岩である。14は紡錘車の未成品である。表面は研磨を施すが、まだざらつきを残す。側面も横研磨を施すが、稜が残る段階である。石材は砂岩系である。

(5) 東西トレンチ(東)出土遺物

第48～54図は東西トレンチ(東)から出土した遺物である。第48図1は広口壺の上半部である。口縁の広がり弱く、その端部断面は方形に収める。外面と内面口縁部に丹塗りを施す。2は鋤先口縁壺である。口縁部は垂れ、端部に刻目を施す。外面頸部は暗文状のミガキが認められる。外面から口縁部上面までは丹塗りである。3は大型の無頸壺である。ほぼ水平に広がる口縁部の端部は丸く収め、胴部に向かって大きく広がる。外面から口縁部上面までは丹塗りである。4も無頸壺である。口縁部は立ち上がり気味で、頸部はS字状に屈曲する。5は複合口縁壺である。口縁部の屈曲部には刻目を施し、口縁部端部は再度反転し、断面は方形に収める。内外面ともにハケメを施す。6は大型壺の口縁部で、鋤先状を呈する。口縁部断面はM字状で、端部には刻目を施す。頸部には暗文状のミガキが認められる。7も大型壺の口縁部でラッパ状に広がる。口縁部端部は粘土を貼り付け肥厚させる。口縁部断面は方形で、端部には工具の小口を使って×印状に刻目を施す。

8～12は壺の底部である。8は底部中央を欠くが、平底の底部で一度内湾したあと、直線的に広がりつつ立ち上がる。外面にハケメを施す。内面にはコゲが付着する。9・10も内湾したあと広がりながら立ち上がるが、8よりも傾斜が強い。11は内湾せずに直線的に広がるものである。12は凸レンズ状の底部をもつ。

第49図1～10は甕の上半部である。1は口縁部の下に三角突帯を巡らせる甕である。口縁部は丸みをもつ素口縁に端部をつまみ上げた三角突帯を配する。上半部の張り出し部に巡らせる突帯は低い。全体的に磨滅が著しいが、それぞれの突帯の頂部に小さな刻目を施す。2は丸みもち内傾

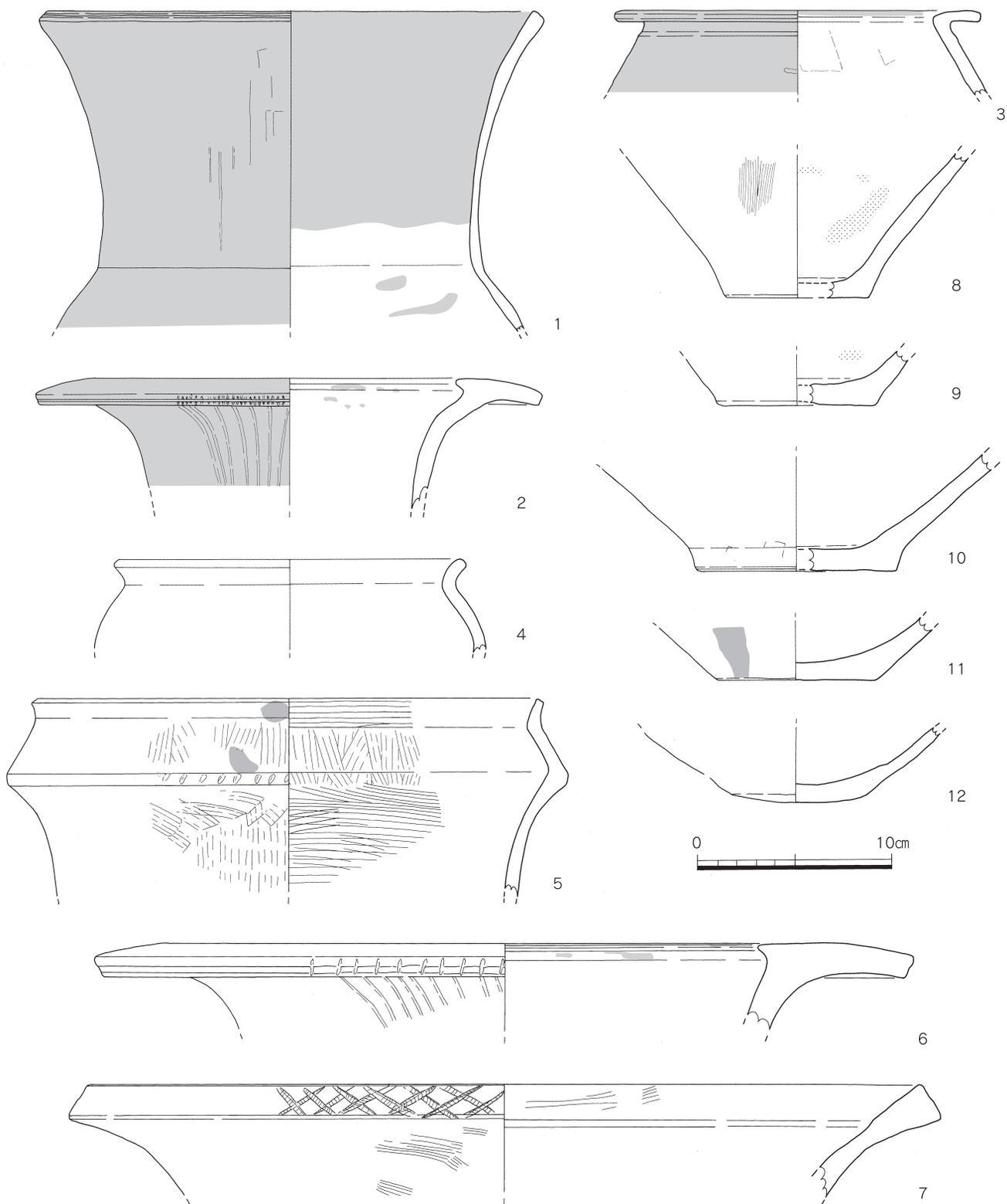
する短い口縁をもつ甕で、全体的に肉厚である。3は跳ね上げ気味の口縁をもつ甕である。4は胴の張りの弱い甕で、やや内傾する口縁部をもつ。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。口縁端部と胴部外面にススが付着する。5はやや肉厚の甕である。外面に縦ハケ、内面にナデを施すが、接続痕も残る。6は薄手で口径の大きな甕である。口径に少し不安が残る。7は甕の口縁部で、頸部にススが付着する。8はやや垂れ下がる口縁をもつ甕で、頸部内外面に接続痕を残す。9は内面への突出がやや大きい甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10は丸みをもつ口縁をもつ甕で、口縁部の下に低い三角突帯を巡らせる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

11～17は甕の下半部である。11は焼成後に外側からの穿孔をもつ甕で、穿孔後の調整がなく、不整円形を呈する。内面底にはコゲが付着する。12は全体的に器壁が薄く、胴部の張りが強いことから壺の可能性が高い。外面底部付近にスがつく。13～15は甕の底部で、いずれも平底で肉厚である。13は内外面ともにナデを施すが、14・15は外面に縦ハケ、内面にナデを施す。16は底径が小さく、突レンズ状底に近くなる。内外面ともにナデを施す。17は脚台付甕の脚部である。脚端部は方形におさめる。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。

第50図は甕の上半部である。1は肉厚の甕の口縁部である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。2は断面逆L字形を呈する口縁部をもつ甕で、外面に縦ハケを施す。3は内傾する口縁をもつ甕で、口縁端部にススが付着する。4は頸部がしまる甕である。5は口縁部が内傾する甕で、外面にススが付着する。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6は丸みをもつ口縁の甕で、口縁端部にススが付着する。口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。7は口縁が垂れ下がる甕で口縁端部は一部打ち欠く。外面にはススが付着する。8は胴の張りがほとんどないもので、鉢の可能性もある。口縁部の下に低い三角突帯を巡らし、内面は丹塗である。9はやや内傾する口縁をもつ甕で、口縁端部にススが付着する。

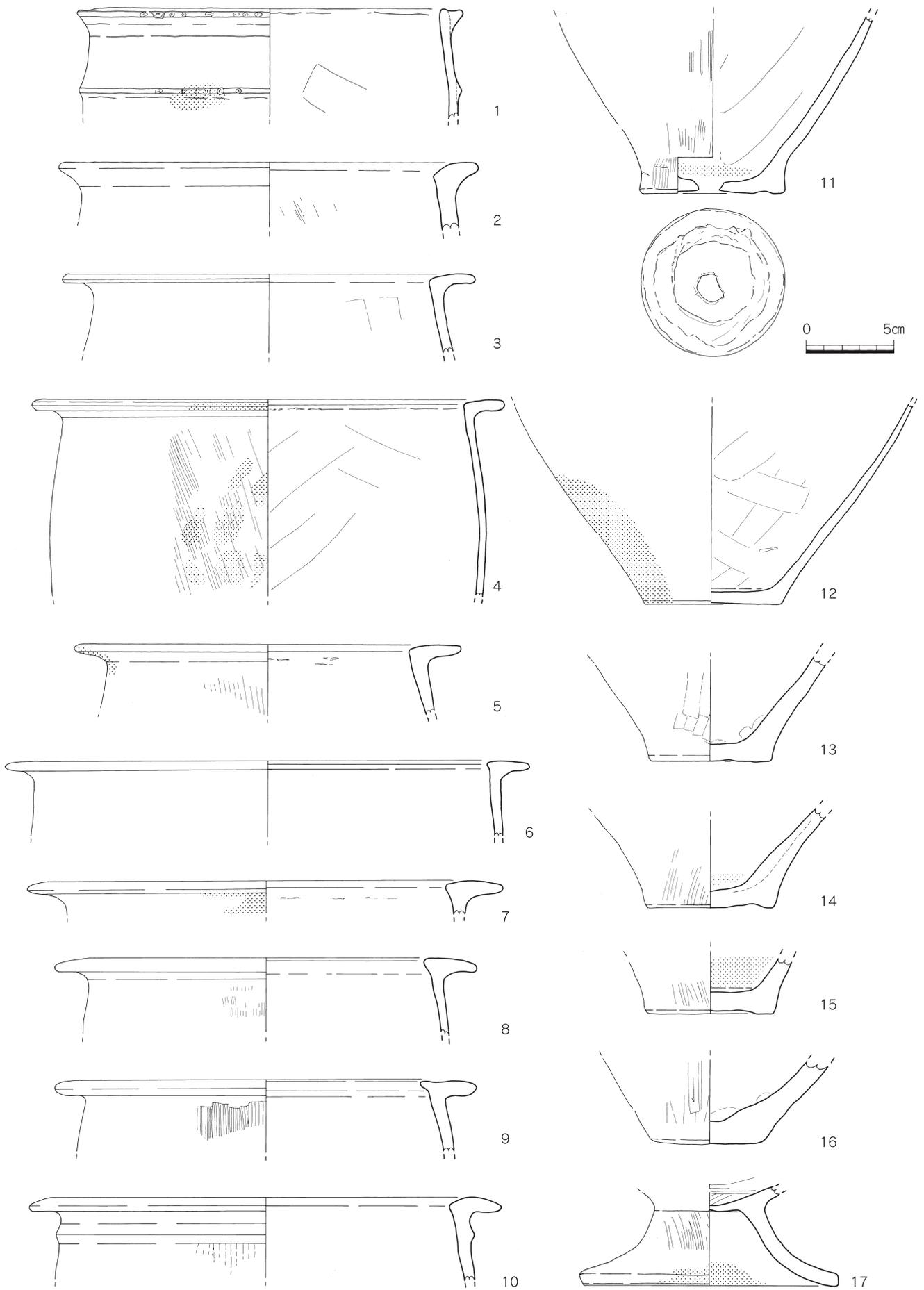
第51図1～6は甕の上半部である。1は胴部の張りがある甕で、口縁部は若干丸みをもつ。口縁部の下には低い三角突帯が巡る。外面には縦ハケ、内面にはナデを施す。2は若干、受け口状を呈する口縁をもつ甕で、口縁部下に低い三角突帯を巡らせる。3は内面への突出が大きい口縁部をもつ甕で、口縁部下には低い三角突帯を巡らせる。4は丸みをもつ口縁部の甕で、胴部外面にススが付着する。5はやや外傾する口縁をもつ甕で、口縁部の下に三角突帯を巡らせる。胴部外面には縦ハケ、内面にはナデを施す。6はやや内傾する口縁をもつ甕で、口縁部の下に台形突帯を巡らせる。突帯から口縁部までは肉厚である。

第52図1は受口状の口縁をもつ甕である。口径は40.1cmと大きく、口縁部の器壁は薄い。2は断面「く」字状を呈する甕の口頸部である。口縁端部は刻目を施し、頸部には低い三角突帯を巡らせる。外面胴部には縦ハケ、内面には横ハケを施す。3も断面「く」字状の口頸部をもつ甕で、口縁部はやや丸みをもつ。口縁端部にはススが付着する。4は口縁部が肥厚する甕で、断面「く」字状の口頸部をもつ。外面に斜ハケと縦ハケ、内面に横ハケを施す。5は胴部が丸みをもつ甕の上半部で、頸部の内外面には明瞭な稜がはいる。内外面ともにハケメが残る。6は小型の甕で、器壁は厚いが口縁端部は薄い。頸部外面は丸みを帯びるが、内面には明瞭な稜がはいる。外面は縦ハケ、内面口縁部に横ハケを施す。7は外面にタタキを施す甕で、内面はオサエののちにナデを施す。胴の

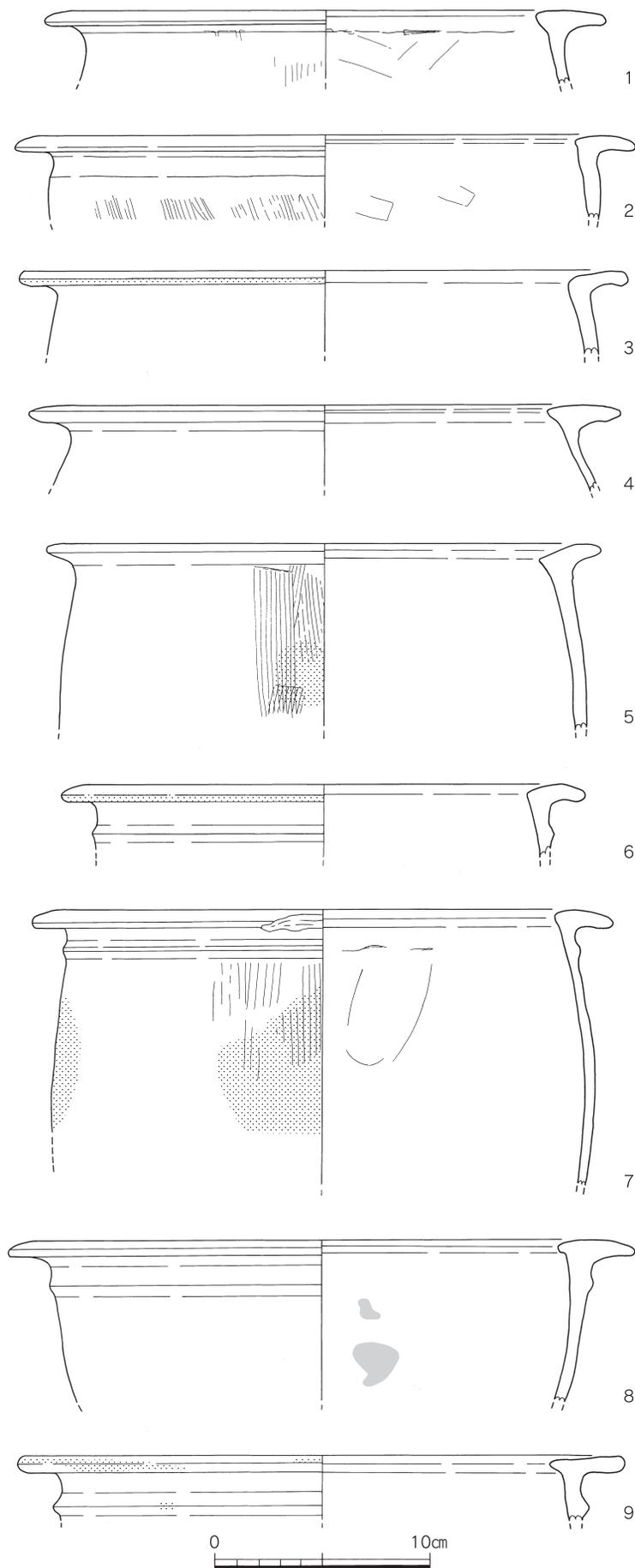


第48図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図1（1/3）

張りは弱く、頸部の内外面には稜が入る。8はやや開き気味の直口の甕である。胴の張りが強く内外面にハケメを残す。口縁端部は方形で、頸部内外面に稜が入る。9は高坏の坏部である。口縁の伸びは小さいが、坏部は深く、内面に横ミガキを施す。口縁部と内面には丹塗りが認められる。10

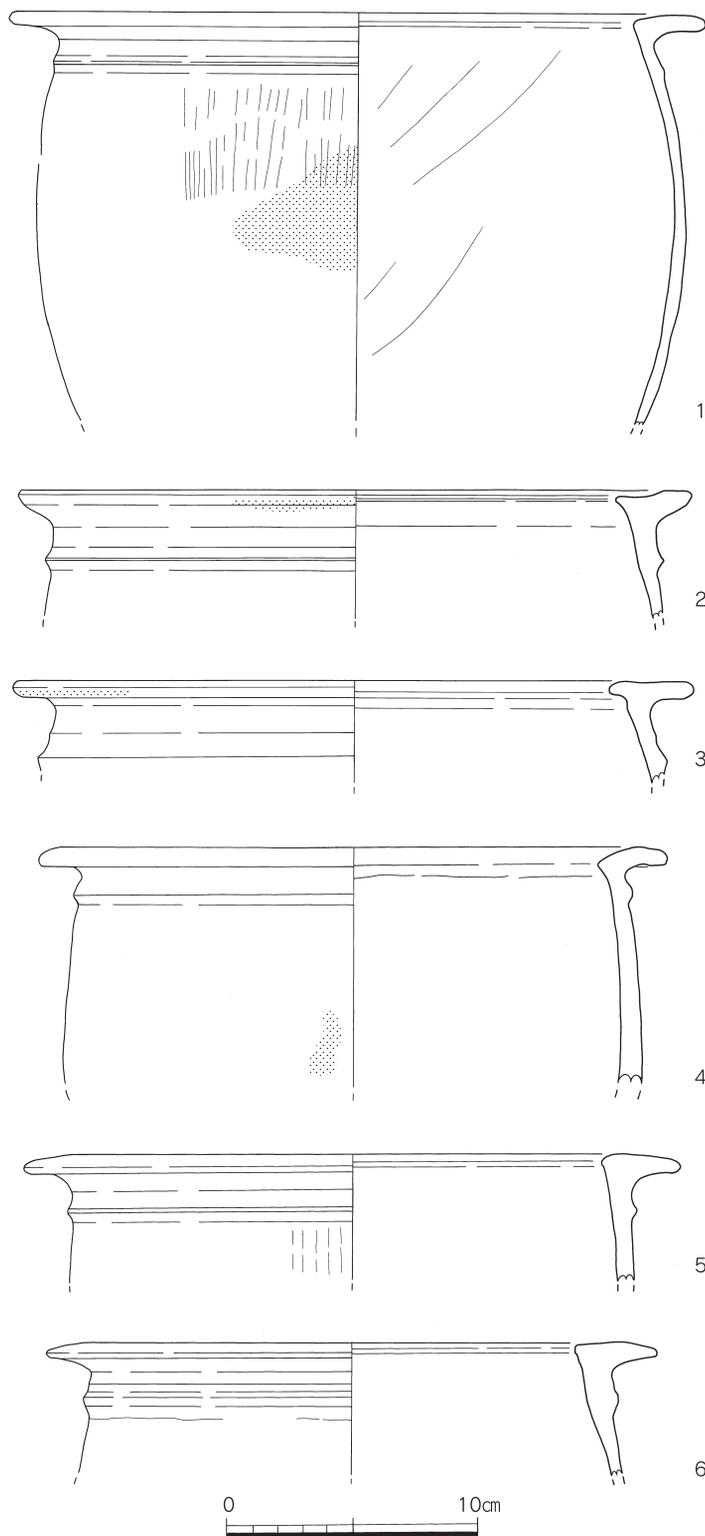


第49図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図2（1/3）



は口縁部が反転する高
 坏の坏部である。反転
 部は坏下部の1/3程度
 で古相を示す。坏部下
 部の内面に暗文状のへ
 ラミガキを施す。坏部
 の屈曲部に黒斑が残
 る。11も高坏で、反転
 部が短く、口縁端部が
 丸みを帯びる。外面反
 転部には斜ハケが残
 り、下部にはミガキ状
 の痕跡を残す。12は反
 転部が長い高坏であ
 る。図上で復元したも
 のであるが径に不安が
 ある。反転部は肉厚で、
 口縁端部は方形気味に
 おさめる。13は高坏の
 脚部である。長脚の高
 坏で、裾部が膨らみな
 がら広がる。外面に縦
 ハケ、内面に横ハケと
 斜ハケを施す。14は低
 脚の高坏の脚部で、中
 実の脚柱部から丸みを
 もちながら大きく広が
 る。脚柱部下部の3方
 向に円形の透かしを入
 れる。外面は縦ハケと
 へラミガキ、内面は斜
 ハケを施す。15は小型
 の蓋である。頂部を欠
 くが、全体的に肉厚で
 ある。外面は丹塗りだ
 ある。16も蓋か。頂部

第50図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図3（1/3）



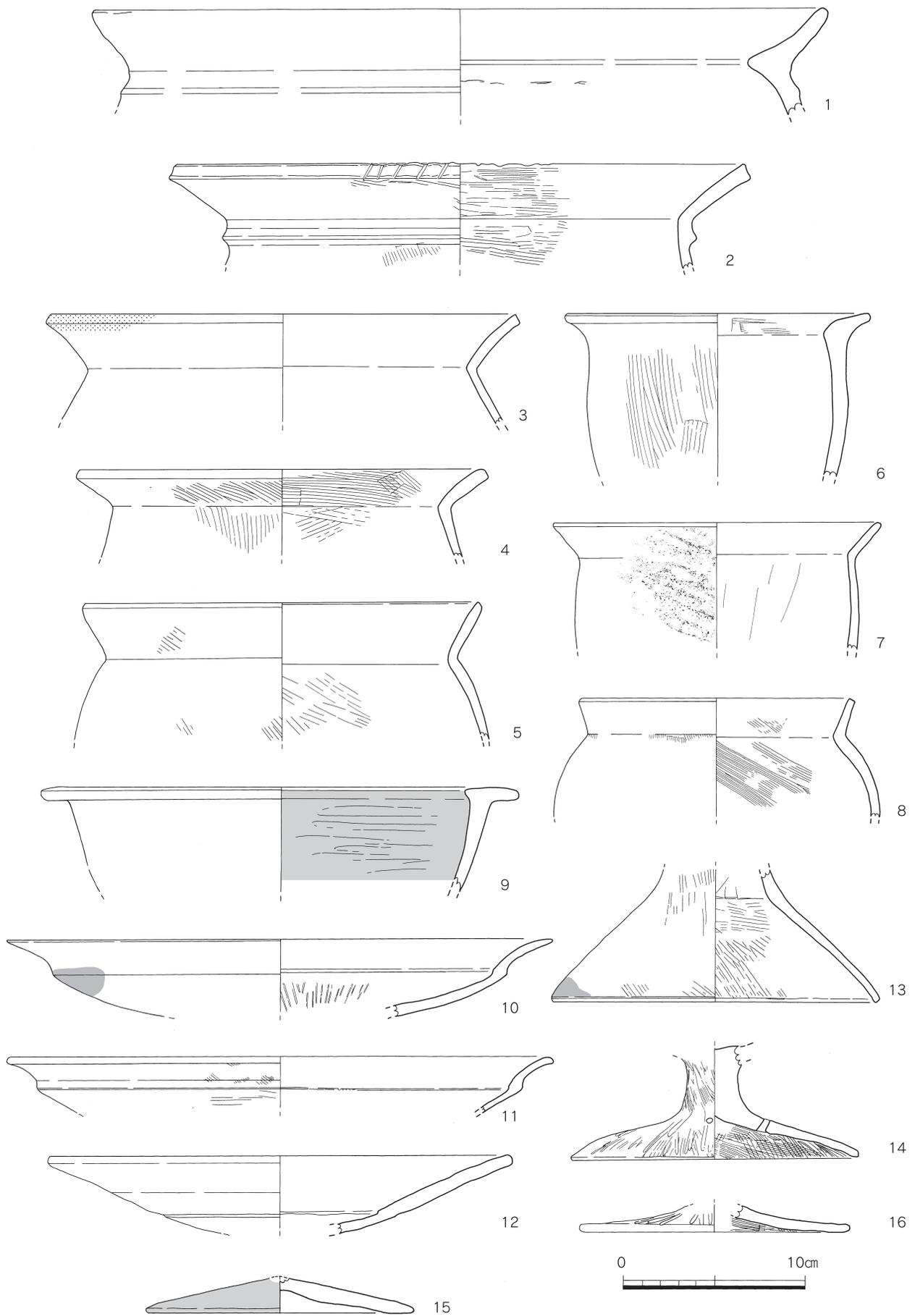
第51図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ(東)出土遺物実測図4(1/3)

岩の剥片である。すべての面が打ち欠いたままで、研磨や刃部の形成は認められない。剥片をスクレイパーとして使用しようとしたものか。長さ10.0cm、幅5.7cm、厚さ1.1cm。11も玄武岩の剥片で、図の下部に刃部を作り出そうとしており、スクレイパーの未製品である。長さ7.2cm、幅5.0cm、厚

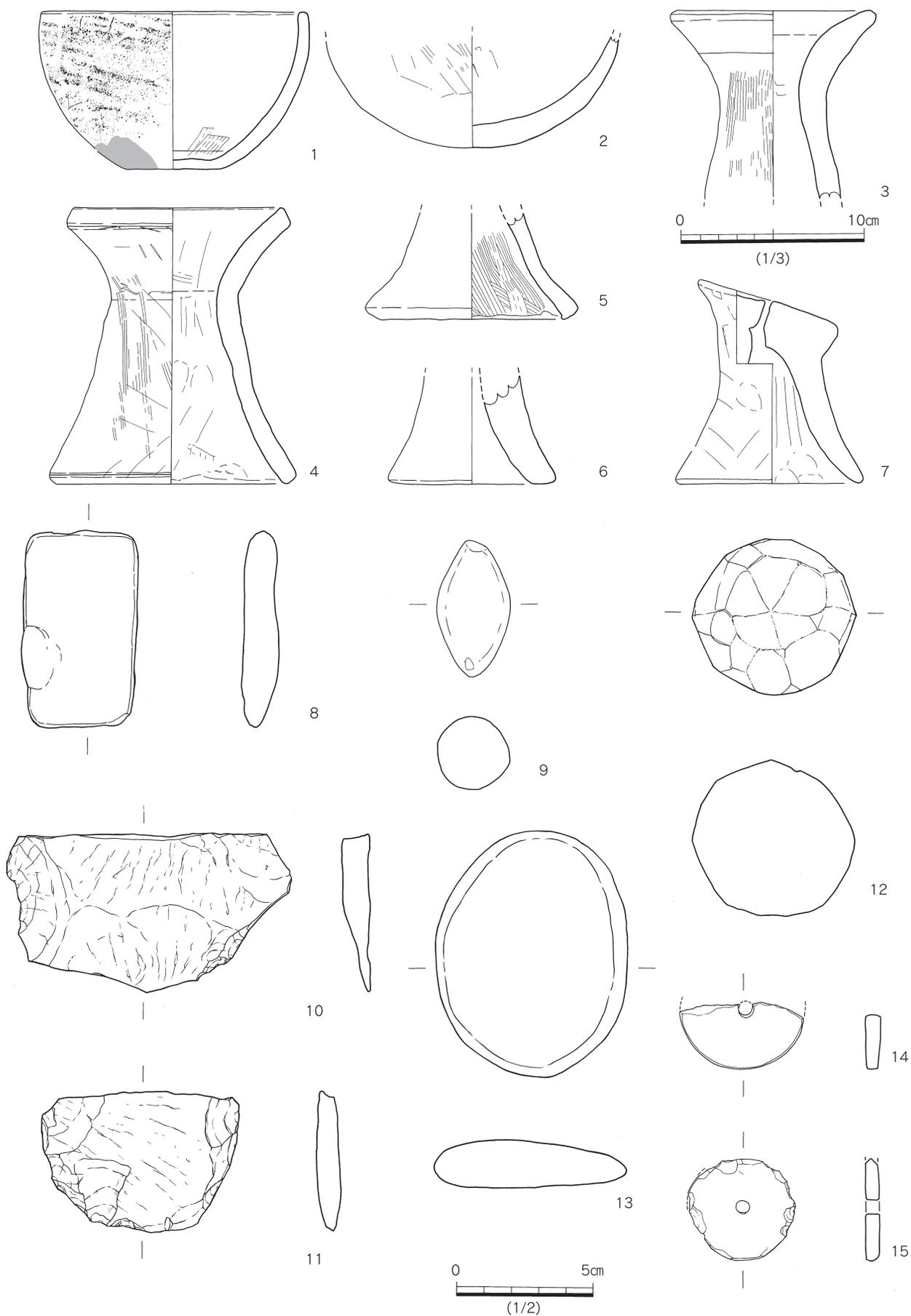
を欠くが、器壁は薄く、端部は丸くおさめる。内面に斜ハケが残り、14のような高坏脚裾部の可能性もある。

第53図 1 は平底の椀である。素口縁で端部は丸く収める。底部付近に黒斑が残る。2 は丸底の鉢としたが、口縁部を欠くので、丸底の甕の可能性もある。3～6 は器台である。3 の屈曲部は上半にあり、しまりはゆるく、肥厚する。胴部は縦ハケを施す。4 は完形に復元される器台である。口縁端部断面は方形で、屈曲部は上半にある。外面にハケメ、内面にナデを施す。5 は脚部である。外面はナデ、内面はハケメを残す。脚端部の断面は方形で、全体的に器壁が薄く丁寧な作りである。6 も脚部である。肉厚で内外面ともにナデを施す。7 は支脚である。全体的にナデで成形し、内湾しつつ脚部に向かって広がる。上面平坦部の中央部に直径4mm程度の孔をもつ。

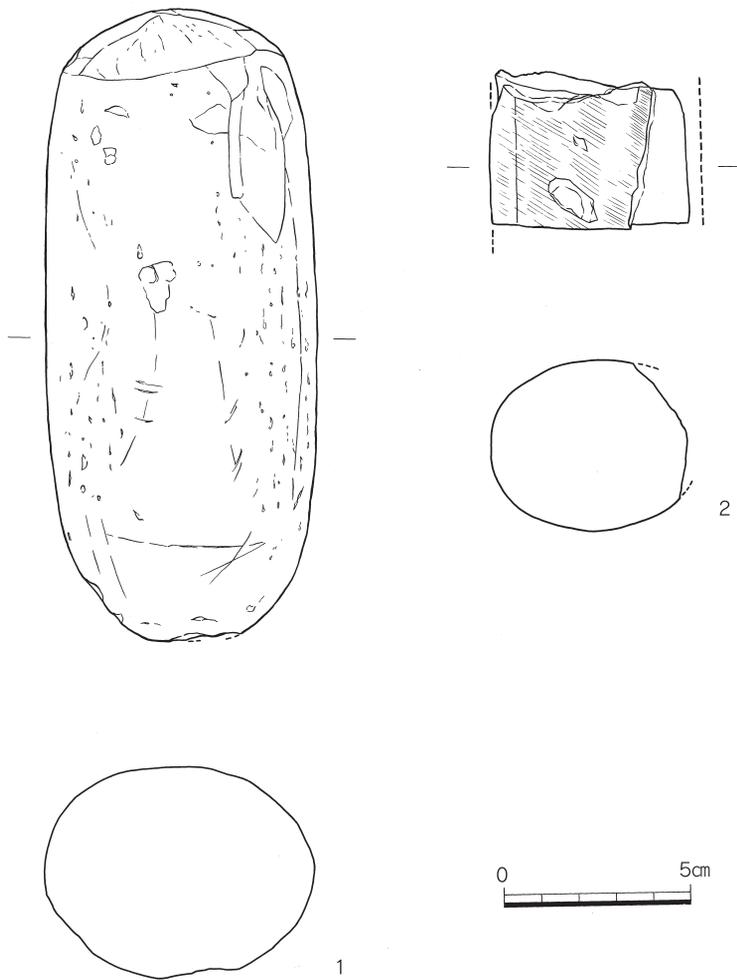
8 は板状の鉄製品である。長さ7.1cm、幅4.2cmを測る。厚さは1.2cmほどであるが、錆ぶくれで正確な厚さはわからない。当初、板状鉄斧としたが、刃部が確認できなかったため板状鉄製品とした。9 は投弾である。長さ5.0cm、幅2.7cmで黒斑をもつ。10 は玄武



第52図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図5（1/3）



第53図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図6（1/2・1/3）



第54図 三雲番上332番地西側調査区東西トレンチ（東）出土遺物実測図7（1/2）

研磨を施すが、敲打痕が多く残る。刃部は丁寧な研磨を施す。2も両刃石斧である。刃部および基部を欠き、器表面には研磨痕を多く残す。厚さ4.5cm。

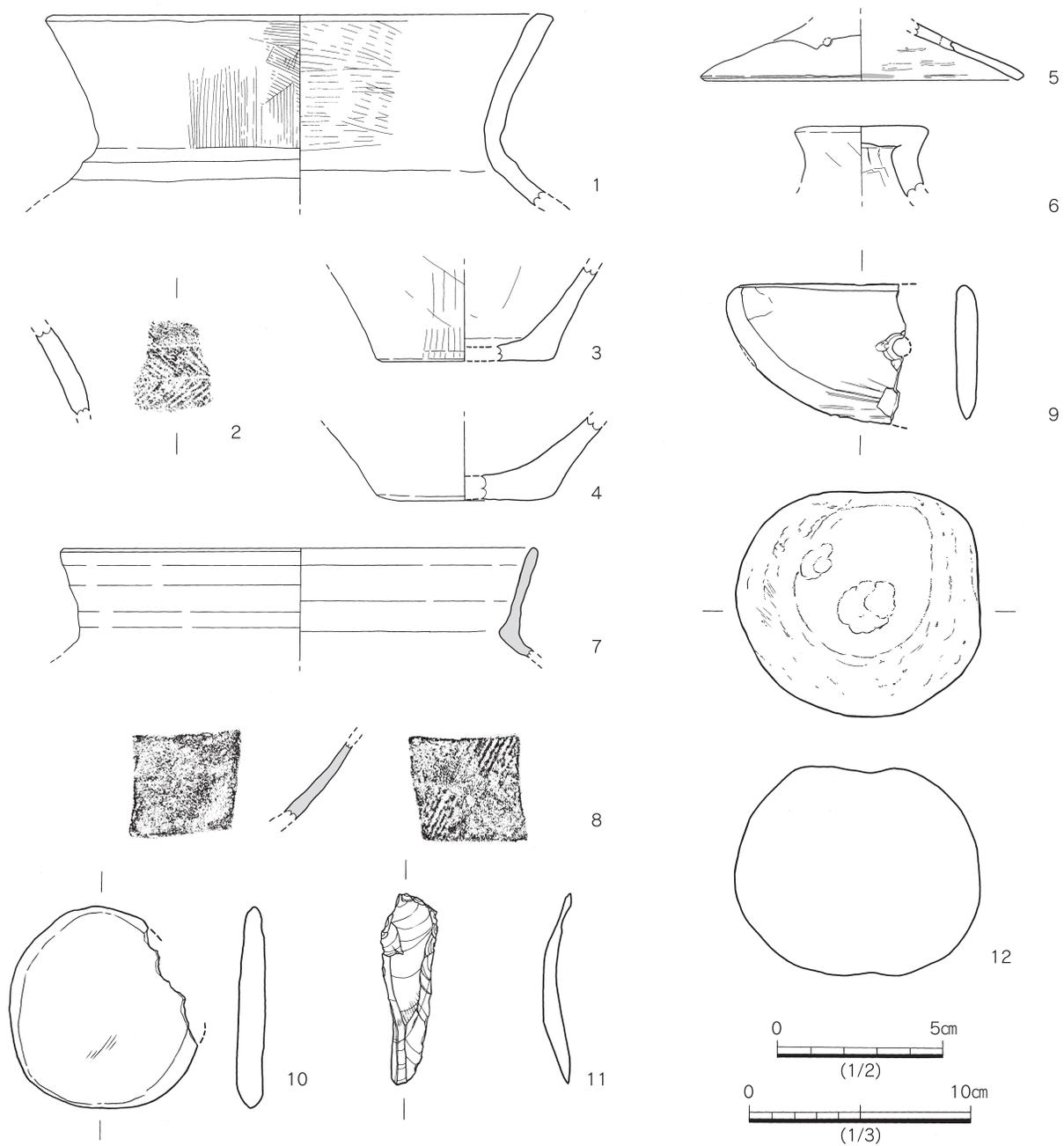
（6）包含層出土遺物

西側調査区において遺構検出時に出土した遺物を包含層出土遺物として報告する。第55図1は頸部が「く」字状に屈曲する大型の壺である。口縁部はやや内湾しつつ立ち上がり、端部は方形を呈する。口頸部外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。頸部には弱い三角突帯が巡る。2は壺肩部の小片で矢羽状の線刻を施す。3は甕の底部で中央部を欠くが、平底である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。4も平底の甕で、内外面にナデを施す。5は高坏の脚部である。短脚の高坏で、裾部に透孔をもつ。6は蓋の頂部片である。丁寧なつくりで器壁はうすい。

7・8は楽浪系土器である。7は短頸壺の口縁部である。全体的に磨滅が著しいがロクロ整形の痕跡を残し、器壁も薄い。軟質で灰色を呈する。8は壺の底部付近の破片である。外面に縄蓆文タキのあとを部分的にナデを施し、内面はオサエ痕を残す。軟質でオリーブ灰色を呈する。

さ0.9cm。12は粗砂岩質の球状砥石である。球状の多面体を呈し、すべての面に研磨痕が残る。手持ち用の粗砥石か。直径6.0cm。13は結晶片岩の円礫である。加工痕は全くないことから、紡錘車や有孔石製品の素材の可能性が高い。長さ9.0cm、幅7.0cm、厚さ1.8cm。14は結晶片岩製の紡錘車である。厚さ0.5cm。15も結晶片岩製の紡錘車である。縁辺部の欠損部分が多い。厚さ0.5cm。

第54図1は大型の両刃石斧である。全長16.7cm、幅7.3cm、厚さ5.6cmを測るが、基部が折れ、再加工されているため、厚さに対して短い印象を受ける。側面は敲打のあとに

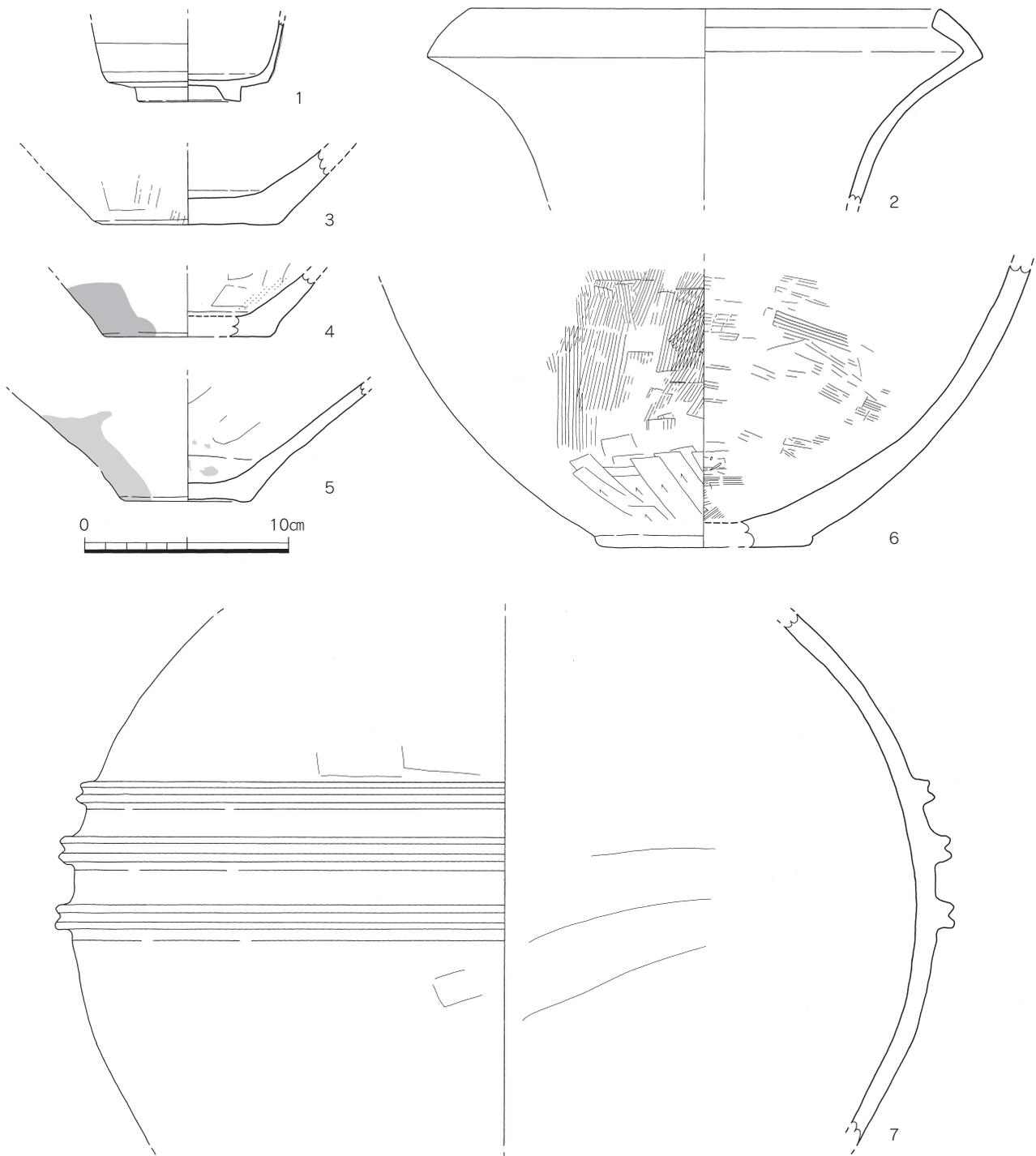


第55図 三雲番上332番地西側調査区包含層出土遺物実測図 (1/2・1/3)

9は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。背は直線的であるが、面取りの研磨を施し断面は丸みを帯びる。10は結晶片岩製の円盤状石材で一部欠く。側面は未加工であるが、上下面ともに弱い研磨を施す。紡錘車の素材か。11は黒曜石製の石刃である。長さ5.7cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm。12は玄武岩製の敲石である。上下面が敲打によって窪む。長さ7.3cm、幅6.8cm、厚さ6.1cm。なお、淡青色の小玉が1点出土している。

(7) 北側調査区出土遺物

第56～58図は北側調査区から出土した遺物である。北側調査区は土器溜りの北への広がりを確認



第56図 三雲番上332番地北側調査区出土遺物実測図1 (1/3)

認するために西側調査区の北側に設定したものである。調査区に東端に南北トレンチを設定したが、土器溜りの埋土は確認できなかった。ただ、遺物は出土しているのでここで報告する。

第56図1は遺構面の上のオリーブ褐色土層から出土した近代の椀である。2は複合口縁壺でしまりの強い頸部からラップ状に立ち上がり、強く屈曲させて端部に至る。反転部は内湾し、口縁端部断面は方形である。3～6は壺の底部である。3は平底で径が大きい。直線的に広がりながら立ち

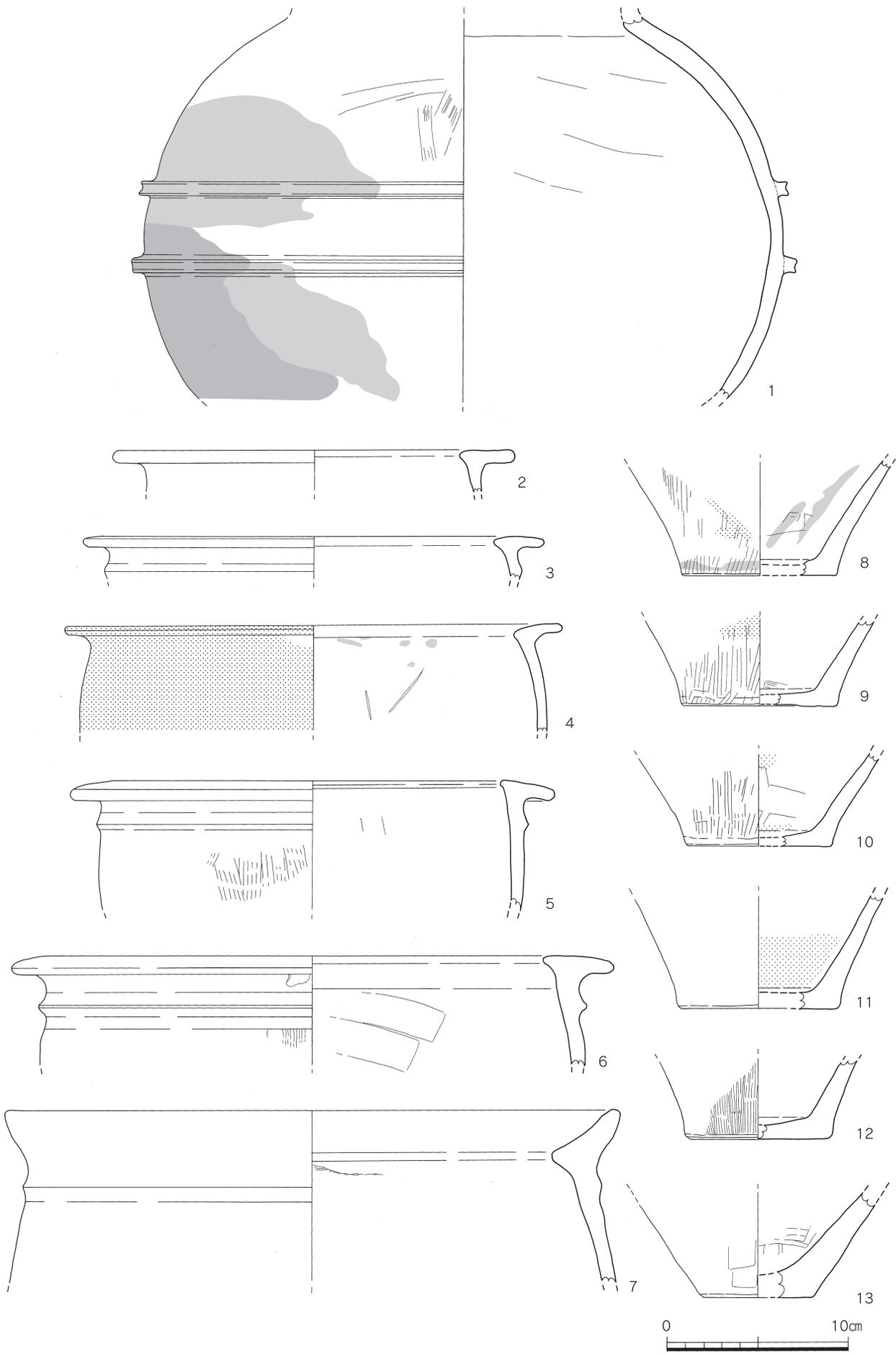
上がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。4は底部中央を欠くが平底であろう。外面に黒斑が残り、内面にコゲが付着する。5はやや上げ底気味の平底から、つよく広がりながら立ち上がるもので、外面は丹塗りである。6は底部中央を欠くが、平底の底部で、丸みを帯びつつ立ち上がる。外面に縦ハケと擦過痕を、内面に斜ハケを施す。全体的に器壁が厚い。7は壺の胴部である。球状に張り出す胴部に三条のM字突帯が巡る。

第57図1は壺の胴部である。球状の張りのある胴部で、最も張り出す部分とその上に二条のM字突帯を巡らせる。外面は全面丹塗りで、胴部下半に黒斑をもつ。2～13は甕である。2は水平に延びる口縁をもつ小型の甕である。3は口縁端部が若干垂れ気味の甕で、口縁下に低い三角突帯を巡らせる。4は内傾する口縁をもつ甕で、外面はススが付着し、口縁端部は二次焼成を受け変色する。内外面ともにナデを施す。5はやや肉厚で、口縁部は垂れる。口縁部の下に低い三角突帯が巡る。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6はやや大型の甕の口縁部で、直線的な口縁部の下に三角突帯を巡らせる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7は受け部上に立ち上がる口縁をもつ甕で、頸部に三角突帯を巡らせる。内外面ともにナデを施す。8～13は甕の底部である。8～10は似た形態の底部で、平底から広がりながら立ち上がるもので、外面に縦ハケを施す。外面にススが付着する。8の内面は丹状の赤色顔料が付着する。10は底部を欠くもので、内面にコゲが付着する。12は直立気味の立ち上がる甕で、外面に縦ハケを施す。13は底径が小さく壺の可能性もあるが、外面に強い二次焼成がある。

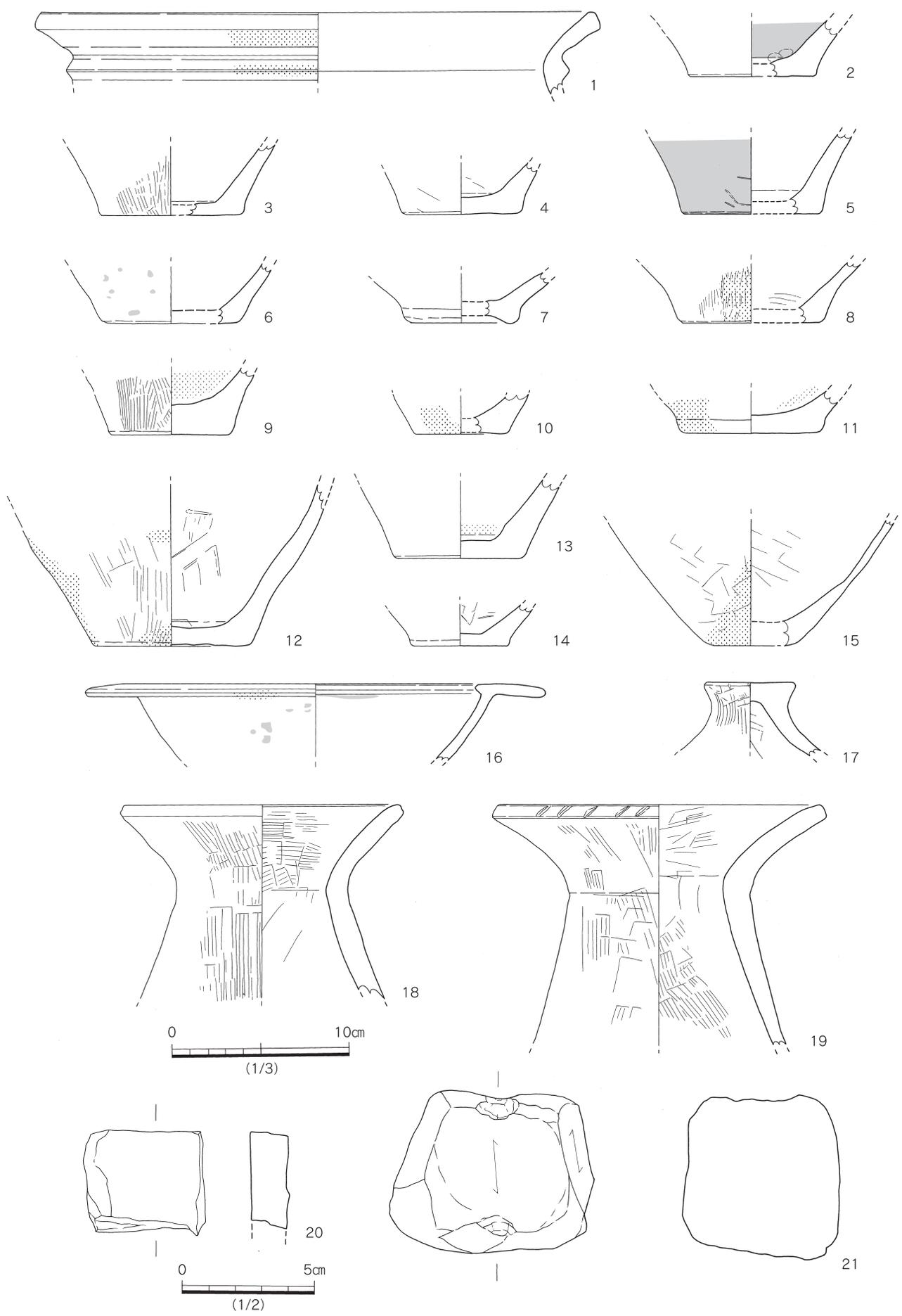
第58図1～15は甕である。1はやや大型の甕の口縁部で「く」字状に屈曲する頸部に三角突帯を巡らせる。2～15は底部である。2は平底の底部で内面に丹が付着する。3は外面にハケメ、4は内外面ともにナデを施す。5の外面は丹塗りである。6は直線的に広がりながら立ち上がる底部で、7は内湾しつつ立ち上がる。やや上げ底である。8は外面にハケメを施し、ススが付着する甕で、9は内面にコゲが付着する。10の底部は径が小さく、外面から底部裏面にまでススが付着する。11は内湾しつつ立ち上がる底部で外面にスス、内面にコゲが付着する。12は甕の底部で外面にハケメを施す。大きさの割に底部の器壁がうすい。13は平底で、内面にコゲがつく。14は内面に工具痕を多く残す小型の甕である。15は尖底に近い平底で、底径が小さい。外面にススが付着する。16は高坏である。全体的に器壁が薄く、口縁部は水平に延びる。器表面は剥離しているが、部分的に丹塗りが残っており、本来は全面に施されたものと考えられる。17は蓋である。頂部のみ残り、外面にハケメを施す。18・19は器台である。18はしまりが上部にある器台で、外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。19も18と似た形態であるが口縁端部に刻目を施す。外面に縦ハケ、内面に横ハケと縦ハケを施す。20はすべての面が剥離しているが砂岩製砥石の可能性もある。厚さは1.4cm。21は図の左右側面のみ敲打し、そのほかの四側面を砥石として用いたものである。粗砥石を転用した石錘か。

②東側調査区

東側調査区は楽浪郡や帯方郡の使節が滞在した施設の有無を確認するために、土器溜りの東側に設定した調査区であるが、確認されたのは住居跡と土坑のみであった(第59図)。基本的に平面ブ



第57图 三雲番上332番地北側調査区出土遺物実測図2 (1/3)



第58図 三雲番上332番地北側調査区出土遺物実測図3 (1/2・1/3)

ランの確認に留めた。

(1) 住居跡

1号住居跡 (第60図1) 調査区の南端で確認された住居跡で、半分以上が調査区外に伸びる。

出土遺物 (第61図1～7) 1は甕の口縁部である。口頸部の断面は「く」字状を呈し、内外面に共に稜線が入る。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。2は完形に復元される甕で、「く」字状の口頸部をもち、張りのない胴部から丸底の底部に至る。外面はタタキの後に縦ハケを施し、底部付近は擦過痕を残す。底部付近にはススも付着する。口縁部内面は横ハケ、胴部内面には斜ハケを施す。3は胴の張りがほとんどない甕の上半部で、外面にタタキ、内面に斜ハケとナデを施す。頸部のしまりも緩く、内外面に弱い稜が入る。4は底部の破片で内外面に共にナデを施す。5は素口縁の鉢で、口縁部が肥厚する。外面はタタキの後に下からの擦過、内面は縦ハケを施す。6は器台である。脚部から内傾しつつ立ち上がるもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7は楽浪系土器の胴部片である。内面にロクロによる回転ナデを強く残す。軟質で灰色を呈する。盆か。

2号住居跡 (第60図2上) 調査区の南東隅で確認された方形の住居跡で、3号住居跡を切るが、6号住居跡に切られる。

出土遺物 (第61図8～11) 8は甕の底部である。平底で内面にはコゲが付着する。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。9は器台である。やや肉厚で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

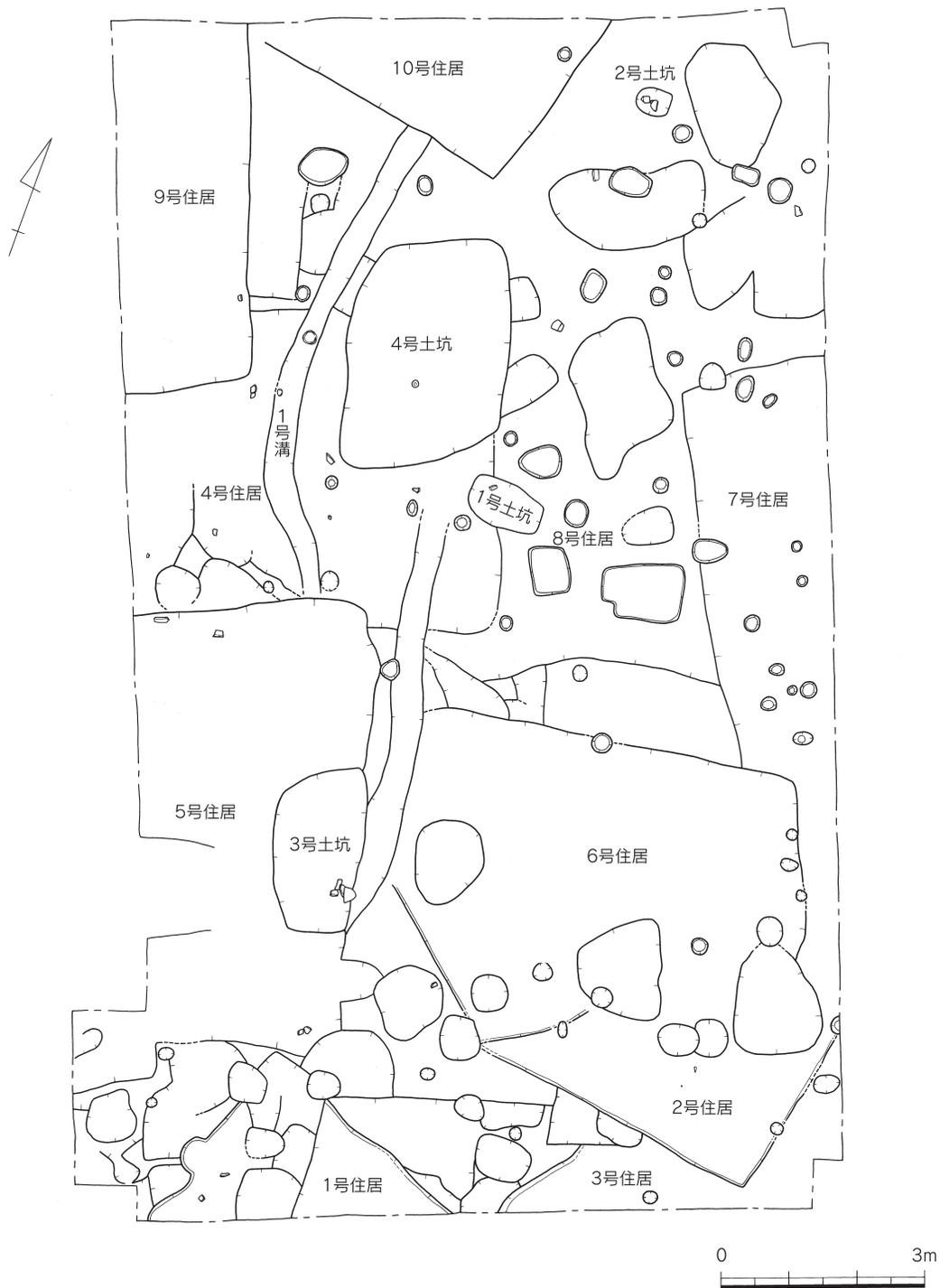
10は鉄鏃である。先端を欠くが圭頭鏃の可能性もある。11は泥質粘板岩製の砥石である。仕上げ砥石でさまざまな面を用いて研磨する。なお、図化していないが淡青色の小玉も1点出土している。

3号住居跡 (第60図2下) 調査区の南東隅で確認された住居跡で、2号住居跡に切られる。

出土遺物 (第61図12・13) 12は小型の甕である。頸部は緩やかに屈曲し、内外面に共に稜が入る。器表面は風化が著しく調整不明。13は鉢である。外面は斜タタキを施し、内面はオサエのあとをナデている。

4号住居跡 (第64図1) 調査区中央西端で確認された方形の住居跡で、5号・9号住居跡、4号土坑に切られる。

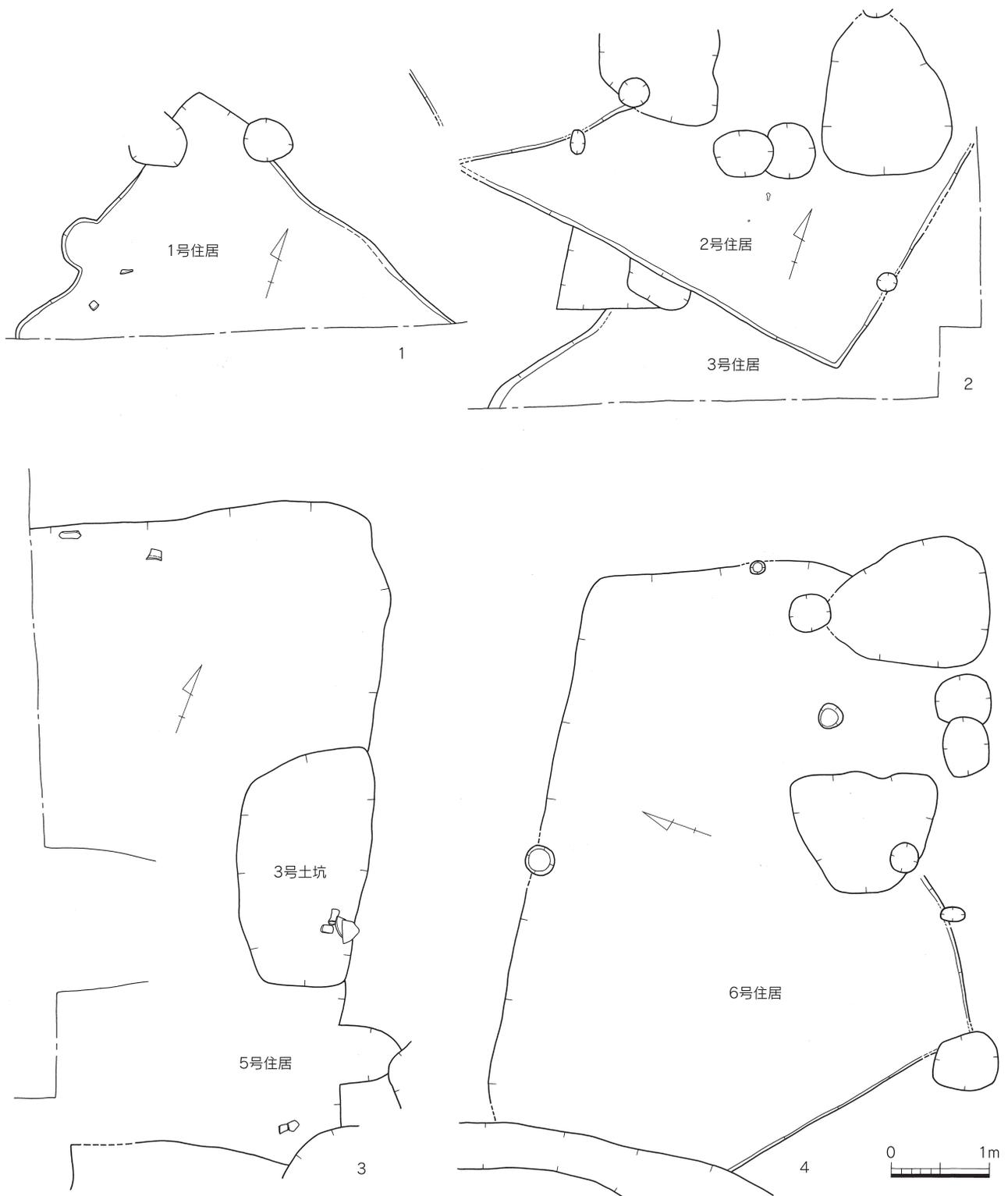
出土遺物 (第62図1～13) 1は甕の口縁部である。頸部は屈曲し、内外面に明瞭な稜が入る。外面はナデ、内面は横ハケを施す。2は甕の口縁部片である。短部断面は方形を呈す。3～5は甕の底部である。いずれも中央部を欠くが、平底である。3の内面にはコゲが付着する。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6は高坏である。坏部上半1/3ほどが反転し、口縁短部は丸く収める。やや坏部が深い。7は坏である。底部を欠くが、グラス状を呈す。器壁は薄く、丁寧なつくりである。外面は斜ハケと縦ハケ、内面はナデを施す。8は三韓土器の短頸壺胴部片である。外面は縄蓆文タタキの後に沈線を巡らせる。内面はオサエの後にナデを施す。軟質で器表面は白灰色、断面は黒色を呈する。9はヤリガンナである。先端部と基部を欠き、現存長4.5cm、幅1.6cm、厚さ0.25cmを測る。断面は湾曲するが、側面に面があることから、基部の一部である。10は石庖丁の小片で、砂岩系製である。11・12は紡錘車である。11は結晶片岩製の紡錘車の破片で、直径4.5cm、孔径0.45cm、厚さ0.42～0.51cmを測る。12は結晶片岩製の紡錘車で直径4.3cm、孔径0.4cm、厚さ0.5cmを測る。



第59図 三雲332番地東側調査区全体図 (1/100)

紡錘車の端から2mm程離れて円文が施される。線も浅く、迷もないため、フリーハンドによる線ではなくコンパスか様に沿ってケガキ針状工具で印をつけたものと判断される。これは装飾のための線刻ではなく製作の補助とするための線刻と思われる。このような線刻をもつ紡錘車は三雲・井原遺跡の石橋や番上地区などから数例出土している。13は水晶原石である。下部がくもり、先端部の透明度が高いことから、不要な部分を除去した素材といえる。長さ1.7cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm。

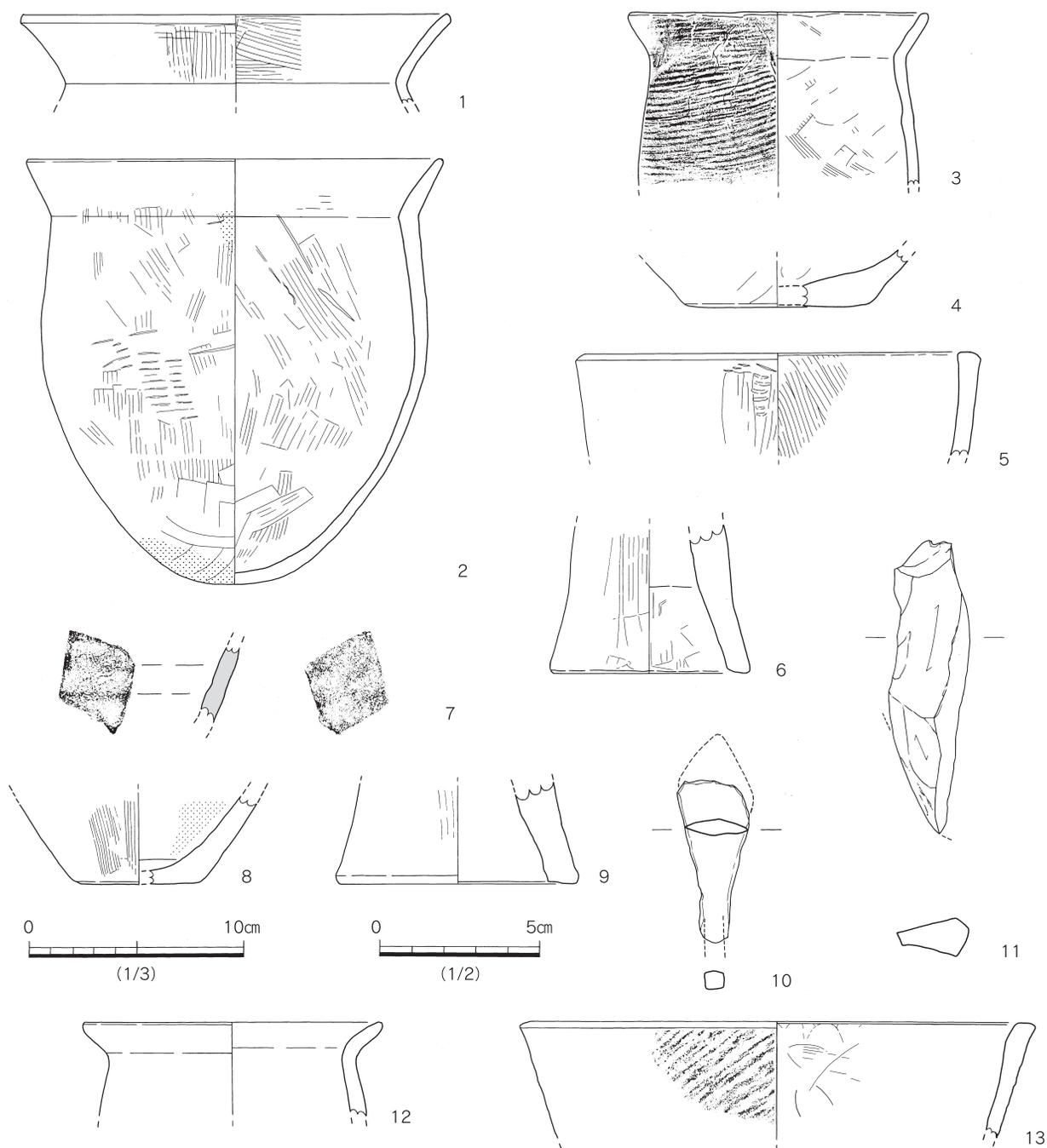
5号住居跡 (第60図3) 調査区の南西側で確認された方形の住居跡で、4号住居跡を切り、3号



第60図 三雲番上332番地東側調査区1～3、5、6号住居跡実測図 (1/60)

土坑に切られる。

出土遺物 (第62図14・15) 14は甕の上半部である。頸部は屈曲し、内外面に明瞭な稜が入る。外面は斜ハケと縦ハケ、内面は斜ハケと横ハケを施す。15は側面の一部を欠くが定形砥石である。対馬系泥岩製で長19.9cm、幅4.9～7.8cm、厚さ1.8～3.4cmを測る。目は細かく、中央部の研ぎ減りが目立ち、黒褐色のものが付着している。なお、水につけると割れたので、被熱していたものと思



第61図 三雲番上332番地東側調査区1～3号住居跡出土遺物実測図(1/2・1/3)

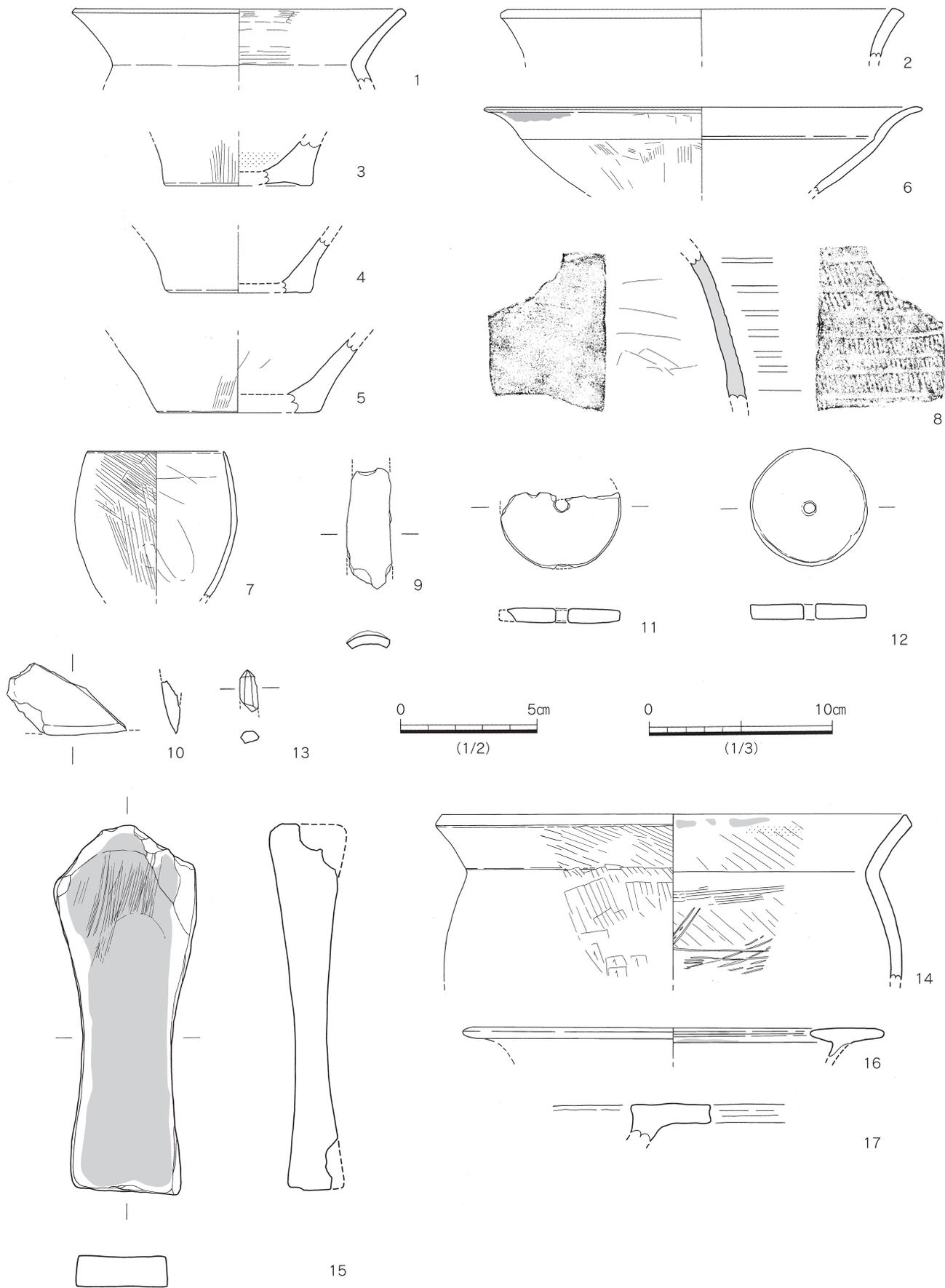
われる。

6号住居跡 (第60図4) 調査区の南寄で確認された方形の住居跡で、2号・7号住居跡を切る。

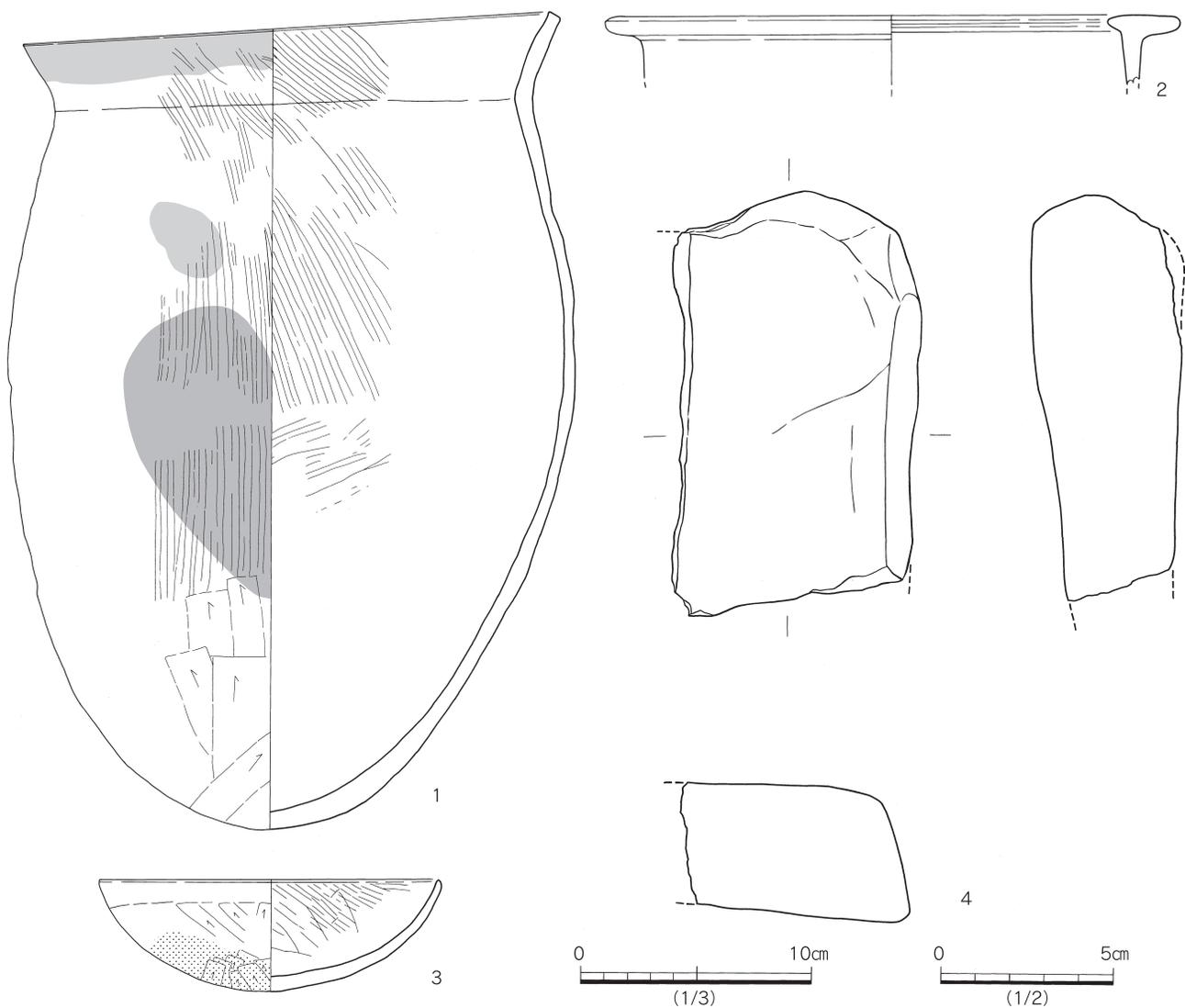
出土遺物 (第62図16) 16は高杯の口縁部である。端部は丸く収め、内面への突出が大きい。器表面は剥離しているが部分的に丹が残っていることから、本来は全面丹塗りであったと思われる。

7号住居跡 (第64図2上) 調査区の中央東側で確認された住居跡で、東側半分は調査区外に伸びる。

出土遺物 (第62図17) 17は壺の口縁部の小片である。口縁端部は強くナデており、内面への突出は小さい。



第62図 三雲番上332番地東側調査区4～7号住居跡出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第63図 三雲番上332番地東側調査区8・9号住居跡出土遺物実測図 (1/2・1/3)

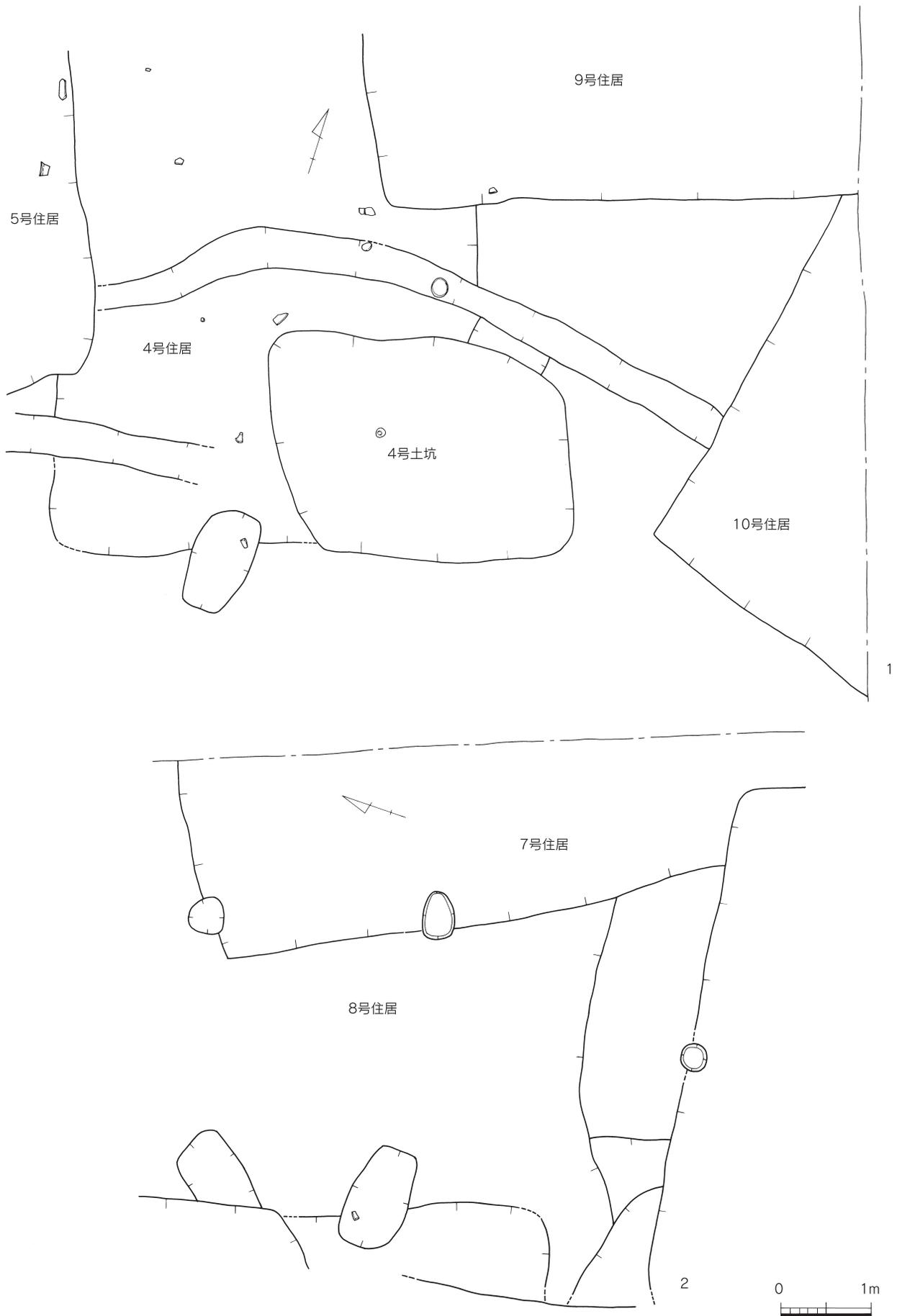
8号住居跡 (第64図2中央) 調査区の中央に位置する住居跡で、南側一辺のみ確認できた。4号・7号住居跡などに切られる。

出土遺物 (第63図1～3) 1は完形に復元できる甕である。頸部のしまりは緩いが、内外面共に稜がはいる。口縁端部は方形で、胴の張りは弱い。底部は丸底である。外面は縦ハケで、底部付近は下からの擦過痕を残す。内面の上半部は斜ハケ、下半部に横ハケを施す。2も甕である。口縁端を丸く収める。3は浅い鉢である。丸底で口縁端部は丸く収める。外面は底部からのケズリがあり、内面は斜ハケとナデを施す。

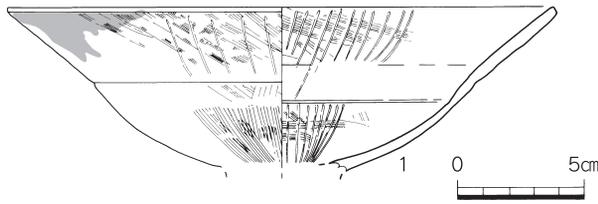
9号住居跡 (第64図1上右) 調査区の北西隅で確認された住居跡で、4号・10号住居跡を切る。

出土遺物 (第63図4) 4は砥石である。図の左と下を欠く。肉厚で厚さ3.8cmを測る。砥石として現存する三側面を用い、中央部がやや窪む。

10号住居跡 (第64図1右) 調査区の北端で確認された住居跡で、その大半は北側に延びる。



第64図 三雲番上332番地東側調査区4・7～10号住居跡実測図 (1/60)



第65図 三雲番上332番地東側調査区1号溝出土遺物実測図(1/3)

部である。外面は口縁から1/3、内面は1/2の箇所段がつく。反転部から口縁まではほぼ直線的に広がり、肥厚する。口縁端部は方形におさめる。内外面共に斜ハケや縦ハケの後に暗文状の縦ミガキを施す。外面口縁部に黒斑が残る。

(2) 溝

1号溝 (第59図) 調査区の西側にある溝で南北方向に延びる。幅は20cm程度である。

出土遺物 (第65図1) 1は高杯の

(3) 土坑

1号土坑 (第66図) 調査区の中央で確認された隅丸方形の土坑である。長軸1.14m、短軸0.70m。深さ0.21mを測る。

出土遺物 (第67図1～3) 1は土坑の西側で板状鉄斧の近くから出土した高杯である。ラップ状に広がる脚裾部で、端部の内外面に黒斑が残る。脚部上位の3方向に円形透を入れるが、2カ所は貫通しない。外面はナデ、内面は横ハケを施す。2は土坑の東端から出土した器台の脚部である。内外面共にナデを施す。3は板状鉄斧である。現状では認識できないがレントゲンでは下部に刃部が認められる。上部は若干肥厚する。断面は長方形である。長さ9.4cm、幅3.8cm、厚さ1.3cm。

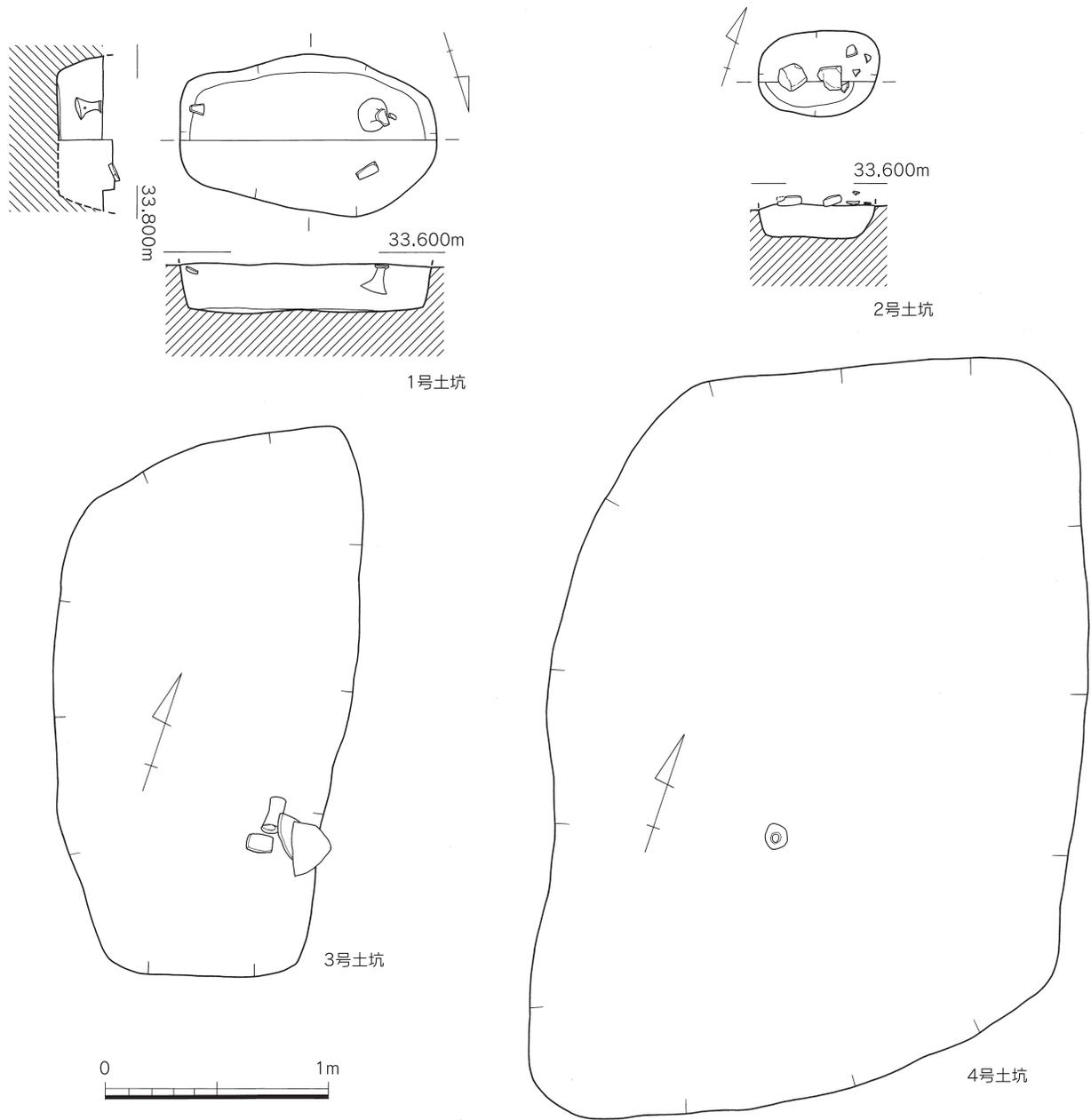
2号土坑 (第66図) 調査区の北東寄り確認された楕円形の土坑で、長軸0.55m、短軸0.37m、深さ15cmを測る。

出土遺物 (第67図4～6) 4は半円形の土製品である。強く焼きしまっており、近辺で出土する弥生土器の状況とは異なる。外面は平滑であるが、スサ状のものが混ぜ込まれ、焼成時に燃焼して空間となった部分がある。横断面でみると中央部分が窪み、紐状のもので縛りつけられた可能性もある。内面はナデているが凹凸が激しい。ただ、図の左下の側面に格子状のタタキの痕跡が残る。出土状況は外面を上にして出土した。土製鋳型の可能性も考えられるので、類例との比較検討が必要である。現存長8.0cm、現存幅8.7cm、厚さ4.3cm。5は筒形土製品である。当初、中実の器台かとも思ったが、弥生時代後期には殆ど見られず、4の土製品との関連から筒形土製品とした。底径9.7cm、現存高11cmを測る。外面はすべてオサエで調整している。強く焼きしまっている。比恵遺跡出土の埴塙に似た印象をうける。6は鉄鎌か。当初、片方に刃部が認められたので、鉄刀かと思ったが、背が湾曲していることから鉄鎌とした。ただ、鉄鎌としては肉厚な印象がある。

3号土坑 (第66図) 調査区の南西側で確認された隅丸方形の土坑で、長軸2.40m、短軸1.35mを測る。

出土遺物 (第67図7・8) 7は鉢である。素口縁でやや胴が張る。外面はタタキの後にナデ、内面は斜ハケを施す。8は器台である。肉厚で、上位にくびれがある。内外面共にナデを施す。両者は3号土坑検出時に接して出土した。

4号土坑 (第66図) 調査区の中央北寄り確認された隅丸方形の大型土坑である。長軸3.30m、短軸2.43mを測る。

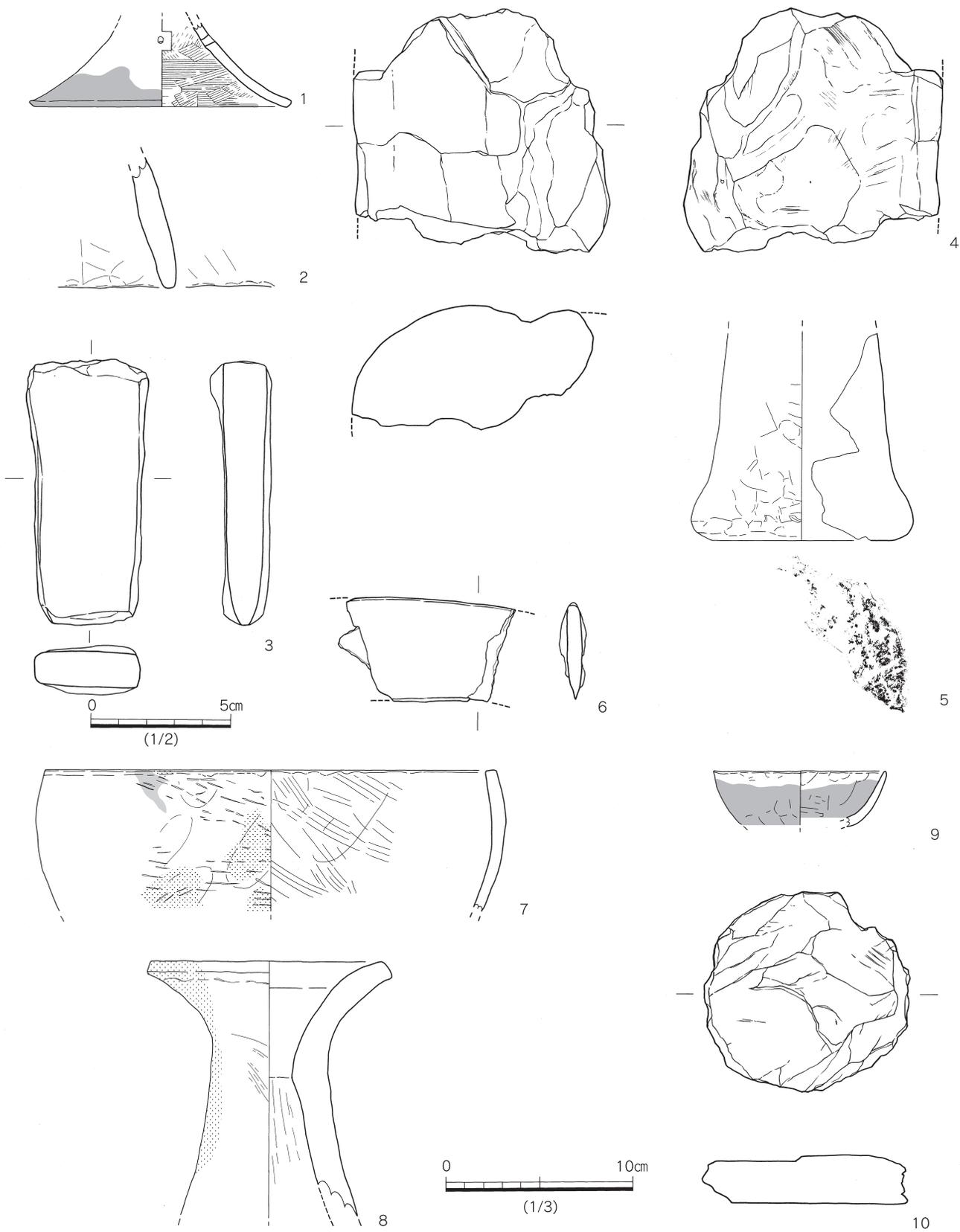


第66図 三雲番上332番地東側調査区1～4号土坑実測図 (1/30)

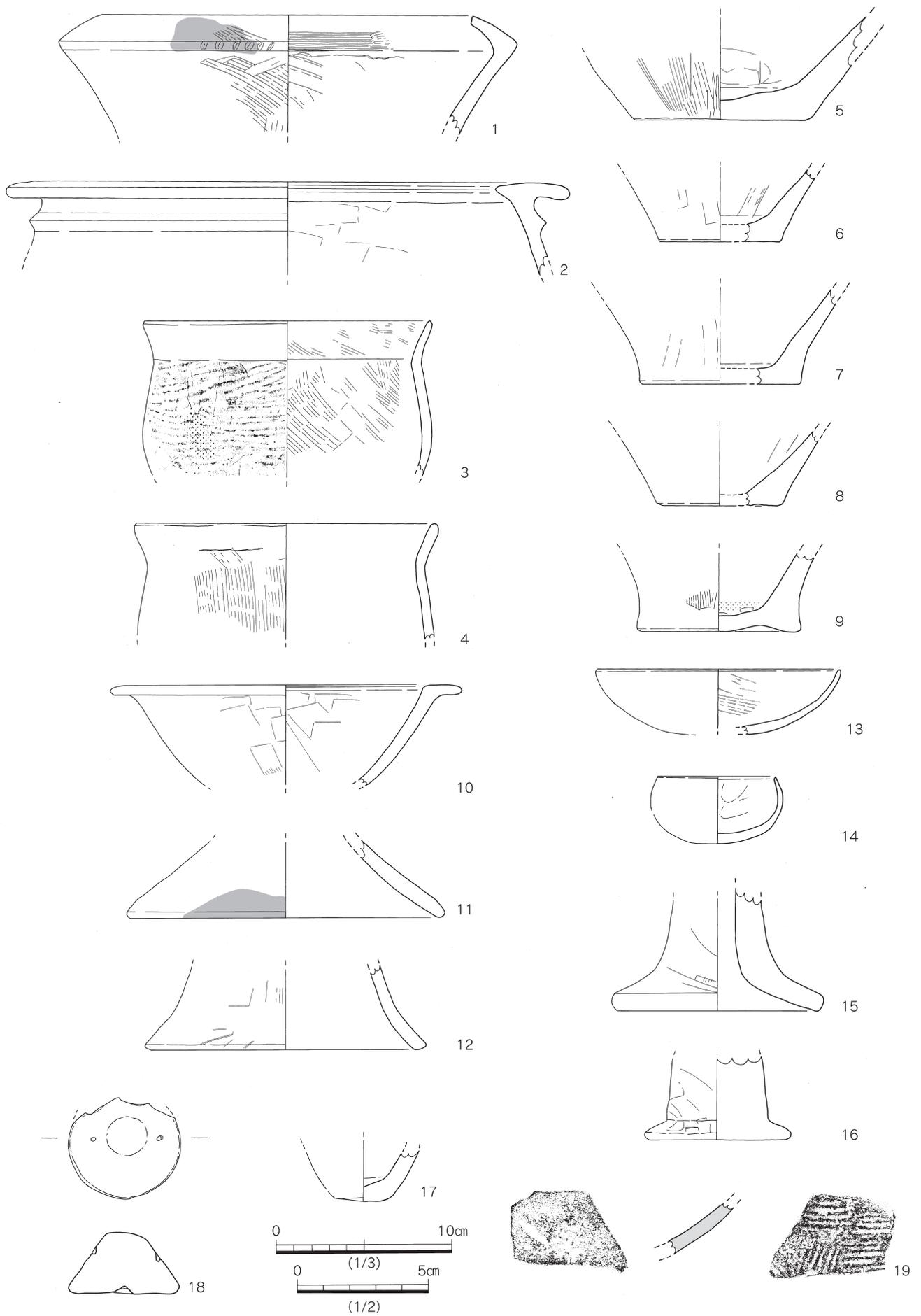
出土遺物 (第67図9・10) 9は小型の椀である。内外面共にナデを施す。10は蛇紋岩製の紡錘車未製品である。直径は7.0～7.3cm、厚さは1.5～1.7cmを測り、この段階である程度の形状を意識したものとなっている。側面は打欠きの段階で、一部切削りが認められる。上面は鉄製工具による敲打痕を残し、裏面は大きな石材から取り出したままの状態であるが、平滑である。

(4) 包含層出土遺物

東側調査区における包含層は遺構検出時に出土したもの (東側調査区包含層出土遺物)、遺構面



第67図 三雲番上332番地東側調査区1～4号土坑出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第68図 三雲番上332番地東側調査区包含層出土遺物実測図1 (1/2・1/3)

の上にある黒褐色土から出土したもの（黒褐色包含層出土遺物）に分けている。なお、遺構面の保全等のために、調査区の周囲に排水溝を、四隅には溜め枘を設けた。そこからも遺物が出土したため排水溝出土品としてまとめて報告する。

第68・69図は東側調査区包含層出土遺物である。第68図1は複合口縁壺で屈曲部に刻目をもつ。内外面ともにハケメを施す。2～9は甕である。2はやや大型の甕の口縁部で、口縁下に三角突帯をめぐらせる。3は頸部のしまりのゆるい「く」字状口縁を持つ甕である。外面は横から斜めにタタキを施し、内面はオサエのあとにハケメを施す。4もしまりのゆるい甕で、頸部内外面に稜が認められない。外面の縦ハケ、内面にナデを施す。口縁短部はやや肥厚させつつ丸く収める。5～9は底部である。5は大型の甕の底部で、広がりながら立ち上がる。6・7は底部中央部を欠くが平底である。外面にナデを施す。8も底部中央部を欠くが平底の甕で、外面に二次焼成痕が残る。9はやや内湾気味に立ち上がる底部で、外面にハケメを残す。

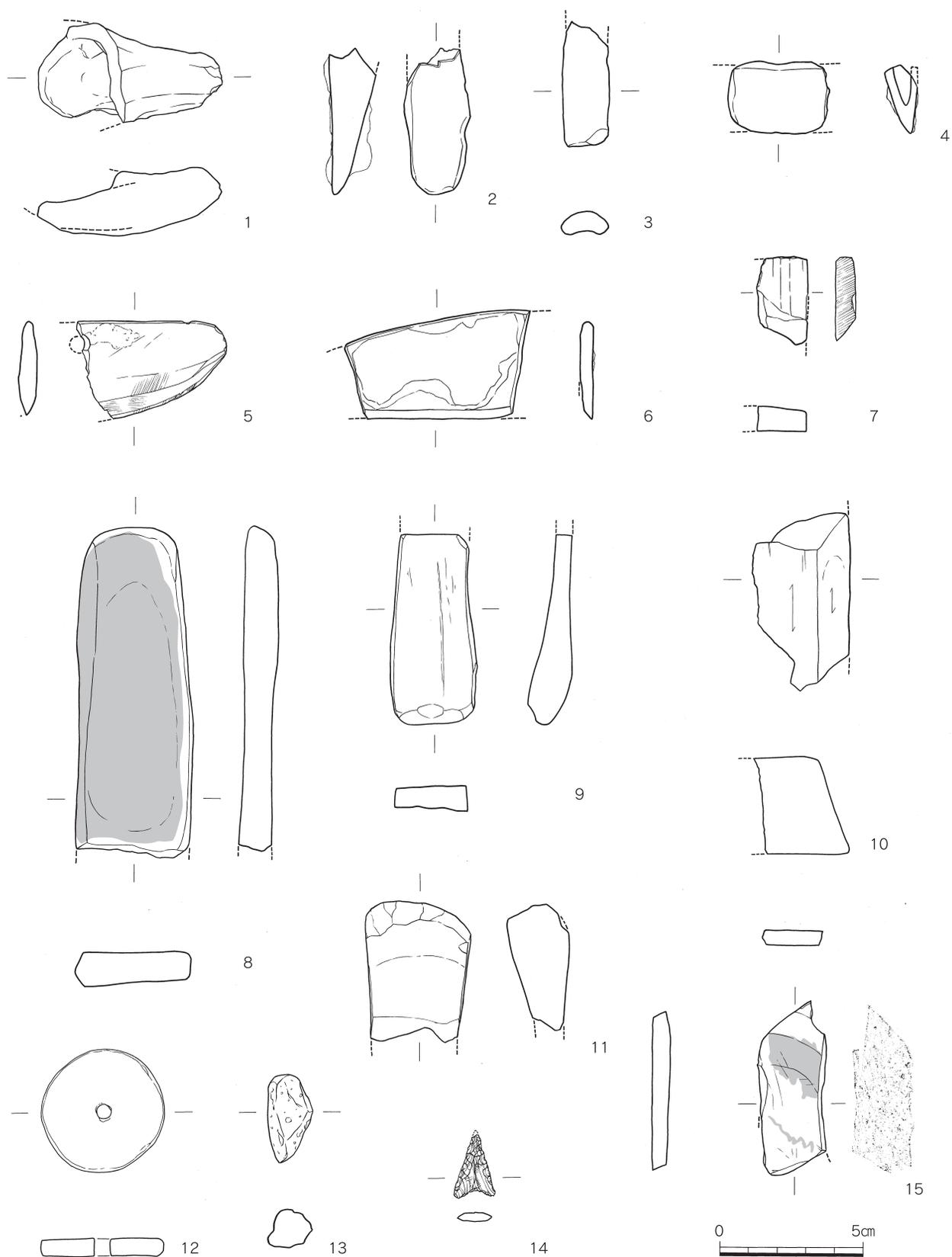
10～12は高坏である。10は坏部の深い高坏で、口縁は延びない。内外面ともにナデを施す。11・12は脚部である。11は端部を丸く収め、12は脚裾の径が小さく、端部断面は方形気味である。やや古いものか。13は鉢である。器壁は薄く、内面に横ハケ、外面にナデを施す。底部を欠くが丸底であろう。14はミニチュアの鉢である。丸底で器壁は薄く、口縁端部を小さくつまみ出す。15・16は器台である。15は脚部が広がる器台である。胴部には絞り痕を残す。16は中実の器台で、脚部は小さく広がる。丁寧なつくりである。17はミニチュア土器。凸レンズ底で、口縁部を欠く。

18は円盤状土製品である。断面は台形を呈し、肩部に刺突痕を2箇所施す。底部は錐状のもので窪ませる。19は三韓土器の短頸壺底部片か。焼成は軟質で外面に縄文タタキを施す。

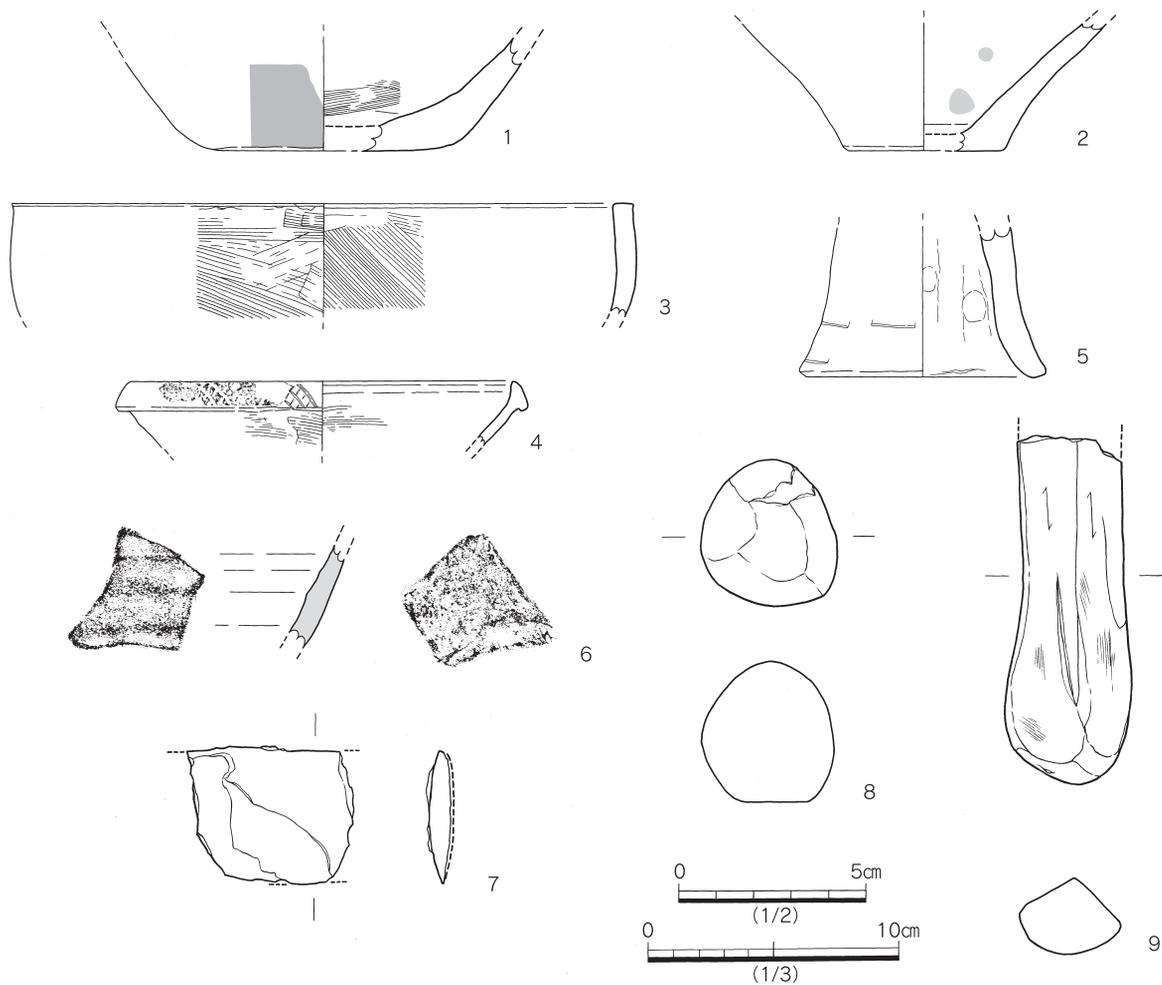
第69図1は土製柄杓である。合の部分大きく欠き、柄の部分は肉厚である。

2は鑿状の工具である。刃部幅は1.7cmで、使用のためか丸みを帯びる。基部は刃部とほぼ同じ幅で、厚さは錆のため膨張しているが1.7cmを測る。3はヤリガンナの基部である。錆で膨らむが、本来は厚さが3・4mmであろう。断面は弧状を呈する。4は小片であるが断面がV字形を呈することから、U字形鋤先の可能性が高い。U字形鋤先は古墳時代中期以降に増加するが、糸島市域では上鐘子遺跡や三雲下西435番地、三雲屋敷489番地から弥生時代中期中頃～古墳時代初頭にかけてのものが出土しており、本例も包含層出土ながらも弥生時代に含まれると判断される。

5は石庖丁である。穿孔部から割れている。刃部付近には研磨痕を残す。輝緑凝灰岩製。6は石鎌か。器表面が層状に剥離しており、現状で4mm程度の厚さしかない。細砂岩製。7は偏平片刃石斧の基部片である。石の目は刃部に対して垂直に入り、右側面には斜め研磨の痕跡を明瞭に残す。層灰岩製。8は砥石である。長方形を意識しているが、不定型のままである。砥石としては小口を除く四側面すべてを用いており、図化した面では下側の立ち上がりも確認できるので、欠損部分も大きくないと判断される。泥質粘板岩製で砥石としての目は細かい。9も砥石である。小口を除く四側面が用いられている。上面と下面が使い込まれており、薄くなる。また、筋状の窪みが認められる。泥質粘板岩製で砥石としての目は細かい。10も砥石である。図の表面と右側面のみ用いられており、裏面は平坦であるが未使用の状態である。砂質の粘板岩製で砥石としての目は細かい。11も砥石で小口を除く四側面が用いられる。図の表面と裏面は研ぎ減りが著しい。粘板岩製で砥石と



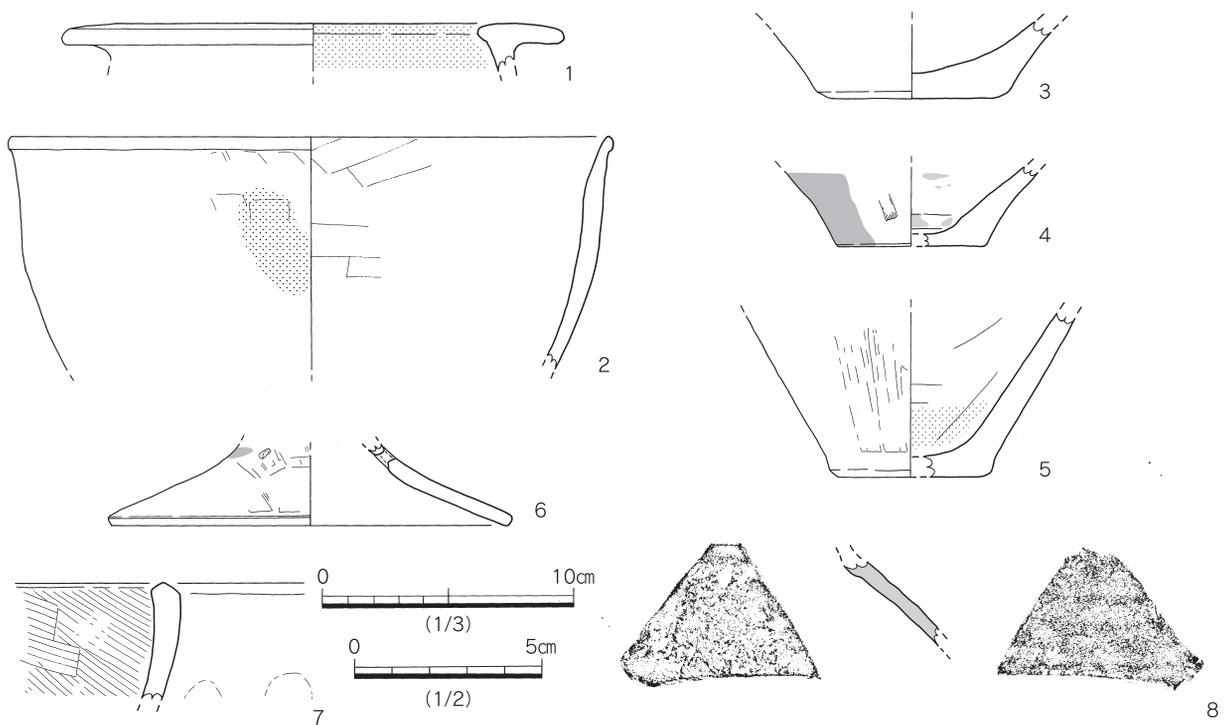
第69図 三雲番上332番地東側調査区包含層出土遺物実測図2 (1/2)



第70図 三雲番上332番地東側調査区黒褐色包含層出土遺物実測図 (1/2・1/3)

しての目は細かい。12は結晶片岩製の紡錘車である。表裏面はいずれも光沢研磨を施すが、一部にざらつきを残す。側面は横研磨を施す。13は軽石製の浮子である。14は黒曜石製の凹基鏃である。先端部を欠く。15は板石硯片である。側面で生きている面はなく、現状で長さ5.5cm、幅2.2cm、厚さ5.4～6.5mmを測る。表面は研磨されて平滑であるが、裏面は剥離したままである。裏面は平坦であるが、表面は図の上部が丸みを帯び、やや肉厚である。おそらくその下が硯としての磨面である。表面には赤外線に反応する部分があり、図ではアミカケしているが、墨かどうかの最終的な確認はできていない。なお、図の下辺と右側面下位は新しい割れがあり、縞状の堆積が認められる。石材は砂質頁岩である。なお、包含層からは淡青色の小玉も2点出土している。

第70図は東側調査区の遺構面の上に位置する黒褐色包含層から出土した遺物である。1は底部で、外面に黒斑が残る。2は壺の底部である。内面にこぼれた丹が付着する。3は大型の鉢である。素口縁で断面は方形を呈する。胴部はややふくらみ、内外面ともに斜ハケを施す。4は小型の鉢である。口縁部を肥厚させ面をつくり、ヘラで三角文を刻み、内部を直線で充填する。5は器台の下部である。器壁は薄く丁寧な調整を施す。脚裾端部は方形を呈す。6は楽浪系土器の盆か大型鉢の胴部片か。内外面共に回転横ナデを施すが、内面にその痕跡を強く残す。軟質で外面は黄灰色、内面



第71図 三雲番上332番地東側調査区排水溝出土遺物実測図 (1/2・1/3)

は灰色を呈する。

7は欠損部分が多いが、断面がレンズ状を呈することから、鉄剣の破片か。上下共に欠けており、4.3cm分だけ残る。幅は3.6cmである。8は球状を呈する玄武岩で、下面は平らになっている。ただ、一部くぼみもあり、擦石とはいえないか。9は頁岩製の棒状の砥石である。実測図で示した2面のみ用いており、残りは丸みを帯びた自然面である。この面を上にしても安定しないことから、手持ちで使う砥石と判断される。

第71図は東側調査区の周囲に掘った排水溝から出土した遺物である。1は甕である。内面にスス状のコゲがつく。2は素口縁の甕で、口縁が弱く外反し、端部は丸く収める。内外面共にナデを施す。3～5は底部である。3は内外面共に二次焼成痕が残る。4は内面に丹が雫状に付着し、外面に黒斑が残る。5は外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面にはコゲがつく。6は高坏の脚裾部である。脚部の屈曲部付近に透孔をもつ。7は鉢の口縁部である。素口縁で内面に斜ハケ、外面にナデを施す。

8は楽浪系土器で内外面共に回転ナデを施す。破片の上端部に立ち上がりが認められるため壺胴部の上半部の可能性がある。軟質で灰色を呈する。

なお、青紺色の小玉も1点出土している。

II. 番上地区330番地 1次調査

1. 調査の概要

平成26年度に三雲番上332番地の調査を行い、土器溜りの北の端部を確認することができた。そこで、土器溜りの全容解明のため、平成27年度に東西水路（Ⅱ－5）の南に位置する三雲番上330番地の調査を実施した。その結果、南側の端部を確認し、これまでの調査で東西38m、南北28mの大型の土器溜りであることが確認された。また、出土が想定されていた楽浪系土器も多く確認されると共に、国内2例目となる板石硯片も確認された。石硯と同定され、発表されるまでの経緯は以下のとおりである。

平成27年12月2日（水）土器溜り南北トレンチB区の検出面から0～20cmの箇所から取り上げ

平成28年2月16日（火）水洗いし、乾燥中に砥石としては違和感があったため、武末純一氏（福岡大学教授）に資料を実見してもらった結果、楽浪郡出土硯と比較して諸特徴が共通することから本例を板石硯と同定

平成28年2月21日（日）西谷正氏（九州大学名誉教授）に資料を実見してもらい、板石硯であることを追認

平成28年2月29日（月）記者発表

平成28年3月2日（水）新聞各紙で報道

その後、出土した石器類を再度確認したところ、前年度に調査した332番地でも別個体の板石硯が確認され、平成28年9月28日（水）に記者発表を行った（本書30頁で報告）。

2. 遺構と遺物

(1) 住居跡

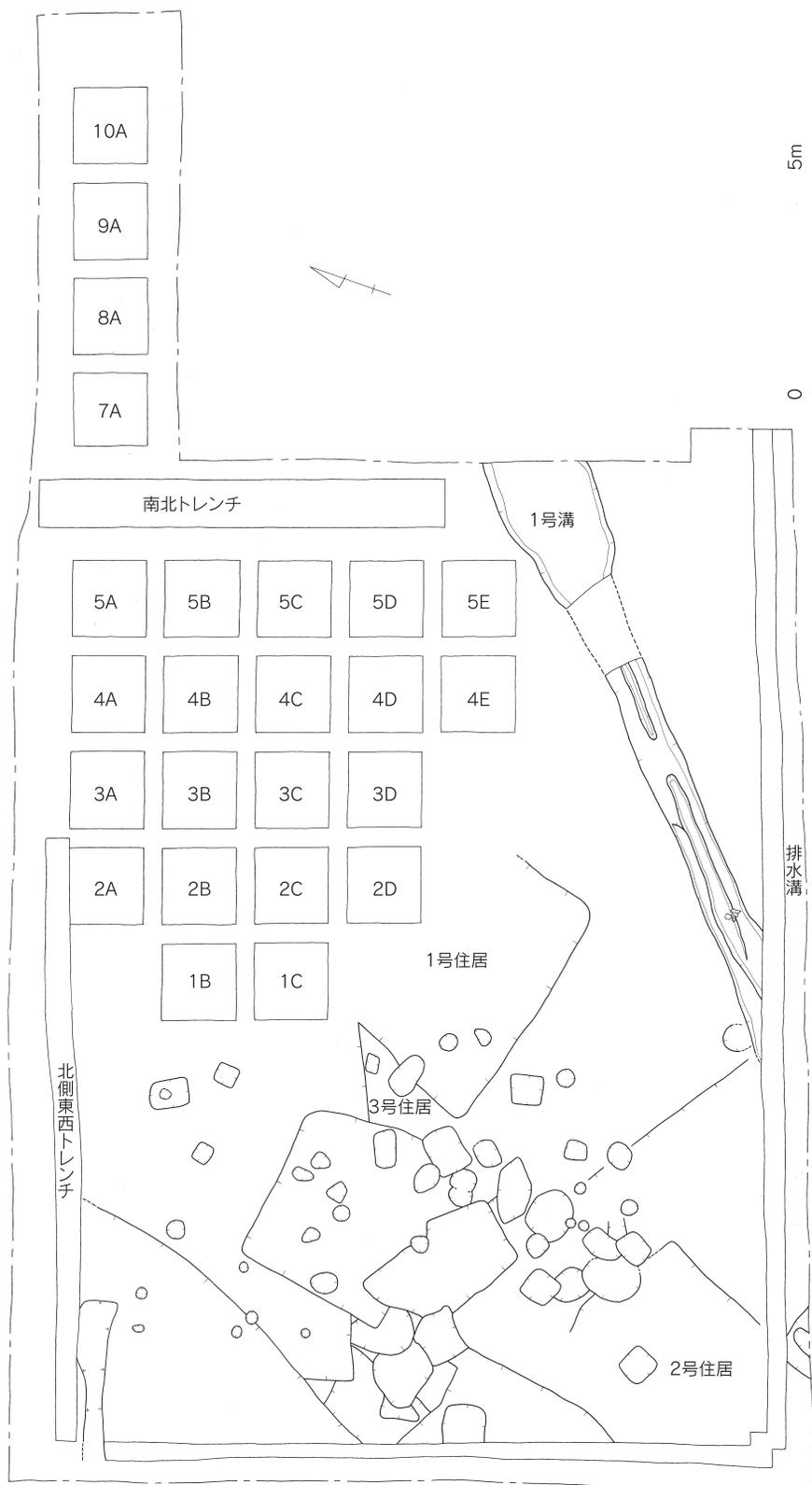
住居跡は平面検出のみであるため、住居跡に伴うものか不明であるが、検出面で土器が集中する箇所が3ヵ所あり、そこに所在する住居跡に伴う可能性が高い。

1号住居跡（第73図）土器溜り1Cグリッドの南に位置する一辺5mほどの方形の住居跡である。住居跡そのものは土器溜りに切られると判断した。

出土遺物（第74図1～3）1は長胴甕で頸部の内外面に稜が入る。内外面に斜ハケを施す。2は碗である。口縁端部は丸く収める。3は三韓土器である。外面に格子タタキを施す。白灰色を呈する。

2号住居跡（第73図）調査区の南西隅で確認された方形の住居跡で、調査区外に伸びる。

出土遺物（第74図4～7、第75図1～6）第74図4は頸部のしまりが強い甕で、やや胴が張る。口縁端部は方形を呈し、外面に斜ハケを施し、内面は斜ハケをナデ消す。5は直立気味に立ち上がる甕の口縁部である。器壁は薄く、外面に縦ハケ、内面に横・斜ハケを施す。6は長胴甕の上半部で内面に稜が入る。外面に縦ハケ、内面に横・縦ハケを施す。7は甕の底部で、平底である。第75図1～6は高坏の坏部である。1～5は反転部が1/2程度のもので、横ハケや斜ハケを施すものもある。5は深い坏部をもつ高坏である。口縁は丸く収める。6は小型の高坏の坏部である。全体的に器壁が薄い。



第72図 三雲番上330番地1次調査区全体図 (1/150)

3号住居跡 (第73図) 1号住居跡の西側で土器の集中部が確認された。さまざまな住居跡から切られており、そのプランは不明である。ここは土坑になる可能性も高い。

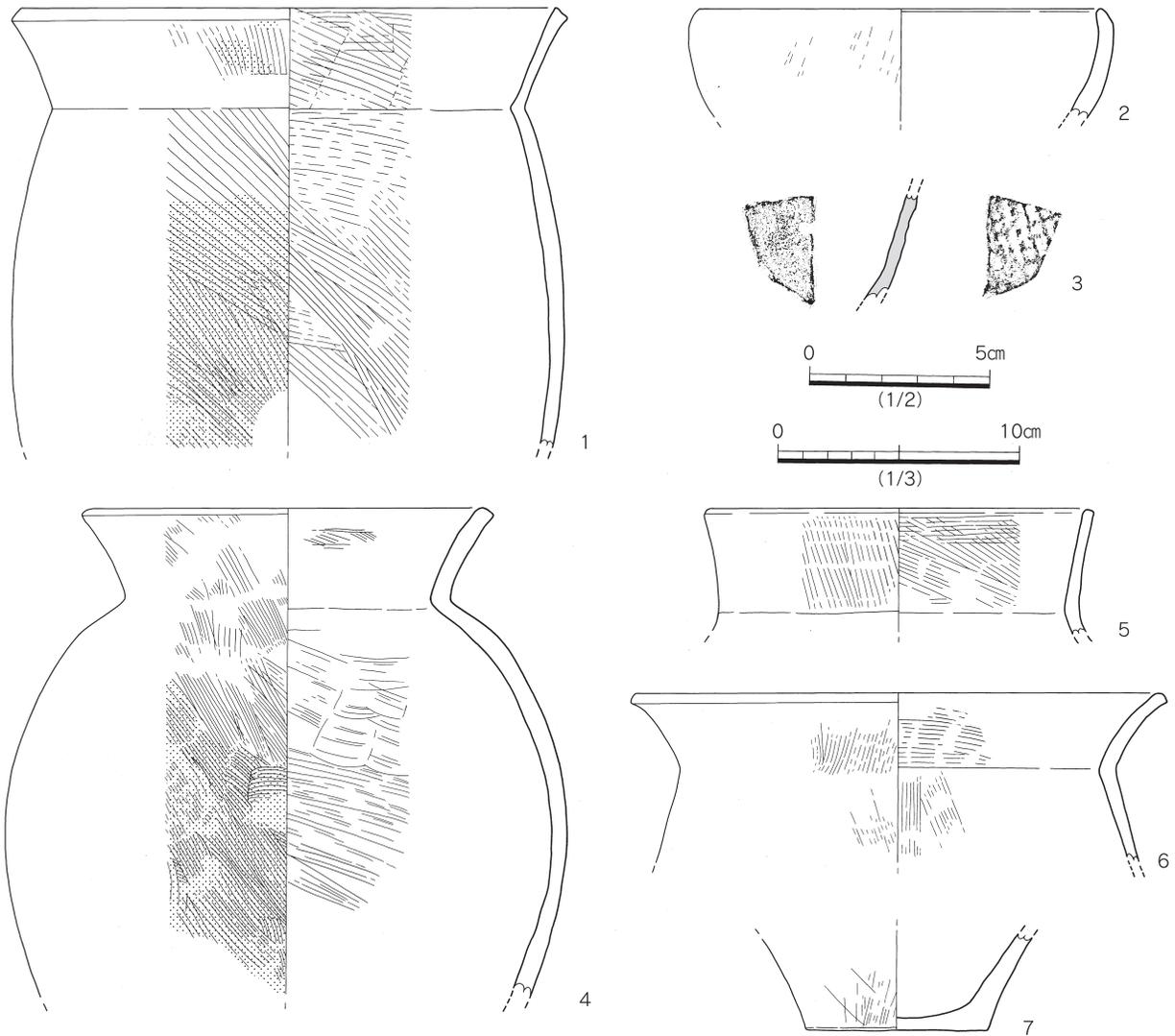


第73図 三雲番上330番地1次住居跡実測図 (1/100)

出土遺物 (第75図 7) 7は器台の脚部である。

(2) グリッド出土遺物

本調査区では福岡県教育委員会による水路掘削に伴う発掘調査(番上Ⅱ-5)で確認された土器溜りの南側の広がりが面的に検出された。そこで、土器溜りの深さを確認するために幅1mのトレンチを設定し(以後、南北トレンチとする)、その東西にグリッドを設定した(第76図)。グリッド

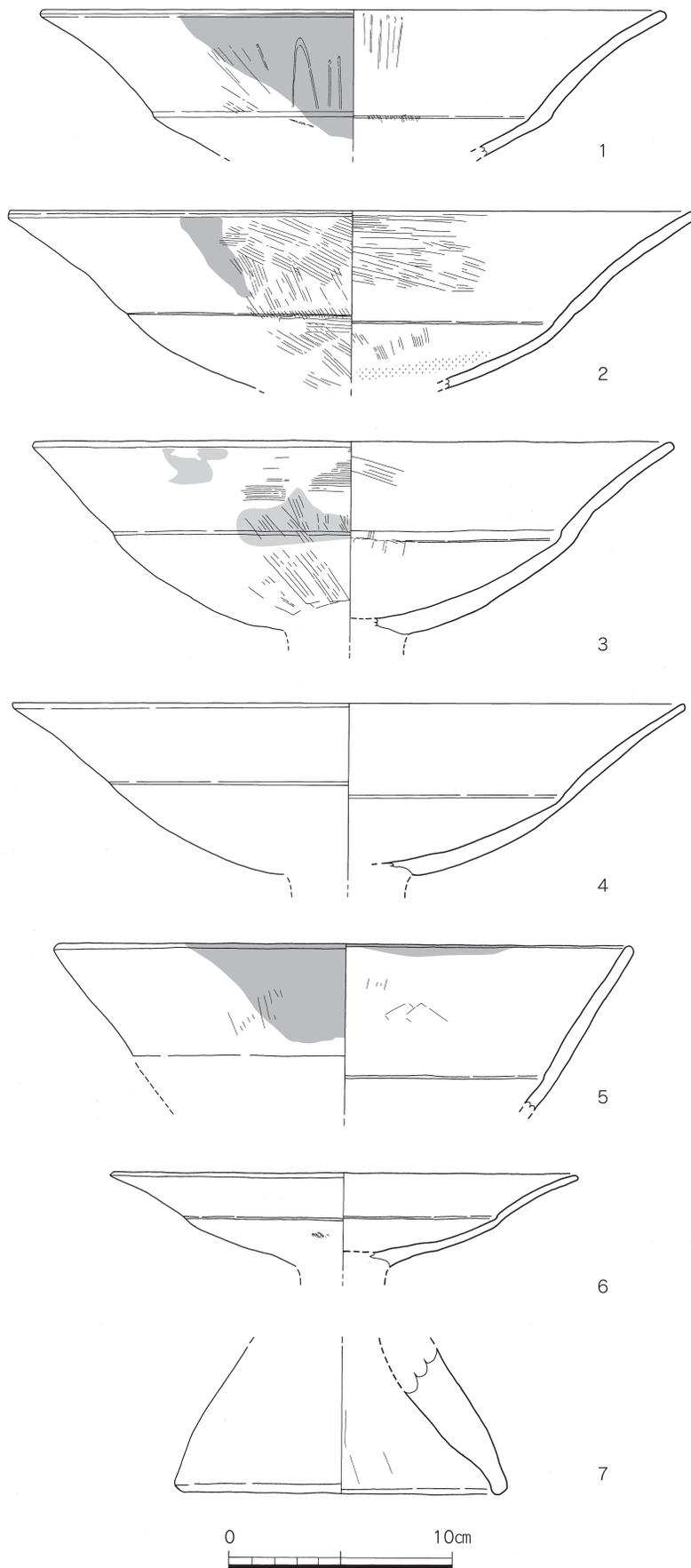


第74図 三雲番上330番地1次土器集中区1・2出土遺物実測図 (1/2・1/3)

は南北5区画(A~E)、東西10区画(1~10)設け、その表記は数字とアルファベットの組み合わせで行った。なお、土器溜りから出土する遺物は福岡県教育委員会による調査と前年度の三雲番上332番地の調査でおおよそ把握できていること、および、遺構の保全を図るため、グリッドは遺物の検出のみで掘り下げてはいない。しかし、検出段階で動いたものや、遺構の性格を知るうえで必要なもののみを取り上げた。調査終了後真砂土を用いて埋め戻し、現在も現地に保存されている。

第77図1は2Aグリッドから出土した楽浪系土器である。外面に縄蓆文タタキ、内面にオサエ痕を残す。短頸壺か。2は2Cグリッドから出土した楽浪系土器で甕の頸部である。内外面共に回転横ナデを施し、外面淡黄灰色、内面淡橙色を呈する。3は2Cグリッド出土の玄武岩である。石斧の石材として持ち込まれたものか。

4は3Bグリッドから出土した長胴甕の上半部で、頸部の内外面に稜が入る。外面に斜ハケとタタキ、内面に斜ハケを施す。5は3Cグリッドから出土した楽浪系土器の鉢である。小さく広がる口縁部の下に三角突帯が巡る。内外面共に黄灰色を呈する。



6は4 Aグリッドから出土した棒状鉄製品である。長さ4.7cm、幅7mmで、先端部は細くなる。鉄素材の可能性が高い。

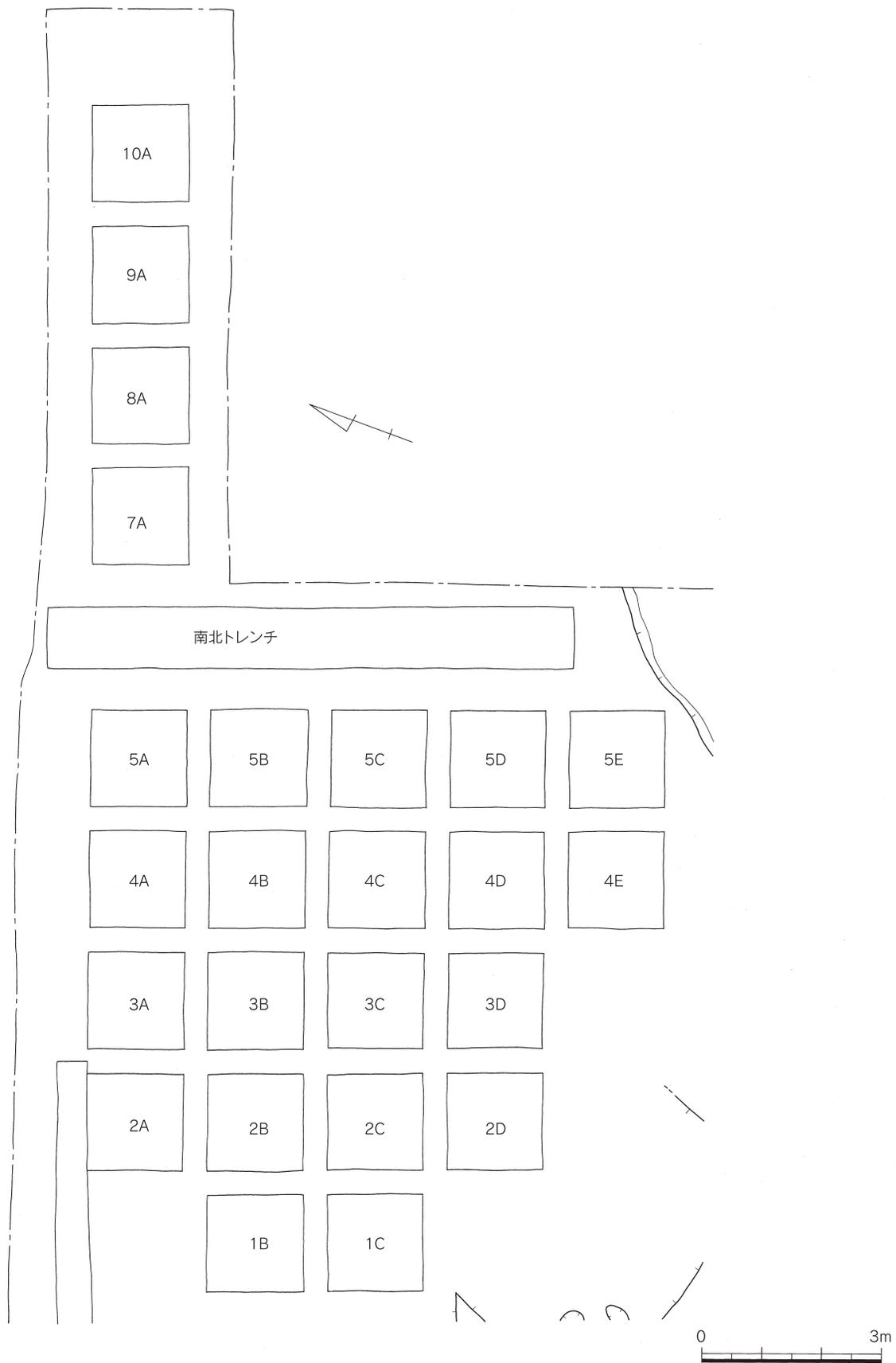
7は5 Aグリッド出土の甕の上半部である。やや外傾する口縁部の下に低い三角突帯を巡らせる。8は5 Bグリッド出土の甕の底部である。内面にはコゲ付着する。9は5 Cグリッド出土の楽浪系土器である。短頸壺の胴部上半部片で縄蓆文タタキを施した後に横方向の沈線を巡らせる。頸部付近はタタキを回転横ナデで消す。10・11は5 Dグリッド出土の甕の口縁部で、頸部内外面に稜が入る。12はやや胴の張る鉢の上半部である。内外面に斜ハケを施す。13は5 Eグリッド出土の楽浪系土器の盆か。内外面に回転横ナデを施す。

14は7 Aグリッド出土の甕の底部で、内面に丹が付着する。15は楽浪系土器の鉢の口縁部片である。内外面ともに回転横ナデを施し、内面に明瞭な稜が入る。

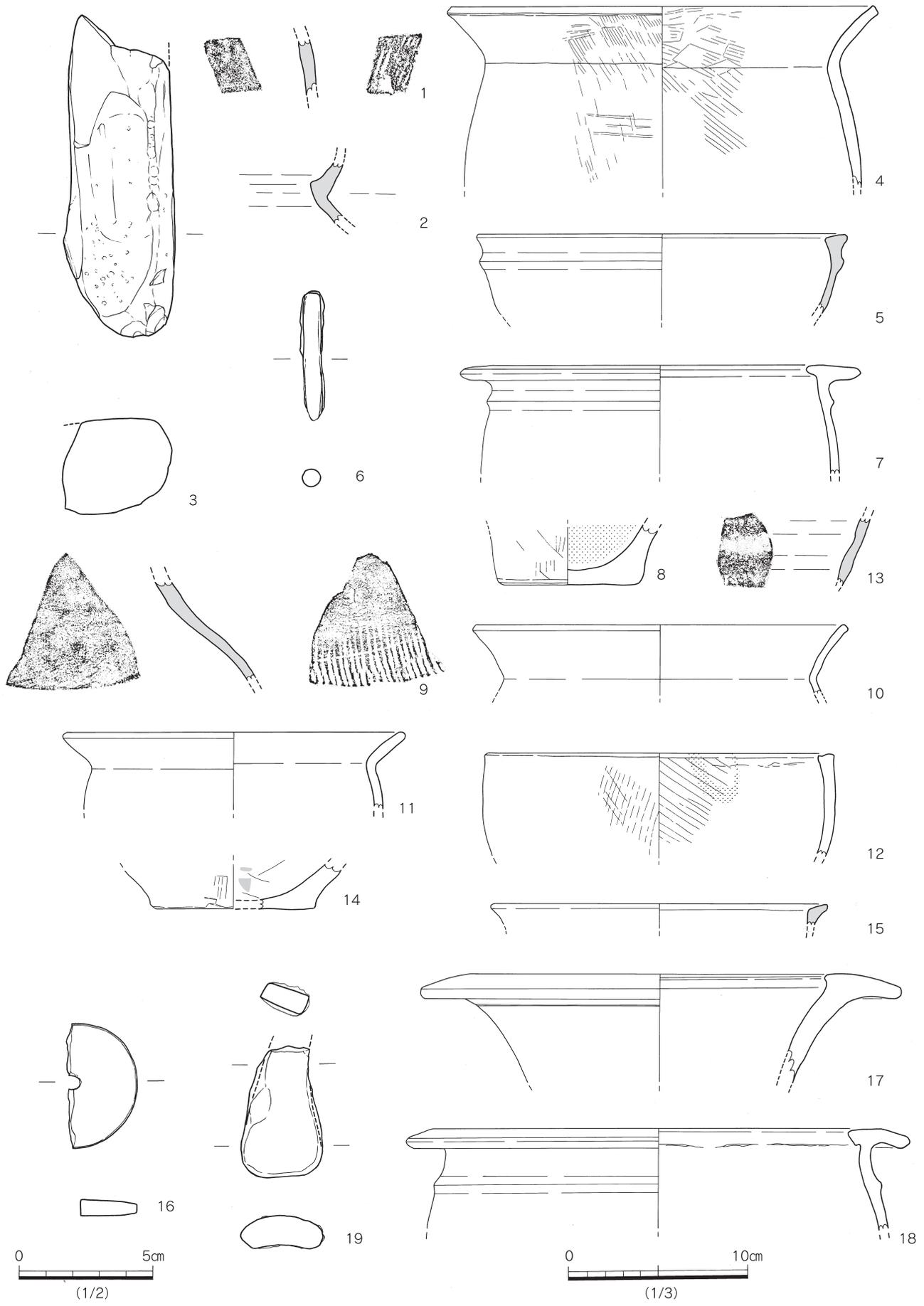
16は8 Aグリッド出土の紡錘車である。片岩製で光沢研磨を施す。

17は9 Aグリッド出土の鋤先口縁壺である。頸部か

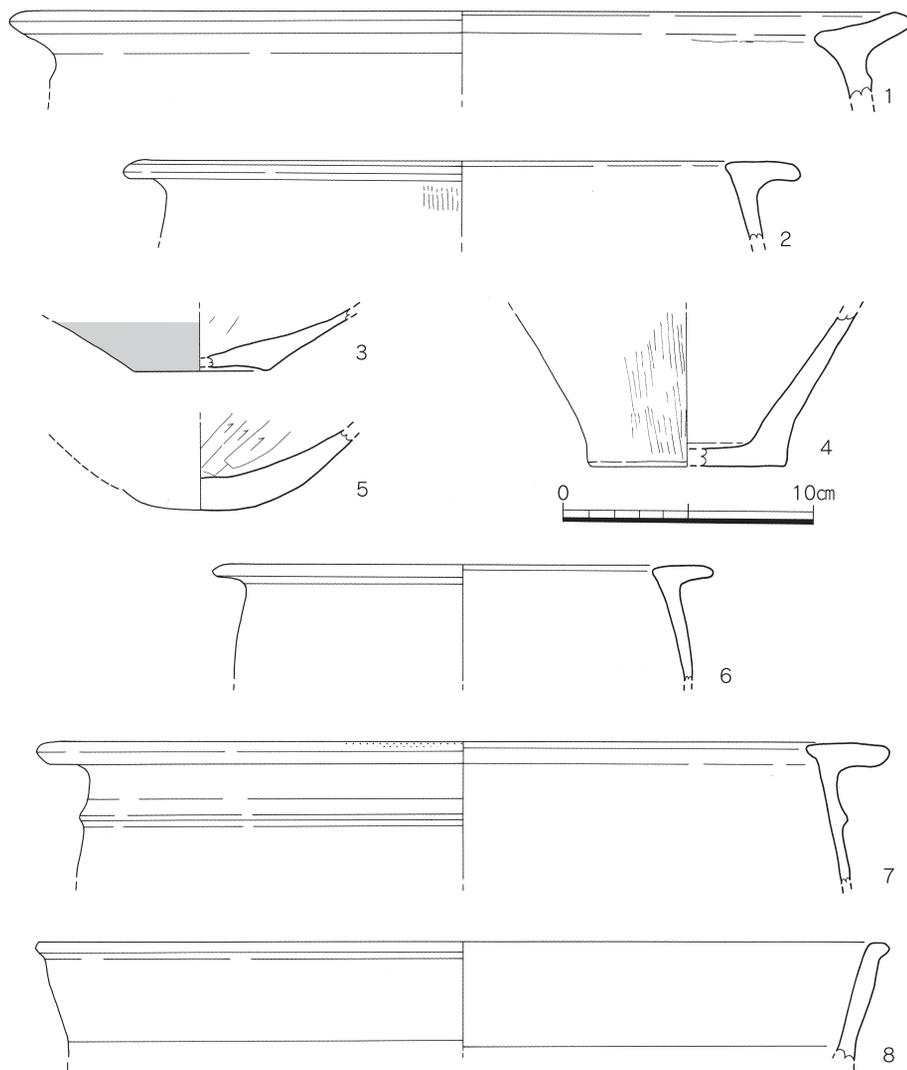
第75図 三雲番上330番地1次土器集中区2・3出土遺物実測図 (1/3)



第76図 三雲番上330番地1次土器溜グリット配置図 (1/100)



第77図 三雲番上330番地1次グリット出土遺物実測図1 (1/2・1/3)



第78図 三雲番上330番地1次グリッド出土遺物実測図2 (1/3)

ら大きく広がりながら口縁部に至り、口縁端部は垂れ下がる。18は甕の上半部で、口縁部の下に低い三角突帯を巡らせる。19は板状鉄製品である。下部断面は半月状であるが、上部断面は長方形で、やや振じれる。第78図1は受け口状の口縁をもつ甕である。2は水平に広がる口縁の甕で、外面に縦ハケを施す。3は壺の底部で外面は丹塗りである。4・5は甕の底部で、平

底と丸底である。

6は10Aグリッド出土の小型の甕である。7はやや大型の甕の上半部で、口縁部の下に三角突帯を巡らせる。8は大型の鉢の口縁部か。

(3) 南北トレンチ

土器溜りの構造を確認するために南北方向に幅1m、長さ8.6mのトレンチを設定した(第72図。以下、南北トレンチ)。土器溜りは南側で確認された1号溝に切られており、その手前までトレンチを設けた。第79図は南北トレンチ土層断面図である。図は左が北側を示す。第1層の黒褐色層には多量の土器が含まれていたが、この上に真砂層が50～60cmほど盛られ、その上に暗灰色土(20cm)、耕作土(20cm)がある。このことから、第1層は耕作土の集積時などの際に若干削られた可能性が高い。この第1層が1号溝に切られている。北側から8mの箇所から第2層が始まる。その下に第4・5層があるが、土器を多く含む第3層から切られていること、土器が一定量含まれていること

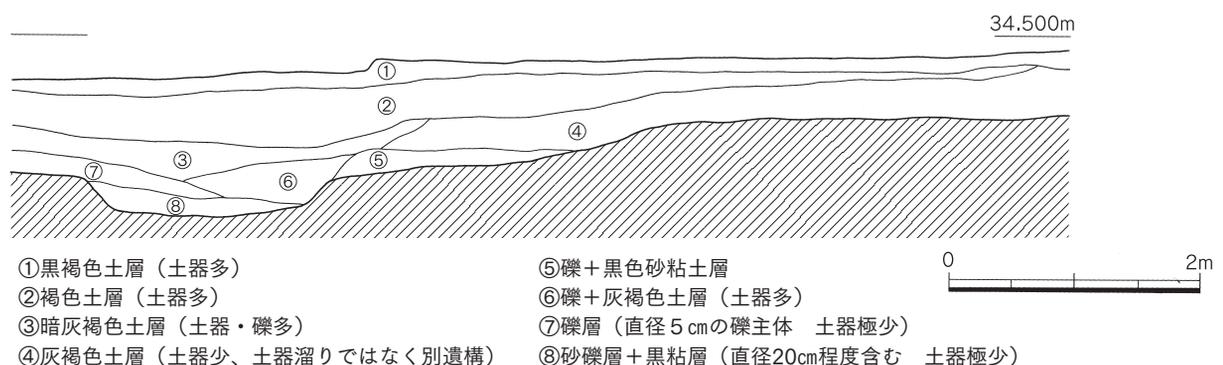
から、土器溜りとは別遺構と判断した。また、第3層、6層の堆積状況から、330番地については北から約3mの地点から掘り込まれている。これは明確な掘り込みが認められない332番地で設定した土器溜りの土層の状況とは異なる点である。なお、地山について、第8層の下は礫が多い砂礫層で、その北側が明黄褐色砂質土である。南側は第5層と同じ状況である、

出土遺物（第80～112図）南北トレンチでは北から8mほどの地点まで大量の土器が石と混じって出土した。そのため、平面を北から約2.5mずつ分けてA～C区とした。また、検出面からの深さを20cm下までを上層、20～40cmを中層、40～60cmを下層、60cm以下を最下層に区分して遺物を取り上げたため、以下では地区別に報告する。

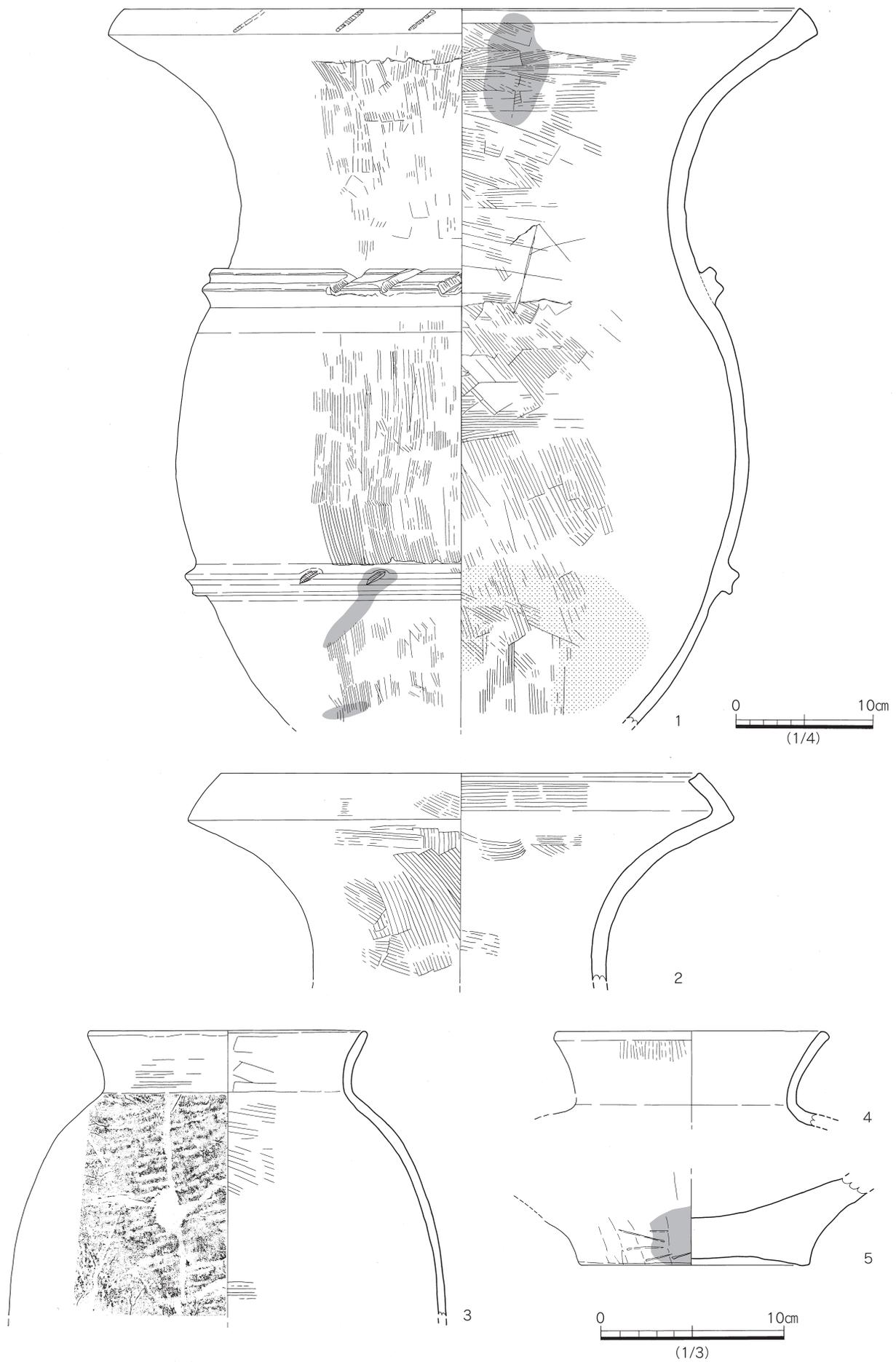
第80～84図は南北トレンチA区上層出土遺物である。第80図1は大型の壺である。緩やかに広がる口縁部をもち、口縁端部は肥厚し、刻目を施す。頸部と胴部下半にM字突帯を巡らし、それぞれ刻目を施す。外面は縦ハケ、内面は横ハケと縦ハケを施す。2は複合口縁壺の口頸部である。頸部の締まりは強く、外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。3は直立気味に立ちあがる口縁をもつ長胴甕の上半部で、胴部にタタキを施す。4も弱く広がりながら立ち上がる甕の口縁部である。5は大型の壺の低部である。やや上底气味で肉厚である。

第81図1は大型の甕で頸部に明瞭な稜がはいる。頸部には断面台形の突帯を巡らし、刻目を施す。外面にはタタキを施す。2は長胴甕の口頸部である。頸部には三角突帯を巡らし、刻目を施す。3～7は甕の上半部で、いずれも頸部に稜が入る。8は小型の甕である。外面と内面口縁部に丹塗りを施す。全体的に肉厚で内外面にミガキとハケを施す。9も小型の甕で、頸部の内外面に稜が入る。外面は斜ハケとナデ、内面は横ハケとナデを施す。10は小型甕の上半部である。口縁部の開きは弱く、内外面にハケメを施す。11～13は脚台付甕の脚部である。11は短脚で、12は長脚である。13は脚部高が6cmほどあり、脚台付甕としてはかなりの長脚である。

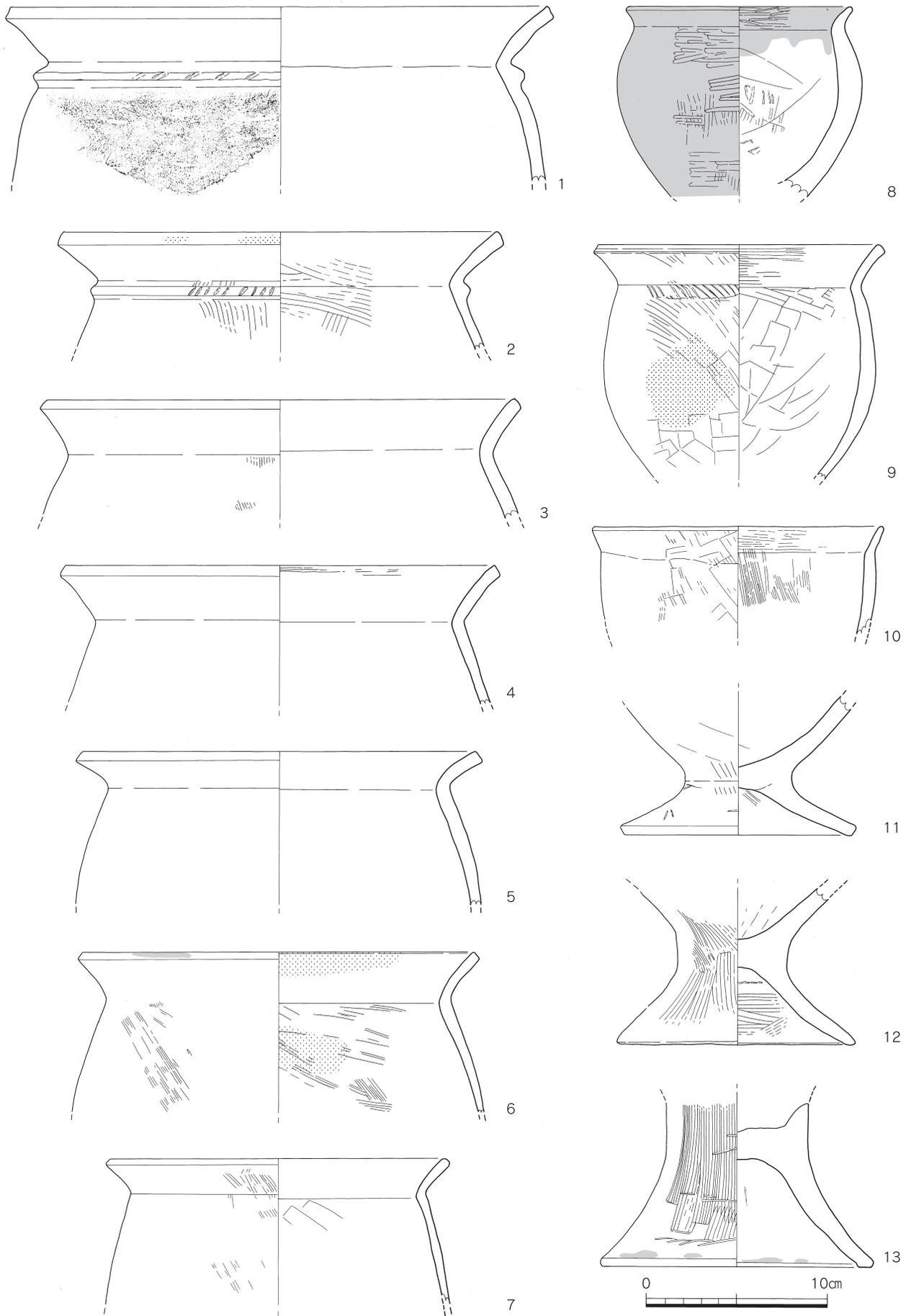
第82図1は大型の長胴甕の上半部である。口縁は大きく開き端部に刻目を施す。頸部には二重の三角突帯を巡らし、刻目を施す。外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。2は長胴甕の上半部である。頸部に低い三角突帯を巡らし、口縁は大きく広がる。外面にタタキと縦ハケ、内面に横ハケを施す。3・4は甕の口頸部である。いずれも頸部の内外面に稜が入る。5は甕の底部で突レンズ底である。外面にススが付着する。6は脚台付甕の脚部である。7～10は器台の脚部である。



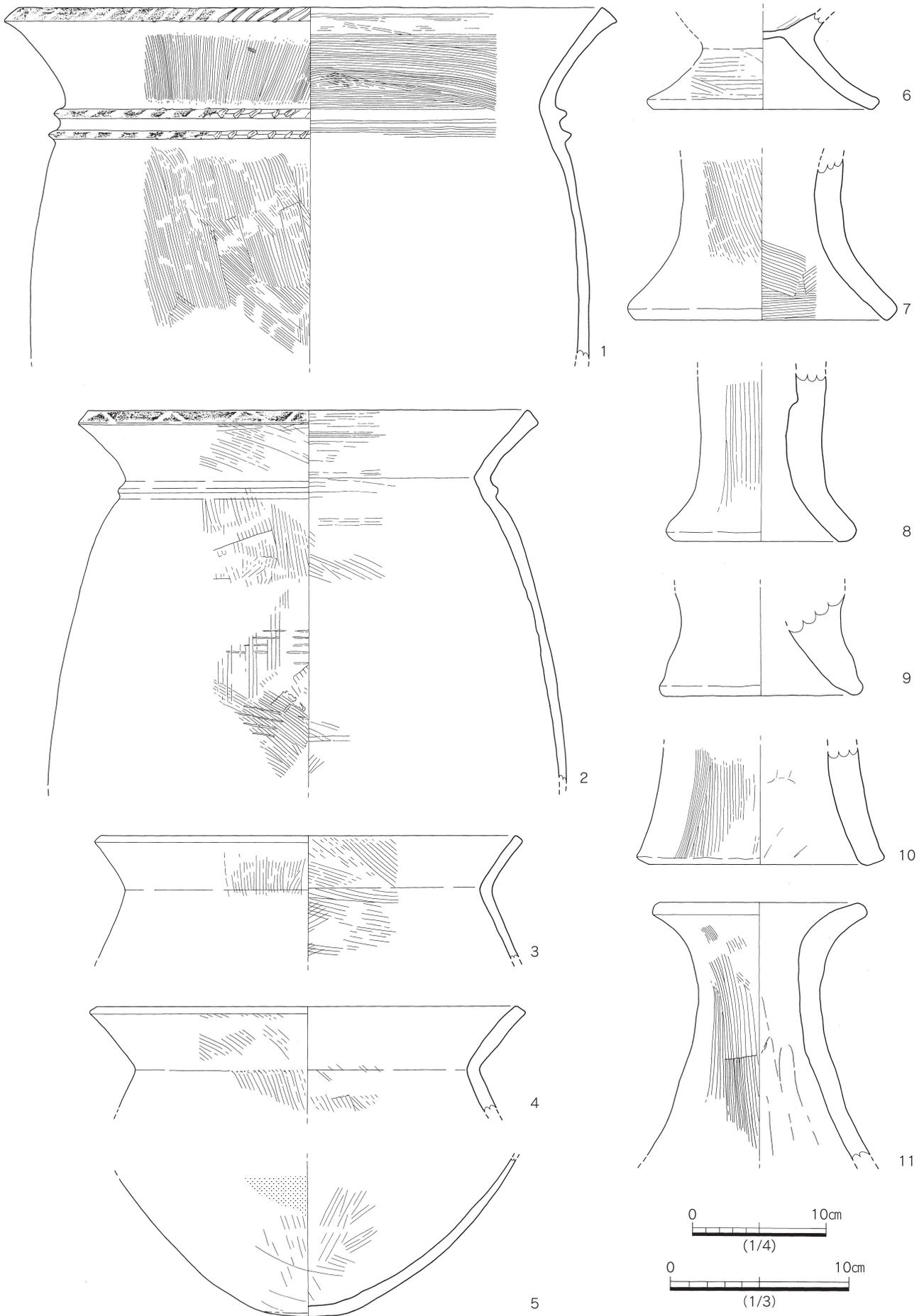
第79図 三雲番上330番地1次土器溜南北トレンチ土層断面図 (1/60)



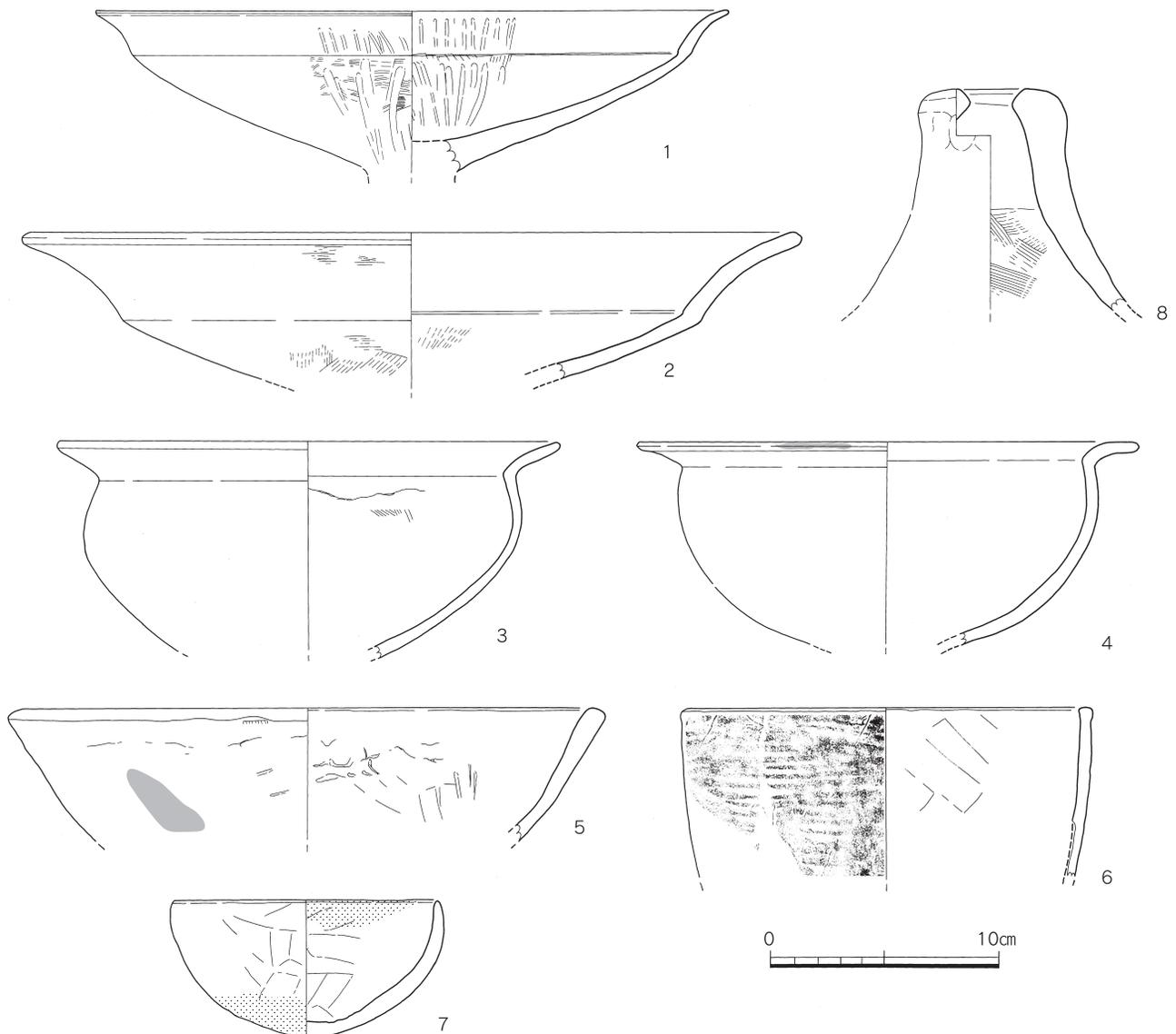
第80図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図1 (1/3・1/4)



第81図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図2 (1/3)



第82図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図3 (1/3・1/4)



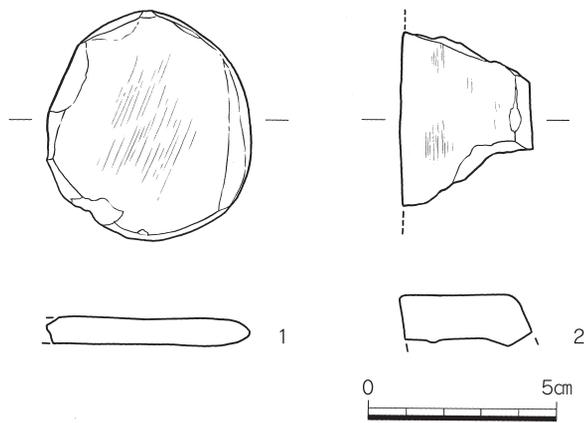
第83図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図4 (1/3)

外面に縦ハケを施すものが多く、9は肉厚である。11は器台の上半部である。頸部がしまり、裾広がりである。

第83図1・2は高坏の坏部である。1は反転部が短く、内外面に縦方向のミガキを施す。2は反転部が全体の1/3程度のもので、大型である。3・4は底部を欠く鉢である。いずれも胴の張りが強く口縁部は丸みをもつ。5は大型の鉢の上半部である。内外面共にナデを施す。6も鉢の上半部である。外面にタタキを施し、器壁を薄くする。7は小型の鉢である。内外面共にナデを施す。

第84図1は紡錘車の未製品である。上・下面ともに研磨を施し、側面を丸く加工する。左側面を欠く。結晶片岩製である。2は砥石である。下部を欠くが、本来は棒状のものであろう。目は細かい。

第85～88図は南北トレンチA区中層出土遺物である。第85図1は鋤先口縁壺である。口縁部はやや内傾し、端部には刻目を施す。外面と内面口縁部は丹塗りである。2は無頸壺か。胴の張りが強く、平底である。3は袋状口縁壺の口頸部である。頸部には縦方向のミガキとナデを施す。外面



第84図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区上層出土遺物実測図5(1/2)

は丹塗りで、内面に丹が付着する。4～6は壺の底部である。5は凸レンズ底である。7は甕の口頸部である。跳ね上げ気味の口縁部の下に三角突帯を巡らせる。8は口縁部が小さな甕で、外面はススが付着する。9は肉厚な甕で、外面に縦ハケを施す。10は口縁が外傾する甕で、口縁部下に三角突帯が巡る。11は肉厚な甕で、頸部の内外面に稜が入る。外面にススが付着する。12は小型の甕で、口縁部と胴部にススが付着する。13は全体的に強いナデで整形された甕で、形がいびつである。14は甕の底部で、

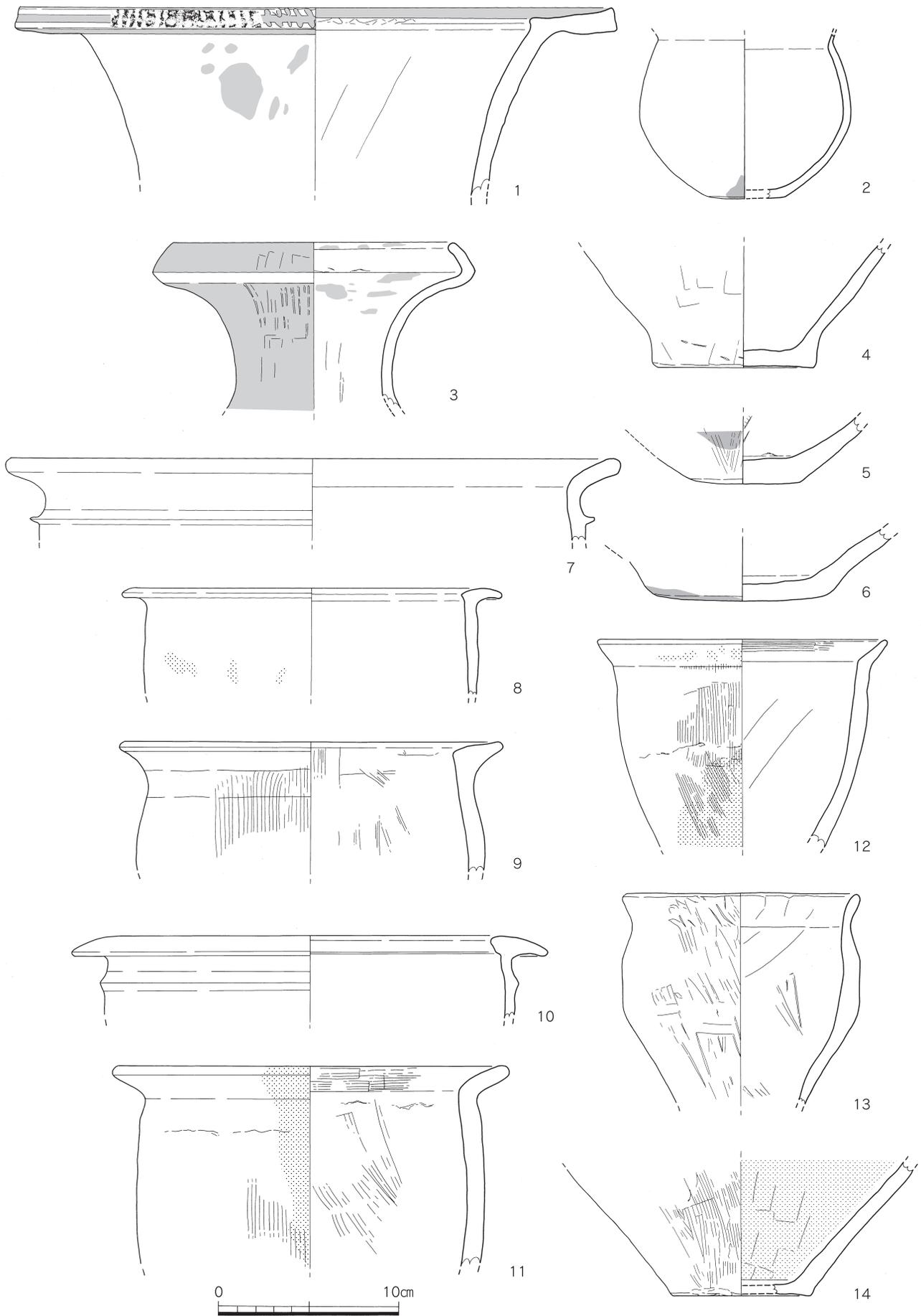
外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

第86図1は大型の甕で、胴の張りが強い。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。2～10は甕の上半部である。2は口縁部の下に三角突帯を巡らせる。3は頸部のしまりが緩やかな甕で、外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。4は頸部の内外面に稜をもつ甕で、口縁端部をつまみ上げる。5・6は頸部の内外面に稜をもつ甕で、外面に縦ハケ、内面に斜ハケを施す。7・9は頸部のしまりが緩い甕である。8は長胴甕で、外面に縦ハケを施す。10は頸部の内外面に弱い稜が入る甕で、口縁端部はやや丸みをもつ。11は脚台付の甕で、外面に横ハケと縦ハケを施す。脚台部の高さが6cmと大型のものである。12～14は甕の底部である。14は凸レンズ底である。

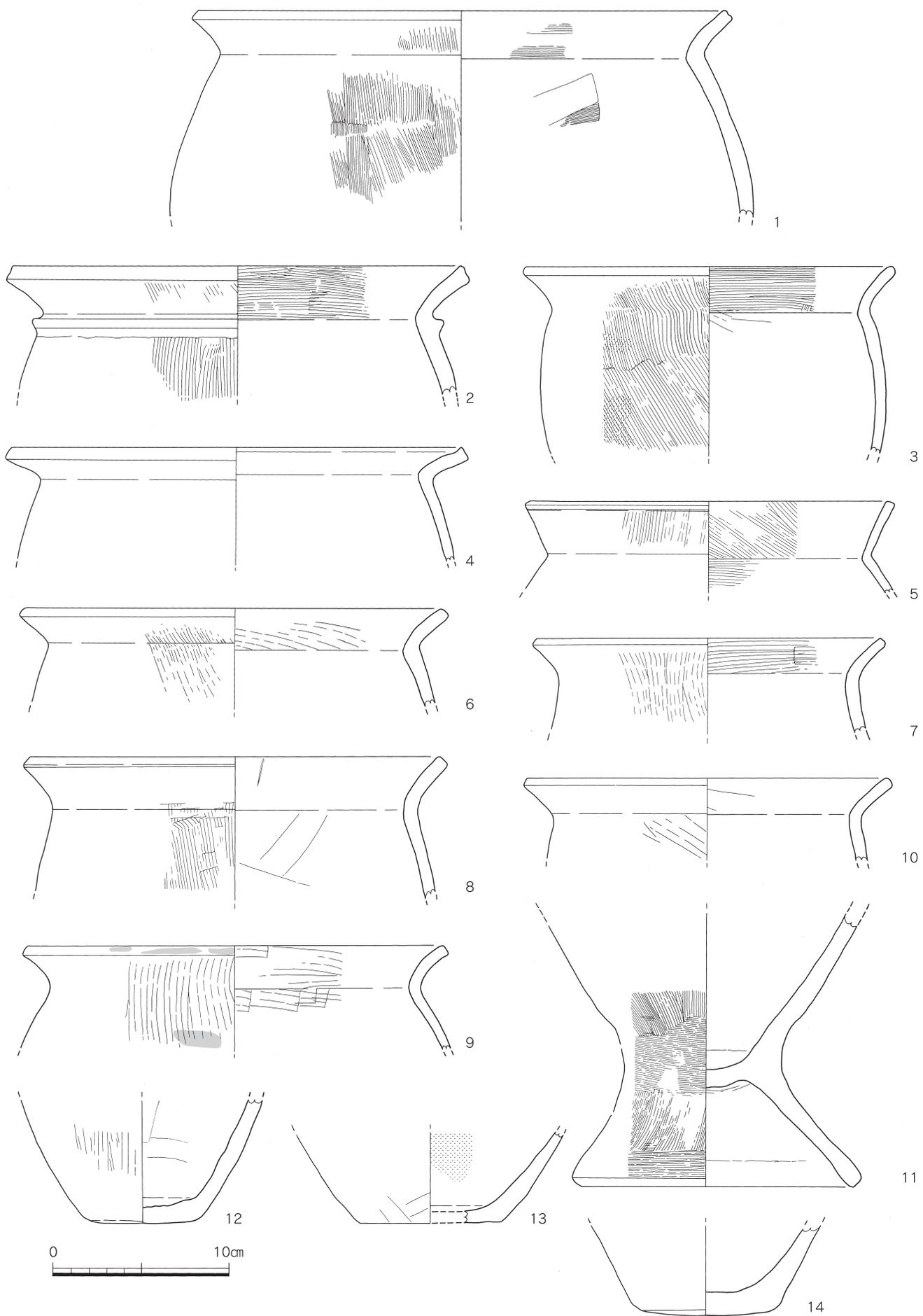
第87図1は高坏の坏部片で、口縁端部を外部に反らせる。外面に黒斑が残り、内面に丹が付着する。2は蓋の頂部片である。3は手握土器で丸底の椀状を呈する。4は小型の器台、5は器壁の薄い器台である。6は楽浪系土器の胴部片である。内外面に回転横ナデを施し、内面に強く痕跡を残す。壺か。

第88図1は鉄製の方形鋤先である。左側の折返し部など一部欠くが、長さ8.0cm、幅5.5cmを測る。2は青銅製鋤先で約1/2が残存する。全体的に風化が進み、本来の面を残す箇所は少ない。基部には突帯が無く、柳田分類のII型に該当する(柳田1985)。基板上端の表面は剥離しているが、端部そのものは当初の面を残している可能性がある。なお、三雲・井原遺跡ではこれまでに柿木地区から1点採集されていたが、本例は発掘調査によるものとしては初例となる。3・4は砥石である。3は上部と左側面を欠くが、断面は長方形を呈し、定形砥石である。4は右側面を除くすべての面を欠くが砥石である。砥石の目は細かい。

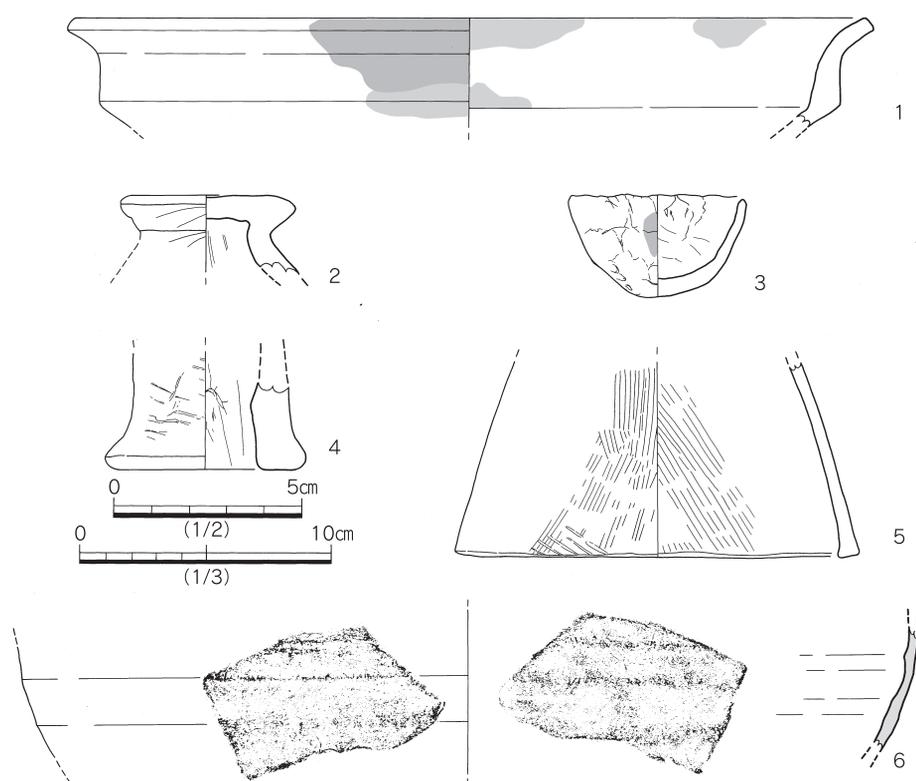
第89～92図はA区下層出土品である。第89図1は鋤先口縁壺の口頸部である。頸部はしまり、外傾する口縁部をもつ。2も鋤先口縁壺の口縁部片か。3は広口壺の口縁端部片である。内面は横ミガキ、外面は暗文状の縦ミガキと斜ミガキを施す。内外面共に丹塗りである。4は無頸壺である。口縁部は肉厚で、内外面共に丹塗りを施す。5は無頸壺の下半部か。外面に横ミガキと丹塗りを施す。6～8は壺の底部である。6は外面に横ミガキを施し、7は外面に丹塗りを施す。9～13は



第85図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図1 (1/3)



第86図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図2 (1/3)



第87図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図3 (1/2・1/3)

甕の上半部である。9～11は口縁部の下に三角突帯が巡り、胴部外面に縦ハケ、内面にナデを施す。12は外傾する口縁、13は跳ね上げ気味の口縁をもち、三角突帯下は内外面共にナデを施す。14・15は甕の底部である。15は焼成後に外面から穿孔を施す。

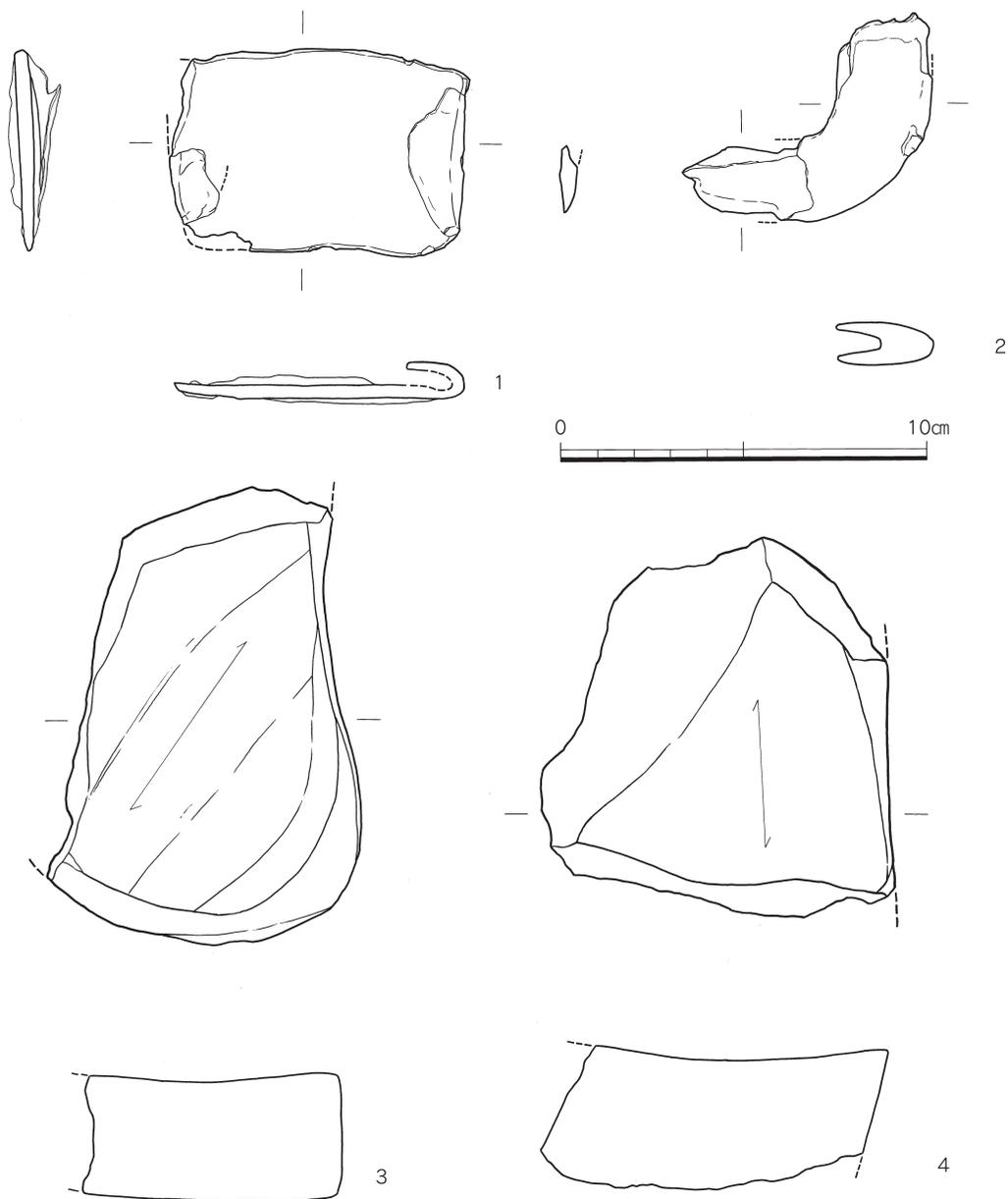
第90図1～9

は甕の上半部である。1は復元口径40cmを測る大型の甕である。やや内傾する口縁の下に三角突帯を巡らせる。内外面共にナデを施す。2～5は口縁部下に突帯がない甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6～9は口縁部の下に三角突帯が巡る甕で、7・9の外面にはススが付着する。10～16は甕の底部である。いずれも平底で、10は内外面共にナデを施し、それ以外は外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

第91図1～6は甕の上半部である。いずれも口縁部の下に三角突帯が巡る。1の口縁端部にはススが付着し、3の突帯付近には丹塗りの痕跡が残る。7・8は小型の甕としたが、無頸壺に近い。7は跳ね上げ気味の口縁をもち、胴部外面にススが付着する。8は水平に広がり、端部が垂れる口縁をもつもので、胴の張りは小さい。外面は全面丹塗り、内面は口縁部から垂れた状態で丹が付着する。9～13は甕の底部である。9は上げ底で、最もしる箇所三角突帯を巡らせる。10～13は平底で、11の外面には黒斑が残る。10・12・13の外面には縦ハケを施す。

第92図1は壺の下半部で、内面の剥離が著しい。底部には焼成後外面から穿孔が施される。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。2は蓋の頂部である、外面に縦ハケを施し、ススが付着する。3は小型の鉢である。口縁端部断面は方形を呈し、口縁部下に三角突帯が巡る。4も鉢で、内外面ともにナデを施す。5は薄手の器台で、外面に縦ハケを施す。6・7は厚手の器台で内外面共にナデを施す。8は長さ4.4cmの棒状鉄製品である。下端部は鋭く小型工具とも考えられるが、棒状部がやや曲がっていることから、棒状の鉄素材の可能性が高いと判断した。

第93～96図はA区最下層出土品である。第93図1は鋤先口縁壺の口縁部である。内外面共に丹

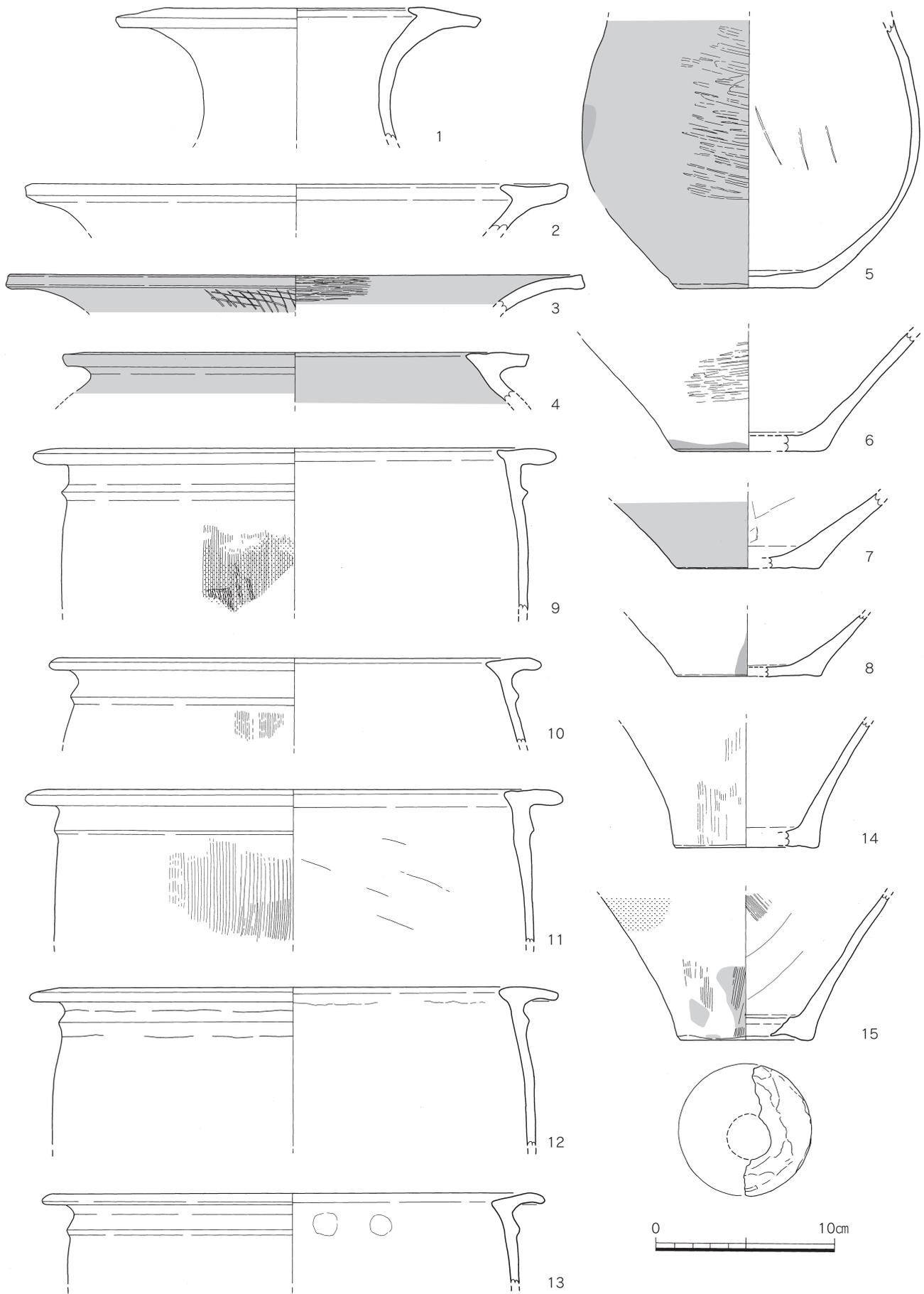


第88図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区中層出土遺物実測図4 (1/2)

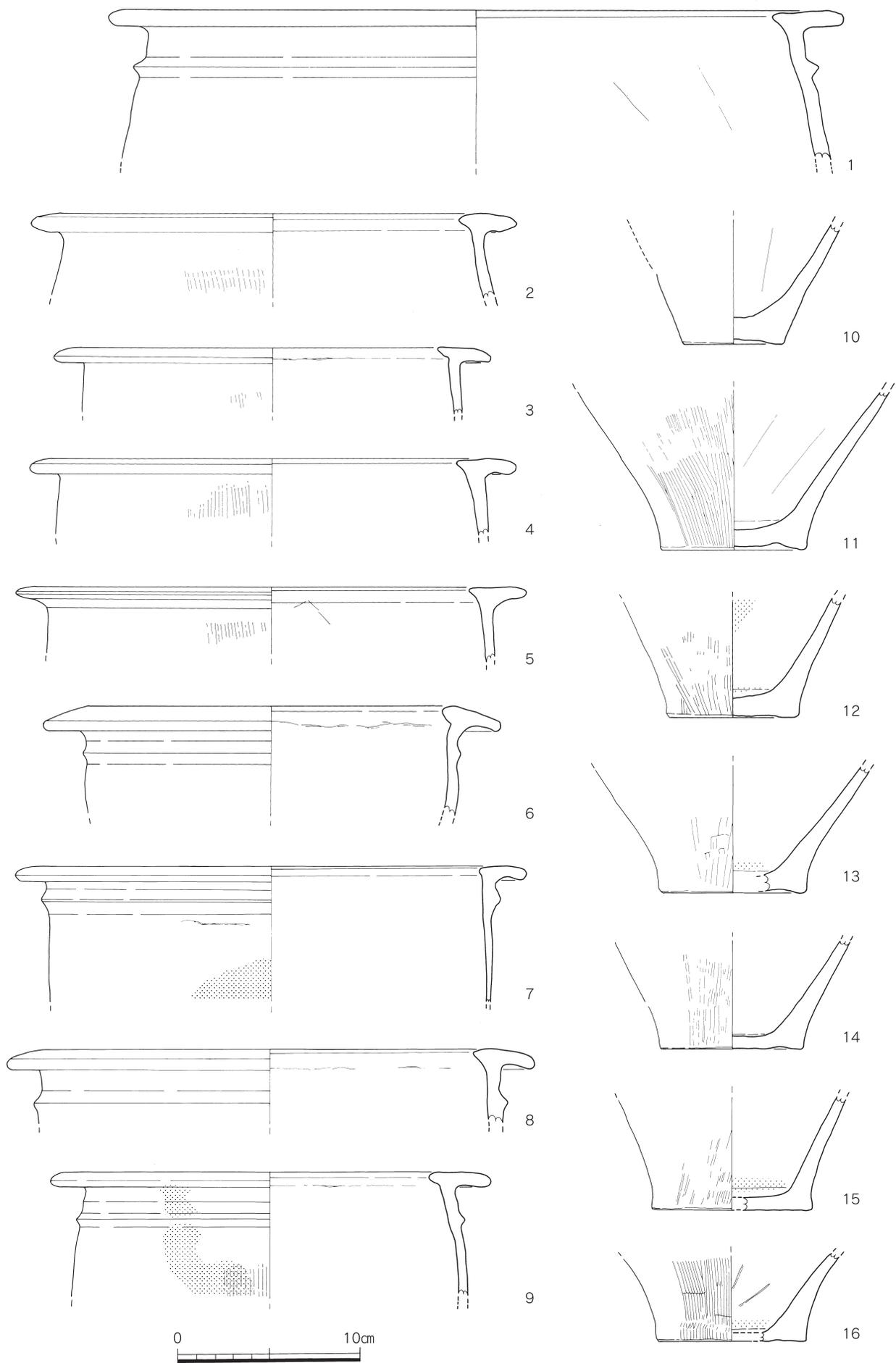
塗りを施す。2・3は広口壺の口縁部である。外面にナデの後に暗文状の縦ミガキ、内面に横ミガキを施す。いずれも内外面に丹塗りを施す。4・5は壺の底部である。いずれも内外面共にナデを施し、4は内外面に丹塗りを施す。6は完形に復元される甕である。内傾する口縁部の下に三角突帯を巡らす。胴はやや張り、平底の底部にいたる。内外面共にナデを施す。

第94図1～8は甕の上半部である。いずれも口縁部の下に三角突帯が巡る。1・2・6～8の外面には縦ハケを施し、6の胴部は打ち欠いて窓を開けている。9～15は甕の底部である。いずれも平底で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

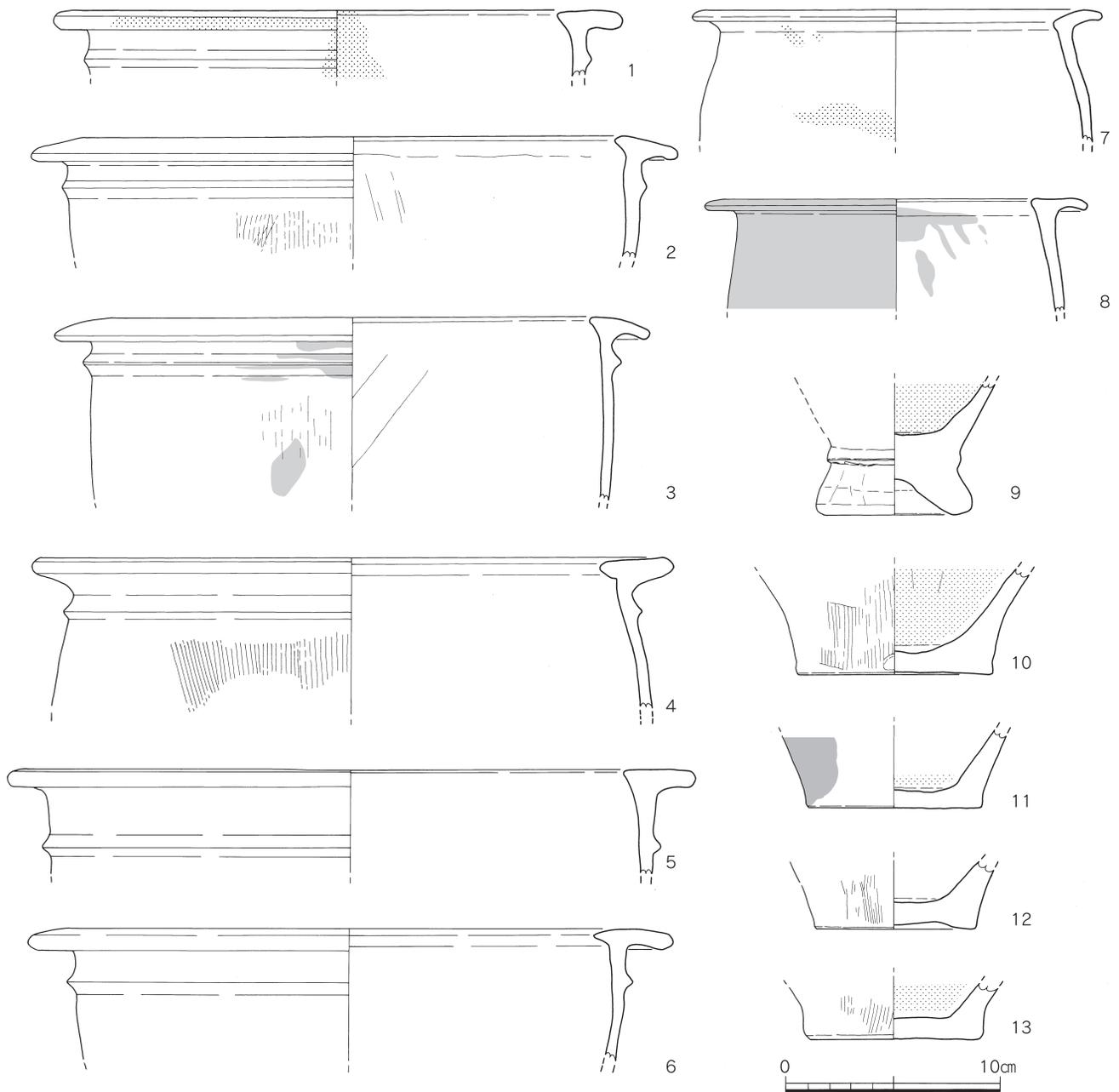
第95図1～11は甕の上半部である。1・3～6・9～11は口縁部下に突帯がなく、2・7・8の口縁部下には三角突帯が巡る。その多くは外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7は口縁部内面に



第89図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図1 (1/3)



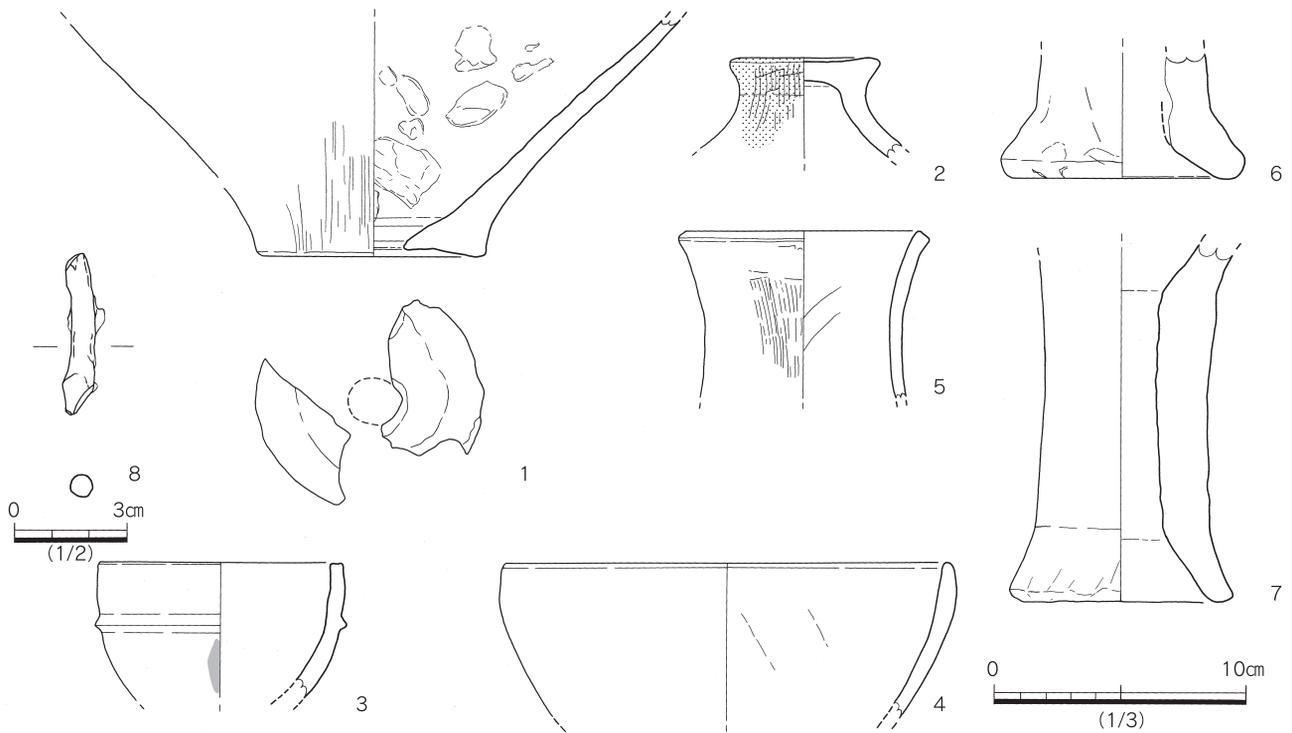
第90図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図2 (1/3)



第91図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図3 (1/3)

丹が付着し、2・4・9～11は内面に接続痕を残す。12・13は甕の下半部である。いずれも平底で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。14はワイングラス状の坏部で、脚部を伴うか。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。外面は丹塗りを施し、内面は口縁部から垂れた状態で丹が付着する。15は高坏の脚部である。脚裾部に丹塗りが一部残っており、本来は全面に丹塗りを施したものと思われる。

第96図1は蓋である。頂部はやや窪み、外面に縦ハケ、内面のナデを施す。2も蓋で、頂部は平らである。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。3は器台の上半部である。器壁が薄く、胴部中位が緩くしまる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。4・5は器台の下半部である。いずれも裾部が開き、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6・7は肉厚な器台の下半部である。内外面共にナデを施す。8は石鎌と思われる石器の破片である。断面は上部が面取りをして丸くしており、下部はやや

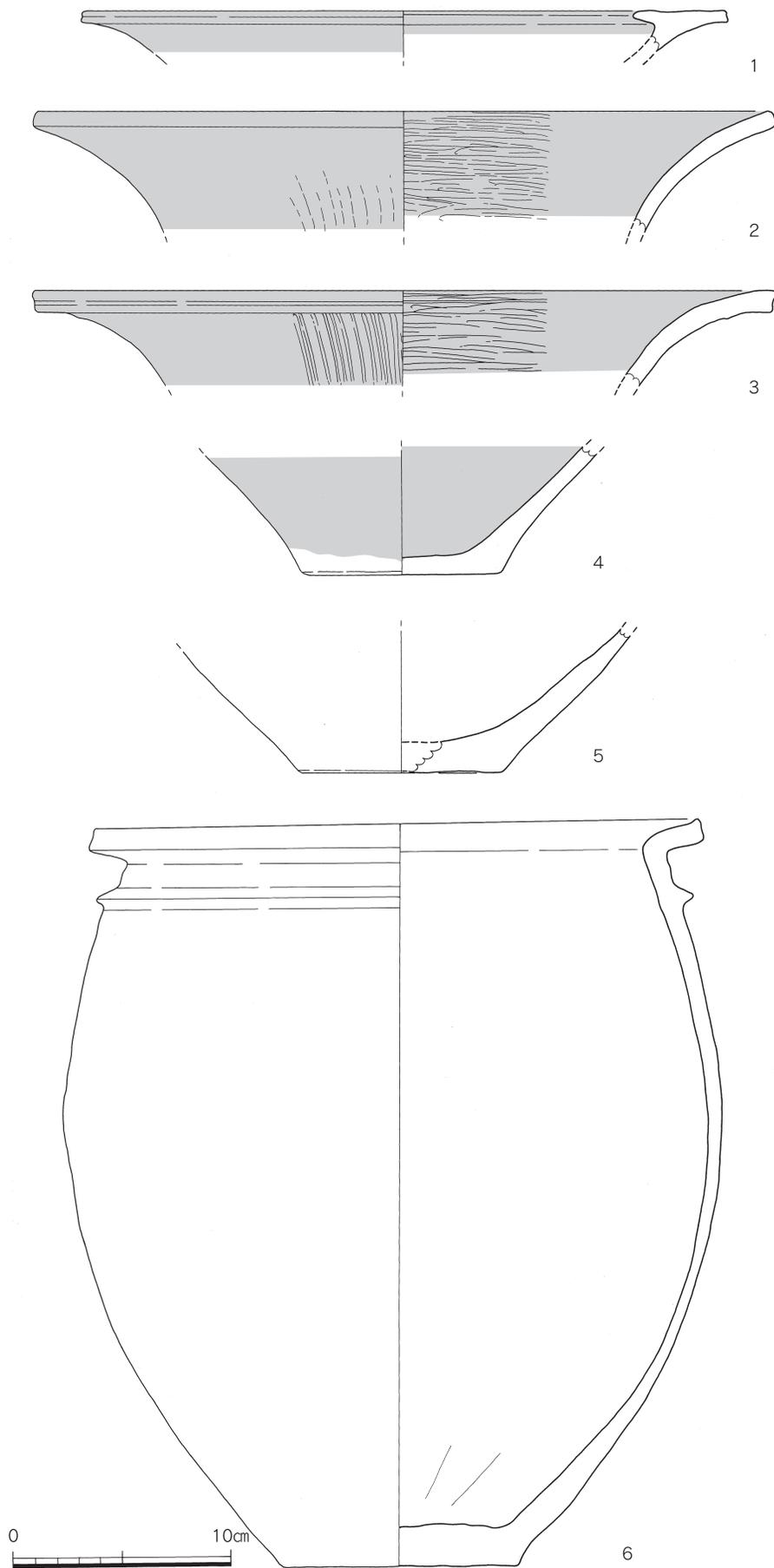


第92図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区下層出土遺物実測図4 (1/2・1/3)

鋭くなるが、刃部の形成にまでは至っていない。部分的に自然面が残っており、未製品と思われる。

第97～102図は南北トレンチB区上層出土品である。第97図1は広口壺の口頸部である。しまりの無い頸部から短く開きながら立ち上がる。器壁は薄く、口縁端部は摘み上げる。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。2は小型の複合口縁壺の上半部である。屈曲部は丸みをもつが内外面に稜がはいる。胴部は球状を呈する。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。3は複合口縁壺の口頸部である。しまりのある頸部から開きながら立ち上がり、屈曲部にいたる。口縁端部断面は方形を呈する。外面は斜ハケと横ハケ、内面は横ハケを施す。4も複合口縁壺の上半部であるが、口縁端部を欠く。しまりの無い頸部から短く開きながら立ち上がり、屈曲部にいたる。頸部には低い三角突帯が巡り、刻目を施す。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。5～8は壺の底部である。5～7は平底で比較的緩やかに立ち上がる。5は外面に丹塗りを施す。6・7は外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8は凸レンズ状の底部で、緩やかに立ち上がる。外面は縦ミガキ、内面はナデを施す。底部にはハケメが残る。9～13は甕の上半部である。9・10は緩やかに屈曲する頸部をもつ甕で、内外面に稜が入る。10の内面には黒斑が付着する。11は頸部のしまりが明瞭な甕、12は胴の張りが強い甕、13は胴の張りが無い甕で、いずれも外面に縦ハケ、内面に横～斜ハケを施す。

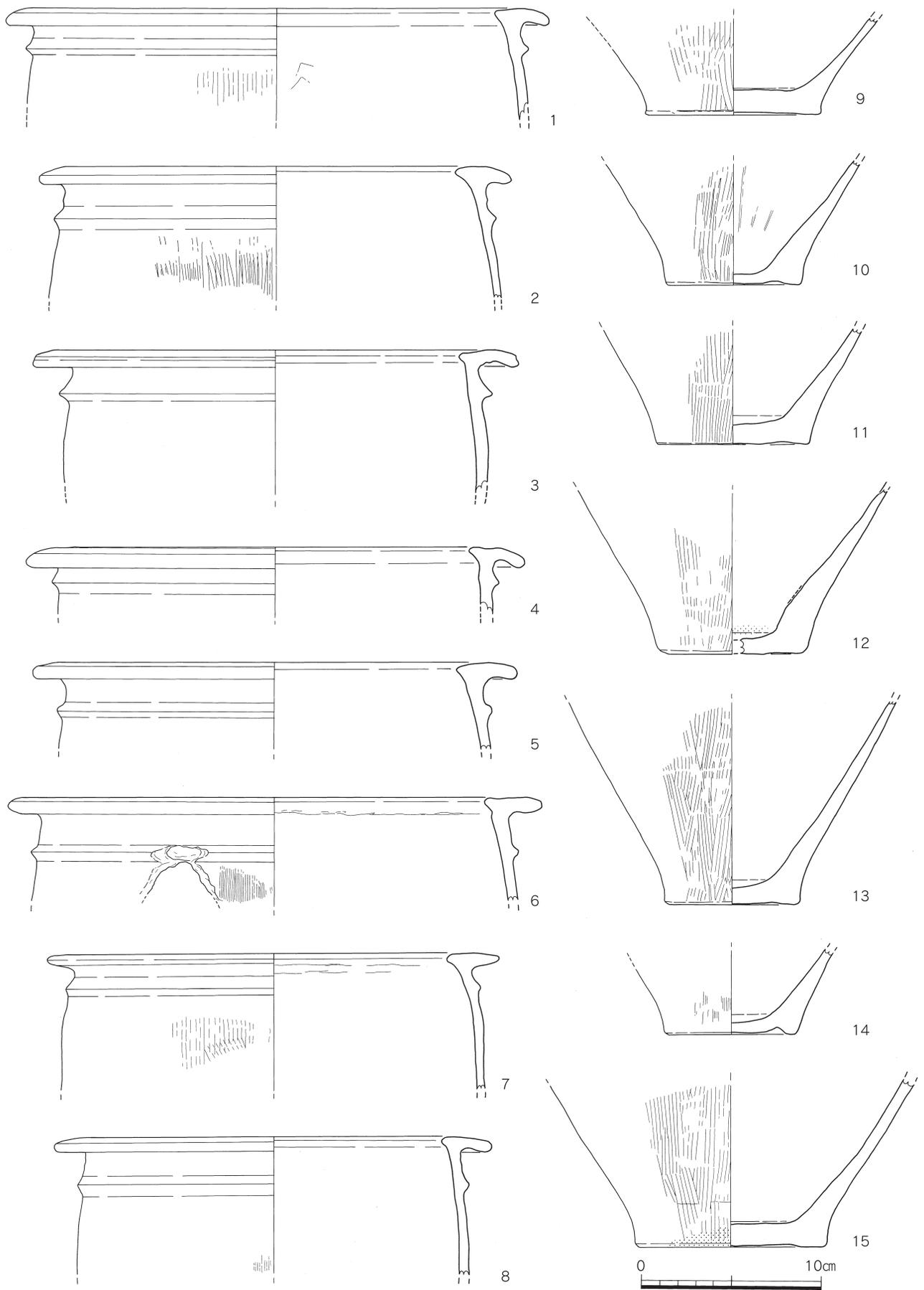
第98図1～4は甕の上半部である。1・2は口縁部が短く立ち上がる甕で、頸部のしまりもゆるいが、内外面に稜が入る。外面は縦ハケ、内面は横～斜ハケを施す。3の口縁部はやや延びるが、頸部のしまりはゆるい。外面に縦ハケ、内面に横～斜ハケを施す。4は肉厚で、内面にオサエの痕跡を残す。口縁端部断面は方形を呈する。5～11は甕の底部である。5～10は平底で外面に縦ハケを施すものが多い。6・7・10にはススやコゲが付着する。11は凸レンズ底で、内面にコゲが付



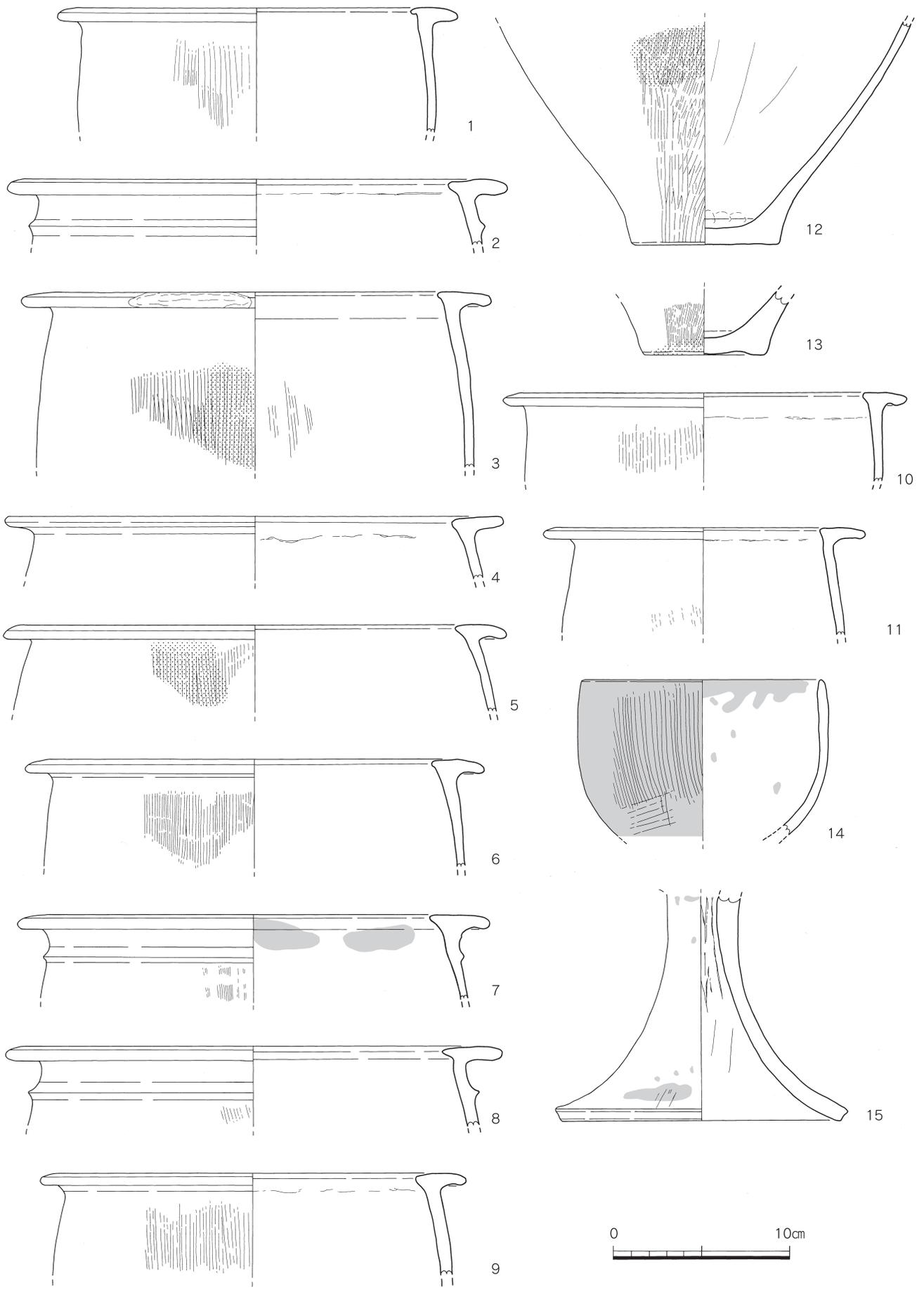
着する。

第99図 1～6は甕の上半部である。1はやや小型の甕で、頸部のしまりが明瞭なものである。外面に縦ハケ、口縁部内面に横ハケを施す。2はやや大型の甕で、肉厚である。外面に縦ハケをほどこす。3は頸部のしまりが殆ど無く、胴部の張りもない甕である。口縁部は湾曲しながら広がる。口縁部内面に赤色顔料、胴部外面にススが付着する。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。4はやや胴が張る長胴甕で、口縁部は湾曲し、頸部のしまりはゆるい。外面

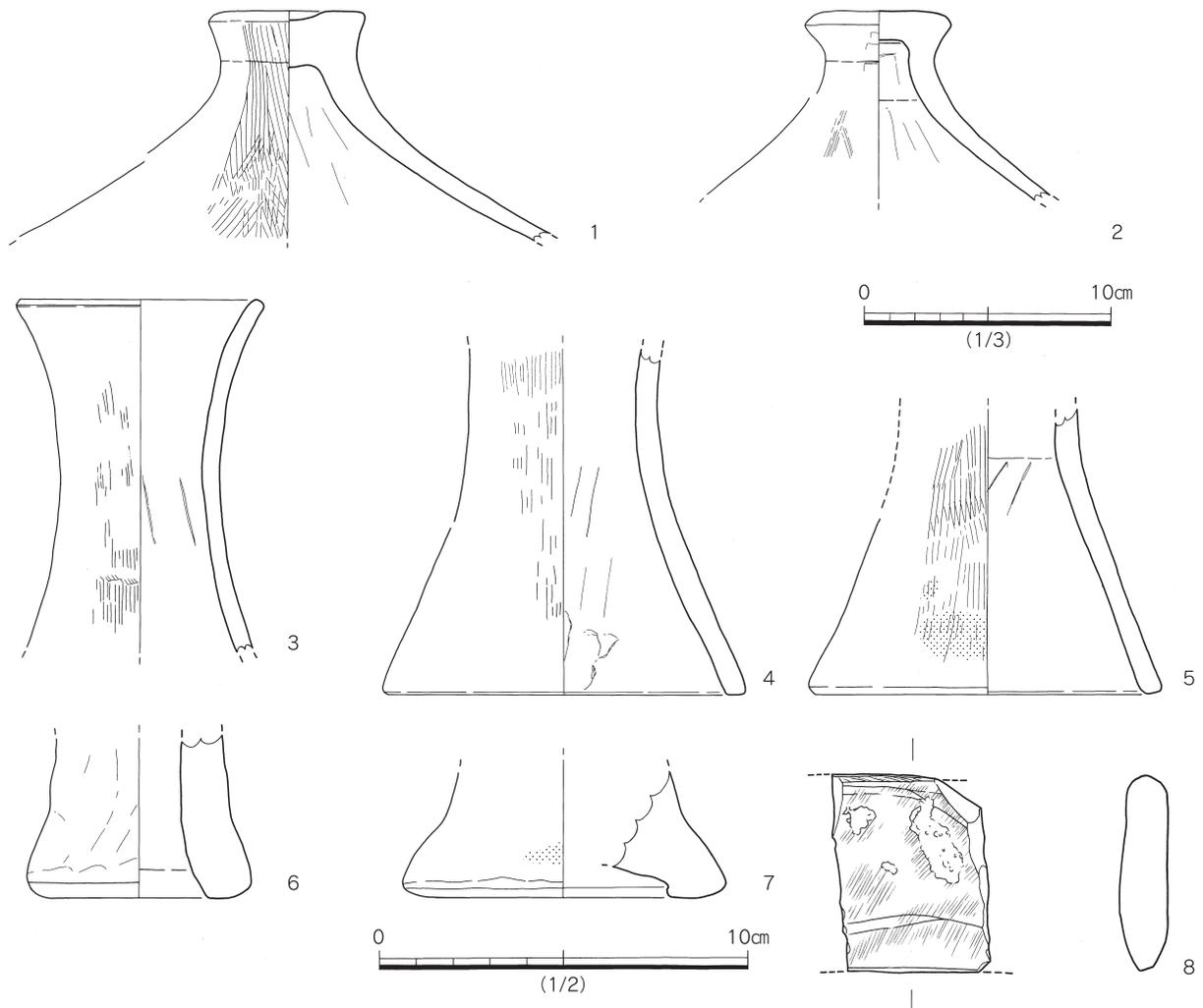
第93図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図1 (1/3)



第94図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図2 (1/3)



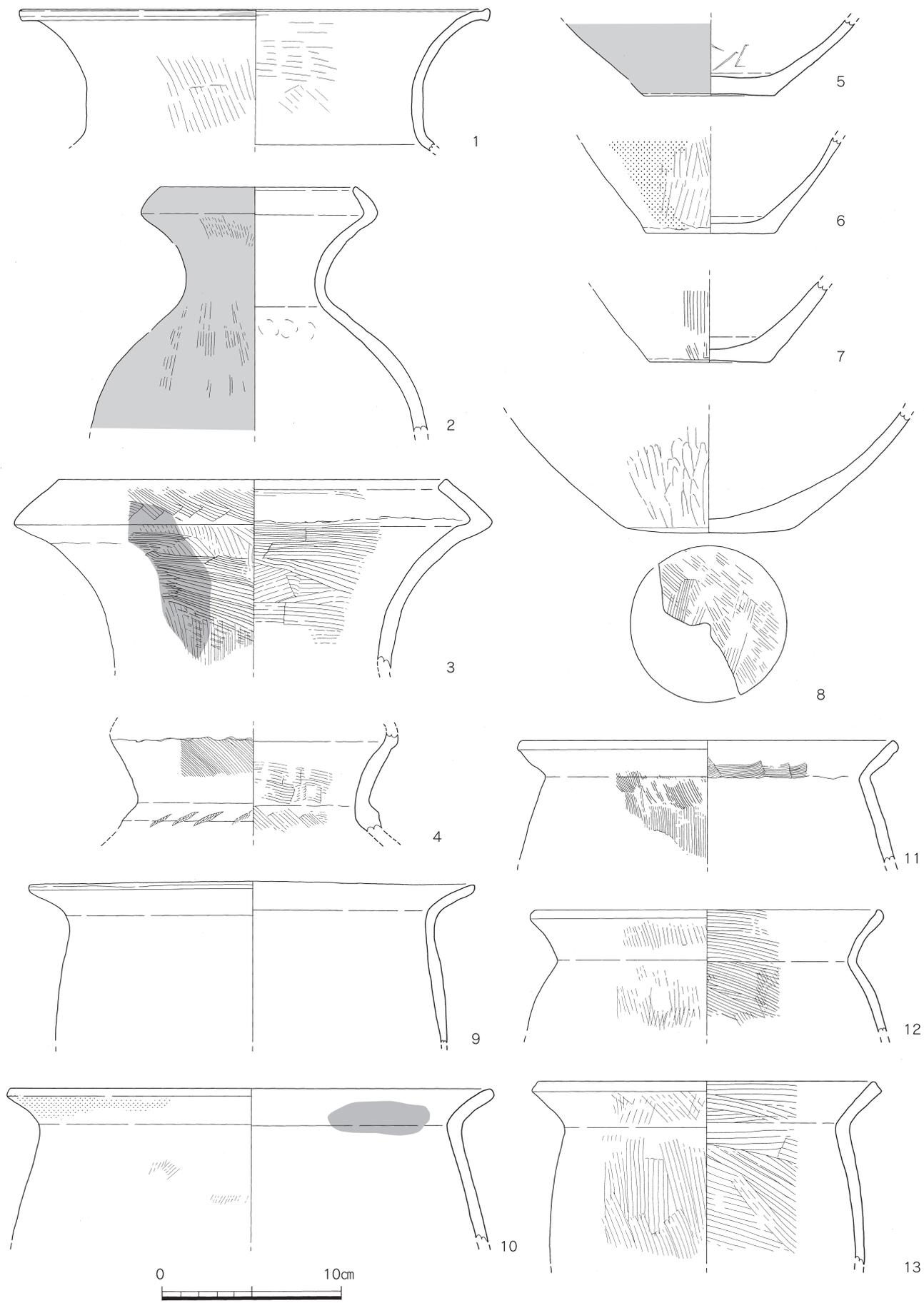
第95図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図3 (1/3)



第96図 三雲番上330番地1次南北トレンチA区最下層出土遺物実測図4 (1/2・1/3)

の器壁は剥離が著しく、二次焼成痕も残る。内面はコゲ状の痕跡があり、口縁部は赤色顔料が付着する。5はやや小型の甕で、頸部のしまりが強く、明瞭な稜が入る。外面に縦ハケを施し、広い範囲にススが付着する。6は頸部がしまり、器壁が薄い甕である。口縁端部をつまみ出す。7は脚台坏甕の脚部である。脚裾端部は方形を呈し、外面に縦ハケを施す。8は甕の下半部である。尖底で、外面にススが付着する。内面には斜～縦ハケを施す。

第100図1は甕の上半部である。張りの強い胴部から頸部に至り、短く広がる口縁部をもつ。頸部の内外面には稜が入る。外面は横～斜ハケ、内面は横ハケとナデを施す。2は甕の胴部である。不安定な平底から、張りの強い胴部を経て、頸部にいたる。頸部はしまり、内外面に稜がはいる。外面は風化が著しく、内面に縦ハケを施す。3は甕の下半部である。突レンズ状の底部をもち、広がりながら立ち上がる。外面にスス、内面にコゲが付着する。内外面にハケメが残る。4は高坏である。反転部が短い坏部をもち、内面に縦ミガキ、外面にナデを施す。脚柱部は広がりながら下部に進み、屈曲部を経て脚裾部に至る。5は4と同様な形態の口縁部である。反転部外面は丹塗りを施し、黒斑も付着する。6は器高がある鉢である。素口縁の甕ともいえよう。平底で、外面はナデ、内面はケズリを施す。口縁端部は方形を呈す。7はやや大型化したものである。口縁部のしまりが



第97図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図1 (1/3)

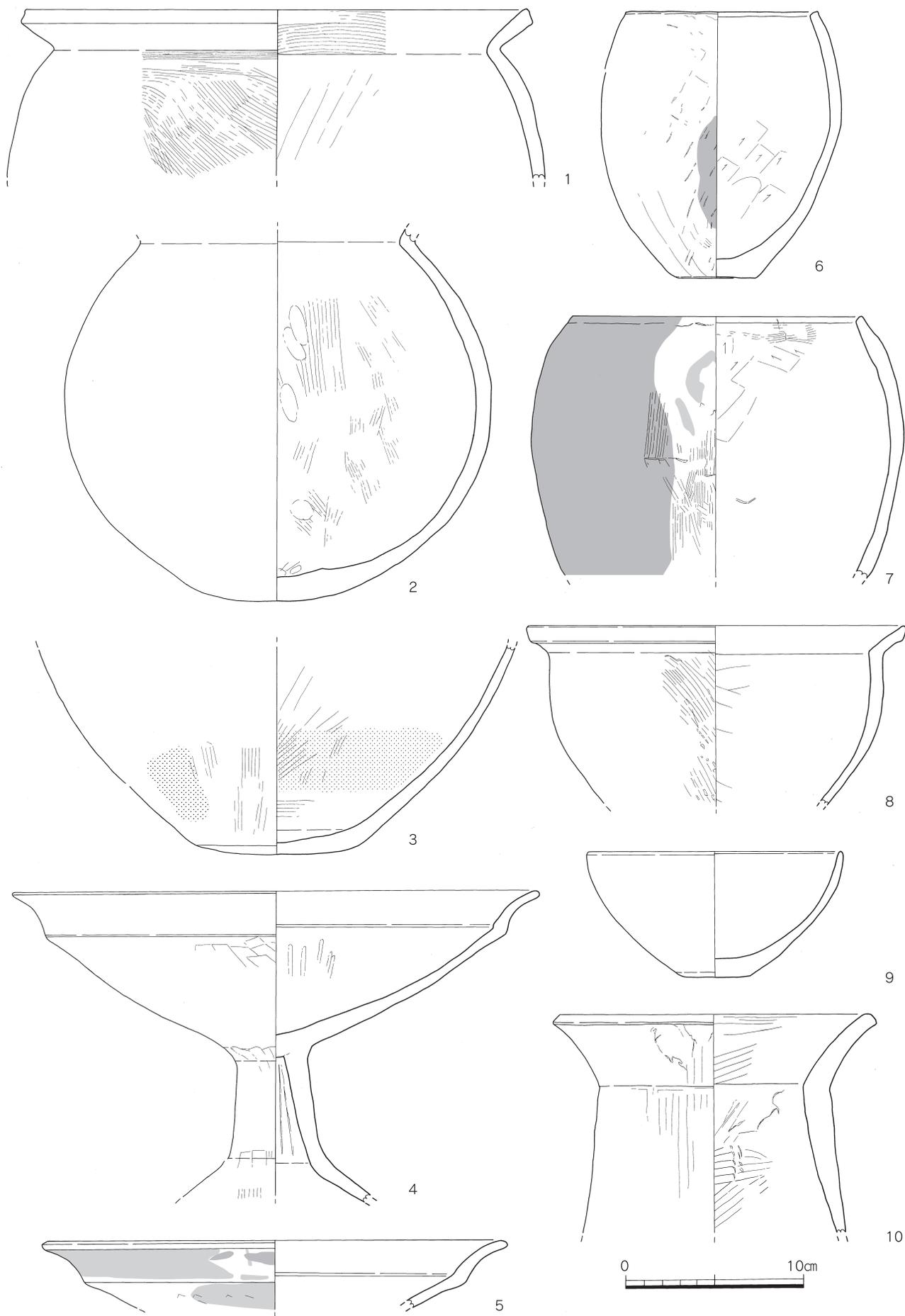


第98図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図2 (1/3)

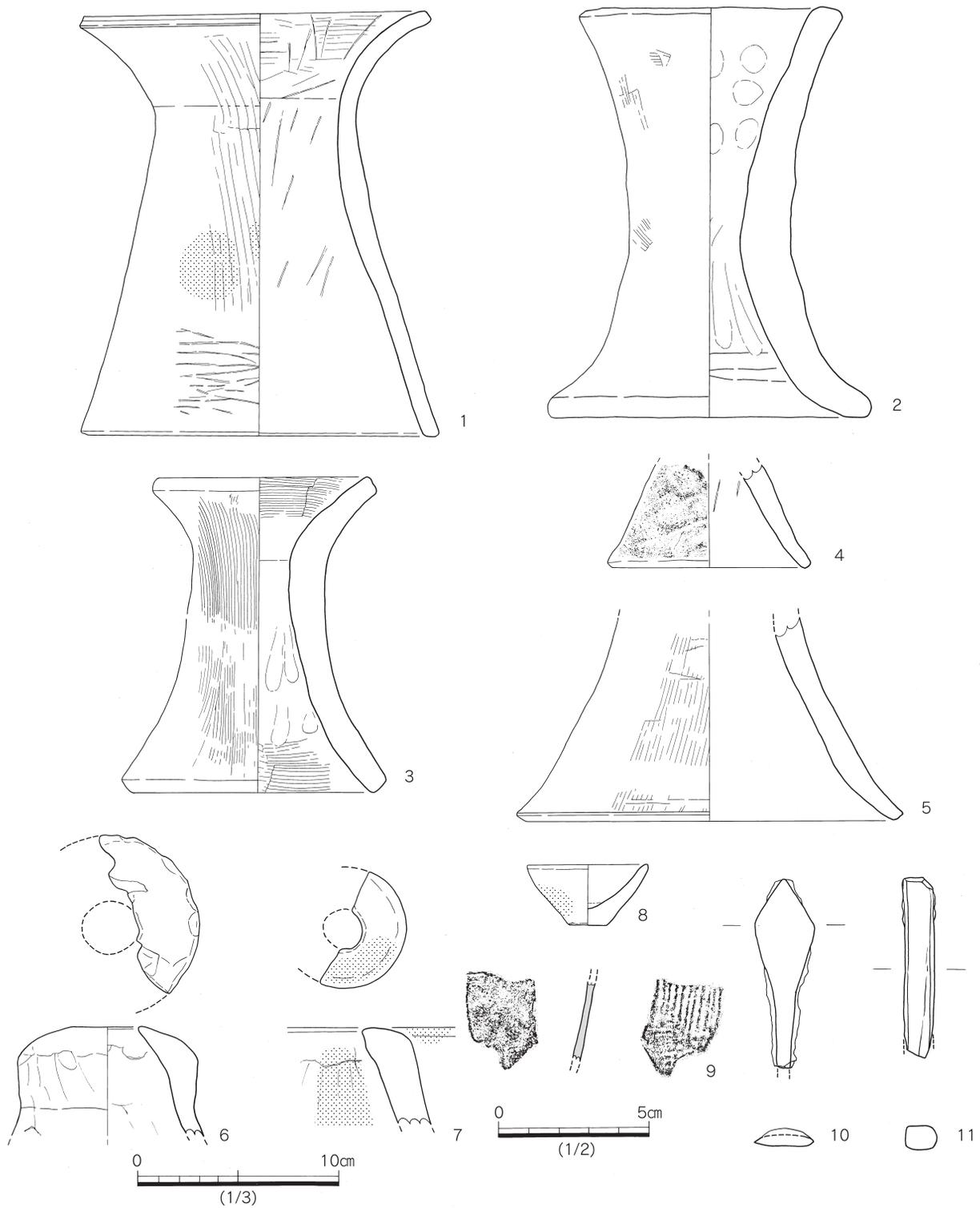


第99図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図3 (1/3)

強くなる。外面に縦ハケ、内面にケズリと横ハケを施す。8は口縁をもつ鉢で、外面に斜ハケ、内面にナデを施す。9は小型の鉢で、平底である。10は器台の上半部で、くびれ部のしまりは弱い。外面に縦ハケ、内面に横～斜ハケを施す。

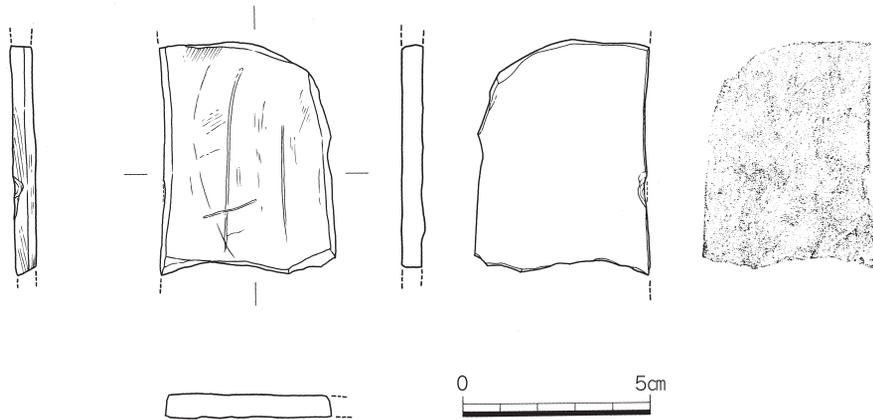


第100図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図4 (1/3)



第101図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図5 (1/2・1/3)

第101図1～5は器台である。1は完形に復元される器台で、くびれは上位に位置する。口縁部は丸みを帯びながら広がる。全体的に器壁は薄い。外面は縦ハケと横ハケ、内面は横ハケとナデを施す。2も完形の器台である。天地逆の可能性もあるが、逆の場合は不安定であったため、この形で図化した。全体的に肉厚で、外面はハケとナデ、内面はオサエとナデを施す。脚裾部が広が



第102図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区上層出土遺物実測図6 (1/2)

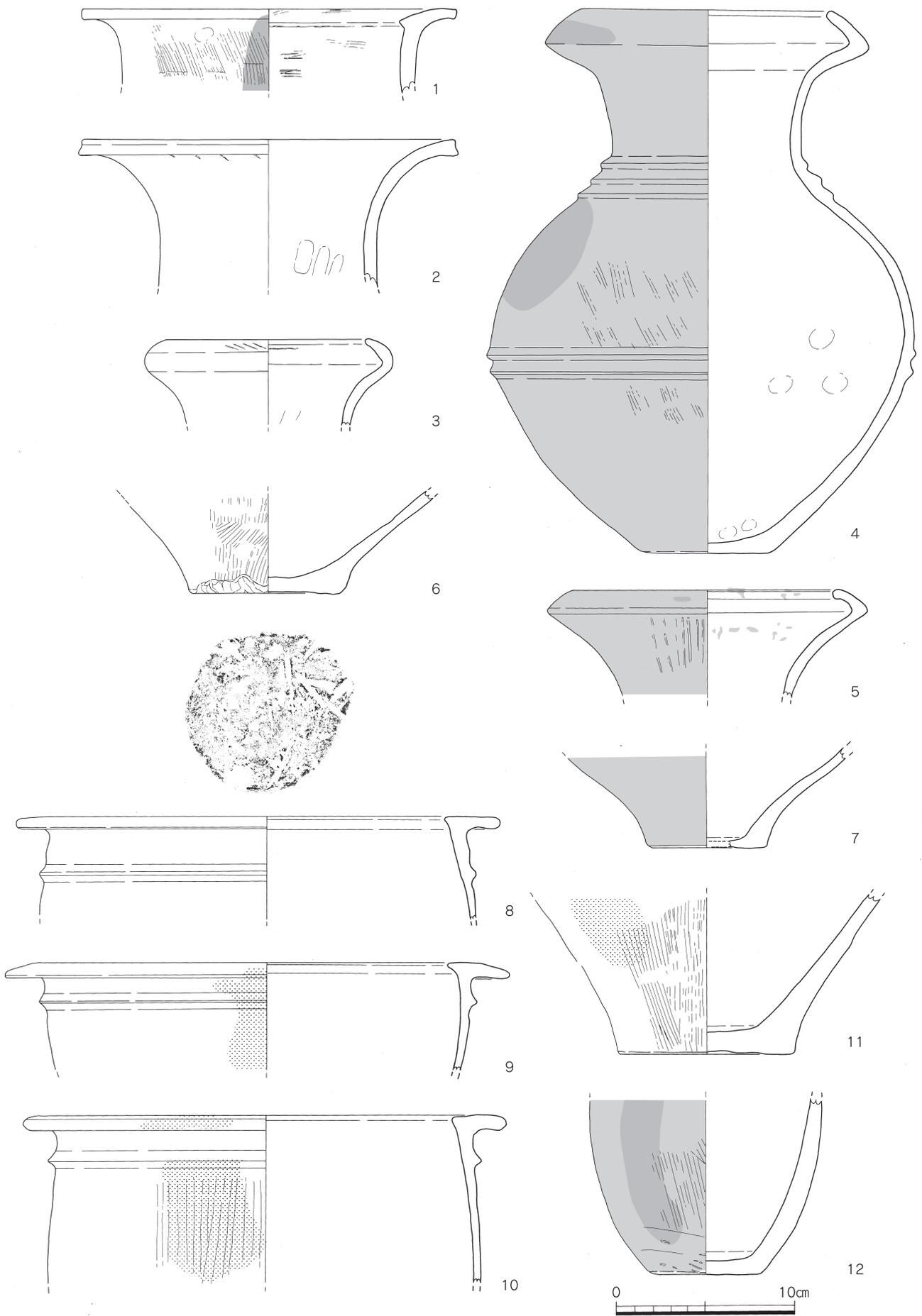
り、口縁部の開きは弱い。3は小型の器台である。くびれ部は上位に位置し、全体的に肉厚である。外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。4も小型の器台で、外面にタタキ、内面にナデを施す。5

は大型の器台の下半部としたが、高坏の脚裾部の可能性もある。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6・7は支脚の口縁部片である。6の器壁は薄く、7は厚い。8はミニチュアの鉢で、つくりは丁寧である。外面にススが付着する。9は楽浪系土器である。器壁は薄く、外面に縄蓆文タタキを施し、内面にオサエの痕跡を残す。短頸壺か。10は圭頭鏃である。基部を欠くが、現存長6.3cm、幅2.0cmを測る。11は棒状の鉄製品である。下部を欠くが、現存長6.0cm、幅1.0cmを測る。断面は隅丸長方形を呈す。鉄素材であろう。

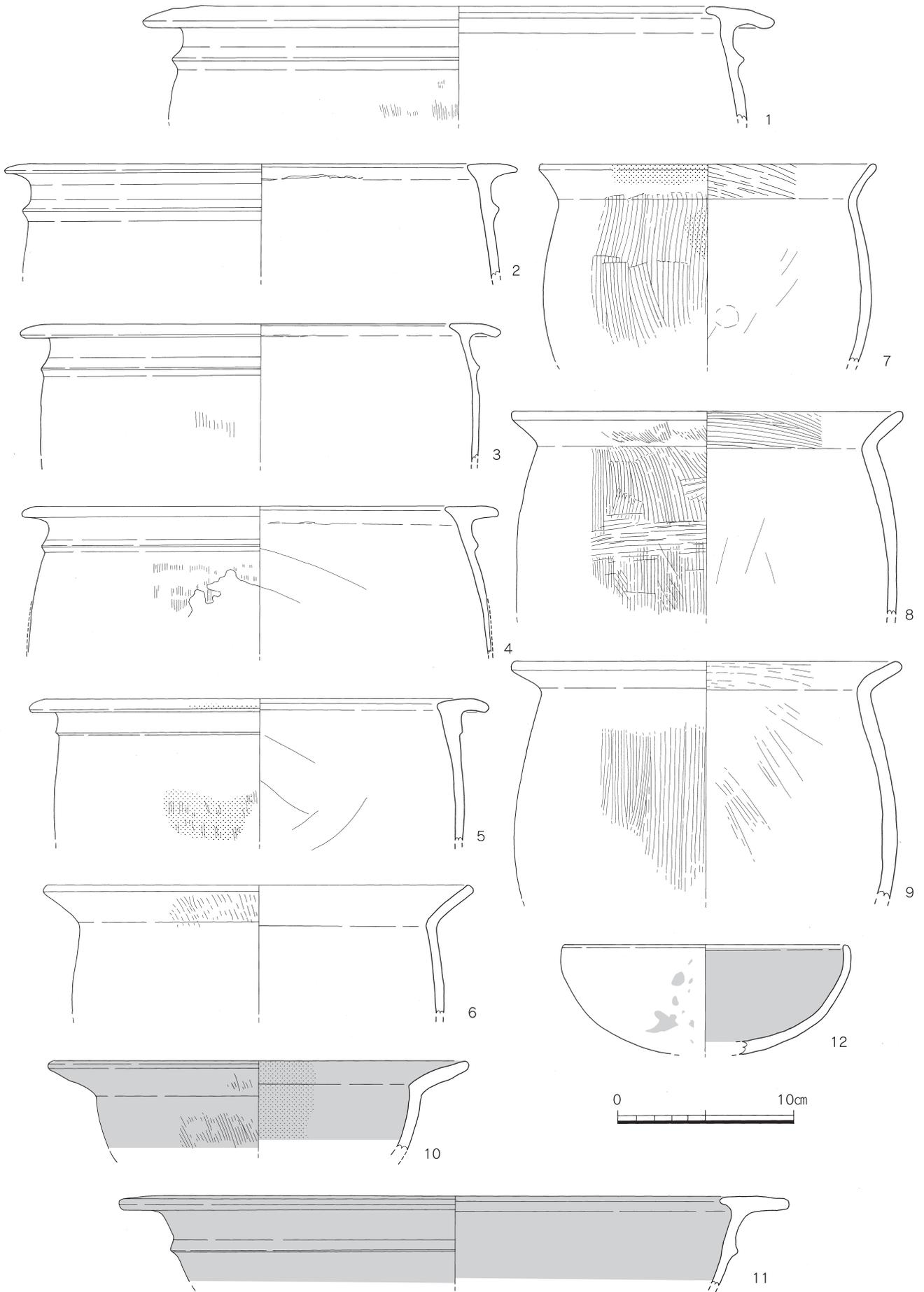
第102図は板石硯である。九州大学安立達朗氏により当初、砂質片岩とされたが(武末・平尾2016)、その後の検討の結果、砂質頁岩と鑑定された。この石材は泥質が強い部分と、砂質の強い部分があるが、本例は砂質の強い部分を硯面とする。現状では硯面と裏面と一側面のみを残すのみで、現存長6.3cm、現存幅4.4cm、厚さ5.7～6.3mmである。硯面は肉眼では墨の痕跡は確認できず、細かな擦痕と縦方向に延びる2本の幅1mmほどの擦痕が確認される。この擦痕を拡大してみると鉄分が確認されることから、硯としての使用後(破損後か)に砥石として刃物を研磨したことが考えられる。このような状況から、本硯には弥生時代終末期の土器が伴うが、使用された時期は弥生時代後期まで遡ると思われる。側面は内傾しており、両側面が残っているならば、その断面形状が台形を呈すると思われる。また、側面は直線ではなく、下から3mm程までは斜研磨、その上2mm程は横方向の研磨が施されている。

裏面は平滑に打ち欠いた後に、細かい調整を施しているが、粗いままである。これは既に指摘されているように長方形板石硯は硯台にはめ込んで用いるため、裏面は基本的に用いることも人目に付くこともないため、粗加工で留めているのだろう。ただ、裏面の下から1cm程の箇所が隆起しており、おそらく、この隆起を除去すると硯そのものが破損すると判断されたため、そのまま残したものであると思われる。

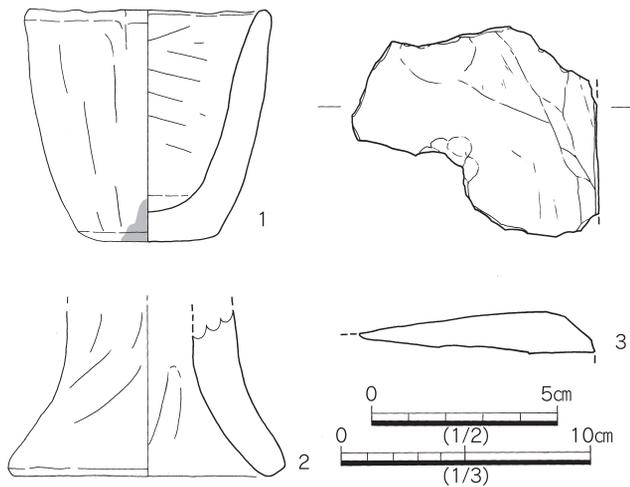
第103～105図は南北トレンチB区中層から出土したものである。第103図1は壺の口頸部で、湾曲した鋤先状口縁をもつ。頸部のしまりは弱い。外面は縦ハケ、内面は横ハケとナデを施す。2は



第103図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区中層出土遺物実測図1 (1/3)



第104図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区中層出土遺物実測図2 (1/3)



第105図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区中層出土遺物実測図3 (1/2・1/3)

広口壺である。頸部のしまりは強く、器壁は薄い。内外面共にナデを施す。3は袋状口縁壺である。口縁部は丸みがあるが、稜をもつ。4は完形に復元される複合口縁壺である。平底で球状の胴部をもち、胴部中位にある最大径の箇所三角突帯を二条巡らせる。頸部はしまりが強く、三条の三角突帯が巡る。頸部から広がりながら立ち上がり口縁部の屈曲部に至る。屈曲部には明瞭な稜が入る。外面は斜ハケとナデを施し、内面はナデとオサエ痕を残す。

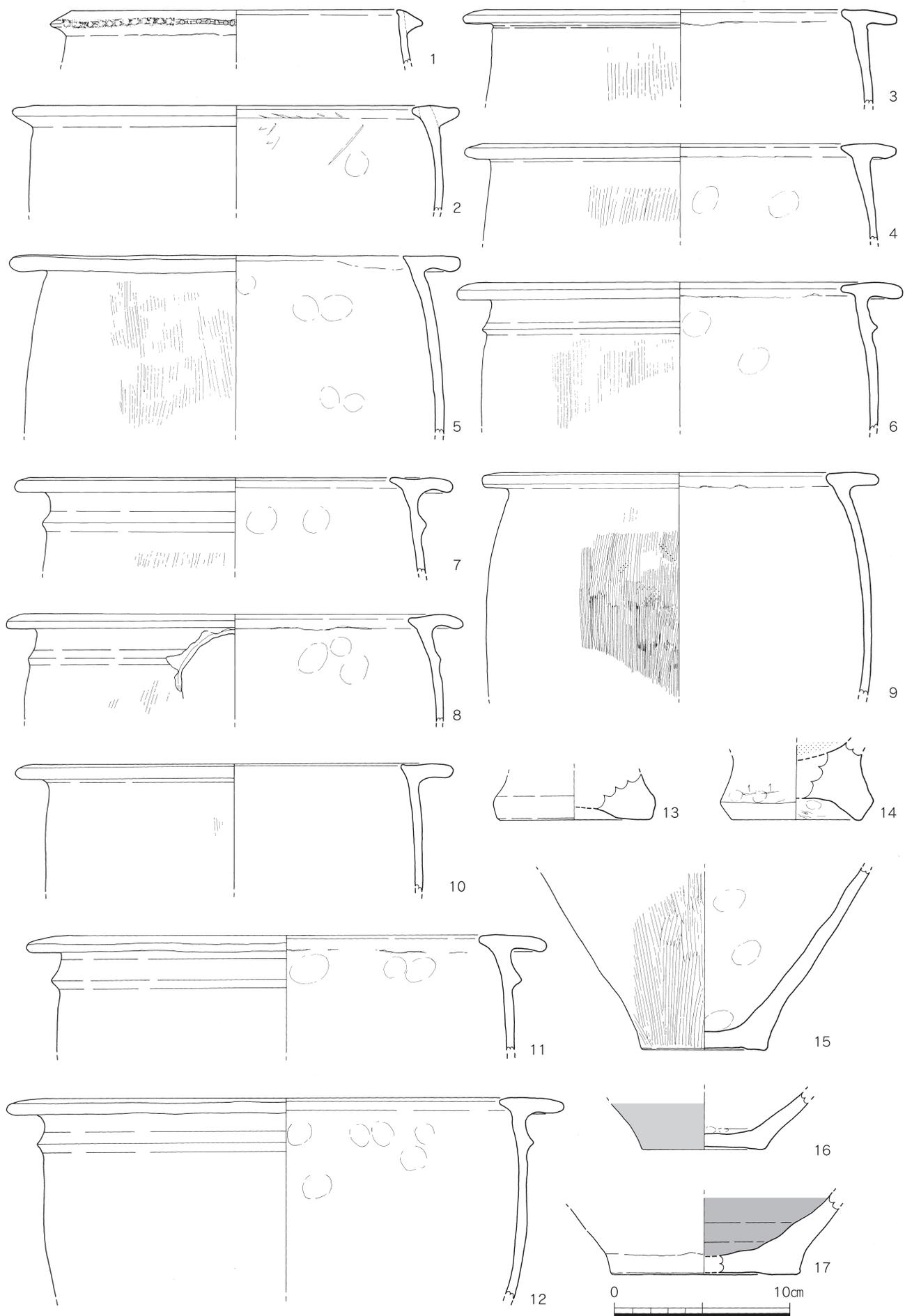
胴部上半と口縁部に黒斑をもつ。5は複合口縁壺の口頸部である。外面は縦ミガキを施す。外面全面に丹塗りを施し、内面には液状にこぼれた痕跡が残る。6・7は壺の底部である。いずれも平底で、6の外面には縦ハケを施し、7の外面には丹塗りを施す。8～10は甕の上半部である。いずれも口縁部の下に三角突帯を巡らせる。9・10は外面にススが付着し、10の外面は縦ハケを施す。11は甕の底部である。平底で、外面にススが付着する。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。12は小型の甕か。平底で、外面に丹塗りを施し、黒斑も残る。外面は縦ハケと横ナデ、内面はナデを施す。

第104図1は口径35.8cmを測るやや大型の甕である。口縁部下に三角突帯を巡らし、外面に縦ハケを施す。2～5は口縁部下に三角突帯が巡る甕で外面に縦ハケを施すものが多い。2～4の内面には接続痕を残し、4の外面は剥離が著しい。5の外面はススが付着する。6～8は口頸部の断面が「く」字状を呈するもので、外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施すものが多い。頸部の内外面に明瞭な稜が入る。9は頸部の屈曲が丸みをもつ甕で、外面に縦ハケ、内面に横ハケと斜ハケを施す。10は楕形の坏部をもつ高坏で、口縁部は内傾する。内外面共に丹塗りを施し、内面にコゲが付着する。11は大型の坏部をもつ高坏で、内外面共に丹塗りで、口縁部の下に三角突帯を巡らせる。12は椀である。底部を欠くがおそらく丸底で、全面に丹塗りを施す。

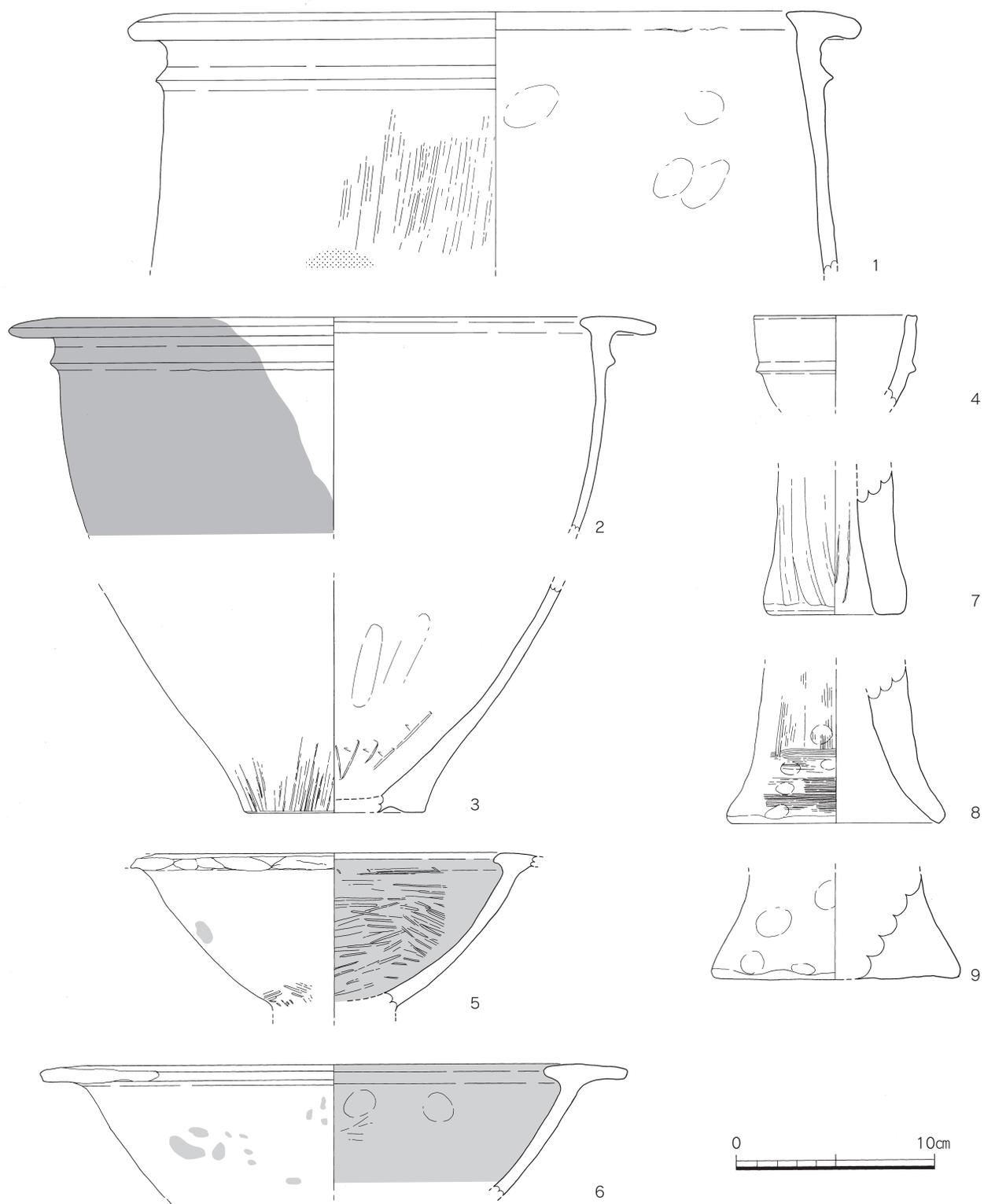
第105図1はコップ形の鉢である。平底で内外面共にナデを施す。2は器台の下半部である。内外面ともにナデを施す。3は砥石か。裏面は剥離しているが、表面は研磨痕を残す。中央部にある円形のくぼみは、もともとあったものか。細砂岩製で目は細かい。

第106・107図は南北トレンチB区下層出土遺物である。第106図1は甕の口縁部である。正三角形の粘土帯を貼り付けて口縁部とし、端部に細かい刻目を施す。2も甕の口縁部で、三角形の粘土帯を貼り付けて口縁部としているが、1より延びている。内外面ともにナデを施す。3～12は甕の上半部で、口縁部下に三角突帯を持つものと無いものがあるが、外面に縦ハケを施すものが多い。8は胴部に打ち欠きで窓を設ける。13・14は甕の底部でいずれも上げ底である。15～17は甕の底部である。いずれも平底で、15の外面には縦ハケを施す。

第107図1は口径37cm程度の大型の甕で、器壁も厚い。口縁部は短く垂れ下がり、その下に三角

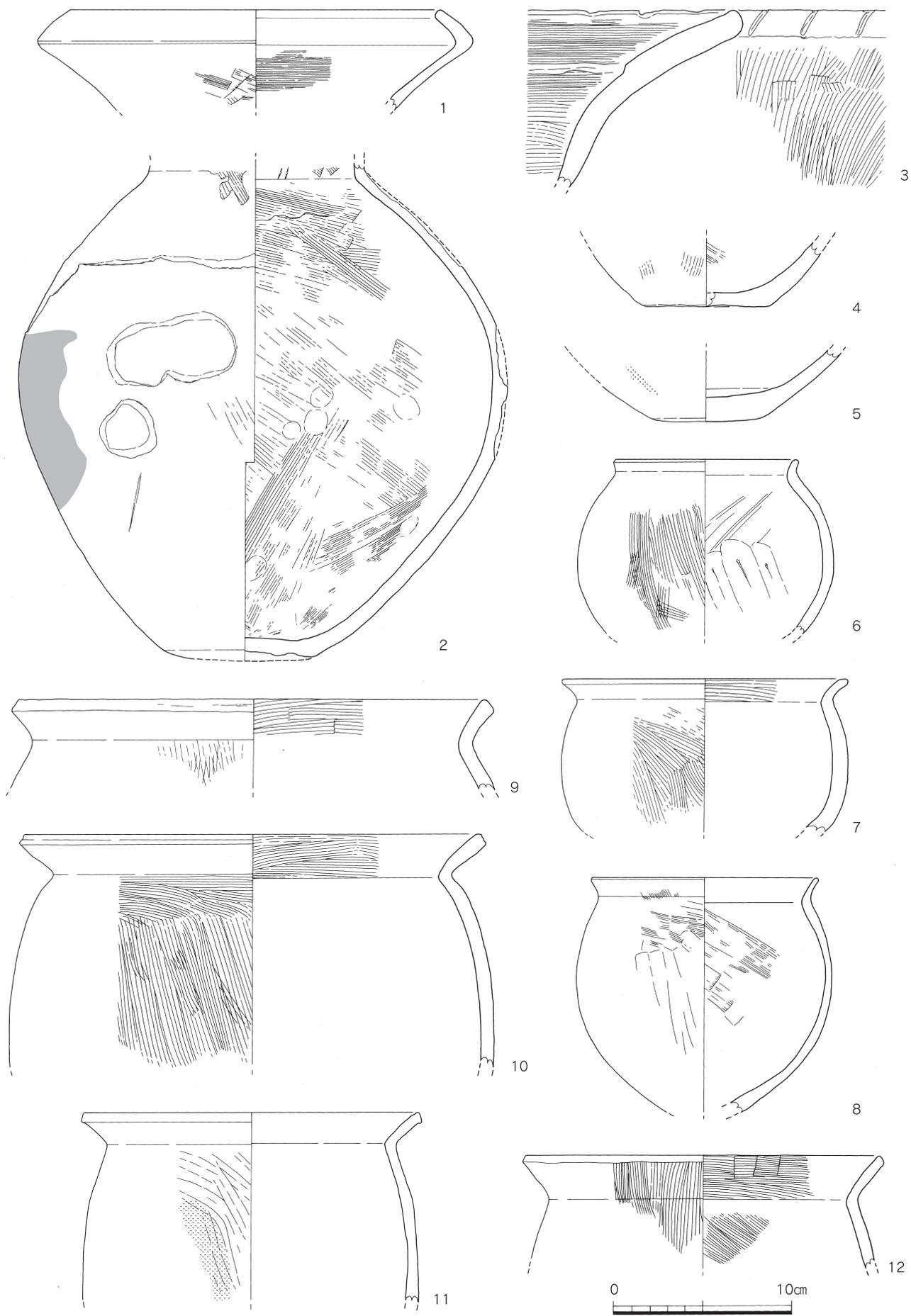


第106図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区下層出土遺物実測図1 (1/3)

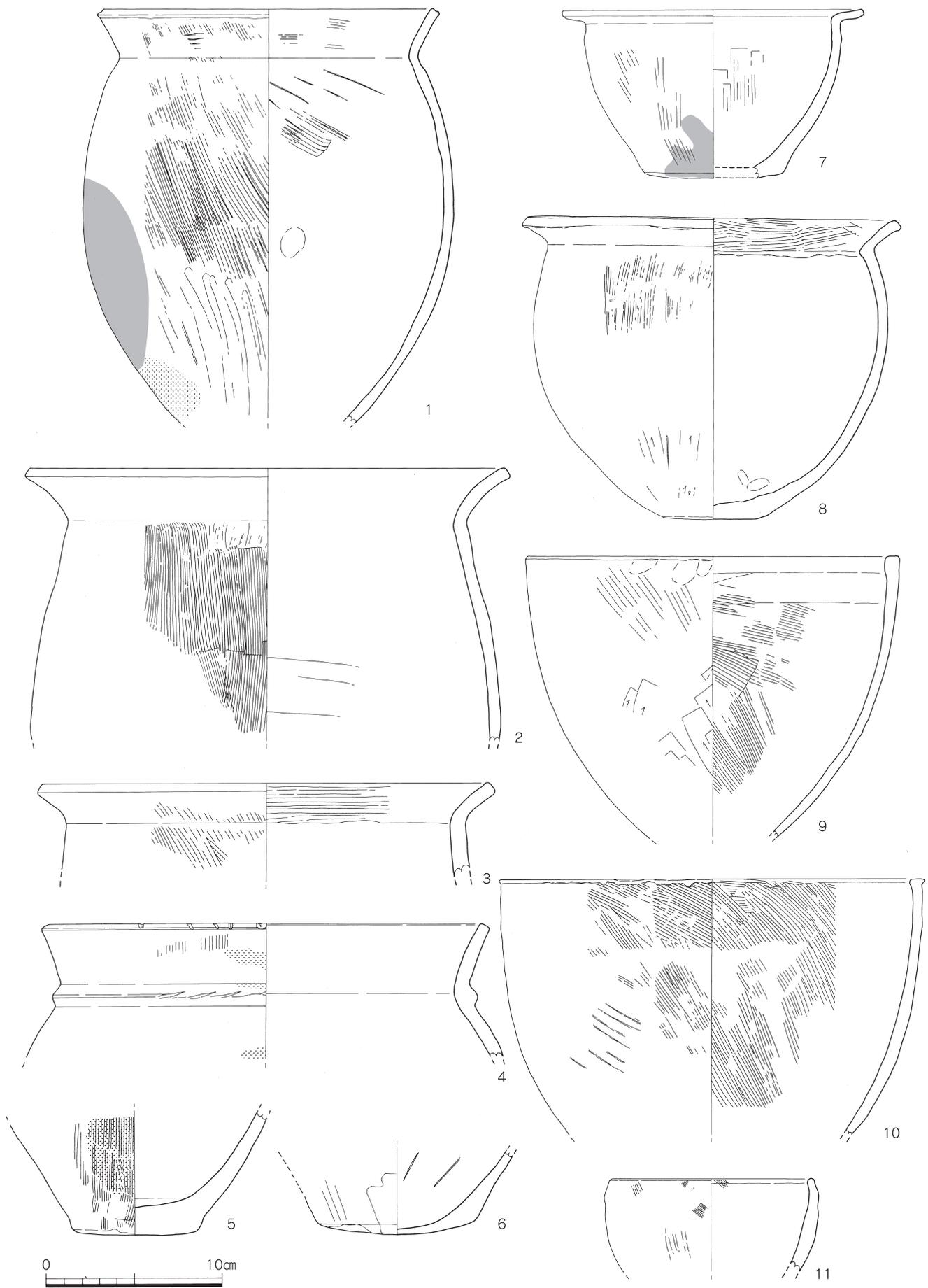


第107図 三雲番上330番地1次南北トレンチB区下層出土遺物実測図2 (1/3)

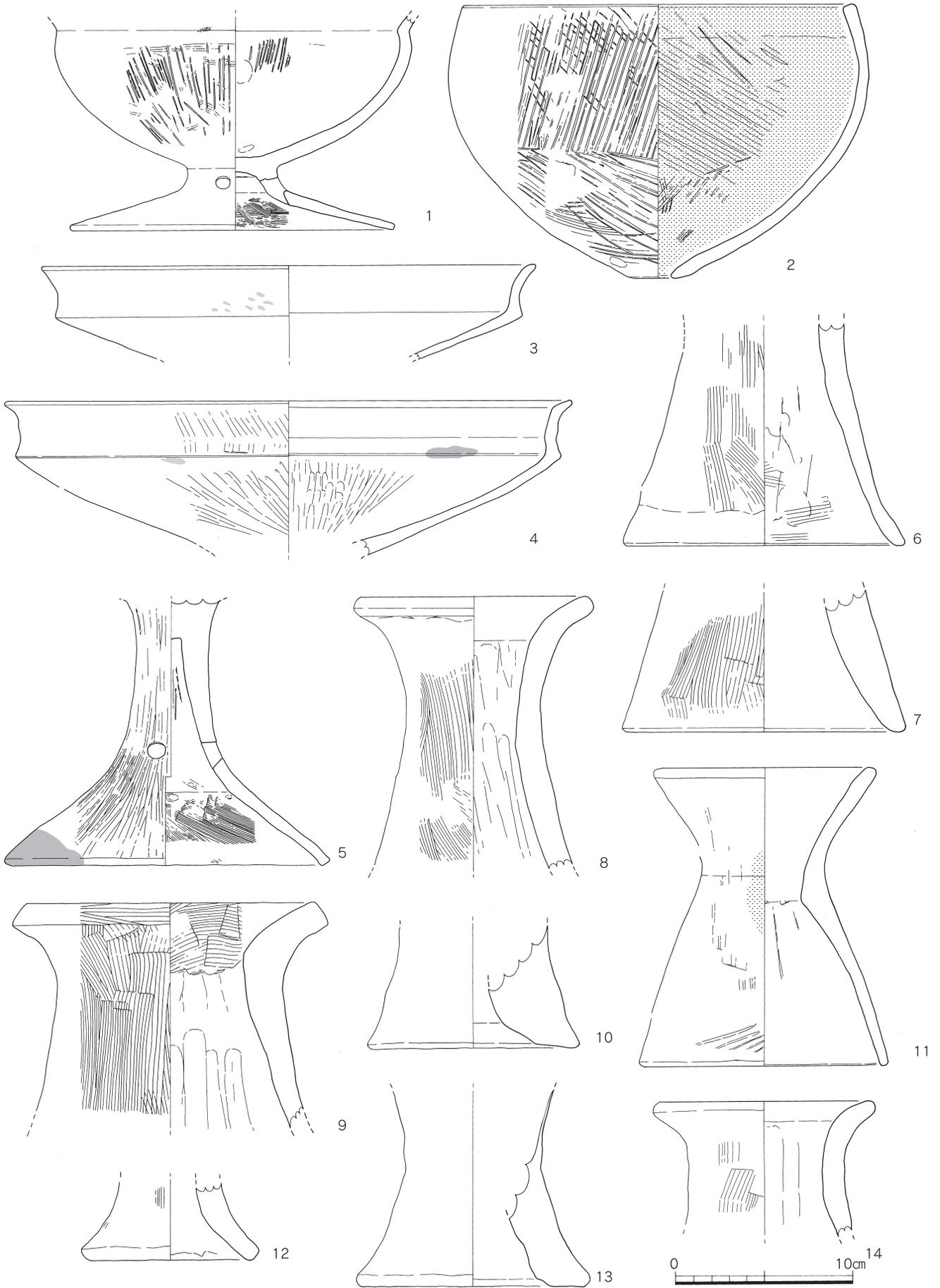
突帯を巡らせる。外面は縦ハケ、内面はナデとオサエを施す。2もやや大型の甕で、口縁部下に三角突帯を巡らせる。3は甕の下半部である。平底で、底部付近に縦ハケを施す。4は小型の鉢で、口縁端部は方形を呈する。口縁下には三角突帯が巡る。5は高坏の坏部である。口縁部はすべて打



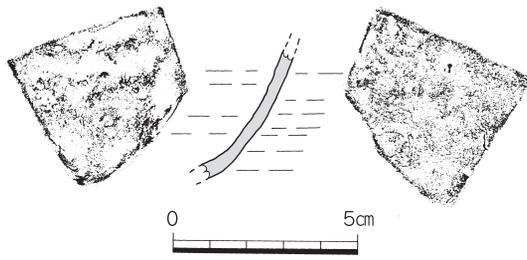
第108図 三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図1 (1/3)



第109図 三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図2 (1/3)



第110図 三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図3 (1/3)



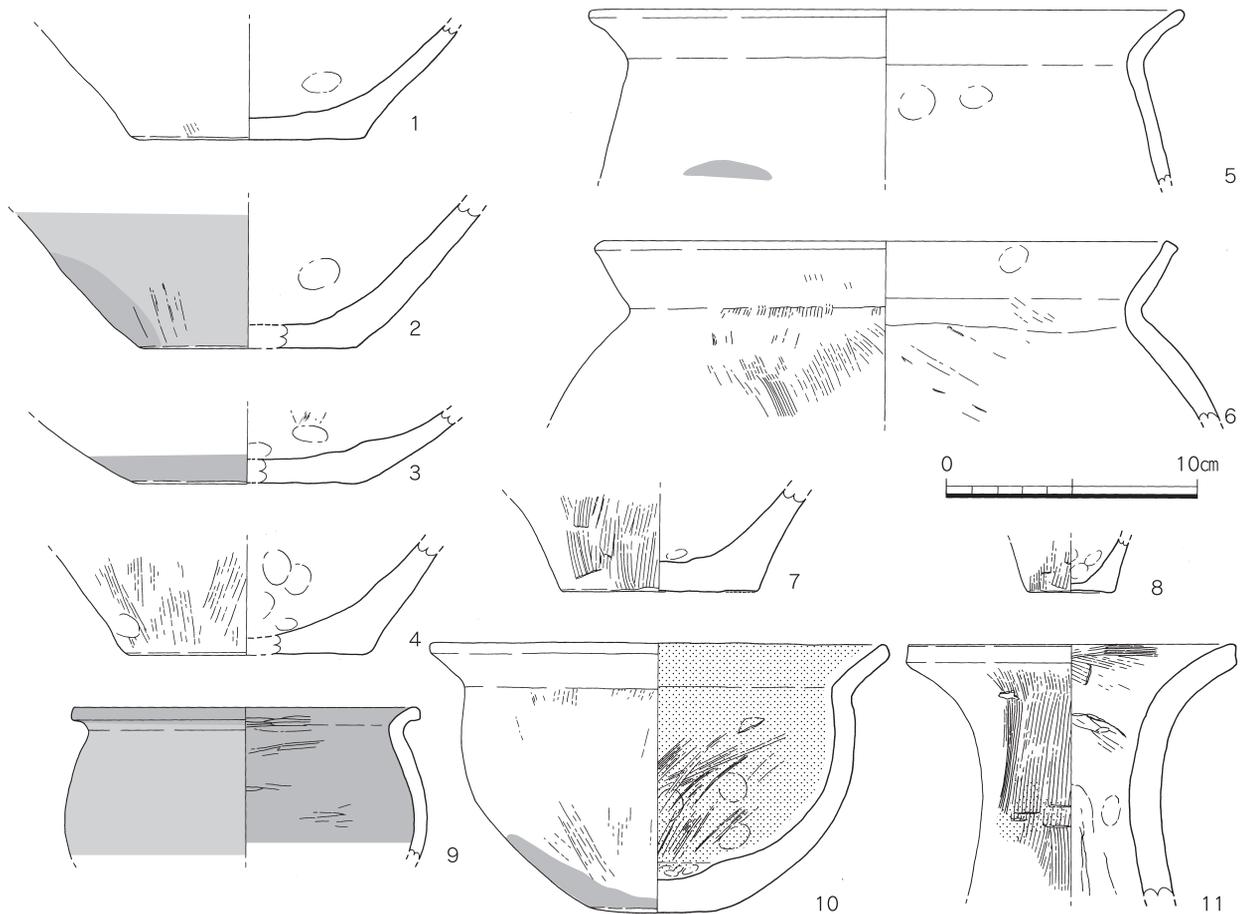
第111図 三雲番上330番地1次南北トレンチC区上層出土遺物実測図4(1/2)

ち欠いている。内面はやや粗めの横ミガキを施す。外面は剥離が著しいが、丹の痕跡が残っており、本来は内外面共に丹塗りであったと思われる。6は高坏の坏部である。口縁部の一部を打ち欠く。7・8は器台である。7は筒状を呈し、器壁は厚い。内外面共にナデを施す。8の脚裾部は広がり、外面に縦ハケと横ハケ、内面にナデを施す。9は支脚か。

第108～111図は南北トレンチC区上層出土遺物である。第108図1は複合口縁壺である。ゆるく屈曲するが稜は明瞭にはいる。2は口頸部と底部を欠く壺である。胴部中位に最大径をもち、底部はおそらく凸レンズ状を呈する。外面は剥離が著しいが、内面は斜ハケを施す。3は大型壺の口縁部である。口縁部に粘土を貼り付け、わずかに肥厚させる。口縁端部に太めの刻目を施し、端部断面は丸みを帯びる。内面は横ハケ、外面は縦ハケを施す。4・5は壺の底部である。4は平底で、5は不安定な平底である。6は口縁が立ち上がる小型の無頸壺である。胴が球状を呈し、外面に縦ハケ、内面に斜ハケとヘラケズリを施す。7は鉢か。口縁は丸みをもちつつ広がり、器壁は厚い。外面に斜ハケ、内面に横ハケとナデを施す。8は小型の甕か。器壁は薄く、外面に強いナデと横ハケ、内面は斜ハケを施す。9は頸部が丸みを帯び、短く広がる口縁部をもつ甕である。10も口縁部が短く広がる甕であるが、頸部がしまり内外面に稜が入る。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。11は小型の甕で断面「く」字形の口頸部をもつ。外面は縦・斜ハケを施し、ススも付着する。12は断面「く」字形の口頸部をもつ甕で、頸部の内外面に稜が入る。外面は縦ハケ、内面は横ハケと斜ハケを施す。

第109図1はやや胴の張る長胴甕である。頸部はしまり内外面に稜が入る。口縁部は短く広がりながら立ち上がる。外面は縦ハケと擦過痕、内面は斜ハケとナデを施す。2～4は甕の上半部である。2はやや大型の長胴甕である。頸部のしまりは緩めで内面に稜は認められない。外面には縦ハケ、内面にナデを施す。3は短く広がりながら立ち上がる甕で、頸部のしまりはゆるい。4は頸部に刻目をもつ三角突帯が巡る甕で、口縁端部にも刻目を施す。外面にはススが付着する。5・6は甕の底部である。5は不安定な平底で、外面に縦ハケを施す。6は凸レンズ状を呈する底部で、外面に斜ハケを施す。7・8は口縁部をもつ鉢である。7は不安定な平底で、口縁端部はややつまみ上げる。8は凸レンズ状の底部をもつもので、胴の張りは強い。頸部はしまり、口縁部は強く内傾する。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。9・10は素口縁の鉢か。9は口縁端部を肥厚させるもので、外面に斜ハケとヘラケズリ、内面に斜めハケを施す。外面には二次焼成痕を残す。10は器壁が薄いもので、口縁端部を外につまみ出す。外面はタタキの後に斜ハケ、内面は斜ハケを施す。11は小型の鉢で全体的に丸みをもつ。

第110図1は脚付きの鉢である。胴部上位に最大径をもち、頸部でしまり、内外面に稜が入る。口縁部を欠くが、内傾するものであろう。脚柱部は太く短いもので、その中位に穿孔を3カ所施す。脚裾部は大きく広がり、器壁は薄い。坏部外面は横ハケの後に縦ミガキを施し、内面は縦ミガキを施す。脚部内面は横・斜ハケを施す。2は底部に焼成前の穿孔をもつ鉢で、胴部上位に最大径をもつ。

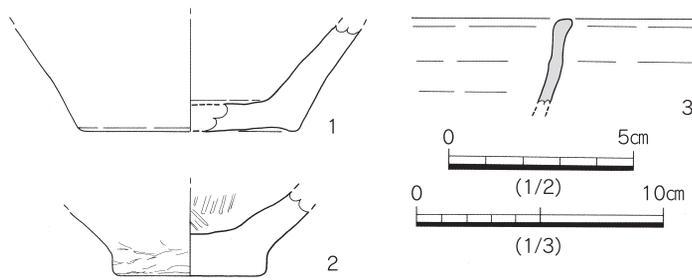


第112図 三雲番上330番地1次南北トレンチC区中層出土遺物実測図 (1/3)

口縁端部を肥厚させ、断面は方形を呈す。外面は横・斜ハケ、内面は斜ハケを施す。3は反転部が外反する高坏で、全体的に器壁が薄い。4は反転部が直立して、口縁端部を摘み出す坏部をもつ高坏である。坏部下部内外面共に縦ミガキ、反転部は斜ハケを施す。5は高坏脚部である。脚柱部は細く直立気味で、脚裾部に向かって膨らみつつ広がる。脚柱部の下端には円形透かしを3カ所に施す。外面は縦ミガキ、内面は斜ハケを施す。6～14は器台である。6は器台下半部で器壁は薄い。外面に縦ハケ、内面にナデと横ハケを施す。7は器台の脚裾部で全体的に肉厚である。外面に縦ハケを施す。8は器台の上半部である。くびれ部は湾曲気味で、外面に稜は入らない。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。9は大型器台の上半部である。外面に横ハケと縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。10は肉厚な器台の脚裾部である。内外面共にナデを施す。11は湾曲気味のくびれ部をもつ器台で、内外面に稜をもつ。器壁は薄く、外面に縦ハケとタタキ、内面にナデを施す。12は小型の器台の脚裾部で、器壁が薄い。13は器台の下半部で、全体的に肉厚である。14は器台の上半部で、全体的に器壁が薄く、口縁端部は丸く収める。

第111図は楽浪系土器である。内外面に回転横ナデを施す。壺か。

第112図は南北トレンチC区中層出土遺物である。1～4は壺の底部である。いずれも平底である。5は長胴甕で、頸部の内外面に稜が入る。外面に黒斑を残す。6は頸部のしまりが強く、口縁



第113図 三雲番上330番地1次北側東西トレンチ出土遺物実測図 (1/2・1/3)

部が広がりながら立ち上がる甕である。外面に斜ハケ、内面にナデとヘラケズリを施す。7は甕の底部である。平底で、外面に縦ハケを施す。8はミニチュア甕の底部である。9は小型の無頸壺である。球状の胴部に、湾曲しながら広がる口縁部をもつ。10は鉢である。

凸レンズ状の底部をもち、全体的に肉厚である。頸部はややしまり、口縁部は広がりながら立ち上がる。11は器台の上半部である。くびれは上半にあり、口縁部に向かって広がる。外面に縦ハケ、内面に横ハケとナデを施す。

(4) 北側東西トレンチ出土遺物

第113図は調査区の北側際に設定した東西トレンチから出土したものである。1・2は甕の底部である。1は平底で、内外面共にナデを施す。2は平底であるが、突出する。外面にナデ、内面に斜ハケを施す。3は楽浪系土器の椀である。内外面共に回転横ナデを施し、口縁端部を摘み出す。泥質である。

(5) 溝

1号溝 (第114図) 調査区の南側で確認された溝で、北東-南西に主軸をもつ。幅0.96～2.10m、深さは18cm程度である。1号溝は砂で一気に埋没したようで、土層を確認しても細砂層のみで分層できなかった。

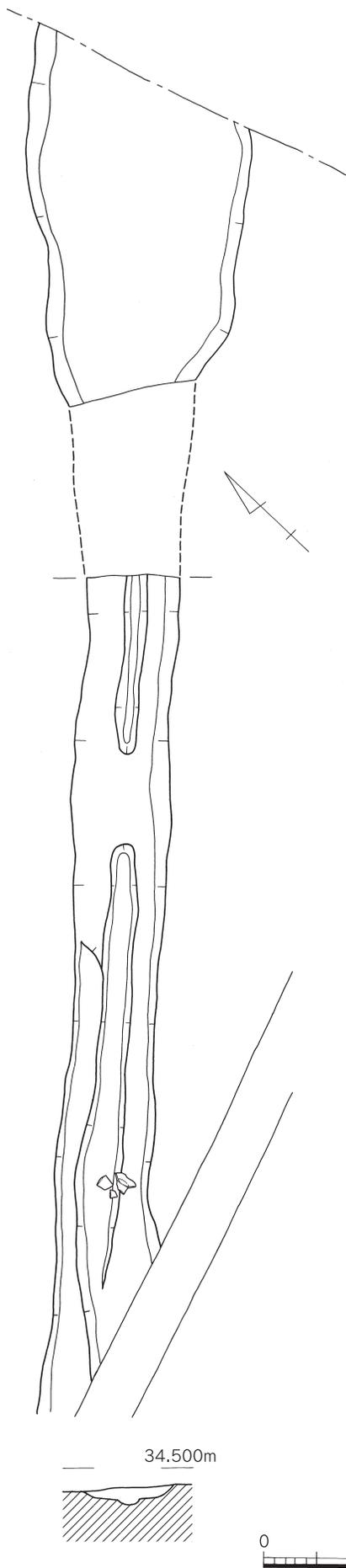
出土遺物 (第115図1～15) 1は鋤先口縁壺の口頸部である。口縁端部は丸くおさめ、内外面共に丹塗りを施す。外面に暗文状の縦ミガキを施す。2は無頸壺の上半部である。内外面共に丹塗りである。外面に横ミガキを施す。3も無頸壺か。丸みをもつ口縁部をもち、内外面共にナデを施す。4は壺の底部である。外面に丹塗りを施す。5は甕の上半部である。頸部はしまり内外面に稜がはいる。外面に縦ハケを施す。6～12は甕の底部である。いずれも平底で、外面に縦ハケを施すものが多い。13は器台の上半部である。口縁部を欠くが丸みをもつものか。外面に縦ハケ、内面に斜ハケを施す。器壁は薄い。14は器台の裾部で、内外面共にナデを施す。器壁は薄い。15は肉厚な器台の脚裾部である。内外面にナデを施し、底部裏面には藁状の痕跡が残る。

2号溝 直線的な攪乱溝である。幅は20～30cm、深さ10cm、埋土はオリーブ灰色を呈する。

出土遺物 (第115図16) 16は鉄鎌の破片か。両端部を欠くが、現存長4cm、幅2.4cmを測る。

(6) 包含層出土遺物

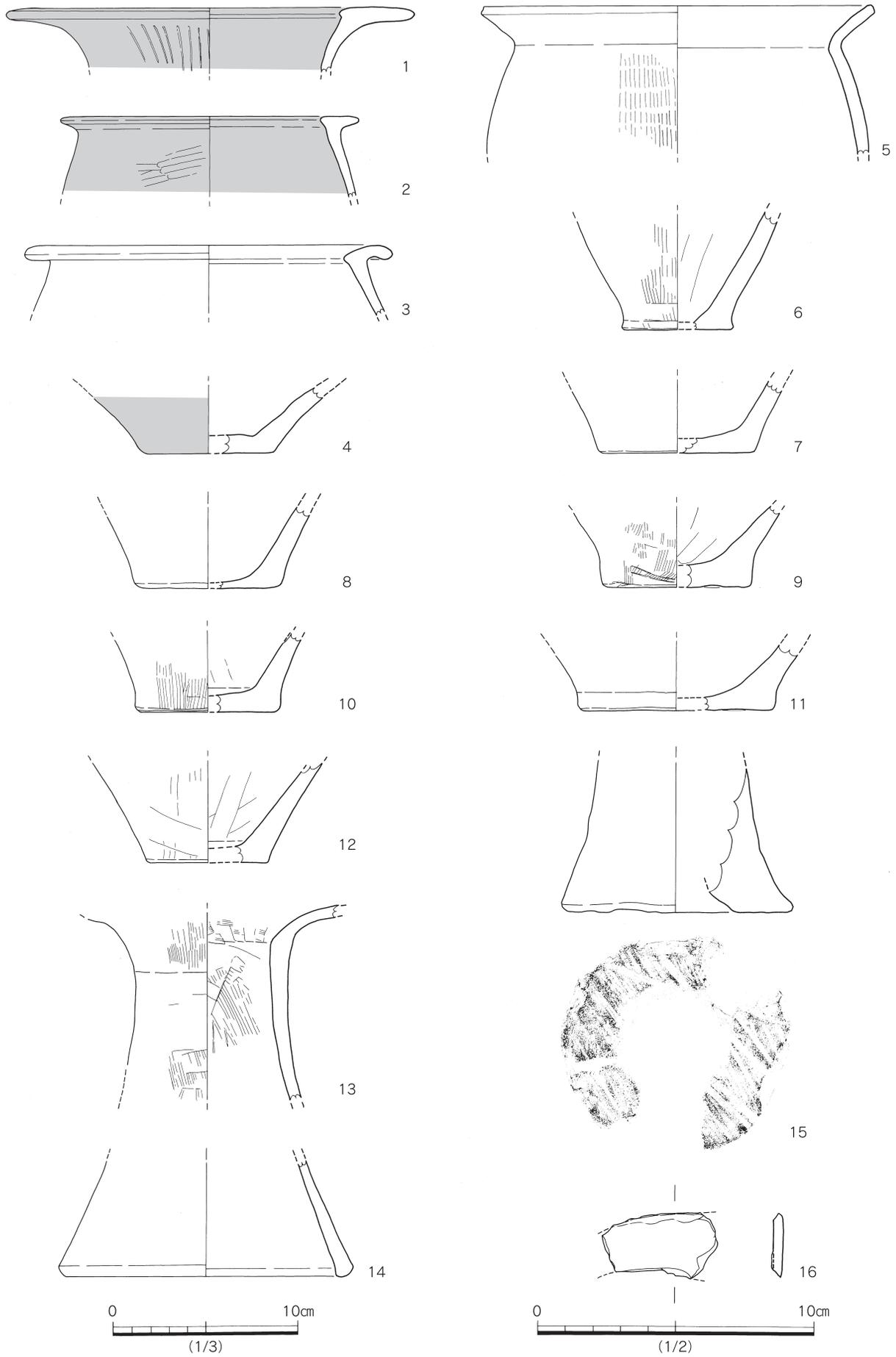
包含層出土品は灰褐色包含層と遺構面検出時の遺構に伴わないものがある。第116・117図は灰褐色包含層から出土したものである。第116図1は受口上の口縁をもつ甕で、器壁を薄く仕上げる。



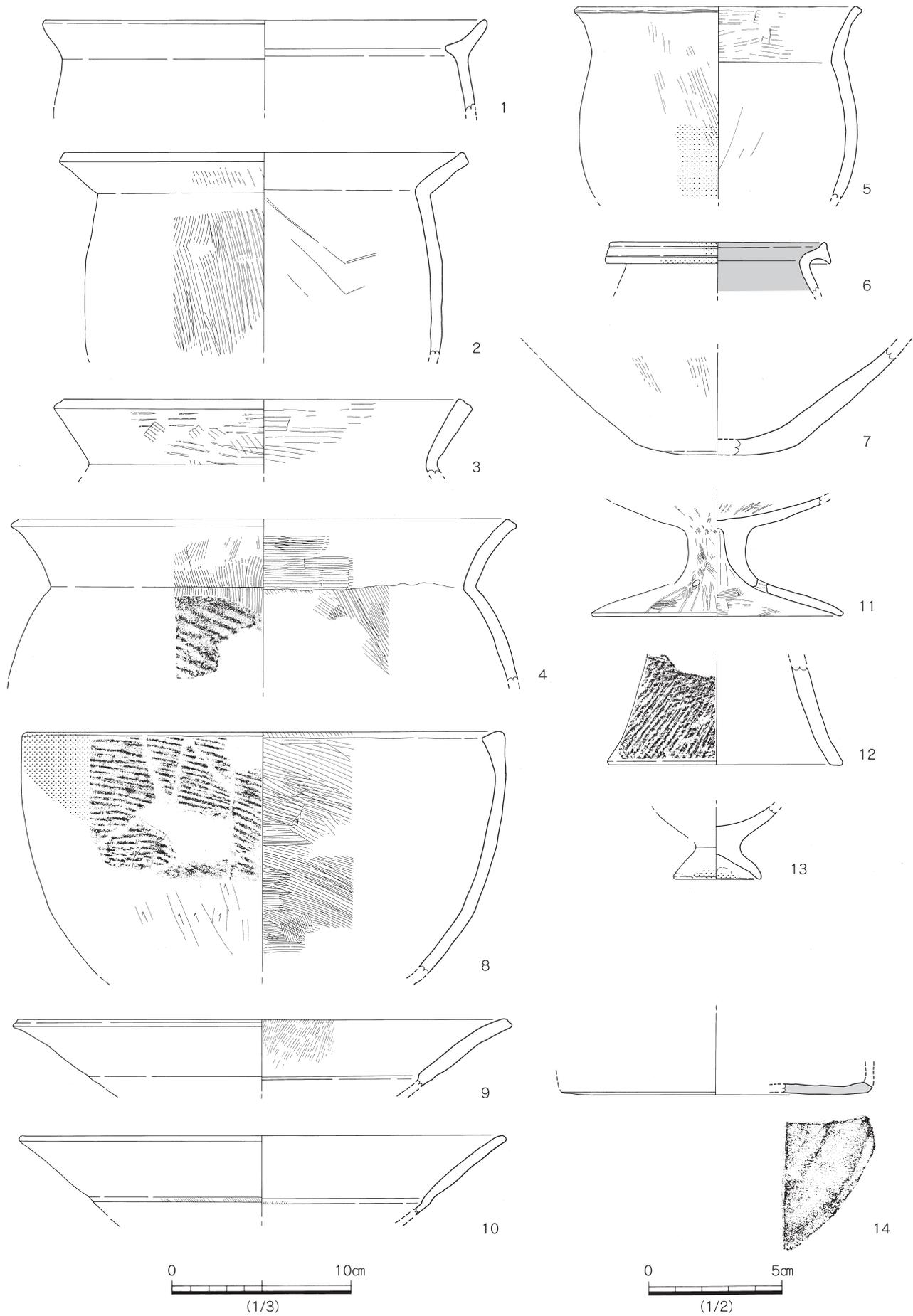
2は長胴甕の上半部で、頸部の内外面に稜が入る。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。3は甕の口縁部である。外面にタタキと斜ハケ、内面に横ハケを施す。4は胴部が丸みを帯びる甕の上半部である。頸部内外面に稜が入る。外面は縦ハケとタタキ、内面は横ハケと斜ハケを施す。5は小型の甕である。頸部のしまりはゆるく、内面にのみ稜が入る。外面に斜ハケ、内面に横ハケとナデを施す。外面にススが付着する。6は吉備系甕の口縁部である。小片から復元しているため、口径に不安が残る。口縁端部は面的に広がり、2本の沈線が巡る。口縁部にススが付着する。7は底部で、断面は凸レンズ状を呈する。8は鉢である。口縁を肥厚させ、口縁端部は内傾する。外面下部にヘラケズリ、内面は横～斜ハケを施す。9・10は高坏の坏部片である。いずれも反転部が直線気味になるもので、9は内面に縦ハケを施す。11は高坏の脚部である。低脚で、脚柱部の下端の3カ所に円形透を入れる。外面は斜・縦ハケと縦ミガキ、内面は横ハケを施す。12は器台の脚裾部である。器壁は薄く、外面にタタキを施す。13は小型の土器である。内外面共にナデを施し、脚端部にはオサエ痕を残す。脚部にはススを残す。14は楽浪系土器筒杯の底部である。端部から1cmほどは回転ヘラケズリを施し、その内側は磨滅してよくわからないが糸切りであろう。内面は回転横ナデを施す。

第117図1は楽浪系土器の鉢の底部である。泥質で、内外面共に回転横ナデを施し、底部は糸切り痕を残す。2は石庖丁である。石製穿孔具による両面穿孔である。3も石庖丁である。上下面共に剥離しており、穿孔部も確認できない。刃部は直線的である。4は紡錘車である。5・6は黒曜石製の凹基式石鏃である。7は鉄製鋤鋤先である。やや左側と刃部を欠く。現存長8.0cm、現存幅6.0cm、8は板状の鉄製品である。現存長3.8cm、幅2.7cm、厚2.5mmを図る。9は不定形の板状鉄製品である。いずれも鉄素材関係か。

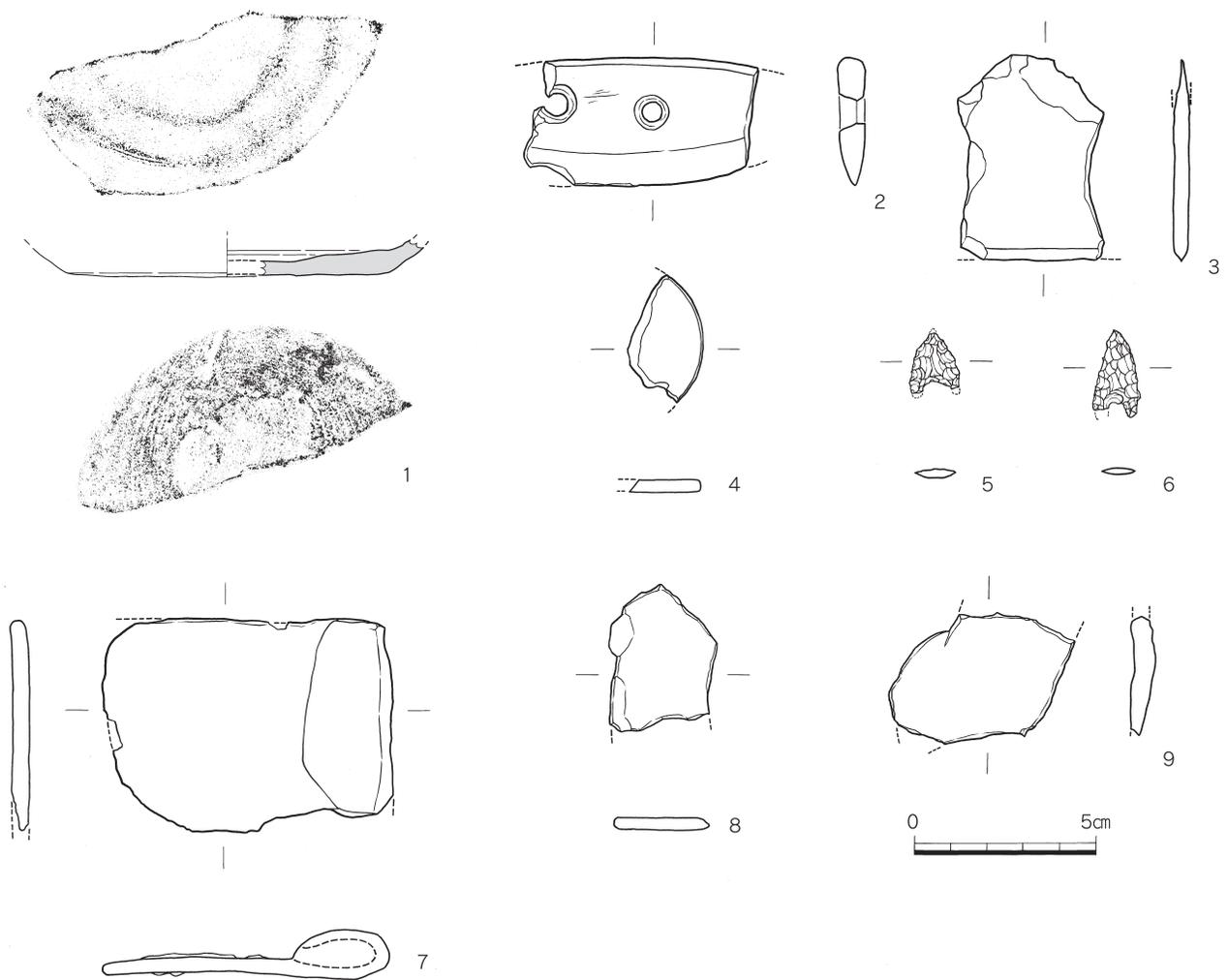
第114図 三雲番上330番地1次1号溝実測図(1/60)



第115图 三雲番上330番地1次1・2号溝出土遺物実測図 (1/2・1/3)



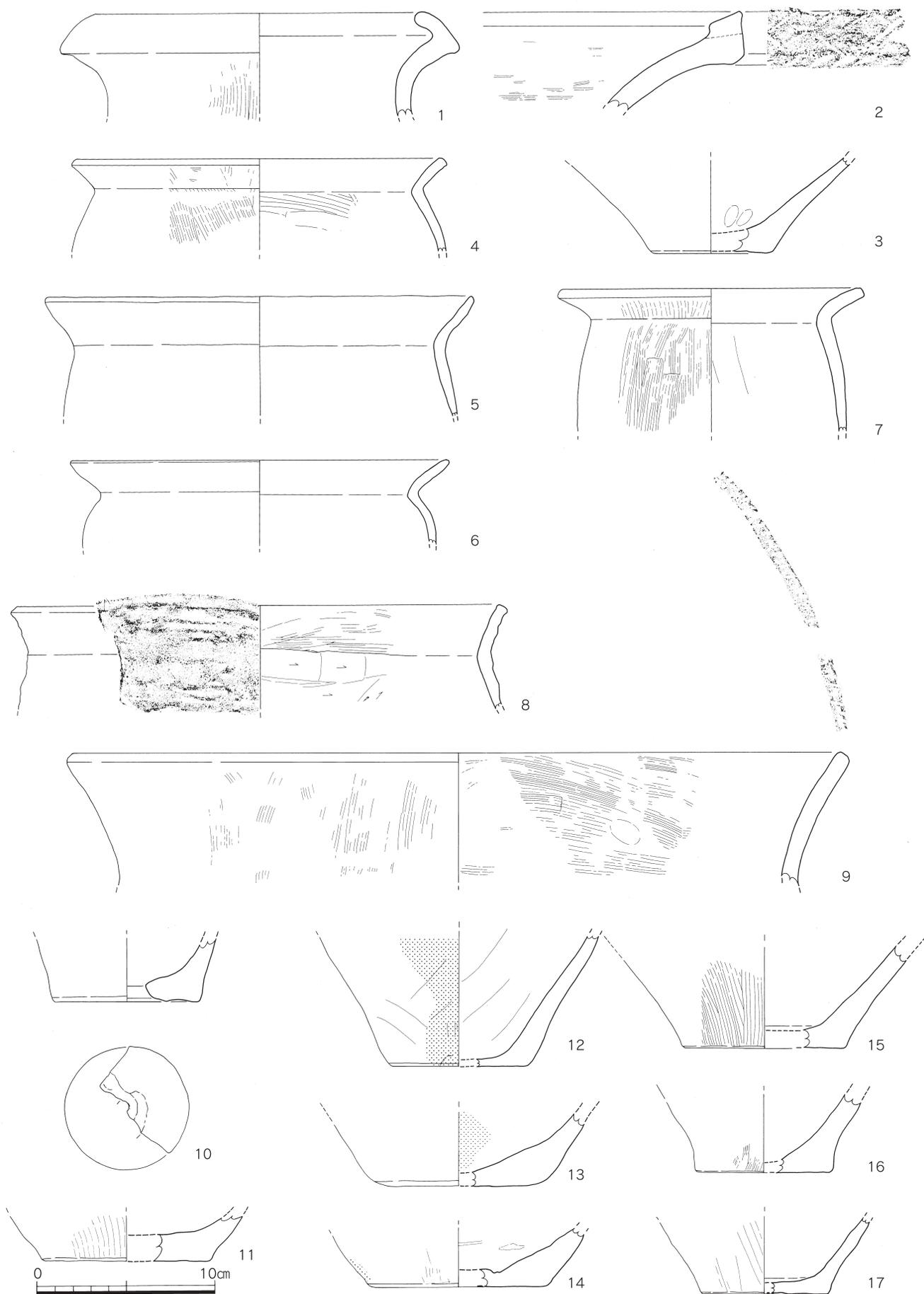
第116図 三雲番上330番地1次灰褐色包含層出土遺物実測図1 (1/2・1/3)



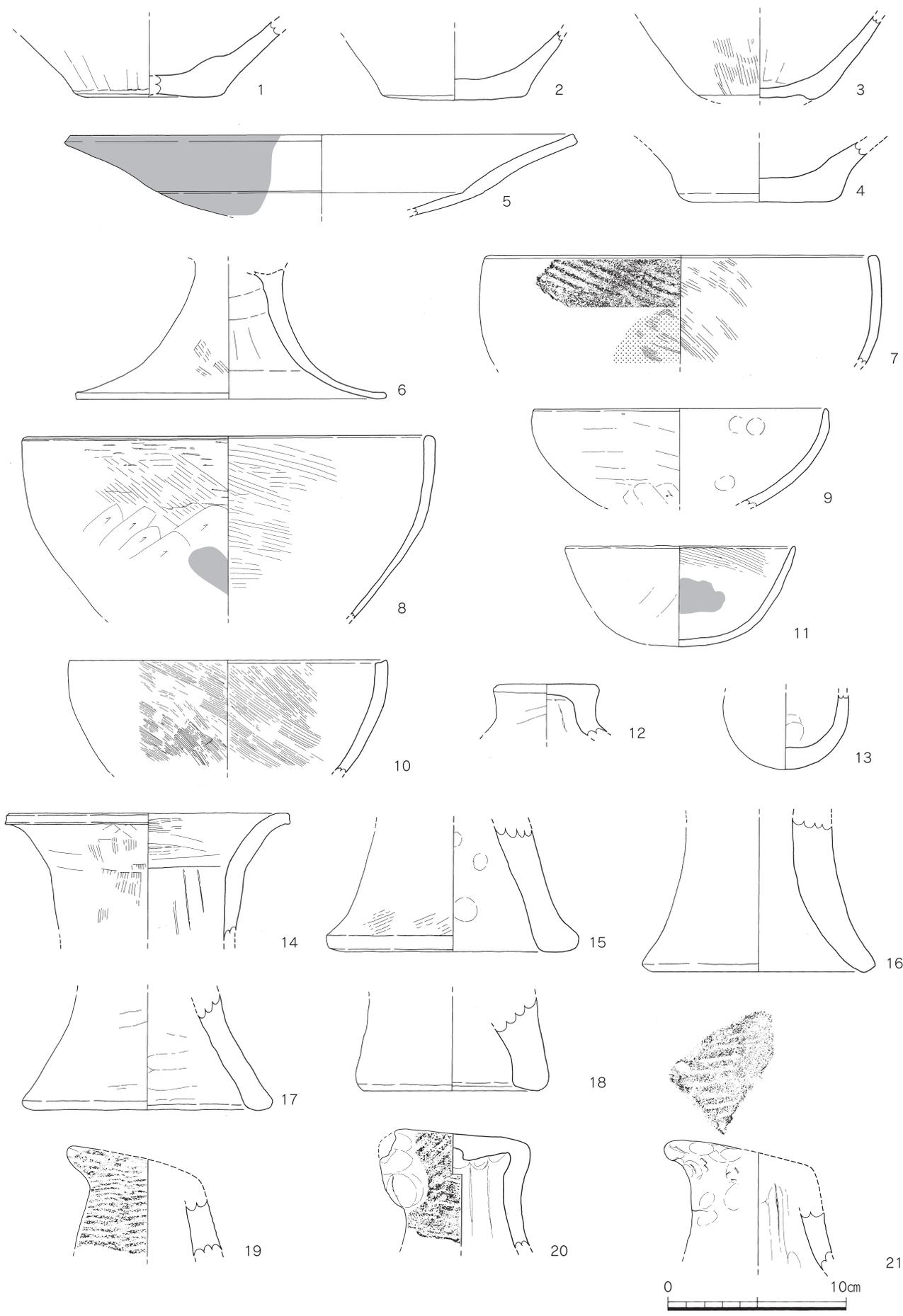
第117図 三雲番上330番地1次灰褐色包含層出土遺物実測図2 (1/2)

第118～121図は包含層から出土したものである。第118図1は複合口縁壺で、屈曲部に明瞭な稜が入る。外面に縦ハケを施す。2は大型壺の口縁部である。口縁端部は粘土を貼り付け肥厚させる。3は壺の底部である。4はやや胴が張る甕で、頸部の内外面に稜が入る。外面に縦ハケ、内面に斜ハケを施す。5は長胴甕である。全体的に器壁が薄く、頸部の内外面に稜が入る。6は胴が張る甕である。7は小型の長胴甕である。頸部はややしまり、口縁部は大きく開く。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9は大型の甕の口縁部で、外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。口縁端部には刻目を施す。10～17は甕の底部である。いずれも平底で、外面に縦ハケを施すものが多い。10は焼成後に底部外面から穿孔を施すものである。13は外面に二次焼成痕をもち、内面にコゲが付着する。

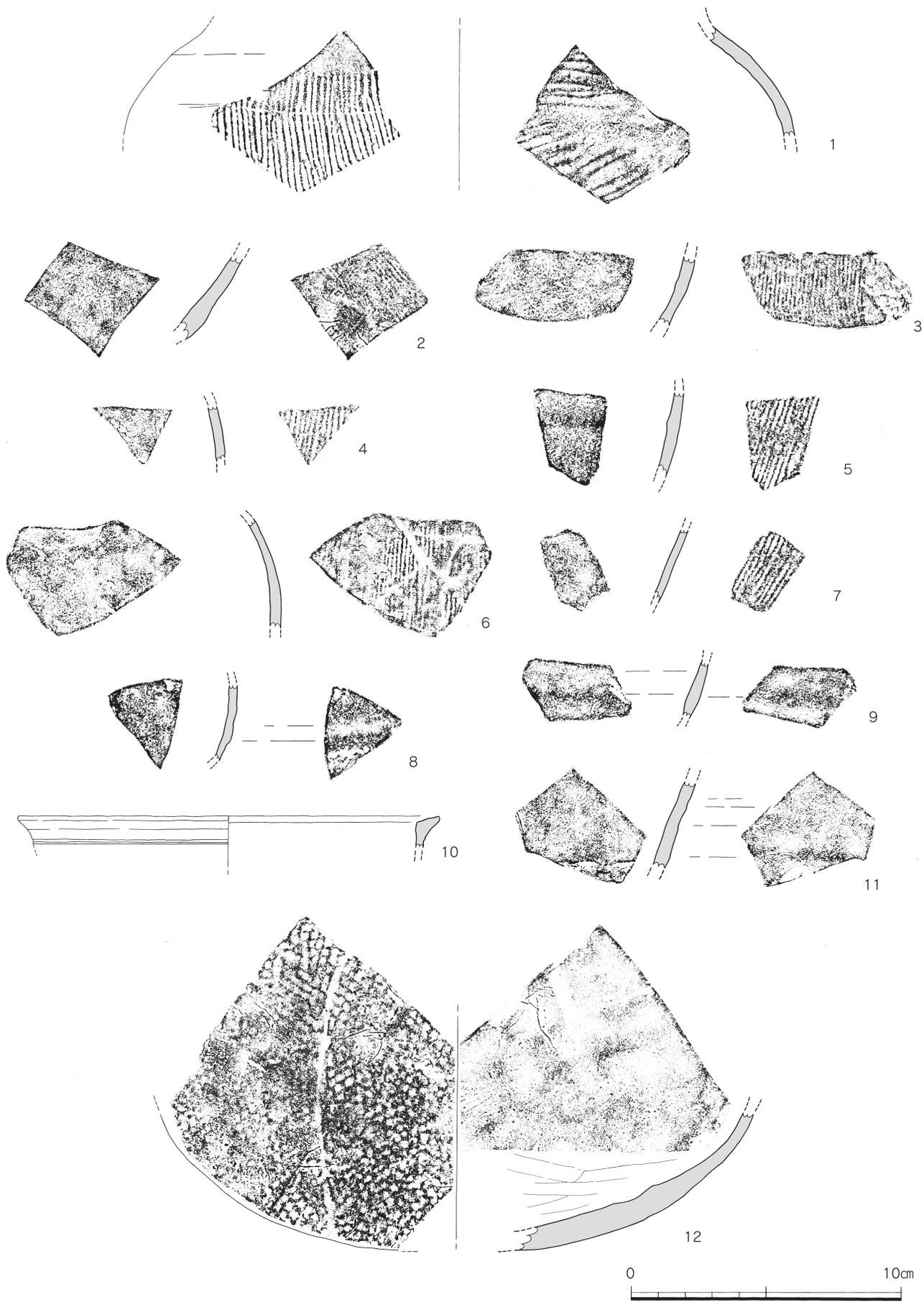
第119図1～4は甕の底部である。2は凸レンズ状底で、3は尖底か。4は平底である。5は高坏の坏部で、反転部が全体の1/2程度を占める。外面に黒斑をもつ。6は高坏の脚部である。短脚でラッパ状に広がる。7～11は鉢である。7は大型の鉢で、外面にタタキ、内面に斜ハケを施す。外面にススが付着する。8も大型で、外面に斜ハケとヘラケズリ、内面に横～斜ハケを施す。外面に黒斑が残る。9は浅鉢である。素口縁で底部外面にヘラケズリを施す。10は内外面に斜ハケを施



第118図 三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図1 (1/3)



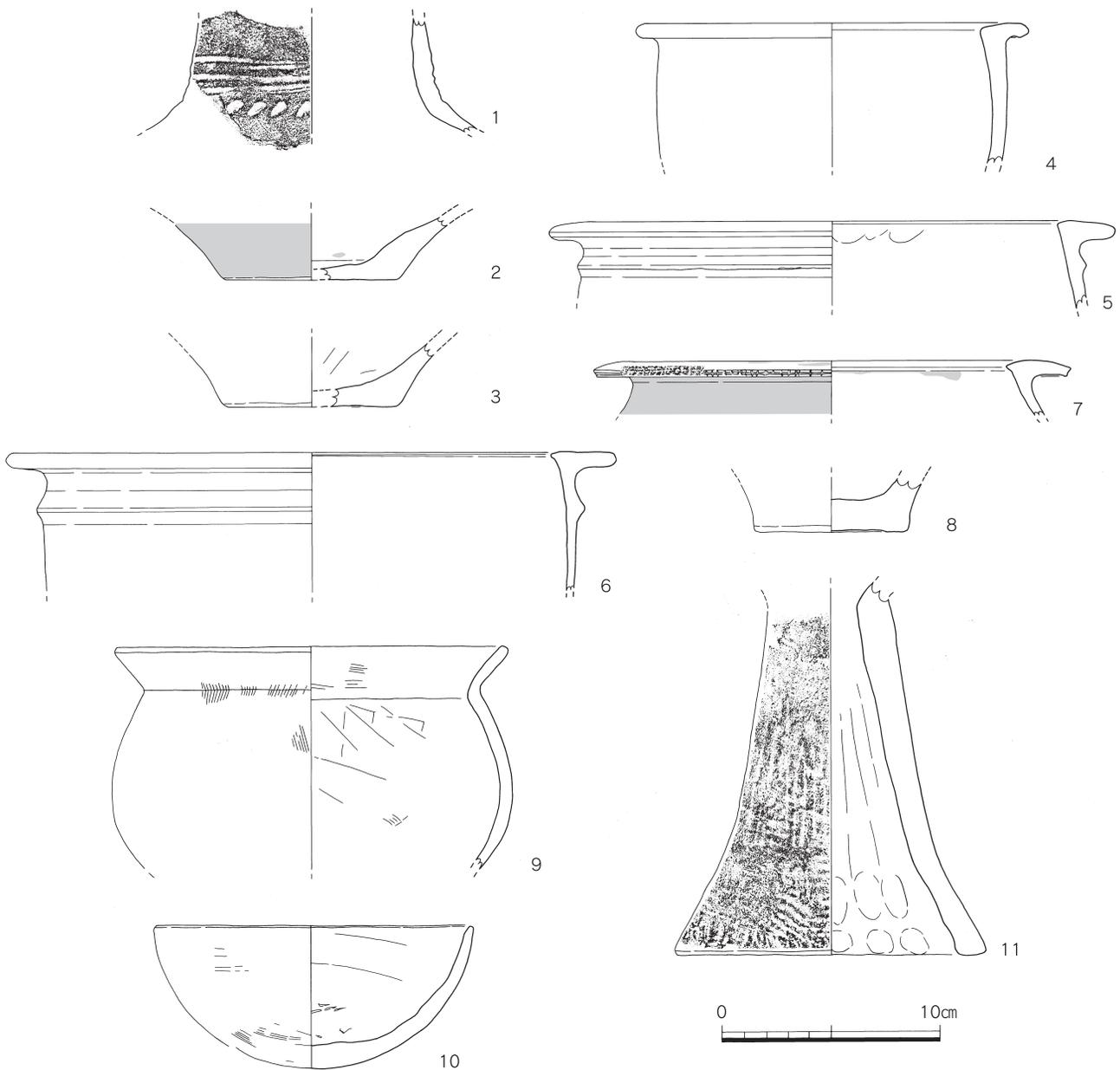
第119図 三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図2 (1/3)



第120図 三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図3 (1/2)



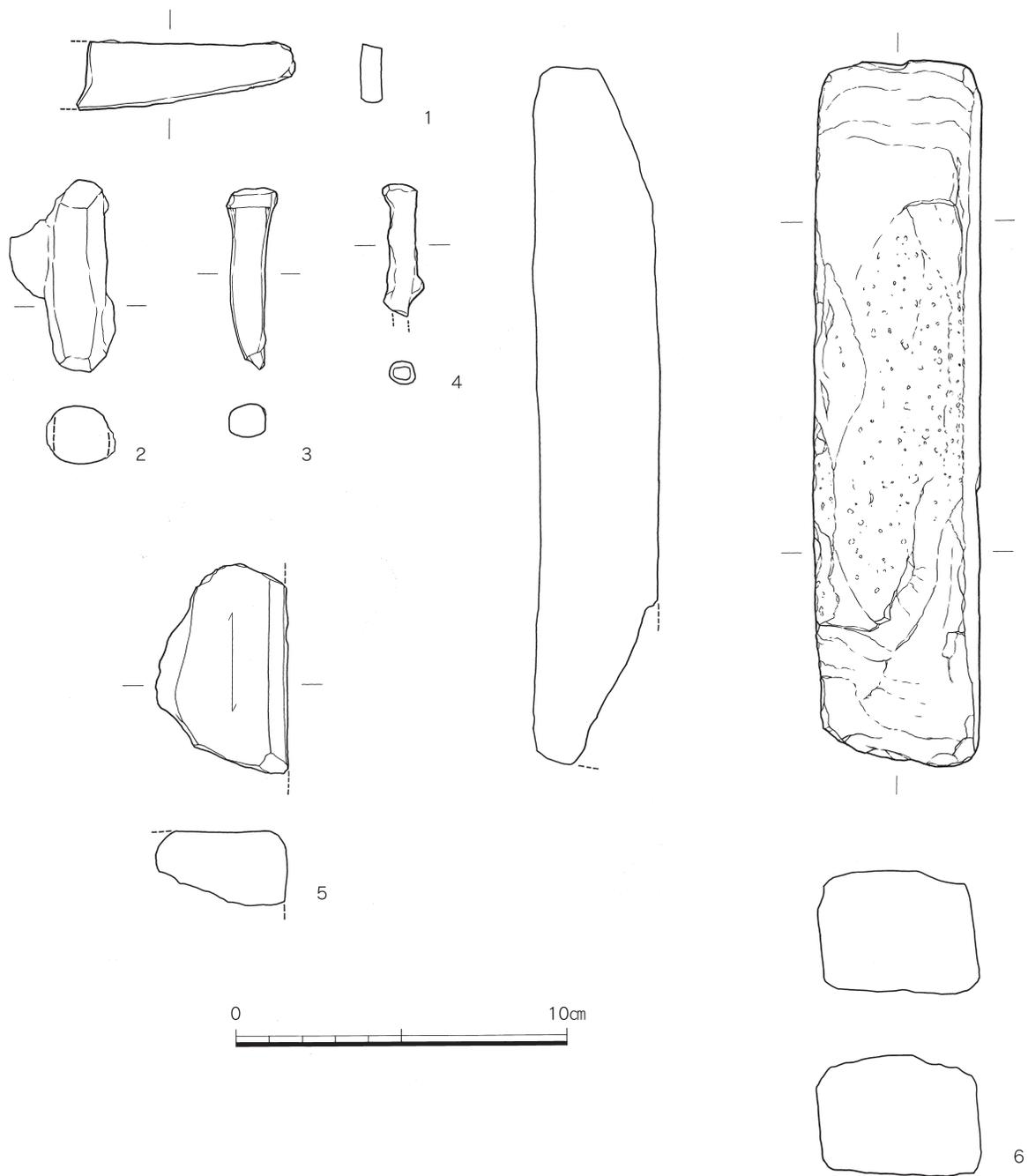
第121図 三雲番上330番地1次包含層出土遺物実測図4 (1/2・1/3)



第122図 三雲番上330番地1次排水溝出土遺物実測図1 (1/3)

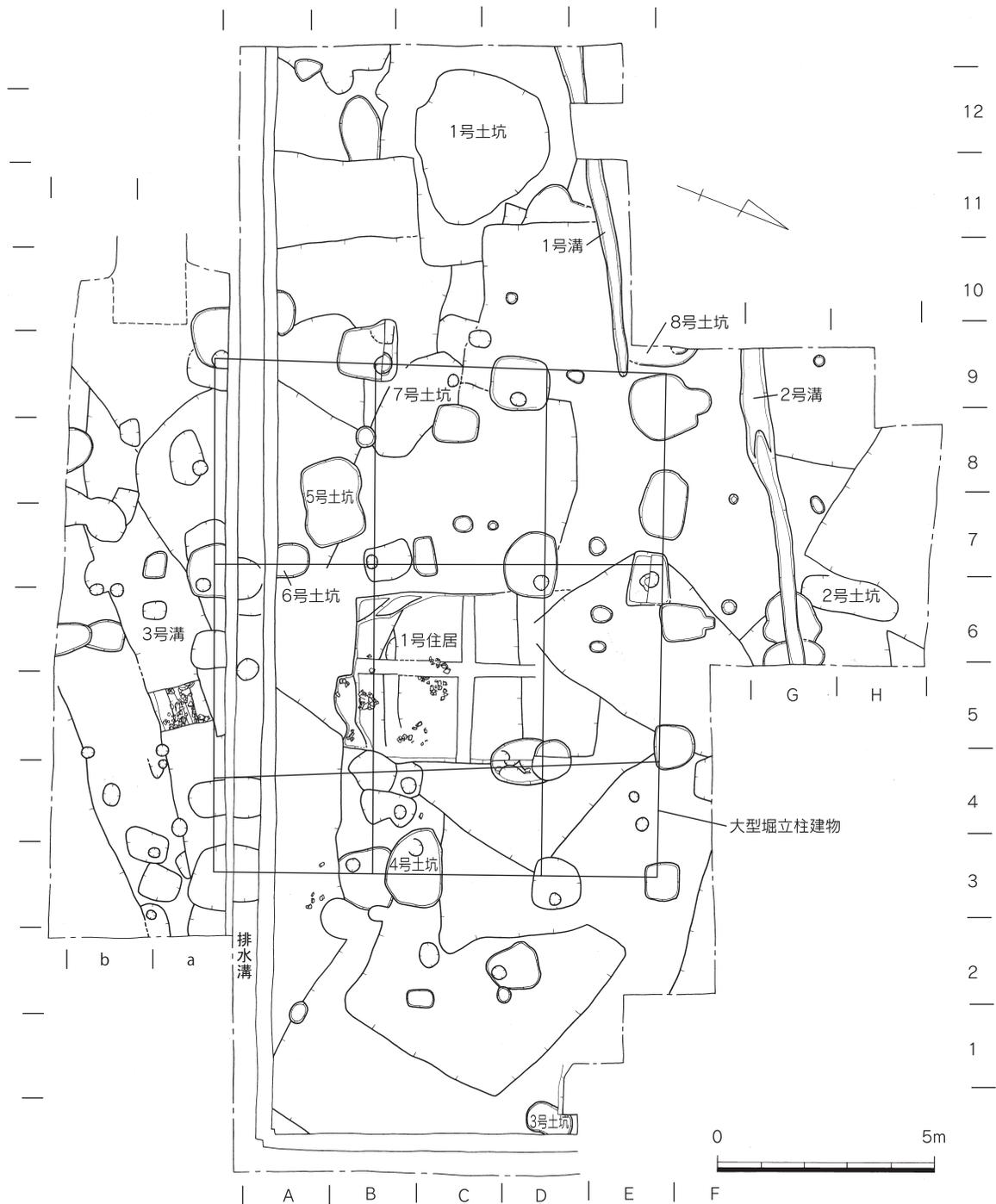
す鉢で、口縁端部に面を取る。11は小型の鉢で、器壁が薄い。内面に黒斑が残る。12は蓋の頂部である。内外面共にナデで仕上げる。13は丸底のミニチュア土器である。14～18は器台である。14は下半部の可能性もあるが、端部の調整が丁寧であるため上半部として図化した。器壁が薄い。15～18は器台の下半部である。内外面共にナデで仕上げるものが多い。19～21は杓形器台である。19・21は上面の一方が突出し、20は縦方向に長軸をもつ把手状に摘み出す。外面はタタキを施す。

第120図 1～11は楽浪系土器である。1は短頸壺の胴部上半～肩部である。外面胴部には縄蓆文タタキの後に工具刃先で刻んだ鋭い沈線を巡らす。肩部はタタキを回転横ナデで消す。内面は全面にオサエを施すが、下半は斜方向、上半は横方向に当具をあてる。部分的にナデを施す。胎土は泥質である。焼成はやや軟質で、外面は灰色、内面は灰橙色を呈す。2は甕の底部付近か。外面に縄



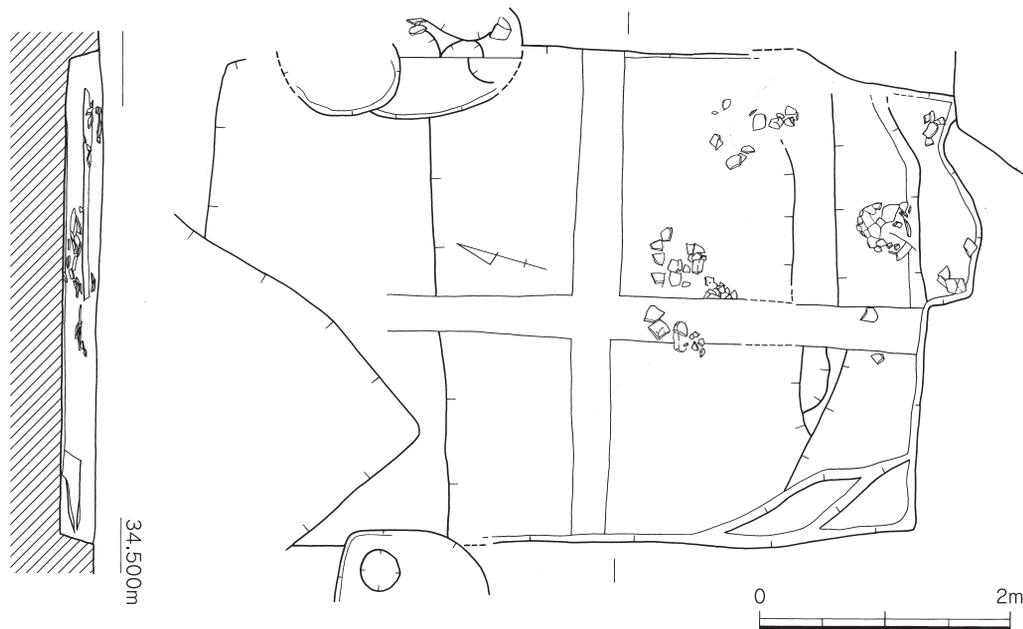
第123図 三雲番上330番地1次排水溝出土遺物実測図2 (1/2)

蓆文タタキとナデ、内面にオサエ痕を残す。部分的に膨らみ、外面は灰色、内面は白灰色を呈する。焼成は軟質で、胎土は泥質である。3も短頸壺で調整等は2と同様である。4も短頸壺か。やや器壁が薄い。調整・胎土は2と同じで、色調は内外面共に淡橙色で、焼成はやや軟質である。5は短頸壺で調整等は4と同じである。6は短頸壺で、調整・胎土・焼成は2と同じであるが、外面は黄灰色、内面は白灰色を呈する。7も短頸壺で、4とほぼ同じであるが、外面はタタキの後に工具刃先で鋭い沈線が巡る。4・5・7は接合する箇所は無いが、同一個体の可能性がある。8は壺の胴部か。内外面共に回転横ナデを施し、胎土は泥質、焼成は軟質である。色調は内外面共に黄灰色を



第124図 三雲番上330番地2次調査区全体図 (1/150)

呈する。9は壺か。内外面共に回転横ナデを施す。胎土は泥質で、焼成は軟質。色調は内外面ともに淡黄灰色を呈する。10は碗の口縁部である。小片から復元しているため、口径はやや不安がある。内外面共に回転横ナデを施す。胎土は泥質で、焼成は軟質。色調は黄灰色を呈する。11は内外面共に回転横ナデを施す。胎土は泥質で、焼成は軟質。色調は外面が白灰色で内面が淡橙色を呈す。小



第125図 三雲番上330番地2次1号住居跡実測図 (1/60)

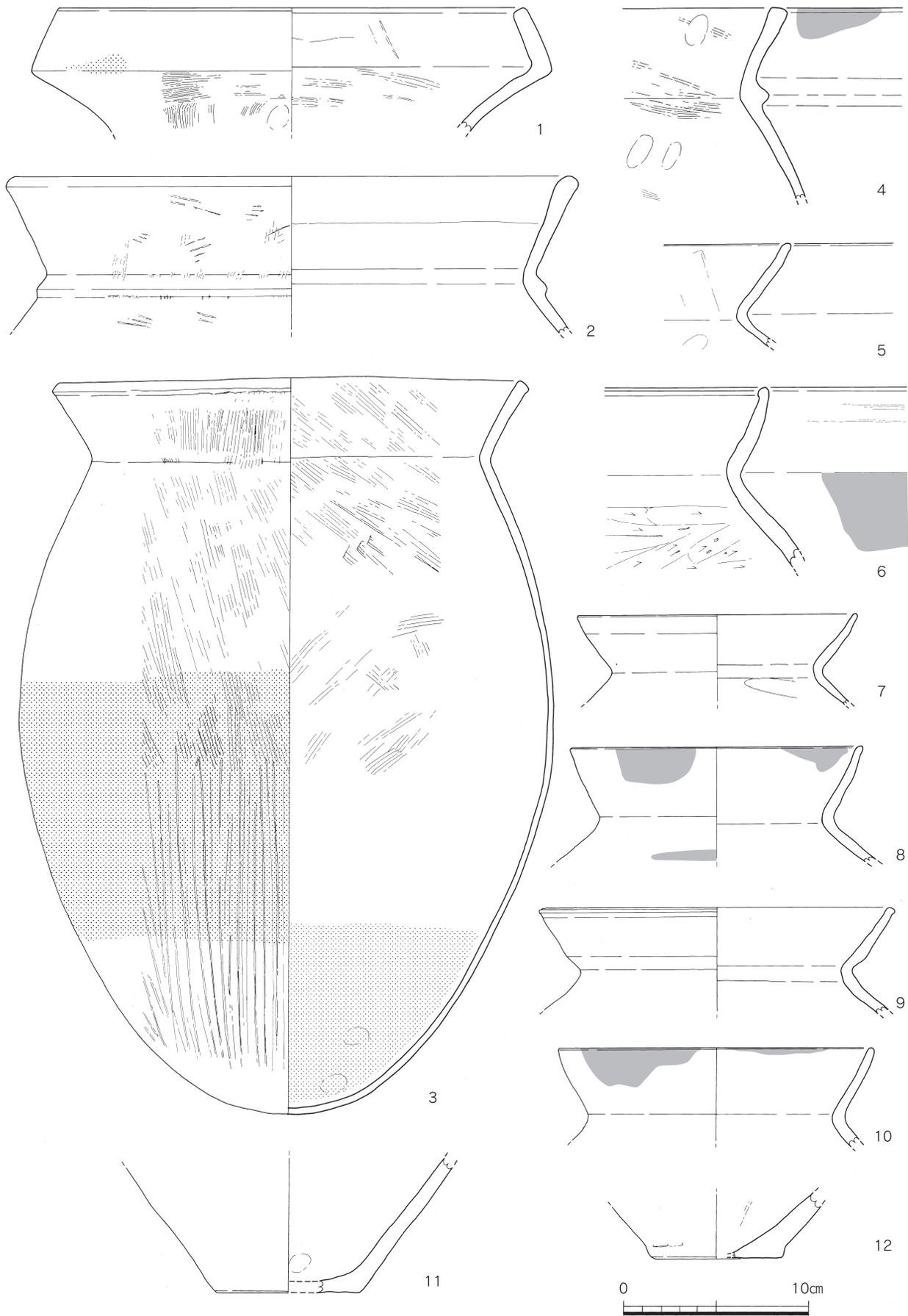
片であるが直径はやや大型のものと考えられ、大型の盆などが該当しようか。

12は三韓土器短頸壺の底部である。外面は格子タタキを施し、内面はケズリ状の強ナデとオサエ痕を残す。胎土は精選、焼成は軟質である。外面は灰色、内面は黄灰色を呈す。

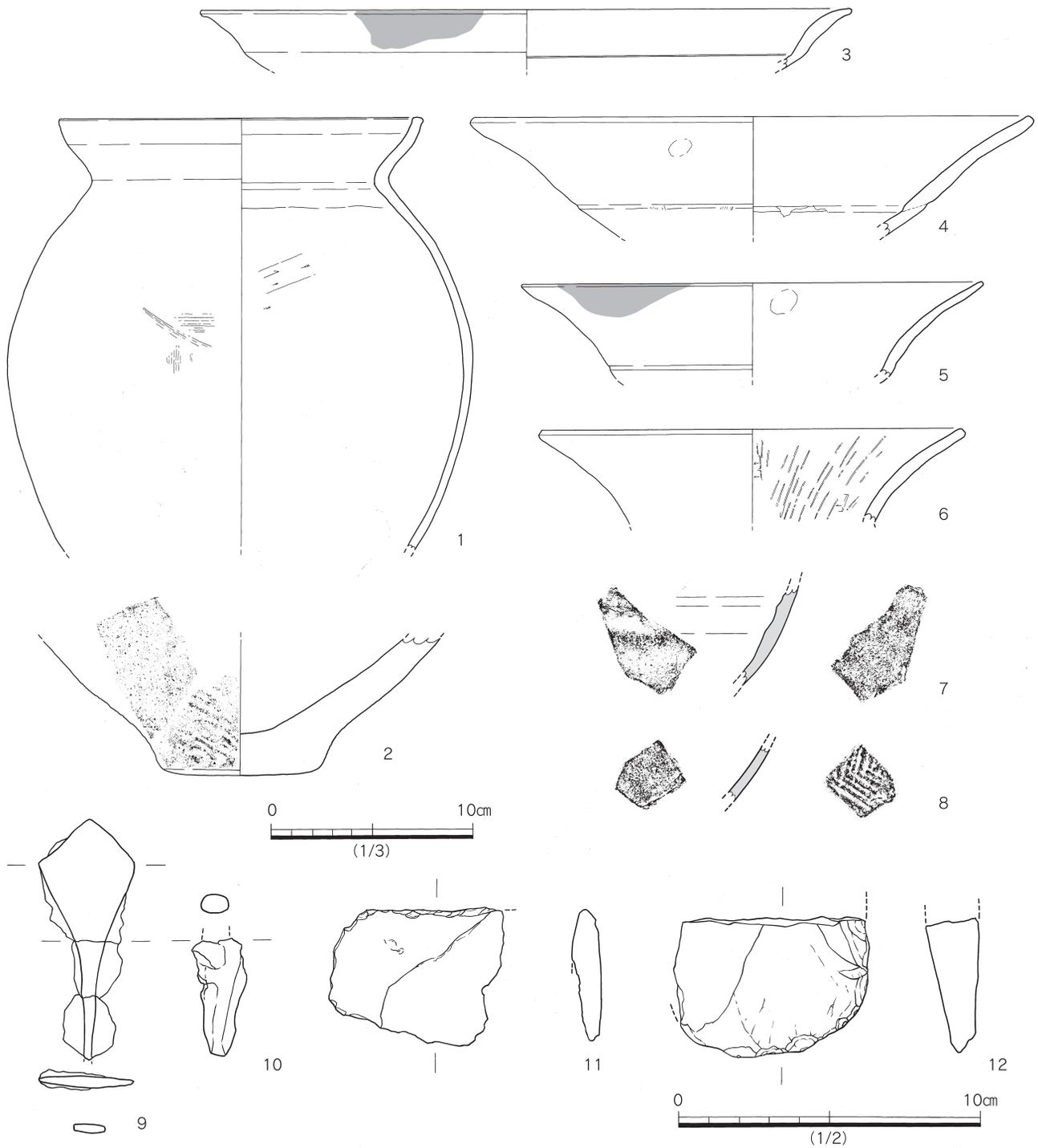
第121図1は須恵器の礎である。調査区南側で確認された1号溝の延長線上に位置する砂に囲まれたベルトから底部を上にした形で出土したため、1号溝に伴う可能性がある。口縁部を欠くが、全体の残りはよい。頸部と胴部最大径の箇所に波状文を施し、胴部に円形の透かしを入れる。底部は磨滅しているが手持ちヘラケズリを施す。2は棒状の土製品である。3は把手か。湾曲しており、表面に刻目を施す。4は杵形器台の突出部とも考えられるが、突出部が大きいため土製品扱いとした。表面にはタタキを施す。

5は両刃石斧の未製品か。前面に調整剥離を行なう段階で下半分が割れたものか。6は砂岩製の砥石である。上から右側面を欠くが、残りの面はすべて砥石として用いている。7も砥石の破片である。8も砥石で一面のみ残す。9も砥石の小片である。10は円盤状の結晶片岩である。未加工であるが紡錘車の素材と思われる。11は紡錘車の未製品である。表裏面共に丁寧な研磨を施すが、側面はやや粗い研磨の状態である。12は紡錘車の小片。13は紡錘車の1/2程度の破片である。端から2mm程度の箇所にケガキかコンパス状の工具で円形に線が刻まれている。三雲・井原遺跡では番上II-6や石橋II-11・12で同様な円文を刻む紡錘車が出土している。

14は板状鉄製品である。左側を欠くが、現存長6.8cm、幅3.2cm、厚さ6.5mmで、断面長方形を呈する。鉄素材か。15も板状鉄製品であるが、錆ぶくれで詳細不明である。16はヤリガンナで断面半月状である。なお、包含層7-E区から青紺色の小玉が1点出土している。



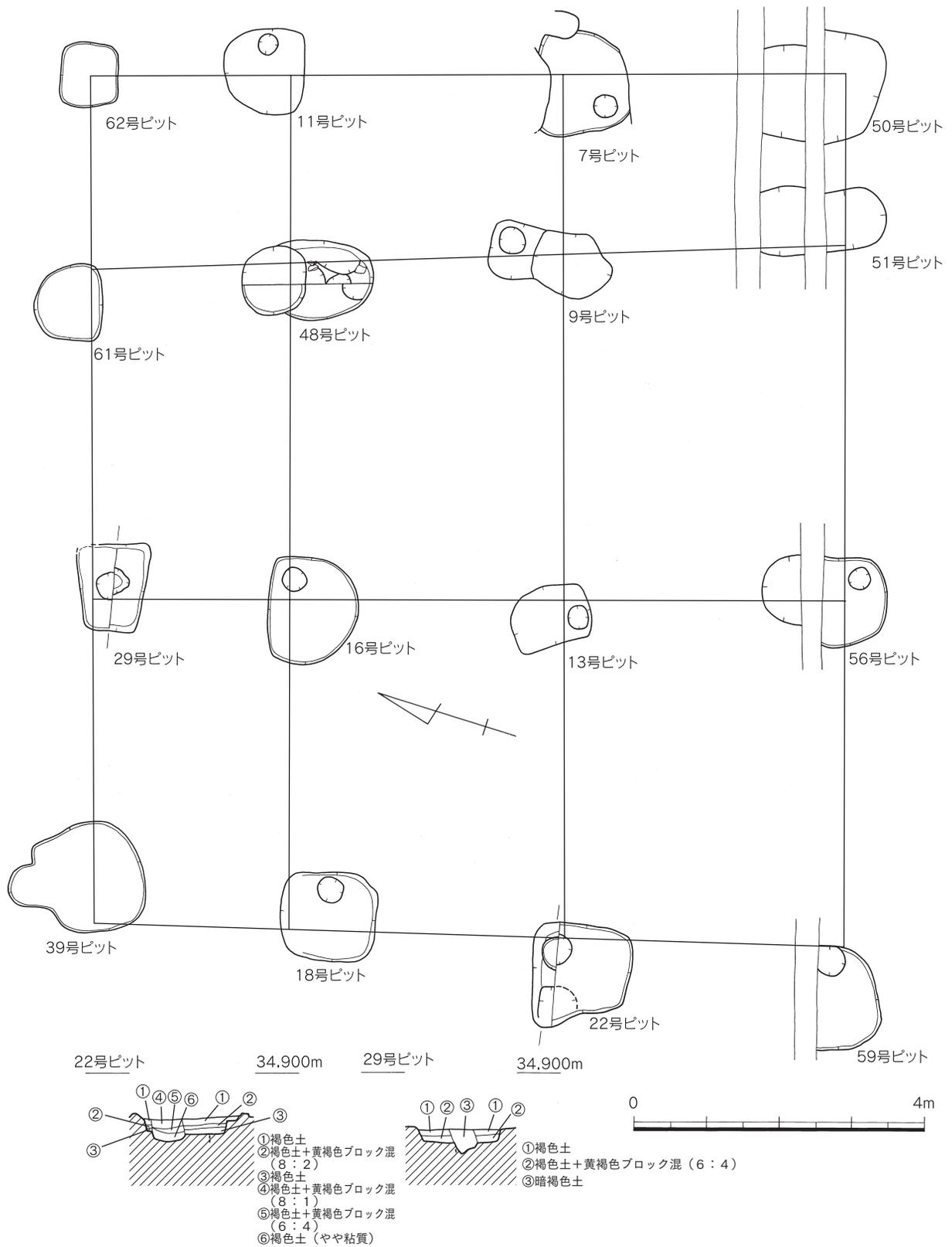
第126図 三雲番上330番地2次1号住居跡出土遺物実測図1 (1/3)



第127図 三雲番上330番地2次1号住居跡出土遺物実測図2 (1/2・1/3)

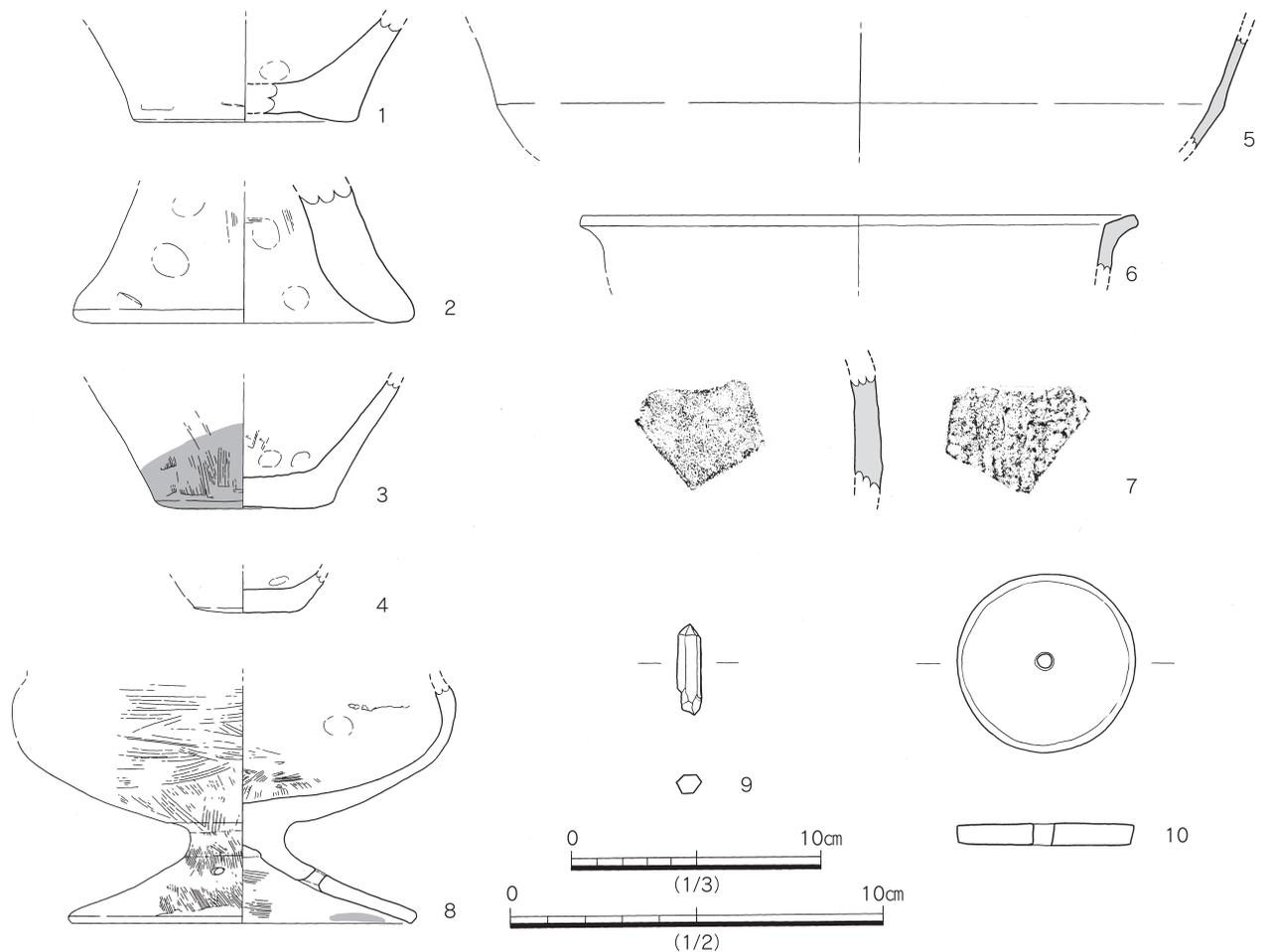
(7) 排水溝出土遺物

発掘調査に際しては調査区を取り囲む形で排水溝を設定した。第122・123図は排水溝から出土したものである。第122図1は壺の頸部の小片である。頸部の付根に棒状工具の小口を押し付けた形で列点を施し、その上に幅2～3mmの沈線を巡らせる。土器の胎土は通常のもので、角閃石等は含まない。弥生時代後期の瀬戸内系土器か。2・3は壺の底部である。いずれも平底で、2の外面に丹塗りを施す。4～7は甕の上半部である。4は小型の甕で、口縁の広がりも小さい。5・6は口



第128図 三雲番上330番地2次大型掘立柱建物実測図 (1/80)

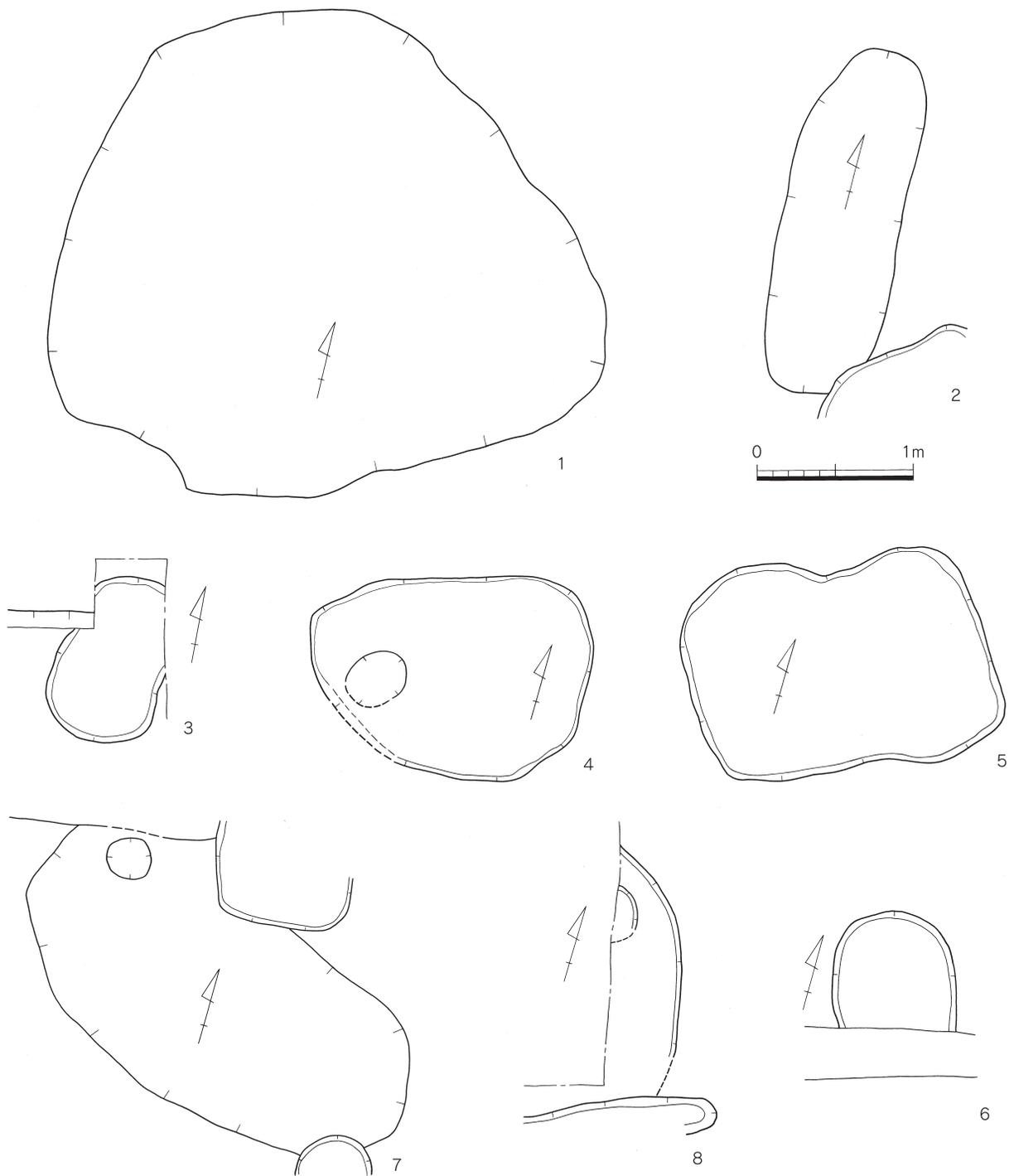
縁部の下に三角突帯を巡らせる甕である。7は丹塗りの甕で、口縁端部に刻目を施す。8は甕の底部である。9は鉢の上半部である。球状の胴部をもち、頸部でしまる。頸部の内外面に稜が入り、



第129図 三雲番上330番地2次大型掘立柱建物出土遺物実測図 (1/2・1/3)

口縁部は広がりながら立ち上がる。10は椀である。素口縁で、丸底である。11は器台の脚部である。脚柱部は広がりながら下部にいたり、脚裾部に向かって大きく広がる。外面はタタキ、内面はオサエとナデを施す。

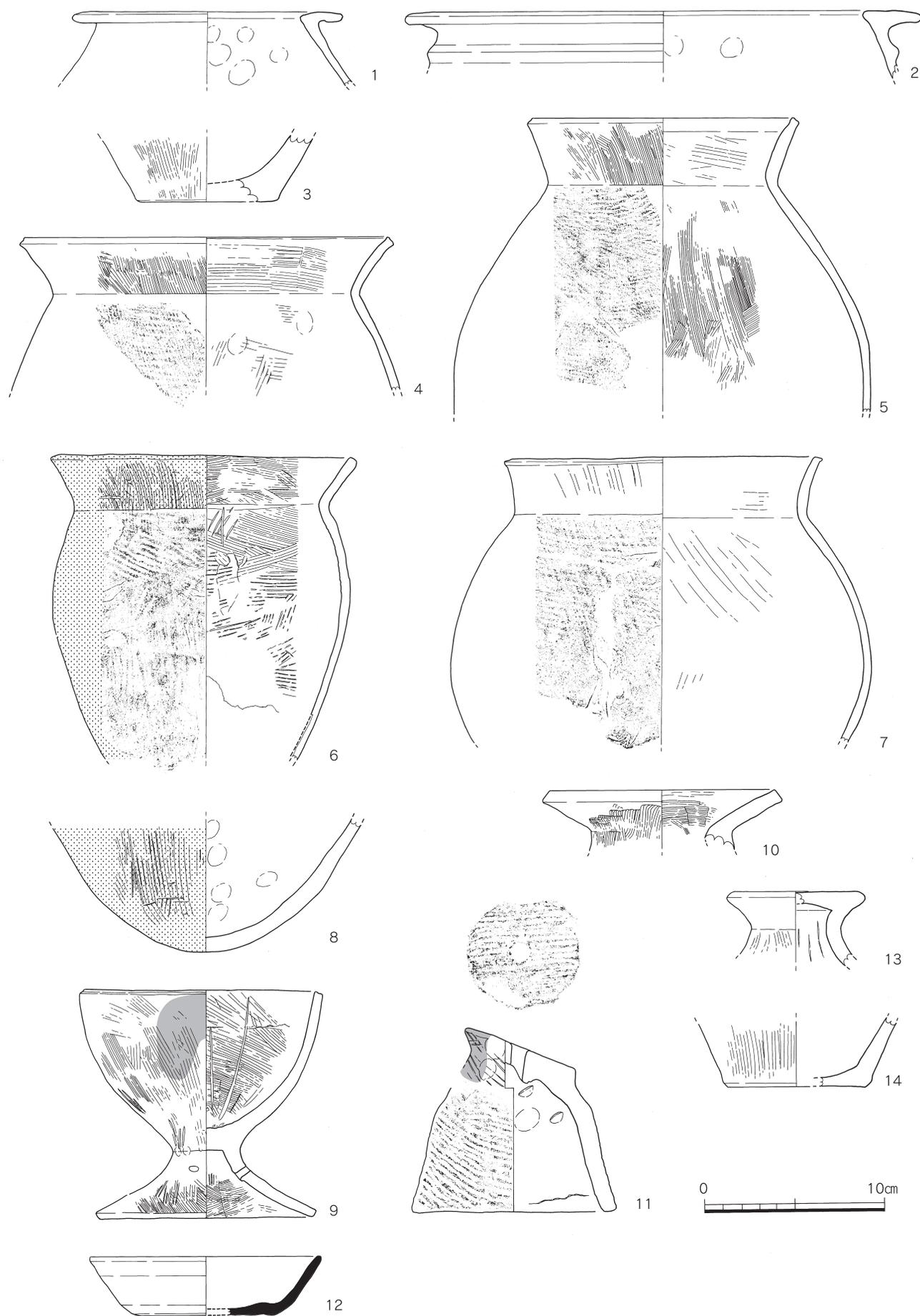
第123図1は鉄刀の茎部分である。目釘穴は無く、残りの状態は良い。断面は長方形で、破断面は捩れがある。現存長6.3cmを測る。2は棒状鉄製品である。全体が錆に覆われるが、長さ6.0cmで、断面は隅丸方形を呈する。3は鉄釘状の鉄器で、頭部を逆L字状に折り曲げる。先端部は鋭い。長さ5.5cmを測る。4は棒状鉄製品である。頭部はひと回り大きくなるが、全体が錆に覆われ詳細不明である。先端を欠く。現存長4.0cmを測る。5は砥石である。断面は長方形を呈するか。砂岩製で、表面はややざらつきがある。6は角柱状を呈する石器未製品である。下部が割れているが、左下端部に研磨痕が残り、本来の大きさを留めている。石の目は水平に入り、断面は横長の長方形である。器表面には敲打痕を全面に残す。当初は柱状片刃石斧の未製品と考えたが、石の目の入り方や断面形が異なる。砥石の未製品の可能性もあろうか。長さ21.0cm、幅5.0cm、厚さ3.7cmを測る。石材は砂岩ホルンフェルスである。



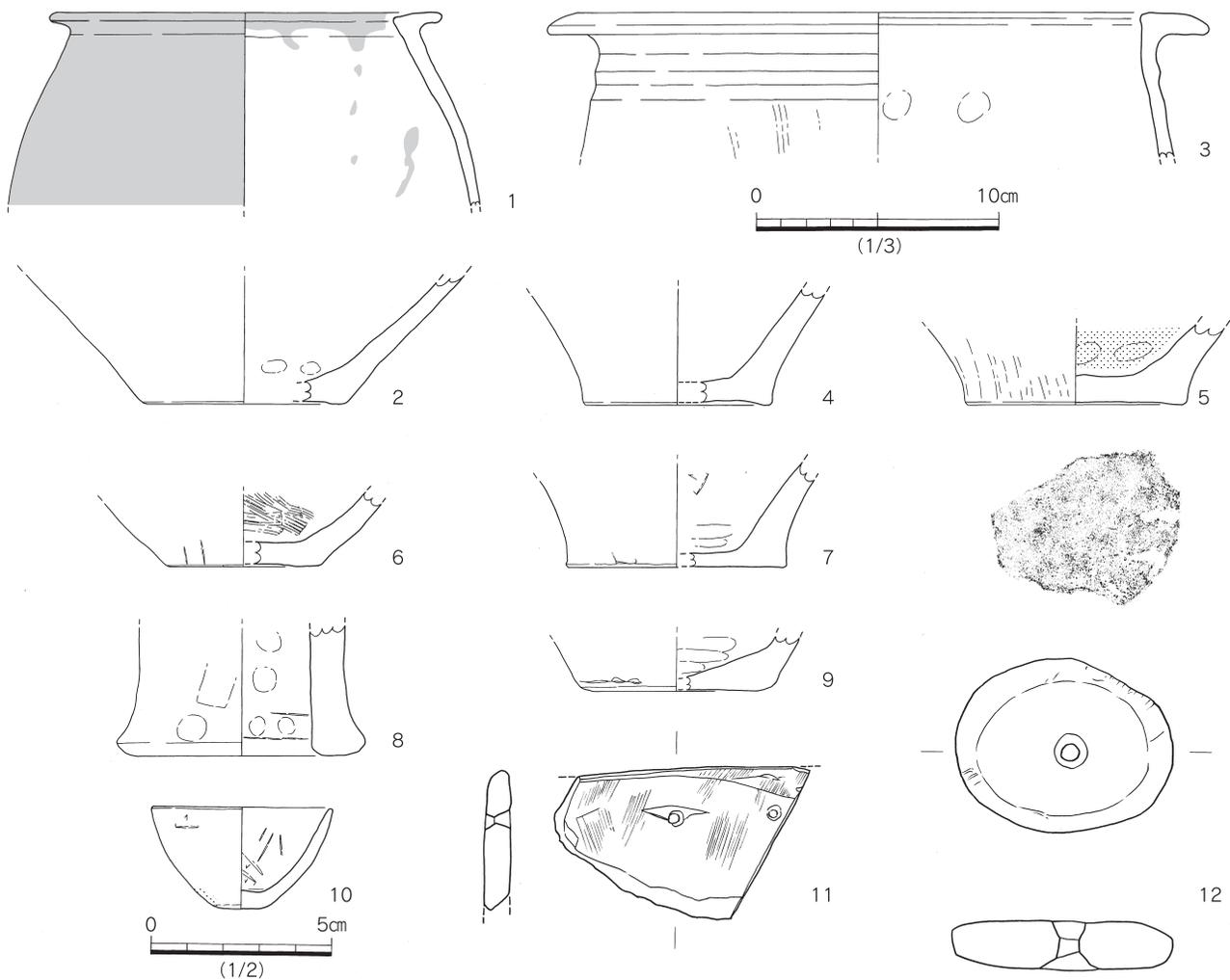
第130図 三雲番上330番地2次土坑実測図 (1/40)

【参考文献】

柳田康雄1985「銅鋤先」『弥生文化の研究』5 道具と技術 I



第131图 三雲番上330番地2次1～3号土坑出土遺物実測図(1/3)



第132図 三雲番上330番地2次4～8号土坑出土遺物実測図(1/2・1/3)

Ⅲ. 番上地区330番地2次調査

1. 調査の概要

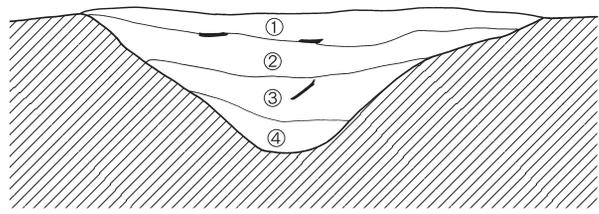
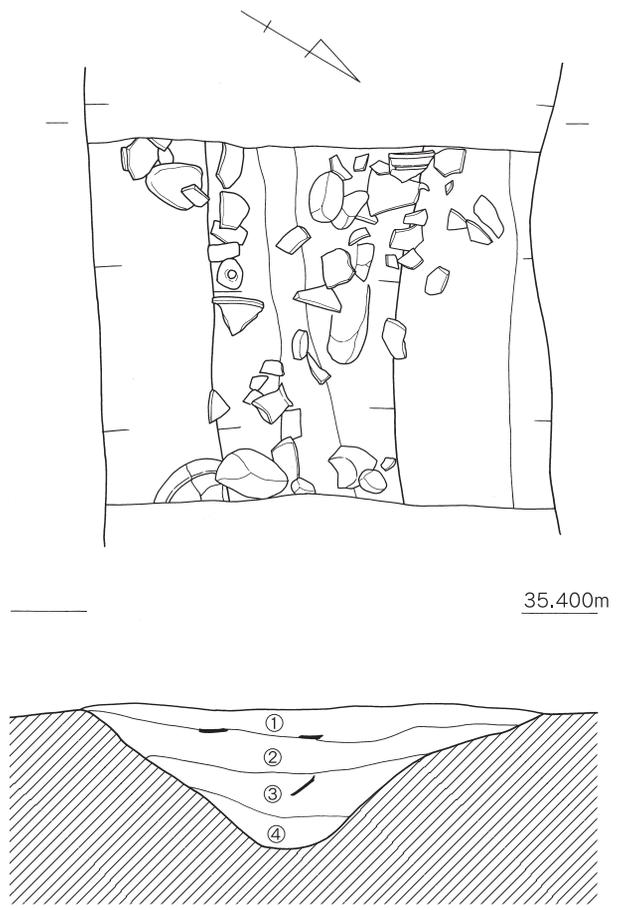
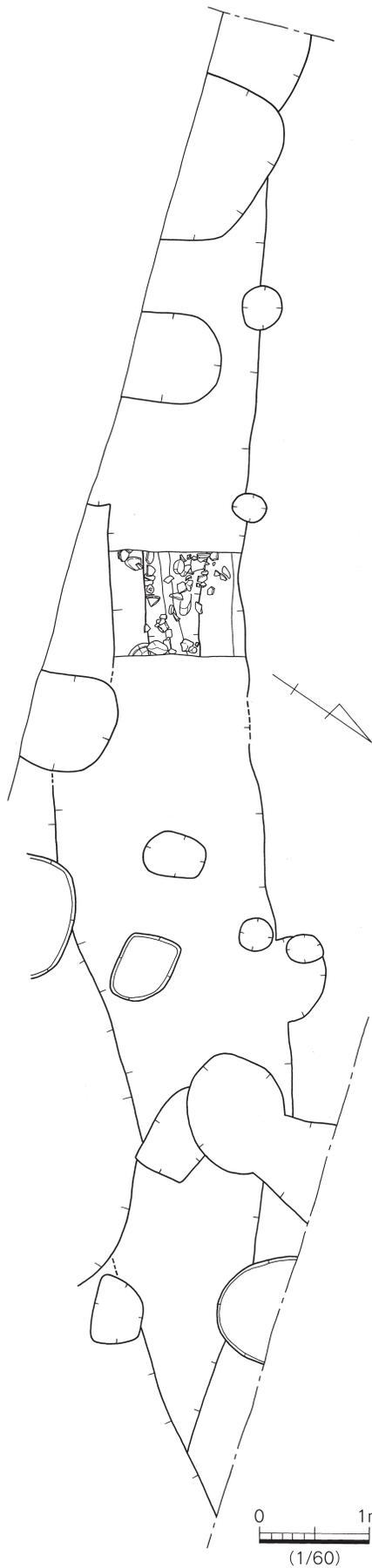
平成26・27年度の発掘調査で、土器溜りの大きさ等を確認することができたとともに、楽浪系土器も多く出土し、楽浪郡や帯方郡から渡来した人々がこの近辺に滞在した可能性がより高くなってきたため、平成28年度は前年度とおなじ330番地の東側の調査を実施した。当初、南北10.8m、東西26.2mの長方形の調査区を設定したが、調査の過程で大型掘立柱建物が確認されたために、調査区を南北にそれぞれ拡張した(第124図)。

調査区内では住居跡が全面に展開し、それを切る形で掘立柱建物が築かれており、西側の土器溜りの埋没時期とは差があり、直接的な関係は少ないと判断される。なお、掘立柱建物の南側には全長77.5m、周溝も含めると全長100m近くになる端山古墳が位置しており、古墳に関連する建物の可能性も出てきた。

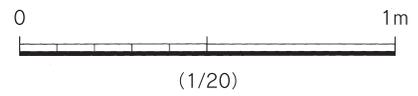
2. 遺構と遺物

(1) 住居跡

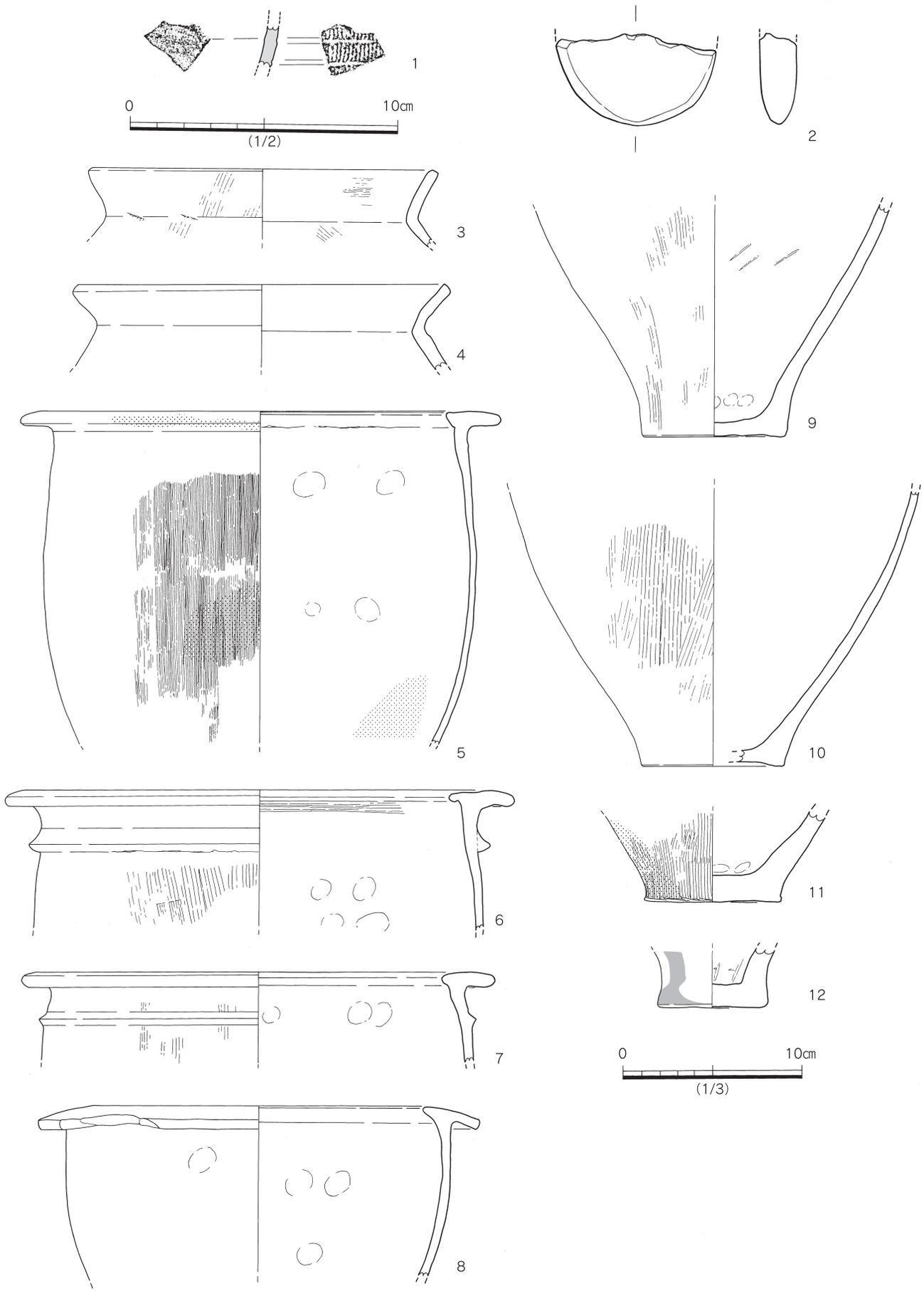
住居跡は調査区の全域に広がり、かつ切り合いが激しかったため、住居プランの確認はかなり困



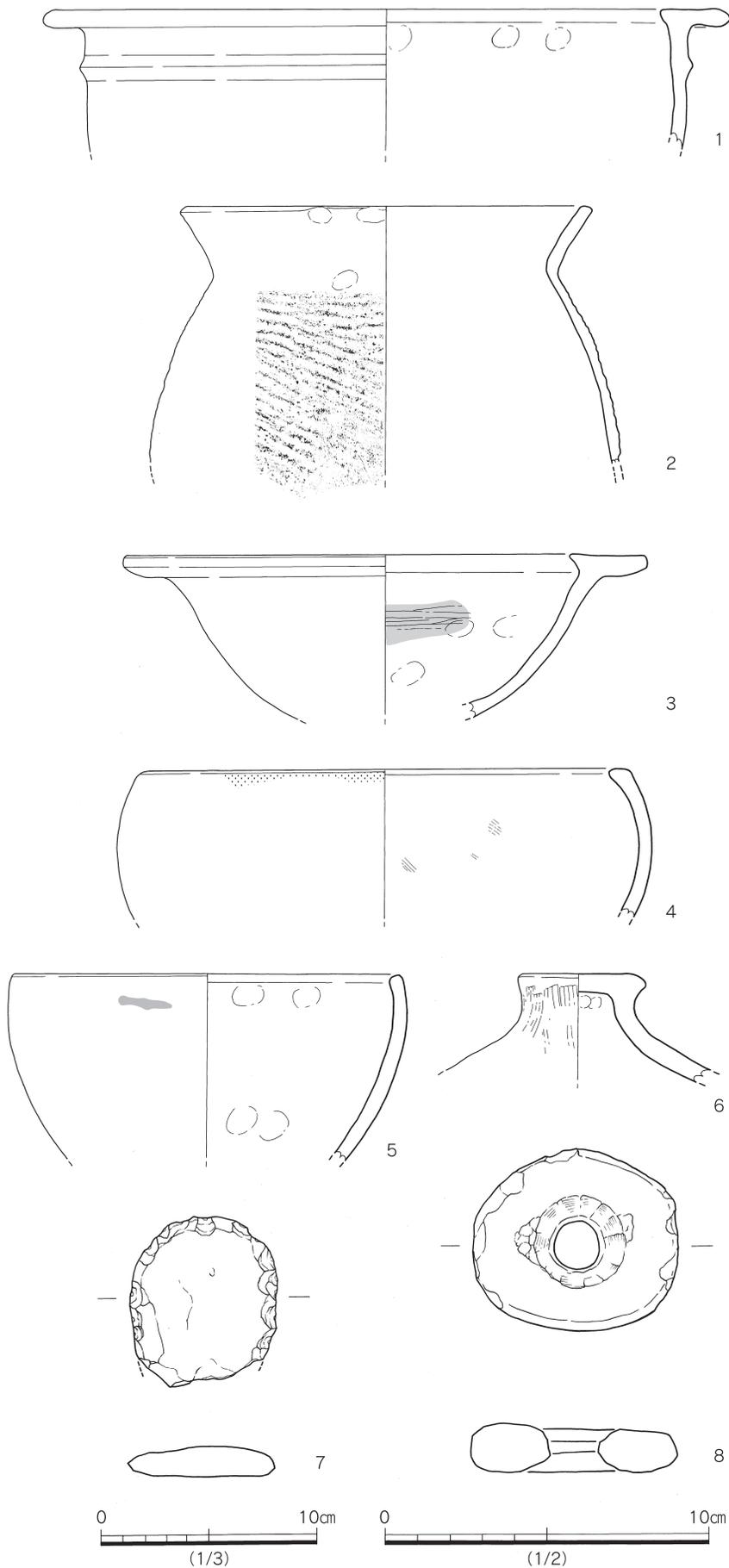
- ①暗褐色土 (やや粘質)
- ②褐色土
- ③明褐色土 (やや砂質)
- ④黄褐色土 (やや砂質)



第133図 三雲番上330番地2次3号溝全体図・トレンチ平面図・土層断面図 (1/20・1/60)



第134图 三雲番上330番地2次1～3号溝出土遺物実測図 (1/2・1/3)

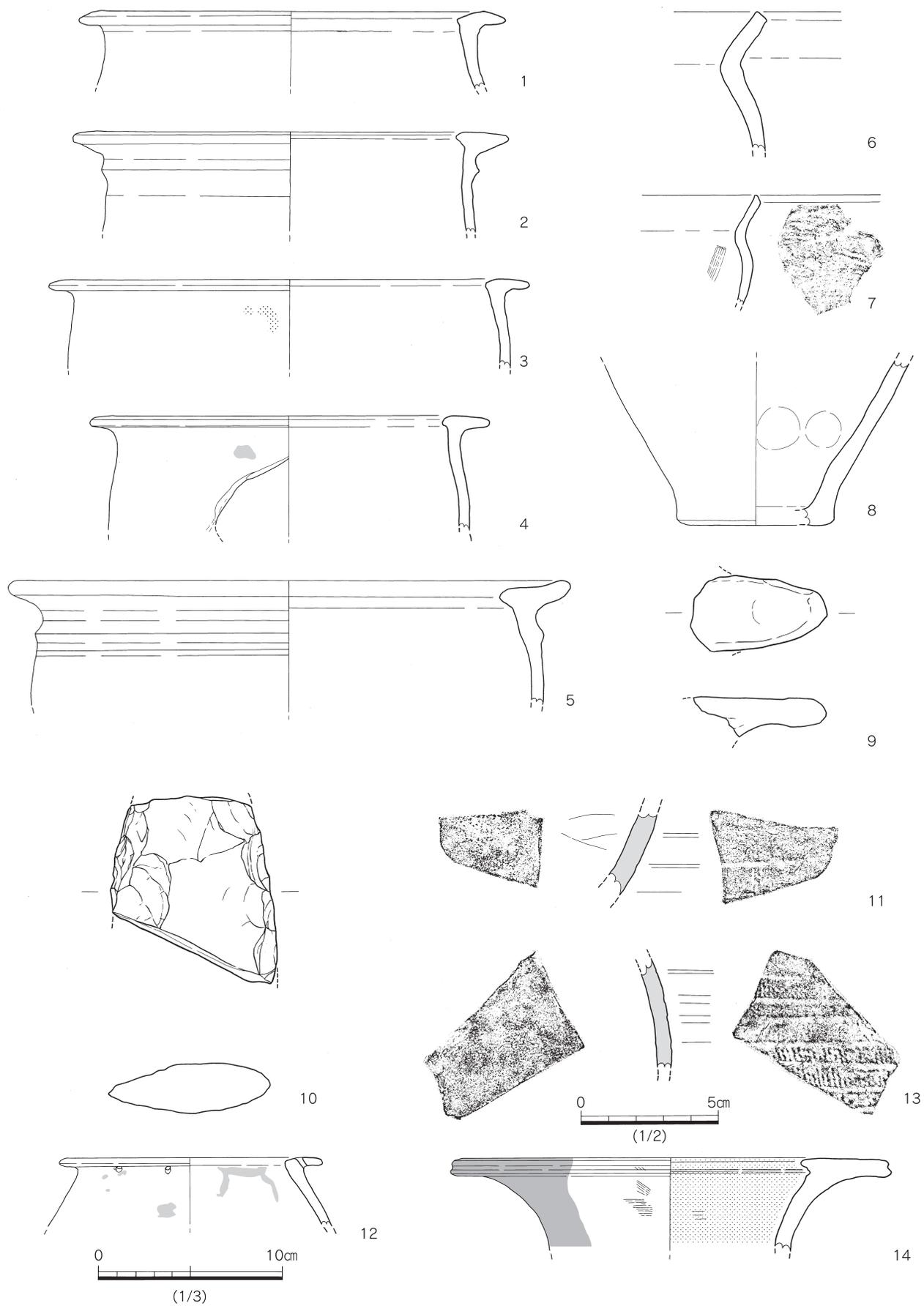


第135図 三雲番上330番地2次3号溝出土遺物実測図 (1/2・1/3)

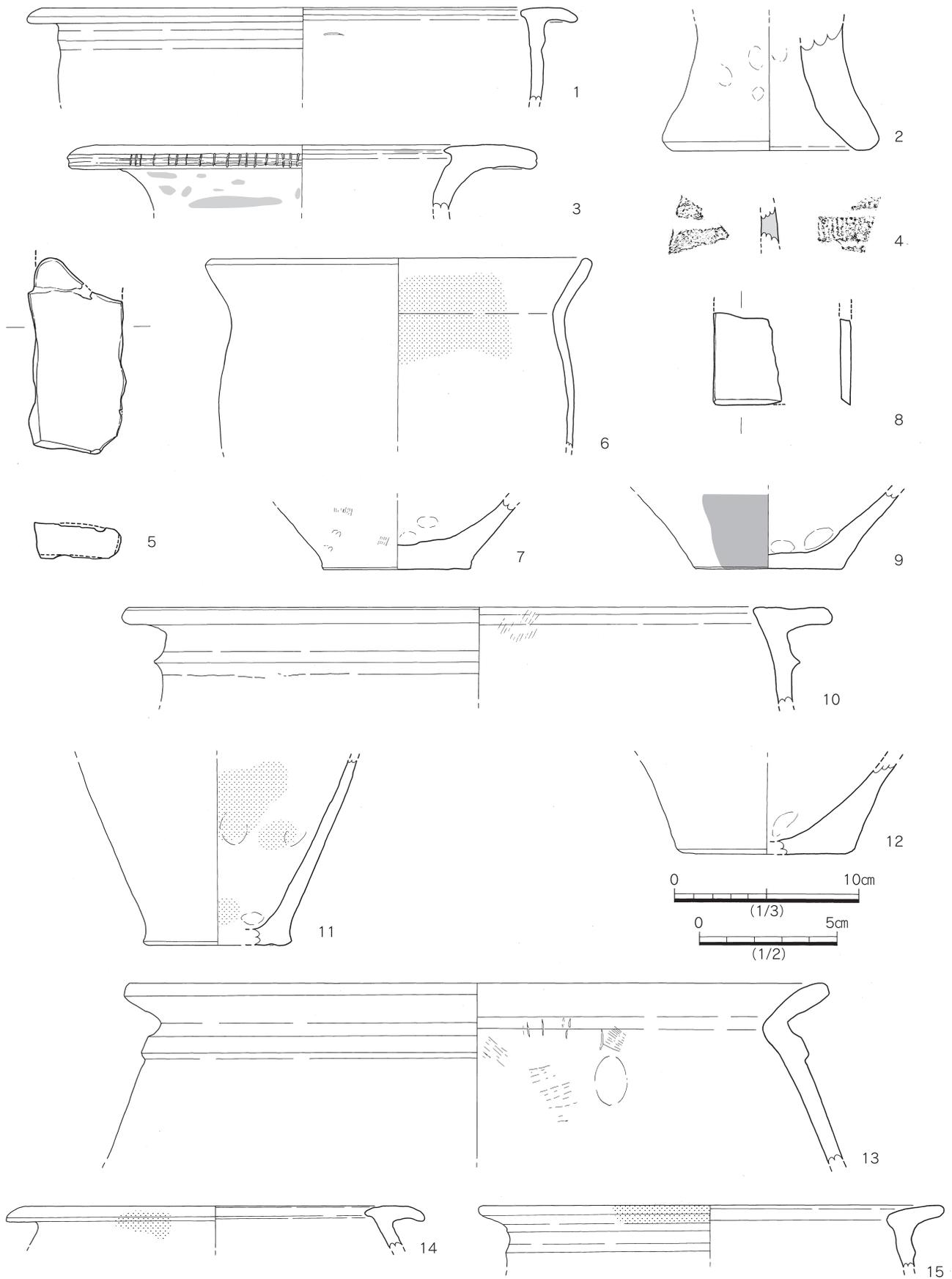
難であった。また、本調査は保存が前提であるため、遺構の掘り下げは、極力避ける形ですすめた。従って、実際に掘り下げて調査を行ったものは1棟のみである。

1号住居跡 (第125図) 調査区の中央に位置する方形プランの住居跡で、南北方向に長軸をもつ。検出段階では長方形プランであると認識したが、切り合い等があり、実際には南北3.84m、東西3.96mの方形に近いプランを確認した。実際に掘り下げた箇所は南側半分で検出面から30cmほどで床面に達したが、床面でも直線的なラインが複数確認され、下にも住居跡が展開していることがわかる。

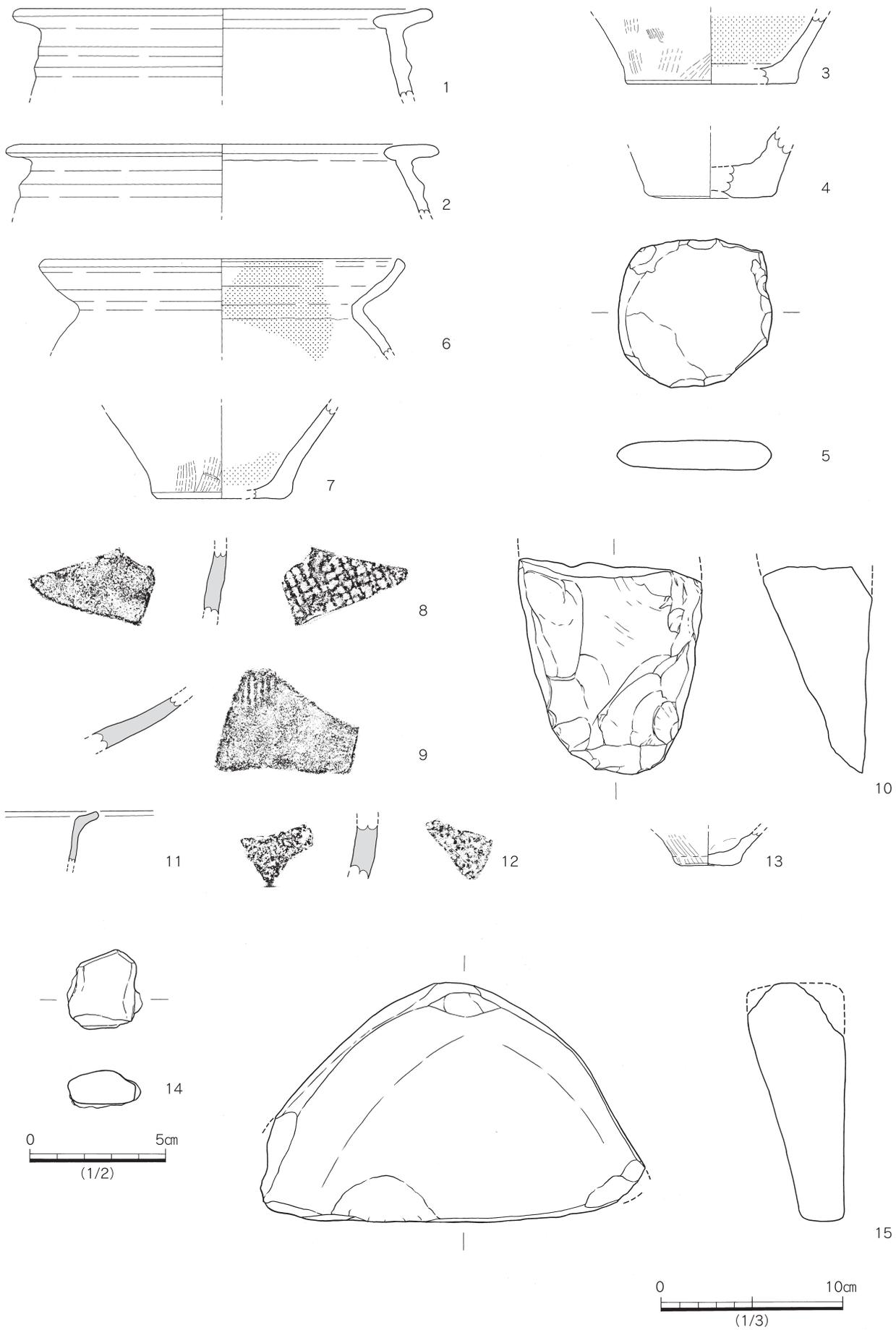
出土遺物 (第126・127図) 第126図1は複合口縁壺である。屈曲部は明瞭で、内外面に稜が入る。外面には縦ハケを施す。2は大型の甕の口頸部である。口縁端部は丸みを帯び、頸部に三角突帯が巡る。外面にはタタキを施す。3はやや胴の張る長胴甕である。頸部は締まり、内外面に稜が入る。



第136図 三雲番上330番地2次包含層1A～2C区出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第137图 三雲番上330番地2次包含層2C～4B区出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第138図 三雲番上330番地2次包含層4B～6A区出土遺物実測図 (1/2・1/3)

口縁部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁端部は方形に収める。底部は丸底である。外面は縦ハケと擦過痕を残し、内面は斜ハケを施す。4は2と同様な形態の甕である。5～10は布留甕の口縁部である。6はやや新しいか。11・12は平底の底部である。

第127図1は布留甕である。口縁端部は水平で、丸みをもつ口縁の下に、中位に最大径をもつ。2は大型甕の底部である。不安定な平底で、外面にタタキを施す。3～5は高坏の坏部である。3の反転部は短い、4は坏部の半分程度の反転部となる。5はやや径が小さく深い坏か。6は鼓形器台か。内面に縦ミガキを施す。7は楽浪系土器である。内外面に回転横ナデを施すが、内面により強く痕跡を残す。壺か。8も楽浪系土器である。外面に縄蓆文タタキを施し、内面にオサエ痕を残す。9は圭頭鏃である。刃部が山形を呈し、関は無く、自然と茎部に移行する。茎部末端を欠く。10は棒状鉄製品である。11は輝緑凝灰岩の自然面を残す破片である。12は打製石斧か。

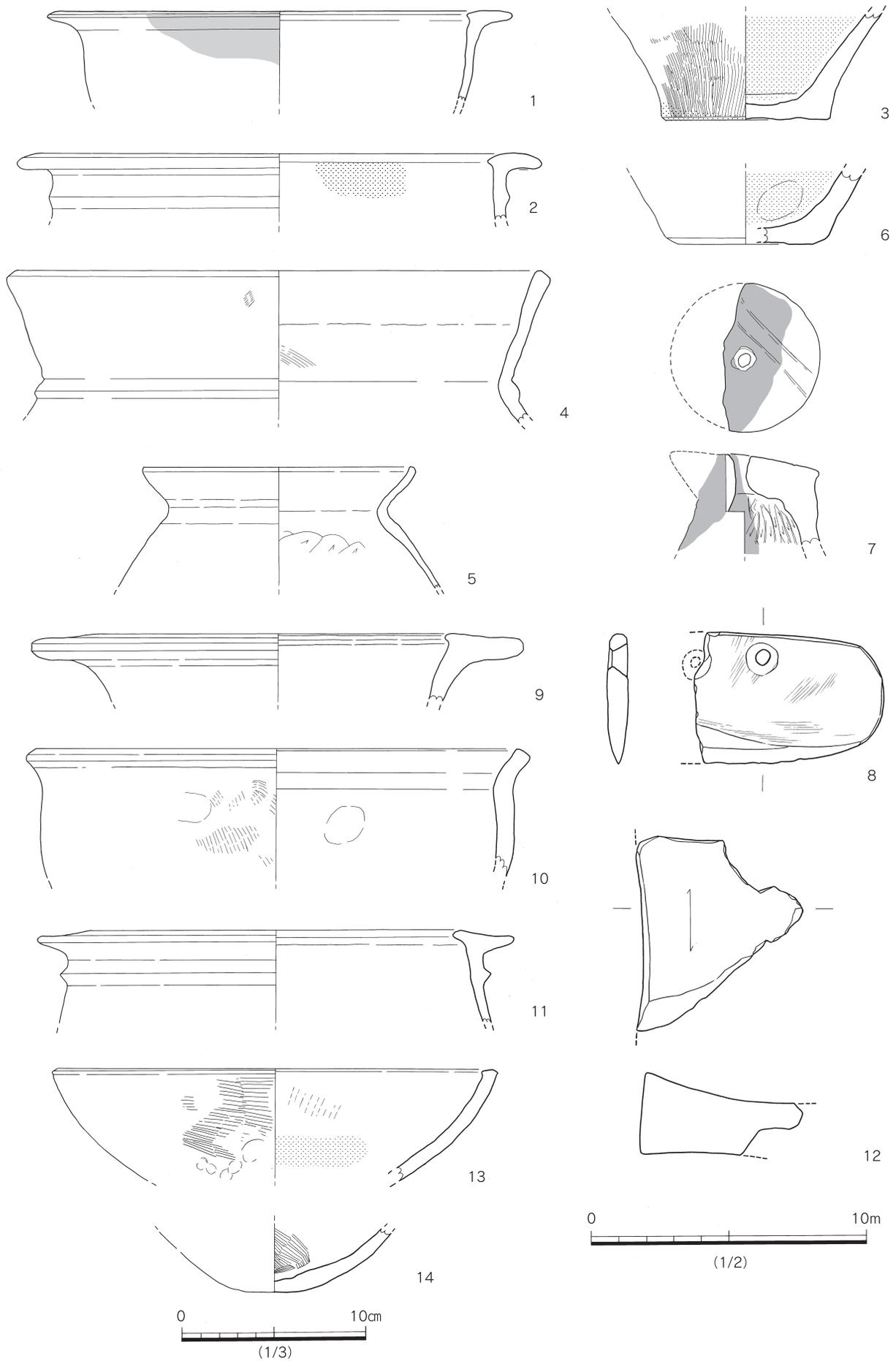
(2) 掘立柱建物 (第128図)

調査区の中央部で確認された掘立柱建物で、各住居跡を切る形で建てられている。個々の柱穴は一辺80～100cm前後の方形、長方形を呈する。規模は最大で3間×3間であるが、東側の柱間隔が狭いため、3間×2間の東側に庇をもつ形の建物になる可能性も高い。面積を計算すると、総柱建物の場合は南北10.4m、東西11.6m、面積120.64㎡となり、庇付建物の場合は南北10.4m、東西9.6m、面積99.84㎡となる。柱穴は2ヵ所半裁して土層を確認した。直径40cm前後の柱痕跡が確認され、褐色土に黄褐色がブロック状に混じるもので埋め固められていたことを確認した。

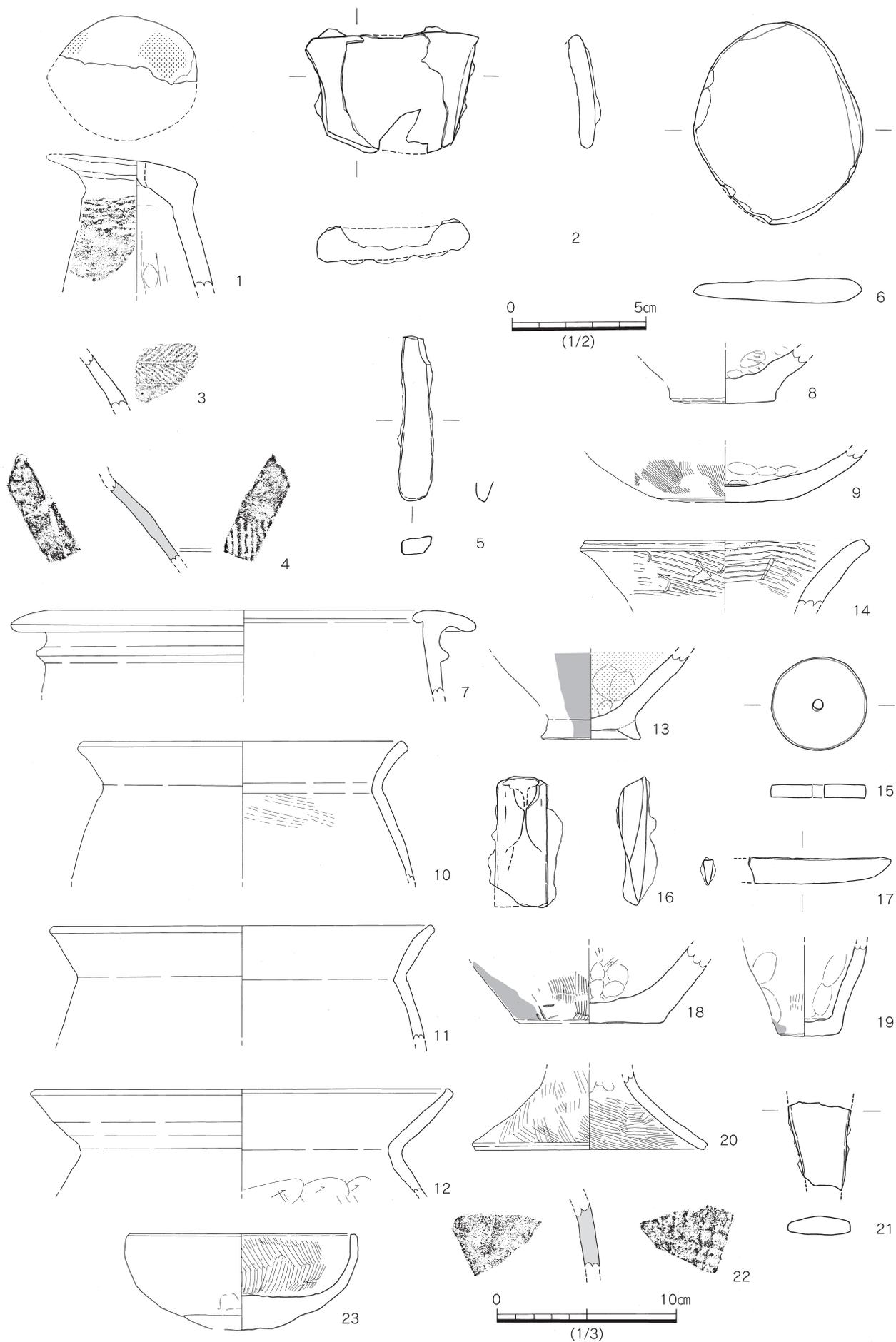
出土遺物(第129図) 1・2は13号ピットから出土した。1は甕の底部で、2は器台の脚裾部である。3は59号ピットから出土したもので、甕の底部である。4は61号ピットから出土した甕の底部である。5・6は18号ピットから出土した楽浪系土器である。5は内外面共に回転ナデを施す。胎土は泥質で、焼成は軟質。色調は内外面共に黄灰色を呈する。6は椀である。口縁端部が屈曲し、内外面共に回転横ナデを施す。胎土は泥質で、焼成は軟質。色調は内外面共に黄灰色を呈する。7は8号ピットから出土した三韓系土器である。外面に格子タタキ、内面にオサエ痕を残す。焼成は軟質で、色調は内外面共に灰色であるが、断面は黒色を呈す。平面確認では8号ピットは7号ピットを切るが、両者をまとめて一段下げた段階で出土したものであることから報告するが、参考資料扱いが適切であろう。8・9は48号ピットから出土したものである。8は脚付きの鉢か。肉厚な短脚で、円形透を三方向にあける。鉢は肩が張る。内外面ともにハケメを主体とした調整を行なう。9は水晶の原石である。長さ2.4cm、厚さ5.0mmを測る。先端から6mm程度の透明度が高く、直径5・6mmの玉を作ろうとしたものか。三雲・井原遺跡では仲田地区で水晶原石3点(時期不明)、八龍地区で算盤玉2点(1点は古墳前期)と算盤玉未製品3点(時期不明)が出土している。10は29号ピットから出土した紡錘車で、縁から2mm程度の箇所にも円文を刻む。

(3) 土坑

土坑はいずれも平面確認、もしくは一段のみ下げた状態で調査を終えている。そのため、出土遺物は土坑の最上層からの出土となる。



第139図 三雲番上330番地2次包含層6B～7C区出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第140図 三雲番上330番地2次包含層7G～8G区出土遺物実測図 (1/2・1/3)

1号土坑（第130図1）調査区の西端部で確認された大型の土坑で、長軸3.54m、短軸3.04mを測る楕円形の土坑である。

出土遺物（第131図1～3）1は無頸壺の口頸部で、胴の張りが強い。2は甕の口縁部で、3は底部である。

2号土坑（第130図2）調査区北側拡張区で確認された長楕円形の土坑で、長軸2.24m、短軸0.78mである。遺構面検出が難しく、じわじわ下げているうちに土器がまとまって出土した。

出土遺物（第131図4～12）4～7は甕の上半部である。4は長胴甕で、頸部の内外面に明瞭な稜が入る。5は頸部のしまりが強い甕である。6は小型の長胴甕で、7は口縁部が直立気味の甕である。いずれも外面はタタキの後に縦ハケを施す。8は甕の底部で、尖底である。9は脚付の椀である。内外面共にハケを多用し、坏部内面には暗文状の縦ミガキが入る。10は器台の上半部。11は支脚である。外面全面にタタキを施す。12は須恵器の坏である。混入品か。

3号土坑（第130図3）調査区の東端部で確認された土坑で、長軸1.1m、短軸0.66mの隅丸方形の土坑である。

出土遺物（第131図13・14）13は蓋で、14は甕の底部である。

4号土坑（第130図4）調査区の南東側で確認された土坑で、長軸1.8m、短軸1.26mの楕円形を呈する。

出土遺物（第132図1～8）1は無頸壺で外面全面と口縁部上面に丹塗りを施す。2は壺の底部。3は甕の上半部で、4～7は甕の底部である。8は器台の底部である。

5号土坑（第130図5）調査区の中央部やや南寄り確認された土坑で、長軸1.9m、短軸1.22mの隅丸方形を呈する。中央部がやや窪むため、2つの土坑が重なっている可能性もある。

出土遺物（第132図9）9は甕の底部である。

6号土坑（第130図6）調査区中央で確認された小型の土坑である。長軸は残存部分で0.74m、短軸は0.8mを測る。

出土遺物（第132図10）10はミニチュアの鉢である。

7号土坑（第130図7）調査区の西寄りに位置する土坑で、長軸2.84m、短軸1.3mの楕円形を呈する。

出土遺物（第132図11）11は石庖丁の破片で、刃部を欠く。両面から穿孔する。

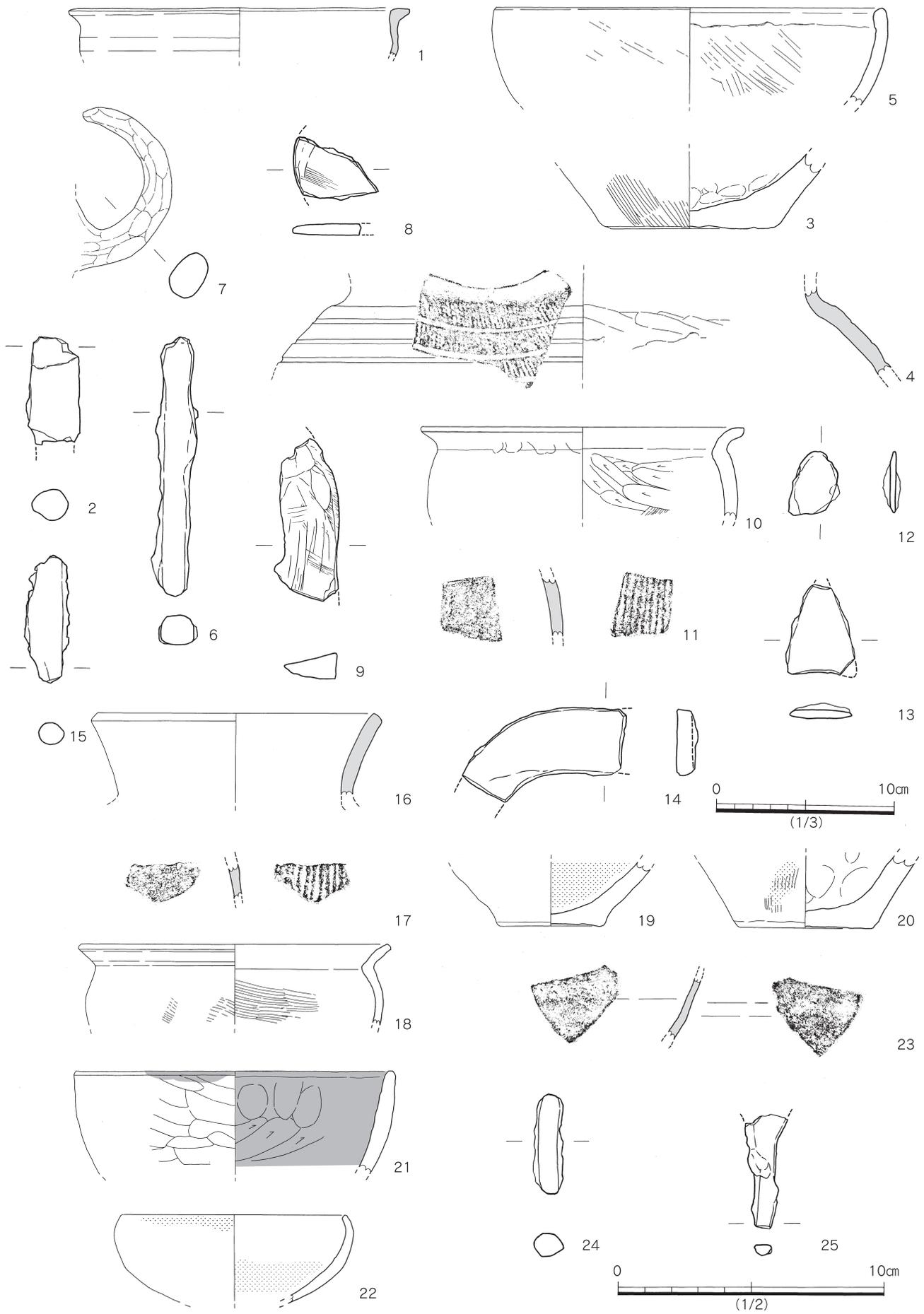
8号土坑（第130図8）北側拡張区南西隅で確認された土坑で、その大半は調査区外に伸びるものである。

出土遺物（第132図12）12は環状石製品である。白雲母結晶片岩製で、両面から穿孔する。刃部はない。同様なものが番上Ⅱ-6で3点出土しており、環状石斧として報告されている。

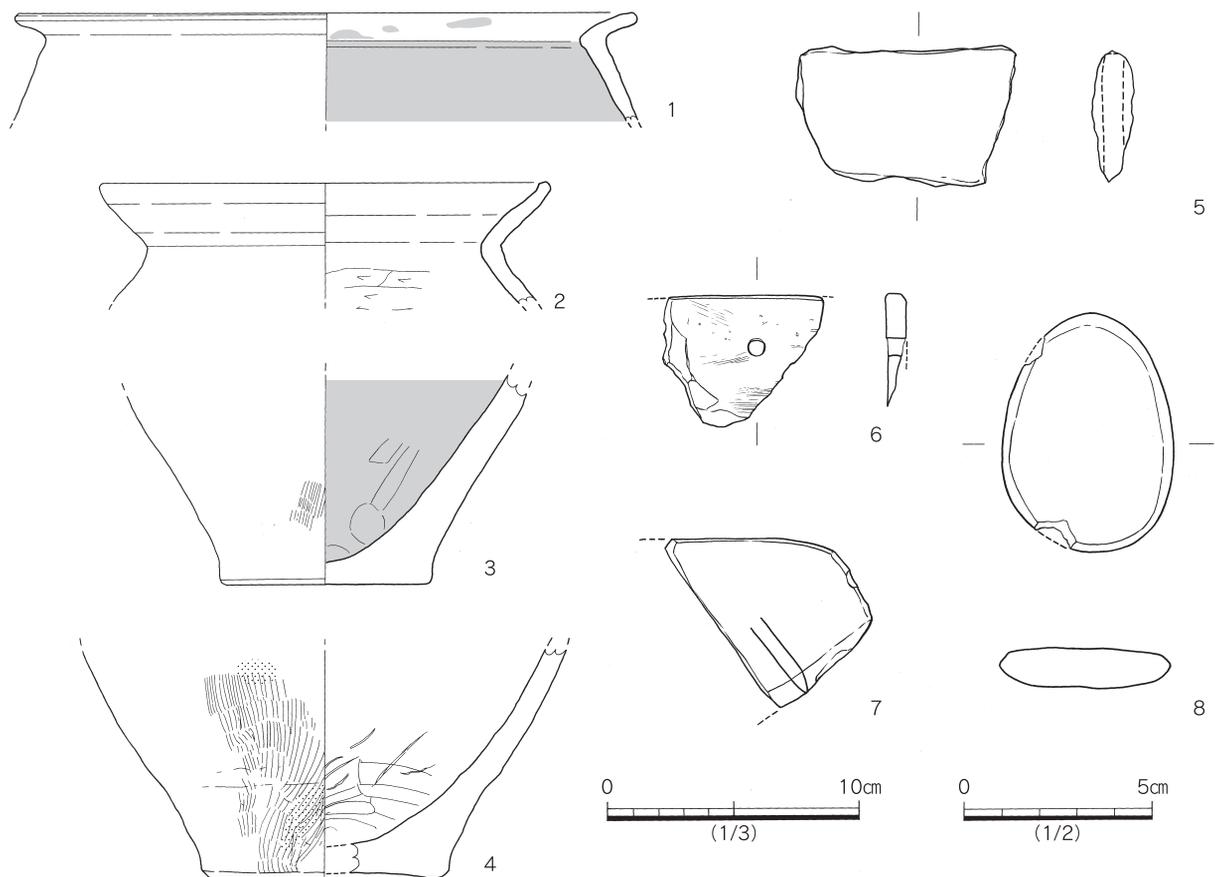
（4）溝

1号溝（第124図）1号溝は調査区の東端から東西方向に延びる溝であるが、幅20～30cm程度、深さ5cm程度で、埋土はオリーブ灰色であることから、現代の農業用に掘削された溝であると判断した。

出土遺物（第134図1）1は三韓土器の短頸壺の小片である。外面に縄蓆文タタキを施した後、



第141图 三雲番上330番地2次包含層8G ~ 12C区出土遺物実測図 (1/2 · 1/3)



第142図 三雲番上330番地2次北側拡張区包含層出土遺物実測図 (1/2・1/3)

沈線を巡らす。内面にオサエ痕を残す。

2号溝 (第124図) 2号溝も1号溝と同じ特徴をもつことから、農業用の溝と判断した。

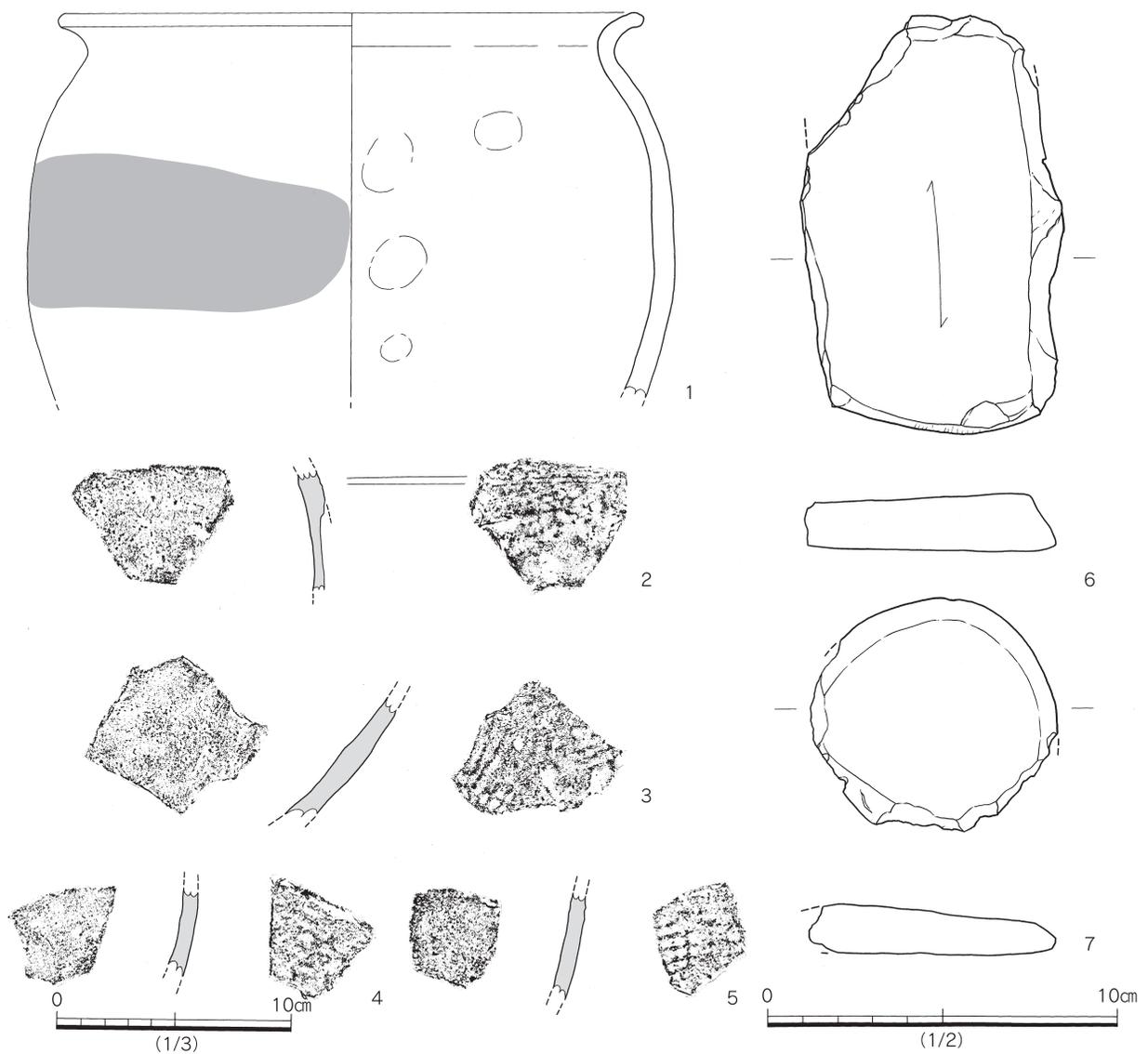
出土遺物 (第134図2) 2は白雲母片岩片である。周縁部に粗い研磨を施す。紡錘車の未製品か。

3号溝 (第133図) 調査区南側拡張区で確認された溝で、北東-南西方向に延びる。幅は60cm程度、断面はゆるい逆三角形を呈する。3号溝は調査区内で15mほど確認した。

出土遺物 (第134図3~12、第135図) 3号溝は時期と断面確認用に設けたトレンチ部分のみを発掘している。第134図3・4は甕の口縁部の小片である。いずれも頸部内外面に稜がはいる。5~8は甕の上半部である。6・7の口縁部の下には三角突帯を巡らし、8の口縁部は打ち欠かされている。9~12は甕の底部である。いずれも平底であるが、12は蓋の頂部の可能性がある。第135図1は甕の上半部である。2は長胴甕の上半部で、外面にタタキを施す。3は高坏で内面に横ミガキを施す。4・5は鉢である。6は蓋である。7は周辺部を調整剥離し、円形に作り出しているもので、紡錘車の未製品か。8は環状石製品である。白雲母片岩製で両面から穿孔する。周縁部に刃部を形成しない。

(5) 包含層

本調査では遺構の切り合いが激しかったため、少しずつ掘り下げながら遺構検出を行った。その結果、包含層として取り扱わざるを得ない遺物が出土しているが、一括して包含層出土とせず、2m×2mのグリッドごとに取り上げた。南北は北側拡張区~南側拡張区にかけて、北からH・G・



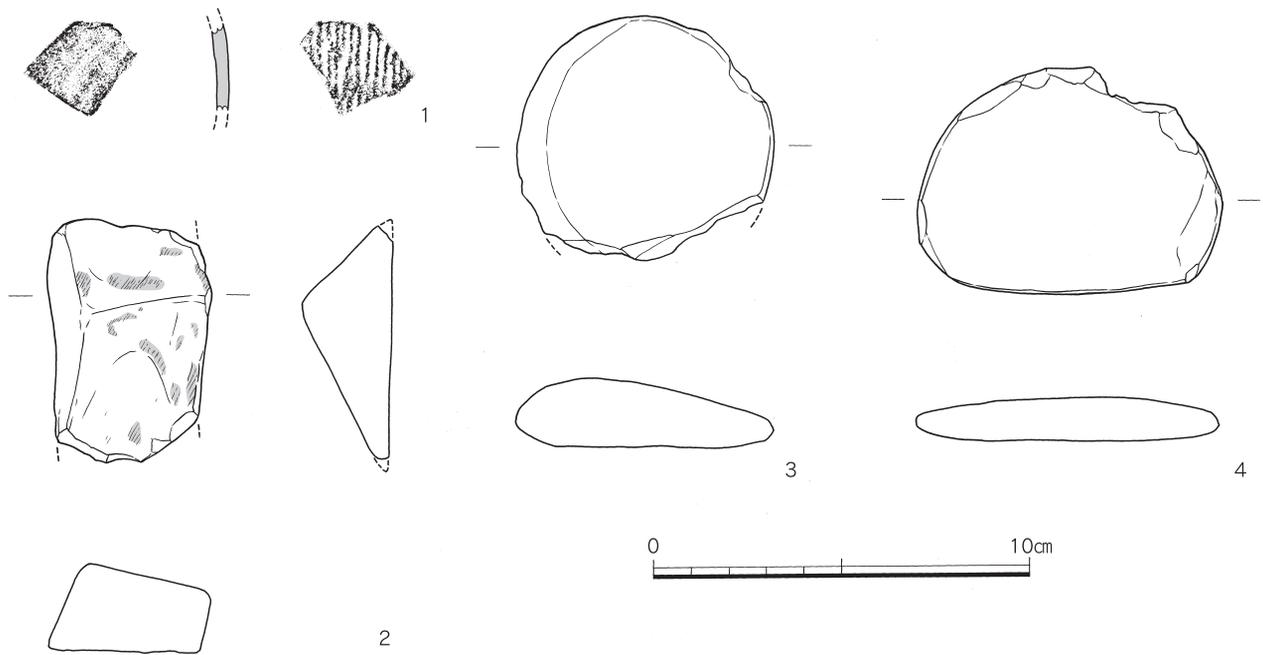
第143図 三雲番上330番地2次包含層他出土遺物実測図 (1/2・1/3)

F・E・D・C・B・A・a・bとし、東西は東側から1～12に区分し、両者を組みあわせて1 A区のように表記する (第124図)

出土遺物 (第136～145図)

第136図1・2は1 A区から出土した甕の上半部である。6は1 B区出土の甕の小片である。3～5、7～10は1 C区出土品である。3～5は甕の上半部で4は窓開の甕か。7も甕か。8は甕の底部で、9は把手状の土製品。10は打製石斧か。11は三韓系土器短頸壺片で1 D区出土。12・13は2 B区出土である。12は丹塗りの短頸壺で、13は三韓系土器短頸壺片である。14は2 C区出土の壺である。

第137図1・2は2 C区出土である。3～5は2 D区出土で、3は壺、4は三韓系土器の小片である。5は铸造品の板状鉄製品である。長さ7cm、幅3cm、厚さ1.2cmで、断面長方形を呈する。6・7は2 E区から出土したものである。8は2 F区出土の石庖丁である。表裏面共に剥離し、下部に刃部をもつ。9は3 A区出土の壺の底部。10・11は3 b区出土の甕である。13は3 B区出土の甕で、12は3 D区出土の甕底部である。第137図14・15、第138図1～4は4 B区出土の甕である。5



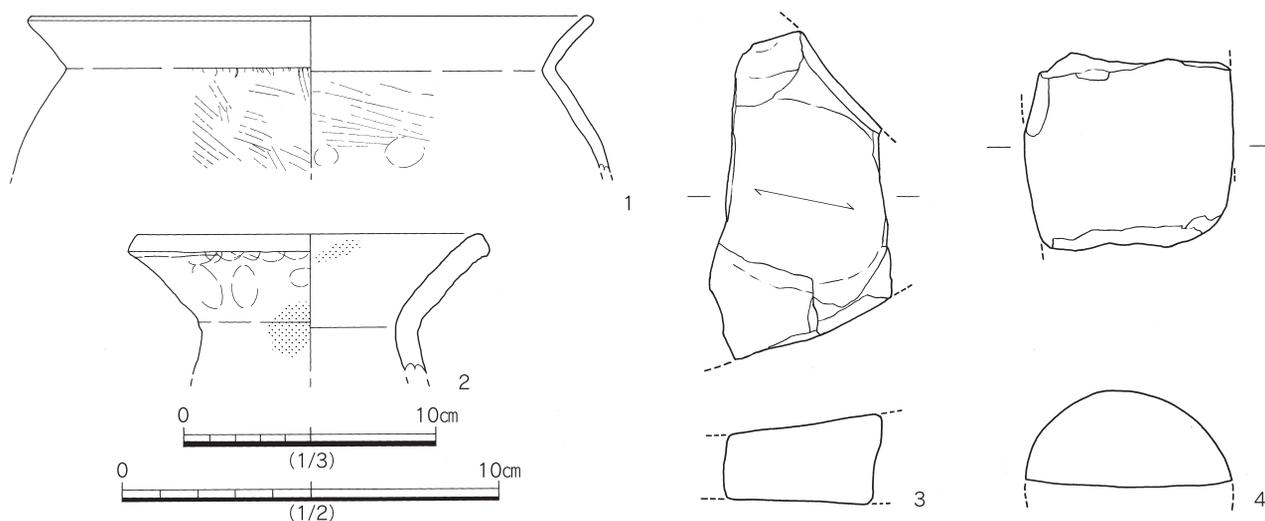
第144図 三雲番上330番地2次オリブ褐色土出土遺物実測図 (1/2)

は4 C区出土の紡錘車未製品。6～10は5 B区出土である。6は古式土師器の甕で、7は甕の底部。8は三韓系土器で、9は楽浪系土器であるが、天地に不安が残る。10は石斧片である。11は5 C区出土の楽浪系土器で、12は5 D区出土の三韓系土器である。13・14は5 F区出土で、13はミニチュア土器、14は鉄片である。錆で膨れて器種等は不明である。鉄素材の可能性はある。15は6 A区出土の砥石である。側面も用いられており平面三角形を呈する。

第139図1～3は6 B区出土の甕である。4・5は6 C区出土で、4は大型甕、5は古式土師器の甕である。6～8は6 F区出土で、6は甕の底部、7は支脚である。8は石庖丁である。9・10は7 A区出土で、7は壺、8は甕である。11・12は7 B区出土で、11は甕、12は砥石である。13・14は7 C区出土で、13は鉢、14は甕の底部か。

第140図1・2は7 G区出土で1は支脚である。2は板状鉄製品で、中央部が錆で剥離しており全容は不明であるが、確認できる範囲で刃部はない。鉄素材か。3～6は7 H区出土品である。3は壺の頸部で羽状文をもつ。4は楽浪系土器短頸壺の胴部上半～頸部である。5は棒状鉄製品で、下部は扁平に広がるが明瞭な刃部はない。6は裏表面共に弱い研磨を施す紡錘車未製品である。7～10は8 A区出土である。7・8は甕で、9は壺の底部か。10は甕の上半部である。11～15は8 B区出土で11・12は甕の上半部である。13は甕の底部で小さな脚部が伴う。14は器台で、15は紡錘車である。16は8 C区出土の小型の袋状鉄斧である。三雲・井原遺跡では加賀石地区でも小型の袋状鉄斧が出土している。17は8 D区出土の刀子である。18～21は8 E区出土品で、18は甕の底部である。19はミニチュア土器で、20は高坏の脚部か。21は上・下を欠く鉄器で、当初、鉄鏃としたが、左右対称でなく、やや肉厚であることから鉄素材となる板状鉄製品と考える。22は三韓土器である。

第141図1は8 G区出土の楽浪系土器碗の口縁部である。なお、8 G区からは淡青色のガラス管玉が1点出土している。7・8は8 H区出土で、7は牛角状の把手で、8は紡錘車か。2は9 b区出土の棒状鉄製品片である。3・4は9 C区出土で、3は甕の底部、4は三韓系土器短頸壺の胴部



第145図 三雲番上330番地2次排水溝出土遺物実測図 (1/2・1/3)

上半である。5は9 E区出土の鉢。6は9 F区出土の棒状鉄製品である。9は9 H区出土の使い込まれた砥石片である。なお、9 G区からは淡青色の小玉が1点出土している。10・11は10B区出土で、10は鉢、11は楽浪系土器である。12は10C区、13は10D区から出土した鉄鏃である。14は10E区から出土した鉄鎌状鉄器であるが、刃部は無く、断面長方形を呈する。15は11A区から出土した棒状鉄製品である。16は11B区出土の甕で、17は11C区出土の楽浪系土器である。18・19は11D区出土で、18は鉢、19は底部片である。20～23は11E区出土品である。20は甕の底部、21・22は鉢、23は楽浪系土器である。24は12B区出土の棒状鉄製品で、25は12C区出土の鉄鏃である。

第142図は北側拡張区包含層出土品である。1は甕、2は古式土師器甕の上半部である。3・4は甕の底部で、いずれも平底である。5は板状鉄製品で、現存長5.8cm、幅3.7cm、厚さ約5.5mmである。錆に覆われ刃部の有無は確認できない。6・7は石庖丁片で、8は白雲母片岩の円礫である。未加工で紡錘車の素材であろう。

第143図は包含層他からの出土品である。1は甕である。2～5は三韓系土器の小片である。6は砥石であるが、左側面は割った後に研磨、右側面と下面は敲打や研磨で調整するなど、平面が長方形になるように調整している段階である。現存長12cm、幅7.4cm、厚さ1.6cmで、両面ともに研磨痕が残る。板石硯の未製品の可能性もあろうか。7は白雲母片岩の円礫である。未加工で紡錘車の素材。

第144図は遺構面上に広がるオリーブ褐色土層から出土したものである。1は楽浪系土器の小片である。2は平面長方形、側面は三角形を呈する玄武岩製石製品である。すべての面に擦った痕跡がある。墨等の付着は肉眼では確認できない。3は白雲母片岩の未加工品、4は側面を面取りする白雲母片岩である。いずれも紡錘車製作関連遺物であろう。

第145図は調査区の周りに巡らせた排水溝から出土したものである。1は甕の上半部で、2は器台の上半部である、3は砥石で、4は石斧片である。(平尾和久)

IV. 石橋地区160番地

1. 調査概要

本調査は三雲・井原遺跡の外郭を巡る大溝の所在確認を目的とする重要遺跡確認調査である。昭和52年に行われた福岡県教育委員会による発掘調査では、石橋Ⅰ-2で、甕棺墓7基が確認され、浮いた状態であるが磨製石剣も出土している。時期としてはⅡ-C期～Ⅱ-D期にあたる。

また、石橋Ⅱ-11・12では、箱式石棺墓8基、木棺墓1基、甕棺墓1基、土壇墓2基が発見され、これに伴う祭祀土壇も検出されている。さらに、三雲・井原遺跡の東側境界線と考えられる大溝も検出されている。

本調査地点は、石橋Ⅱ-11・12の南側に位置し、大溝の続きや箱式石棺墓3基、溝3条などを検出した。

2. 遺構と遺物

(1) 大溝

大溝は、石橋Ⅱ-11、12の調査の時点で、調査区中央を南北に延びる形で検出され、埋没状況と時期の把握は、トレンチによってすでに確認されており、最下層で弥生時代中期中葉、最上層で弥生時代終末期の土器が出土している。このため、今回の調査では、その続き1.3mを確認したが、掘削を伴う調査は行わず、遺構面での検出で延長ラインを確認するにとどめた。

(2) 箱式石棺墓

本調査では3基の箱式石棺墓が検出され、石橋Ⅱ-11、12の調査分を合わせると、11基の箱式石棺墓が確認されている。今回の報告では、前調査の番号を踏襲する形で、9号～11号までの連番とした。

9号箱式石棺墓（第147図、図版23）

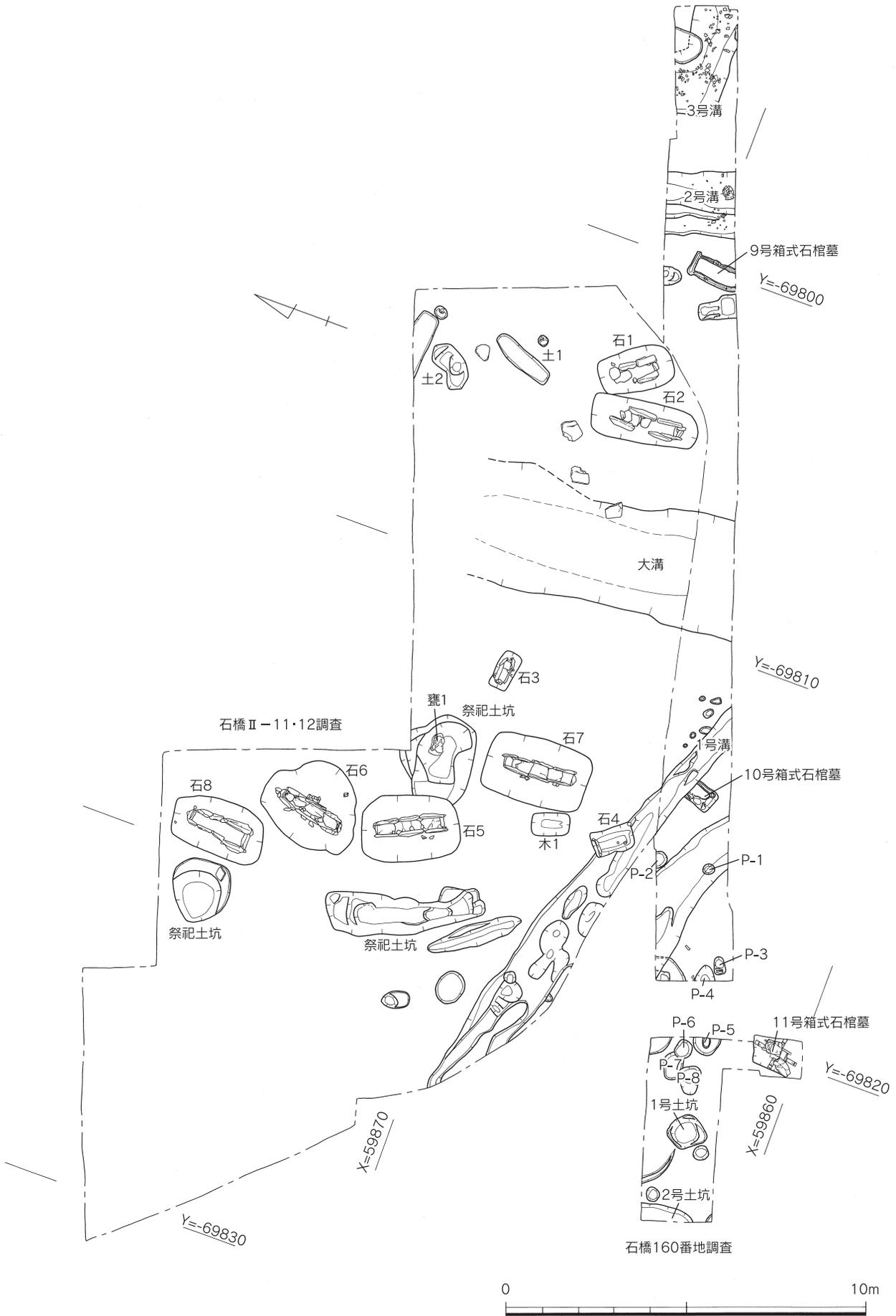
調査区東側の2号溝の近接する形で検出された石棺墓で、石材は全て抜かれていて、その痕跡を残すのみである。その痕跡から、小口石1枚、左側石3枚、右側石2枚まで確認できる。北側小口石に両側石が収まる形であり、これまで検出されている小口石を両側石が挟み込むタイプとは異なる。内寸で主軸長 $1.2 + \alpha$ m、幅0.4mを測り、主軸を $N - 7^\circ - W$ にとる。縦長剥片が出土しているが流れ込みであろう。

出土遺物（第148図、図版24）

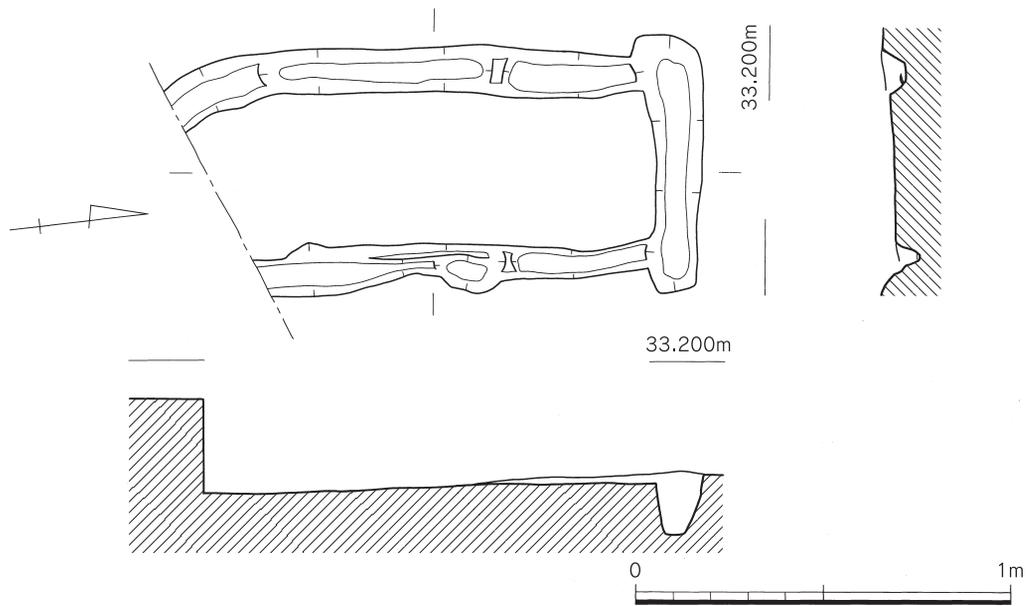
1は黒曜石の縦長剥片で、全長1.6cm、最大幅0.9cmを測る。剥片上位にバルブ、フィッシャーが明瞭に残る。

10号箱式石棺墓（第149図）

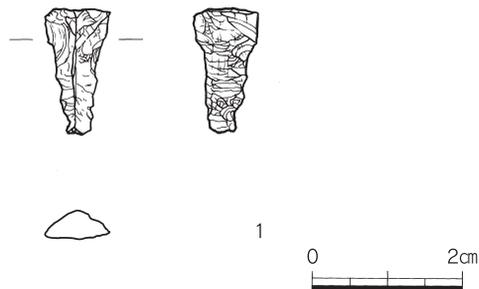
調査区中央に位置し、1号溝に切られる形で検出された。この今回の調査では溝から出土遺物はなかったが、前調査で、弥生時代後期後半の土器が出土しているため、これよりも古いか、同時期と推測できる。石材は全て抜かれており、その痕跡をとどめるのみである。内寸で主軸長 $0.5 + \alpha$ m、幅0.3mを測り、主軸を $N - 23^\circ - W$ にとる。高杯の脚部が出土している。



第146図 三雲石橋160番地調査区全体図 (1/150)



第147図 三雲石橋160番地9号箱式石棺墓平断面実測図 (1/20)



第148図 三雲石橋160番地9号箱式石棺墓出土遺物実測図 (1/1)

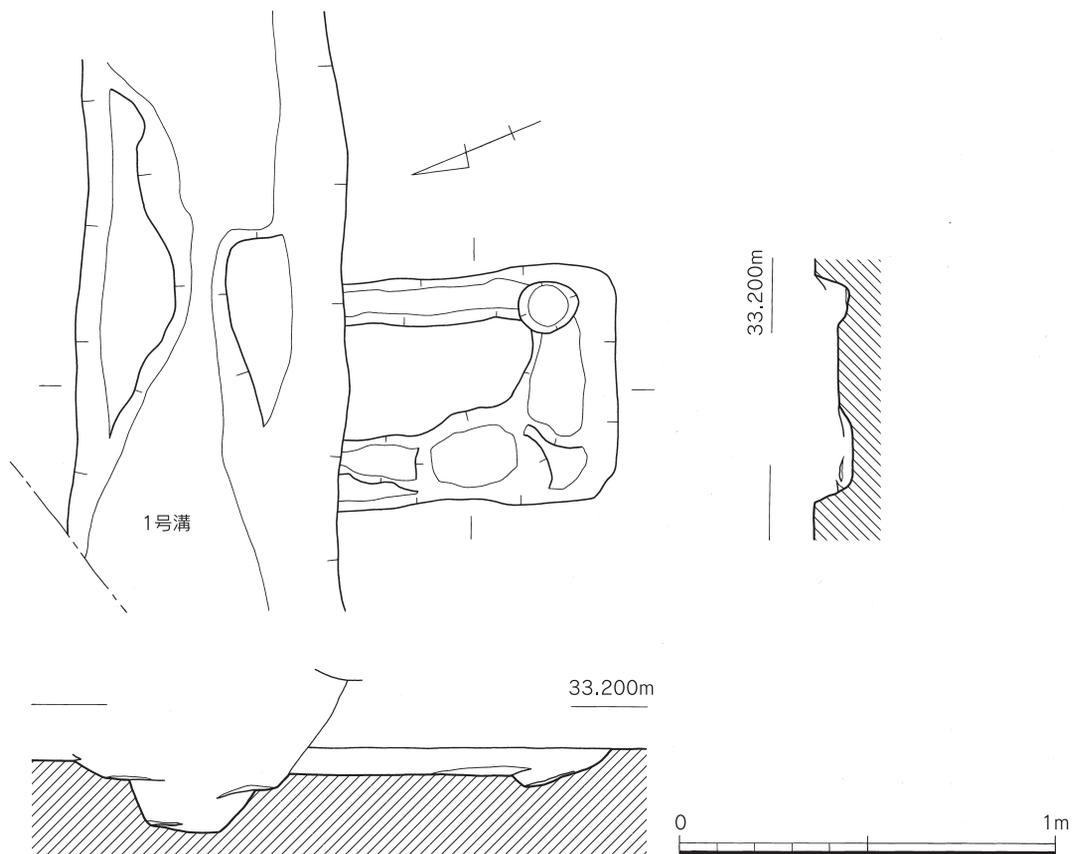
出土遺物 (第150図)

1は高杯の脚部片で、外面は刷毛目後暗文風のミガキ、内面は刷毛目である。

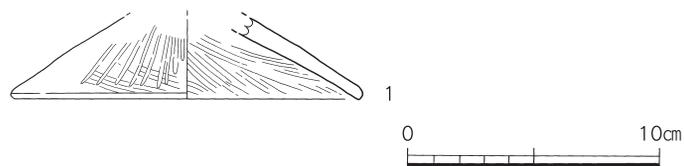
11号箱式石棺墓 (第151図、図版23)

調査区南西隅で検出された小児用の石棺墓である。南側の上石は定位置と考えられるが、北側の上石は東側にズレている。両小口石1枚、両側石2枚で構成されるが、南側は小口石が両側石に挟まれる形に対して、北側は左側石が北小口石を挟み込むように配置され、右側石は北小口石の手前でとどまっている変形的な石材の組み合わせである。石材間の密封には粘土が使用されているが、蓋石上には見ることができない。1次墓壙は調査区外に延びており、部分的にしか検出できなかったが、トレンチを入れたところ、長方形と推測できる2次墓壙を検出した。

石棺の床面は、小石を敷き詰めた後、粘土できれいに整地してあり、石棺の北半分には赤色顔料を確認することができた。副葬品は赤色顔料上の北側東寄りに2点のガラス小玉が検出された。小



第149図 三雲石橋160番地10号箱式石棺墓平断面実測図 (1/20)

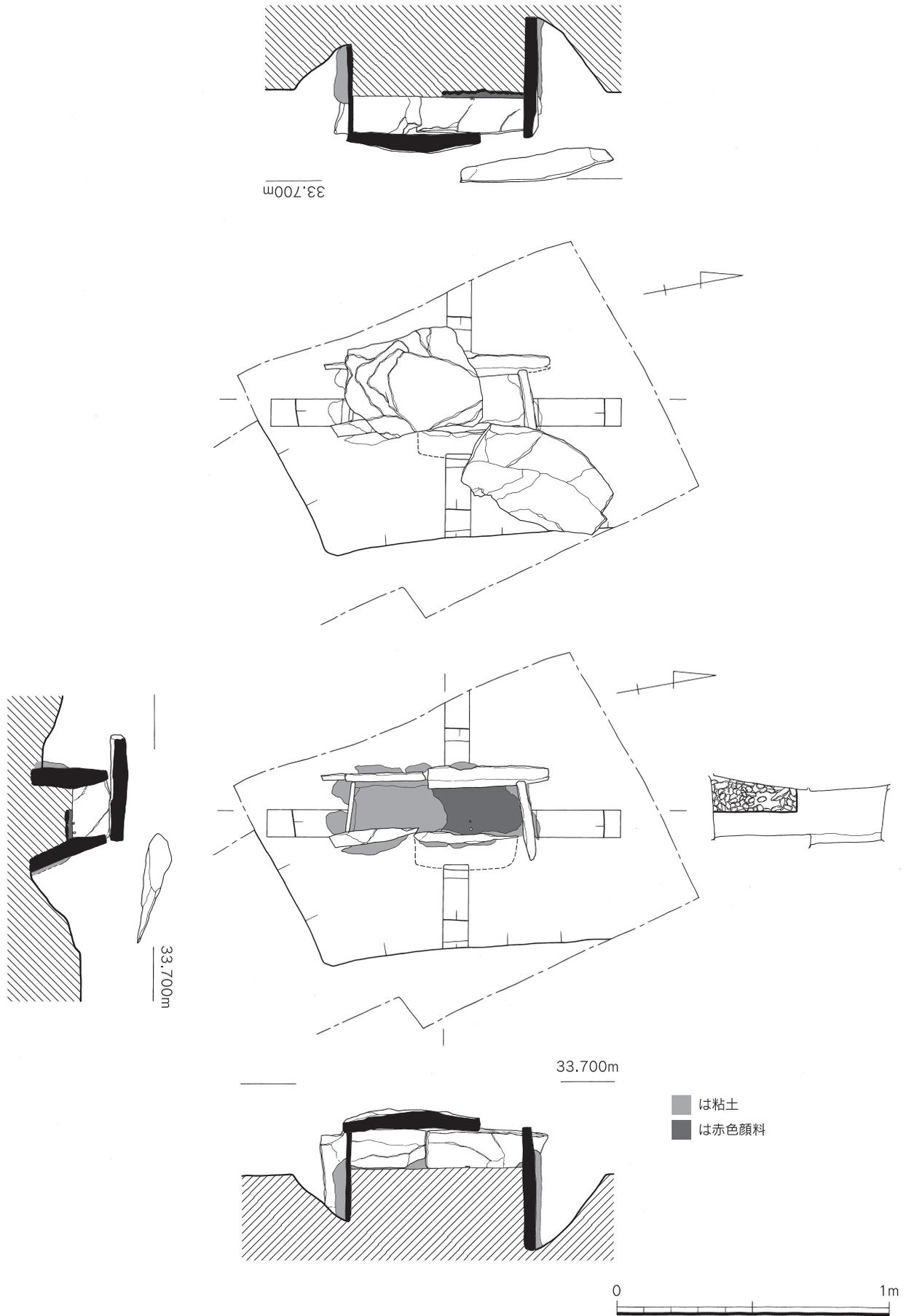


第150図 三雲石橋160番地10号箱式石棺墓出土遺物実測図 (1/3)

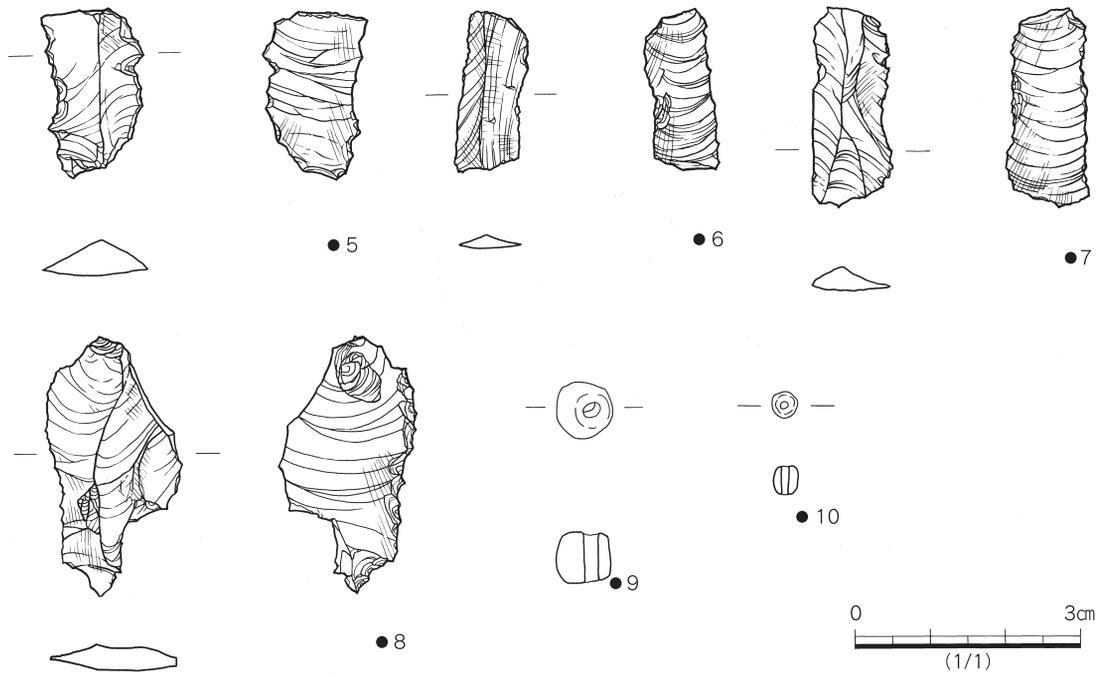
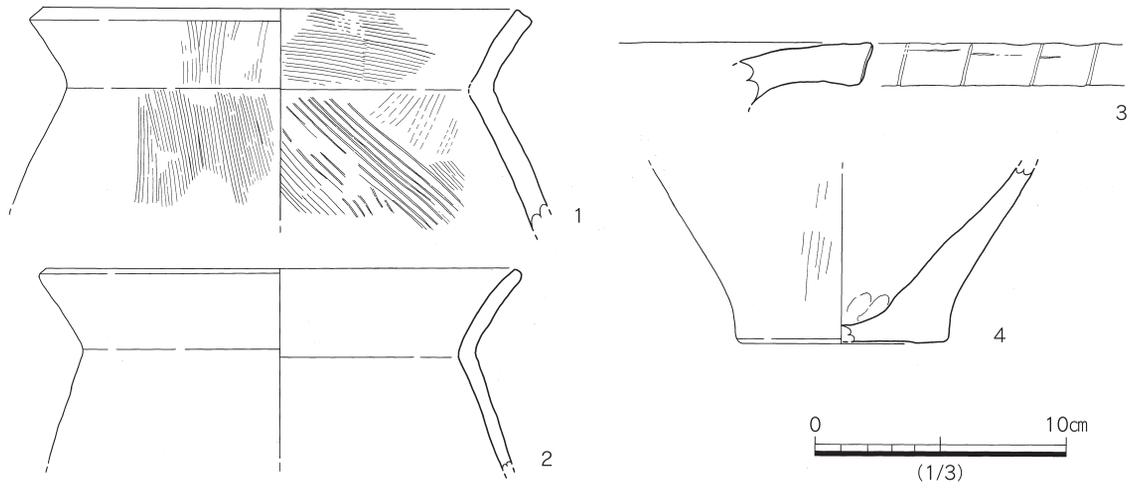
兎用にしては丁寧なつくりで、石棺の内法は、主軸長0.6m、幅0.2mを測り、主軸をN-10°-Wにとる。

出土遺物 (第152図、図版24)

1は、くの字口縁を持つ甕で、口縁端部は横ナデ調整で平坦である。内外面共に胴部は刷毛目調整を施している。2もくの字口縁を持つ甕の胴上部片である。3は鋤先口縁壺の口縁端部で、口縁上面が内傾化している他、口縁端部に刻み目を施す。4は甕の底部片で平底である。5～8は黒曜石の剥片であり、箱式石棺墓の上層にある包含層の流れ込みであろう。5～7は縦長剥片で、ポジティブ面に明瞭なフィッシャーとリングが確認できる。8は黒曜石の剥片でポジティブ面に明瞭なバルブ、フィッシャー、リングが確認できる。9、10は11号箱式石棺の副葬品であるガラス小玉で、



第151図 三雲石橋160番地11号箱式石棺墓平面実測図 (1/20)



第152図 三雲石橋160番地11号箱式石棺墓出土遺物実測図 (●は1/1、1/3)

大小2点が出土している。両者とも引き伸ばし技法で作られている。9は明青色のガラス小玉で径が7mmを測る大形ものである。断面では円形が歪み、孔が中心を通っていない。10もガラス小玉で、径が3mm程度の小形品である。

(3) 溝

1号溝

調査区の北西から南東にかけて延びる溝で、今回の調査では出土遺物が無かったが、福岡県教育委員会による前回の調査では、最上層に弥生時代中期と弥生時代後期後半の土器が包含していたと報告されており、4号箱式石棺墓が切り、10号箱式石棺墓が切られていることから、弥生時代後期後半の溝と考えられる。

2号溝 (第153図、図版23)

調査区東側で検出された南北に延びる溝で、断面形が緩いU字形を呈し、幅1.7m、深さ0.7mを測る。土層観察の結果、自然堆積であり、主に東側からの堆積によって、完全に埋没している。土器は3,6層と4,7層に分かれ、3,6層に含まれる複合口縁壺から、弥生時代後期末に埋没したと考えられる。

出土遺物 (第154図、図版24)

1は2号溝の上層から出土した複合口縁壺で、口縁端部を外方に屈曲させ、胴部最大径の位置は中位にある。底部は丸底と考えられ、外面調整は外面が縦方向の刷毛目調整、内面は頸部付近が横方向の刷毛目、胴部はヘラ削りを行っている。弥生時代後期末であろう。2は大形壺の口縁部片で、上面に粗い刷毛目が残る。口縁端部は刻み目を施している。口縁の内傾から、弥生時代後期後半と考えられる。3は甕の底部片で、内外面共にナデ調整である。

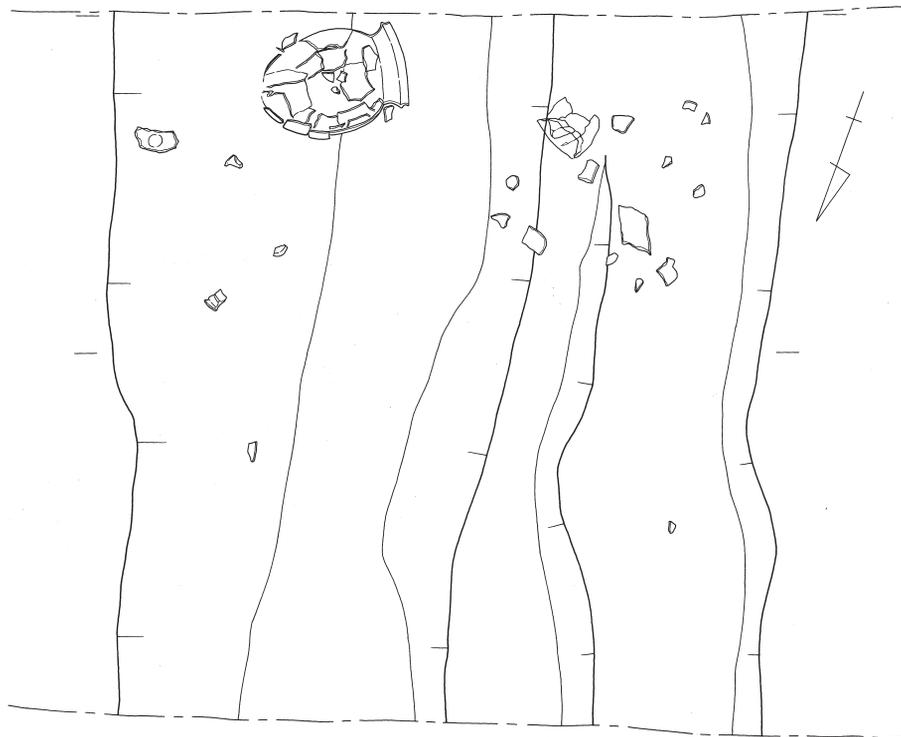
底部は平底であるが、底部から胴部にかけてのラインが外に開き気味で、弥生時代後期のものか。

3号溝 (第155図、図版23)

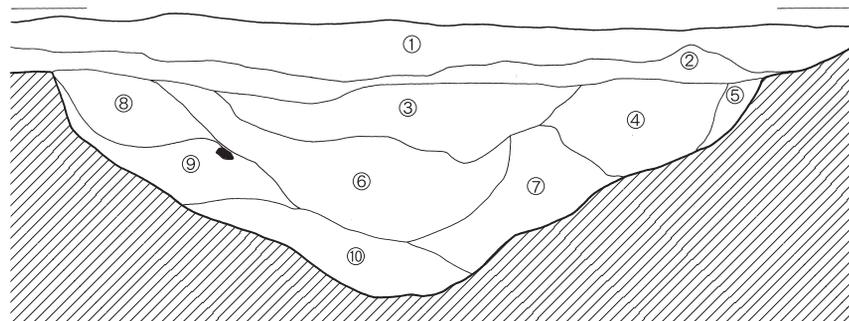
3号溝は、調査区東端で検出されたL字状に曲がる溝で、幅1.3m、深さ0.29mを測る。断面は南に下がる歪なU字形をしており、縄文時代後期中頃の西平式土器が出土している。

出土遺物 (第156・157・158・159・160図、図版24・25・26)

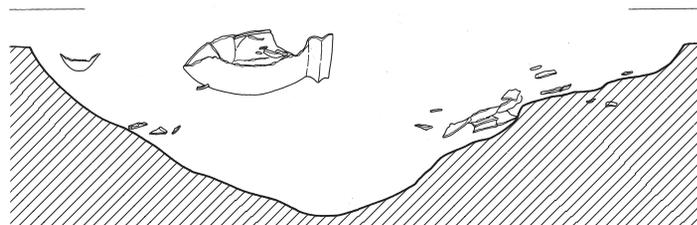
1は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器で、肩部から大きく外反して口縁部が広がる。口縁部文様帯では、平行沈線が沈頂部で間隔を広げ、波頂部直下に三角形の空間をつくる。頸部にも平行沈線があり、平行沈線周辺は縄文を残す。2も波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器である。口縁外面に2条、頸部と胴部の境に4条の沈線を巡らす。内面調整はナデの後ミガキ調整が施される。3は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器の破片である。口縁外面の三角形の空間を広くとり、口縁頂部の平坦面には2個の穴がある。4は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器の口縁部片である。口縁外面に2条の沈線があり、三角上の空間には円形状の刺突文が施される。口縁端部にも穴が1個確認できる。5は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器の口縁部片である。口縁外面の2条の沈線は、沈頂部で間隔を広げ、楕円状の縄文が残る。6は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器の口縁部片で、沈頂部がわずかに残る。口縁外面の2条の沈線は沈頂部で間隔を広げないタイプで、



33.100m



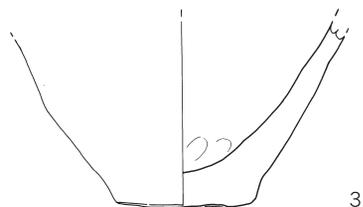
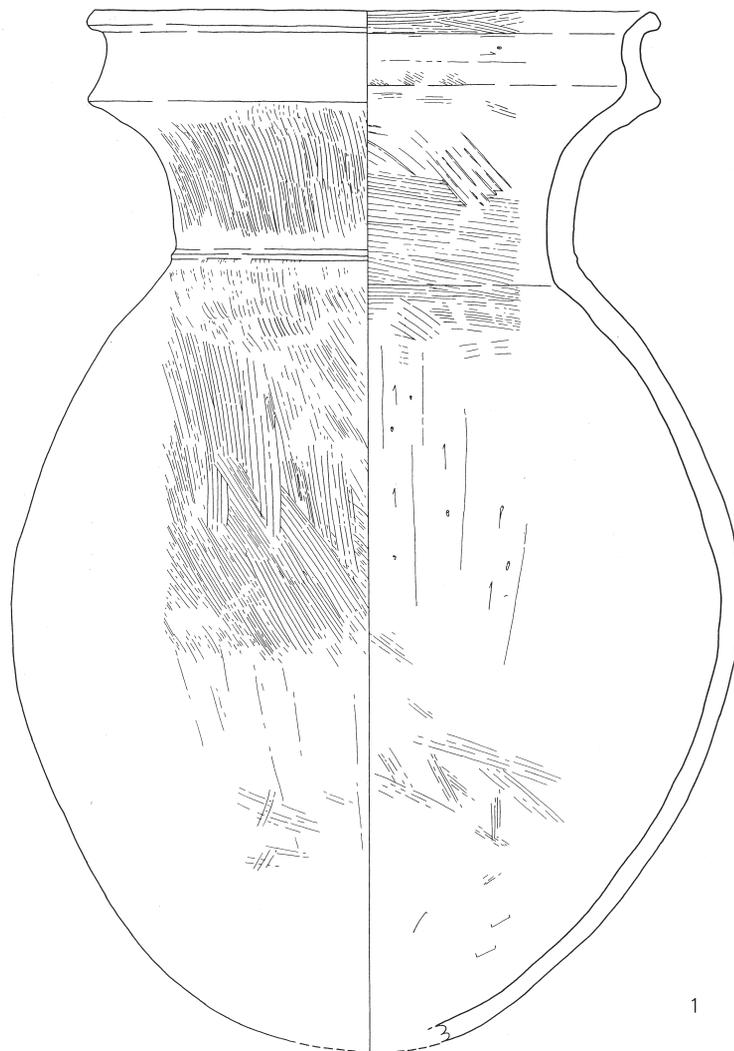
33.000m



- | | |
|-------------------------|------------------------|
| ①真砂土（ほ場整備時盛土） | ⑥灰茶褐色粘質土層（礫が少量混じる） |
| ②耕作土（ほ場整備前水田面） | ⑦暗茶褐色土層 |
| ③灰褐色土層 | ⑧赤茶褐色土層（流れ込みの礫が少量混じる） |
| ④茶褐色土層（暗茶褐色のブロックが少量混じる） | ⑨暗茶褐色粘質土層（弥生後期後半の土器有り） |
| ⑤黄味茶褐色土層（地山の土が少量混じる） | ⑩茶褐色粘質土層 |

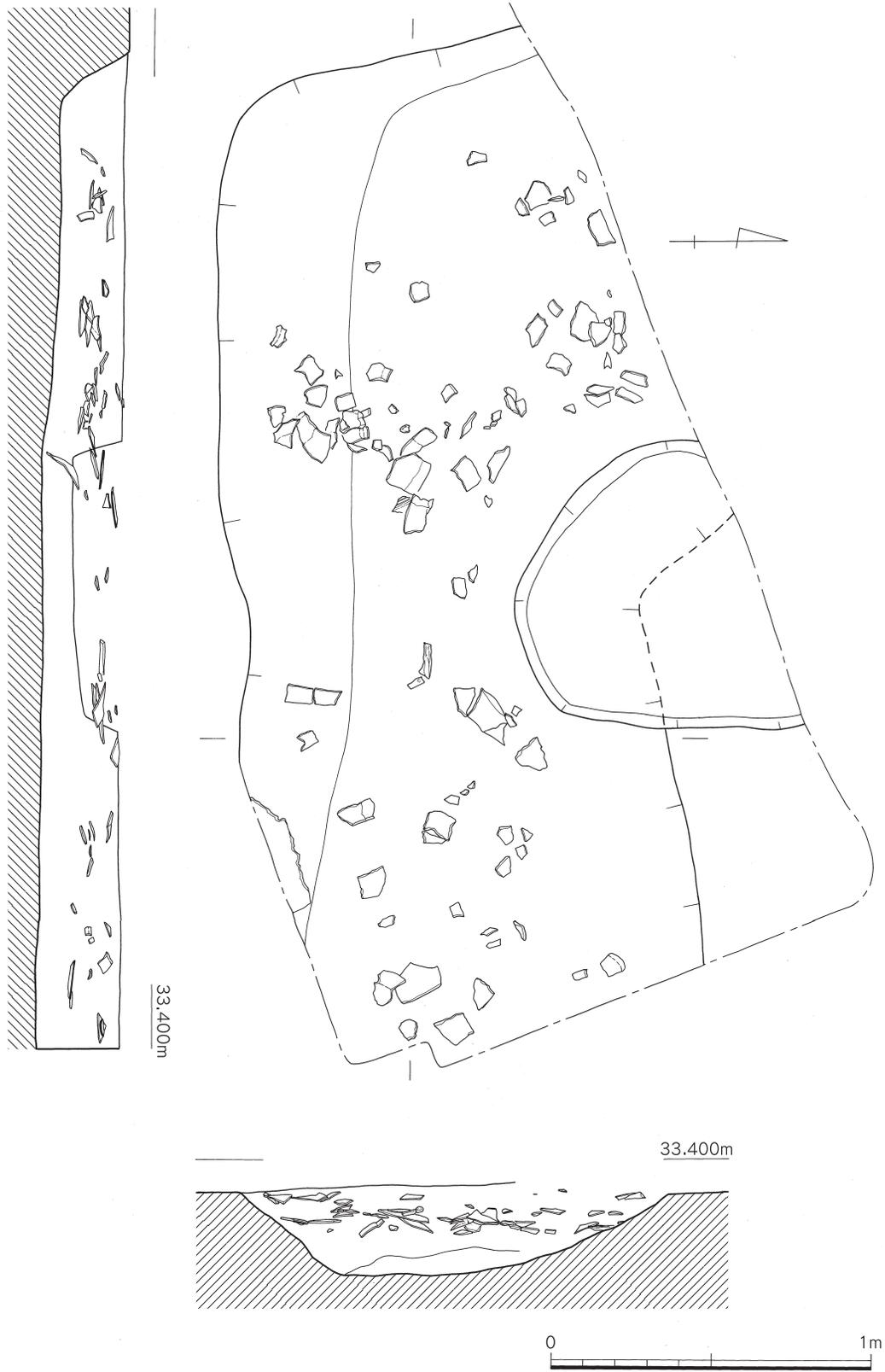


第153図 三雲石橋160番地2号溝断面実測図（1/20）

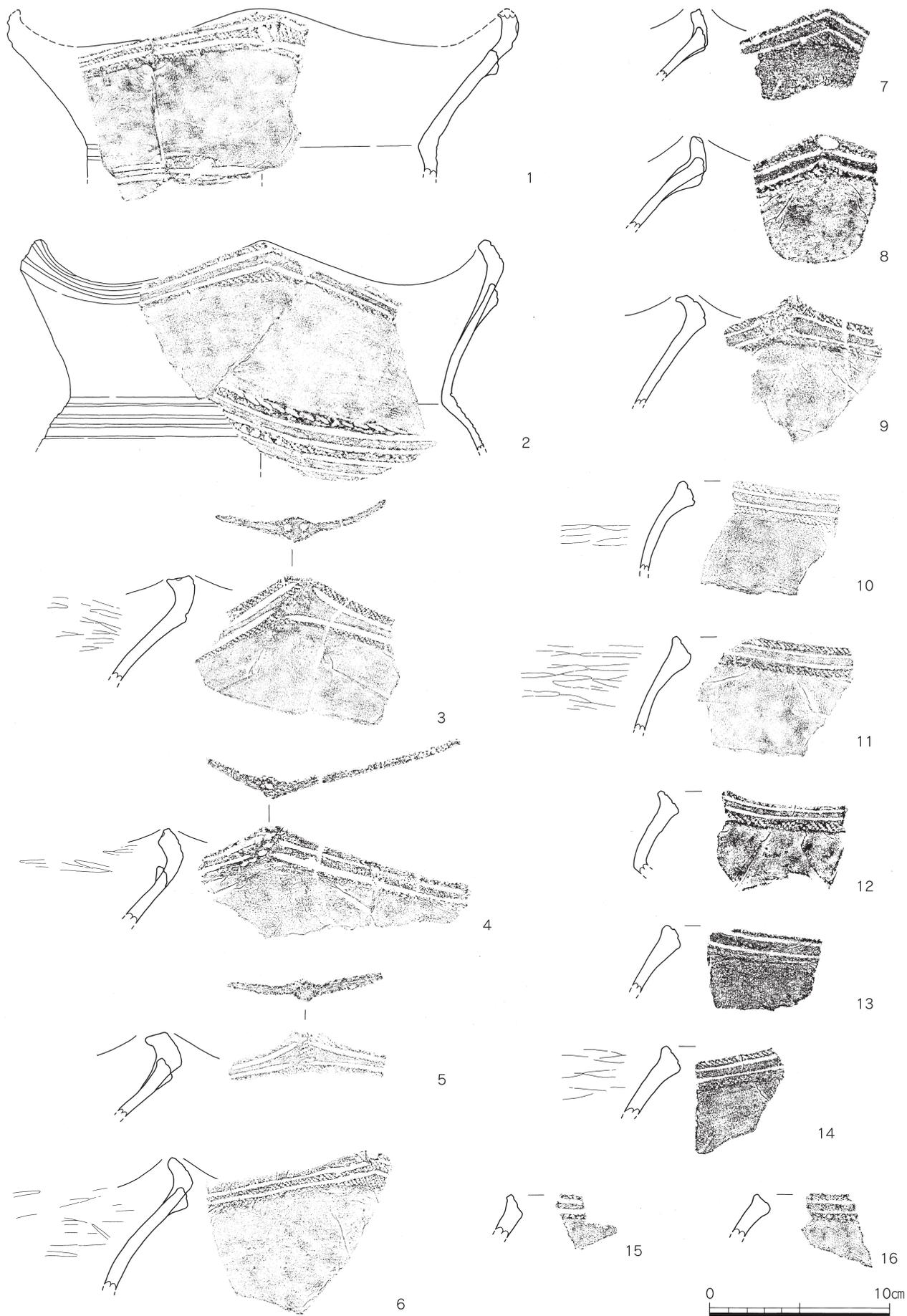


第154図 三雲石橋160番地2号溝出土遺物実測図 (1/3)

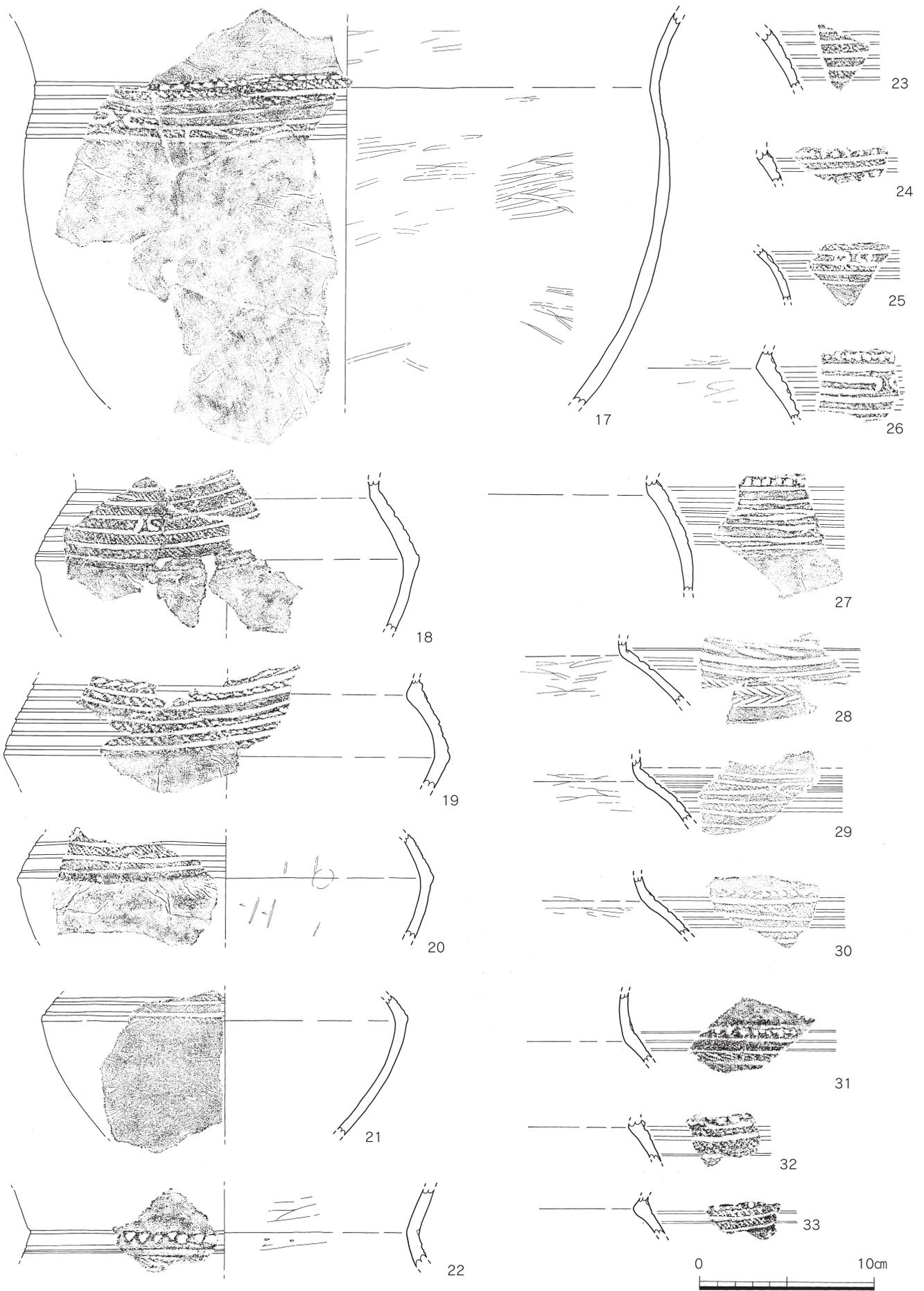
口縁端部を凹ませている。内面のミガキ調整が良く残る。7は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器の口縁部片である。6と同じく口縁外面の2条の沈線は沈頂部で間隔を広げないタイプであるが、口縁部が直立気味に立ち上がる。8は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器の口縁部片である。口縁が直立気味に立ち上がり、沈頂部の口縁端部を凹ませている。9は波状口縁を持つ精製磨研の深鉢形土器の口縁部片である。口縁外面の2条の沈線は、沈頂部で途切れている。10、11は後円部を内側に曲げないタイプの深鉢形土器の口縁部片である。口縁端部に2条の沈線、頸部内面に横ミガキ調整が残る。12は口縁部を内側に曲げて、端部に2条の沈線を巡らすもので、頸部と胴部の境には連続刺突文を施す。13は口縁端部を肥厚させて、2条の沈線を巡らす深鉢形土器の口縁部片である。14は深鉢形土器の口縁部片で、口縁部を内側に引き出して、2条の沈線を巡らしている。15、16は深鉢形土器の口縁部片で、口縁端部に2条の沈線を巡らしている。17は深鉢形土器の胴部片で、胴上位にX字となる沈線があり、一番上位は沈線のかわりに連続刺突文を施す。内面はナデの後ミガキを行っている。18は深鉢形土器の胴部片。逆くの字に屈曲し、X字文を含む沈線を6条巡らしている。19は深鉢形土器の胴部片で、6条の沈線を確認できる。20も深鉢形土器の胴部片であるが、18,19よりも胴部の屈曲が弱い。沈線は3条まで確認できる。21は深鉢形土器の胴部片で、胴下位まで残存する。沈線が屈曲部上位に2条確認出来る。22は深鉢形土器の頸部片で、屈曲部に連続刺突文とその下位に1条の沈線を巡らす。23は深鉢形土器の胴部片で、5条の沈線を確認できる。24も深鉢形土器の胴部片で、2条の沈線の上下に連続刺突文を施す。25は深鉢形土器の胴部片で、4条の沈線とX字文がある。26は深鉢形土器の胴部片で6条の沈線にX字文、沈線の上位に連続刺突文がある。27は深鉢形土器の胴部片で、7条の沈線とその上位に連続刺突文を確認できる。28は深鉢形土器の胴部片で、3条の平行沈線とその間に斜波線を入れ、斜波線の終わりに刺突文を入れる。沈線界には矢羽根状文を確認できる。29は深鉢形土器の胴部片で、6条の沈線の中にX字文を描く。内面の横ミガキ調整が良く残る。30は深鉢形土器の胴部片で、4条の沈線を確認できる。沈線上位には連続刺突文を施す。31は深鉢形土器の胴部片で、3条の沈線とその上位に連続刺突文を確認できる。32は深鉢形土器の胴部片で、連続刺突文の下位に3条の沈線を確認できる。33は深鉢形土器の胴部片で、連続刺突文の下位に2条の沈線を確認できる。34は浅鉢形土器の胴部片で、口縁部と胴部の境に2条の沈線を施す。35は深鉢形土器の胴部片で、4条の沈線を確認できる。36は深鉢形土器の胴部片で、屈曲部分の破片である。現状では3条の平行沈線を確認できる。37は精製土器の深鉢である。口縁部はわずかに内側に傾斜し、逆くの字に屈曲する。38は高台付椀で、流れ込みであろう。39は浅鉢の口縁部片で、3条の平行沈線を巡らす。40は深鉢の口縁部片で、沈線はX字文の部分がわずかに確認できる。沈線上位には連続刺突文を施す。41は深鉢の口縁部片で、棒状工具による沈線が見られる。42は深鉢の胴部片である。43は粗製の深鉢で、内外面の調整はヘナタリ条痕である。44は素口縁の深鉢で、粗製である。内外面の調整はアナダラ条痕である。45は素口縁が若干外反する粗製の深鉢で、内外面の調整はアナダラ条痕である。46も素口縁の深鉢で、粗製である。内外面の調整はアナダラ条痕である。47～63は石器である。47は黒曜石製の石鏃で、挟りが深く、平面形が二等辺三角形となるもの。裏面は主要剥離面を大きく残し、押圧剥離で刃部を形成する。48は脚部を欠損する黒曜石製の石鏃である。49は厚みのある黒曜石製の石鏃で、挟りが浅く、



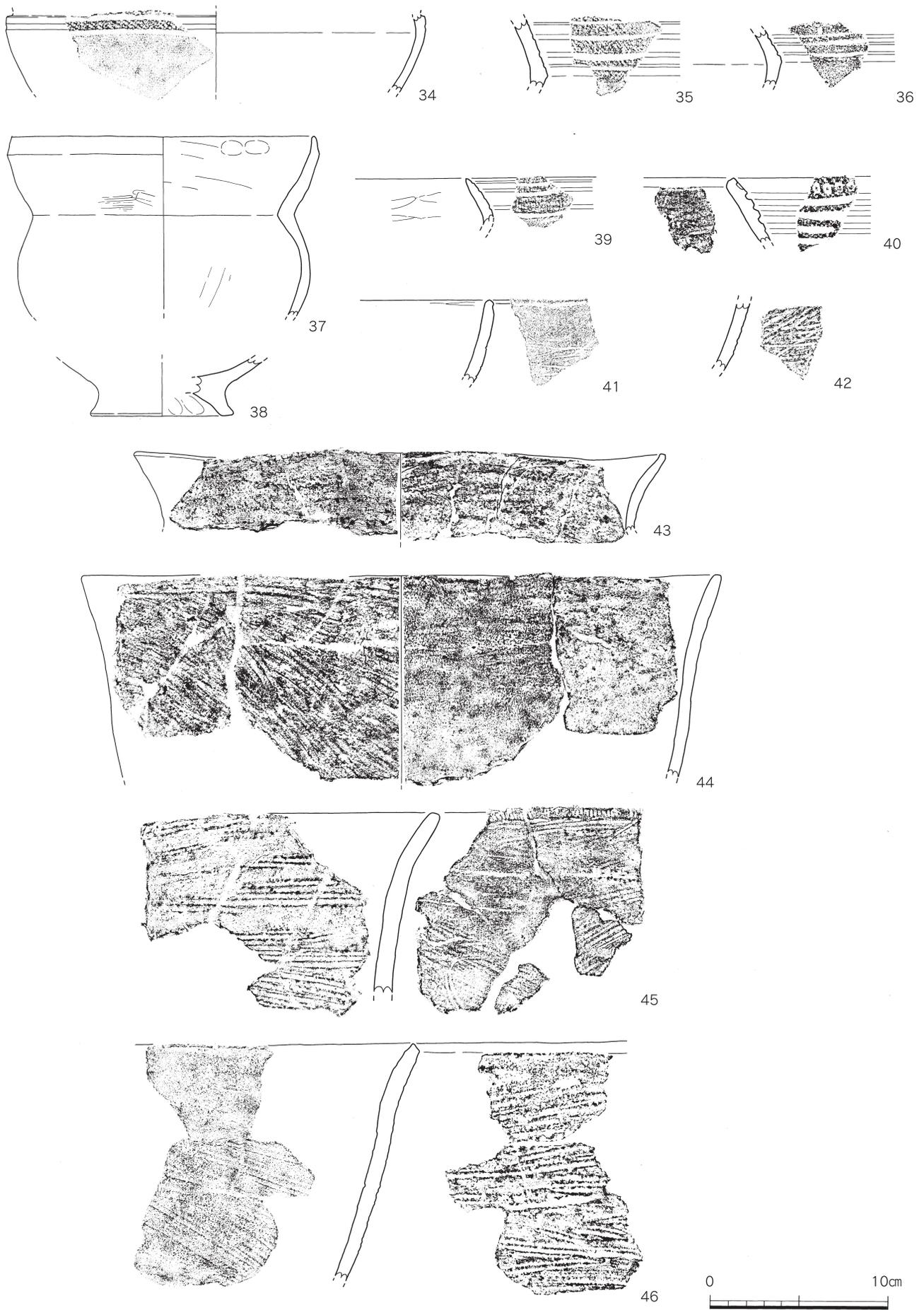
第155図 三雲石橋160番地3号溝断面実測図 (1/20)



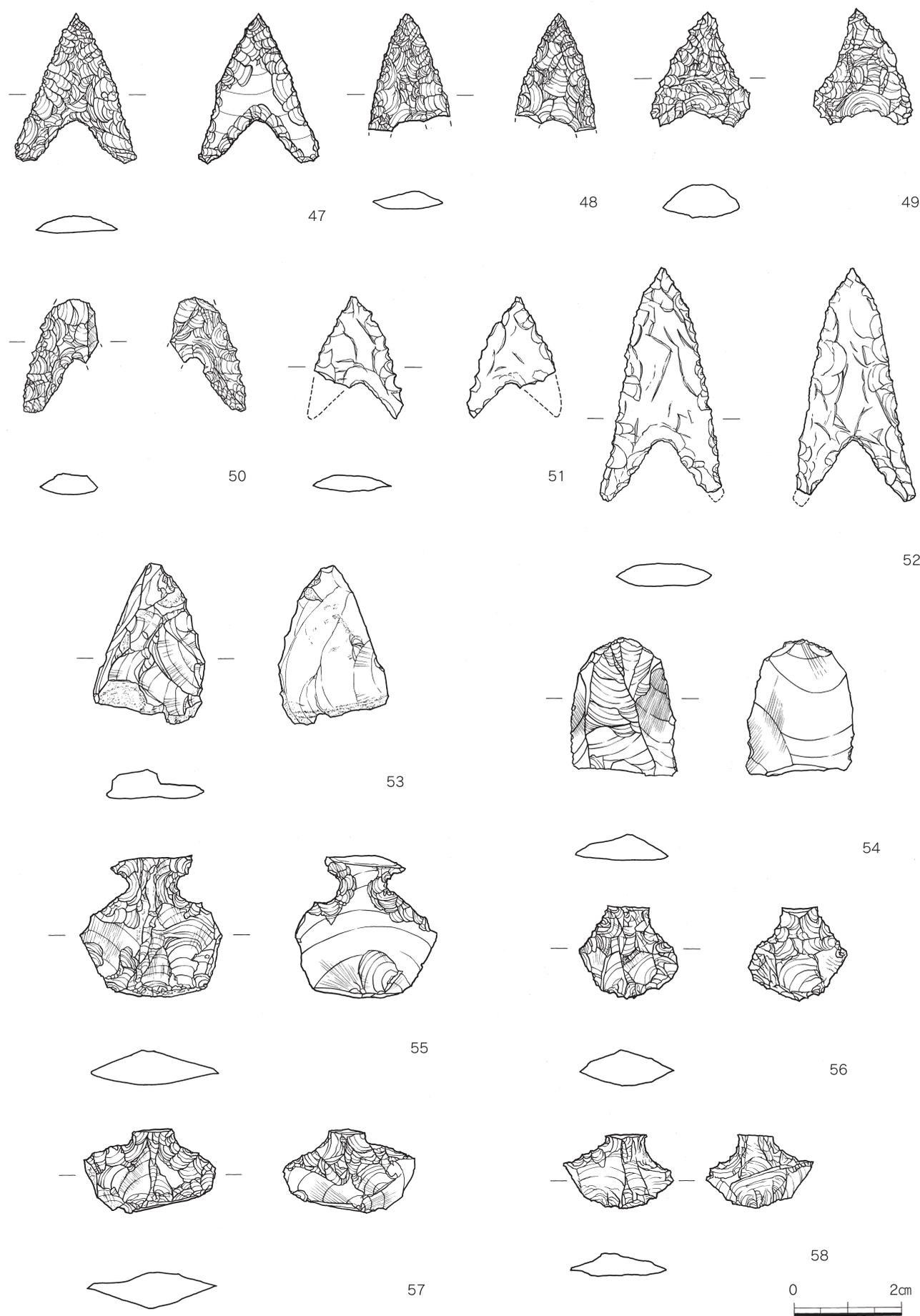
第156图 三雲石橋160番地3号溝出土遺物実測図1 (1/3)



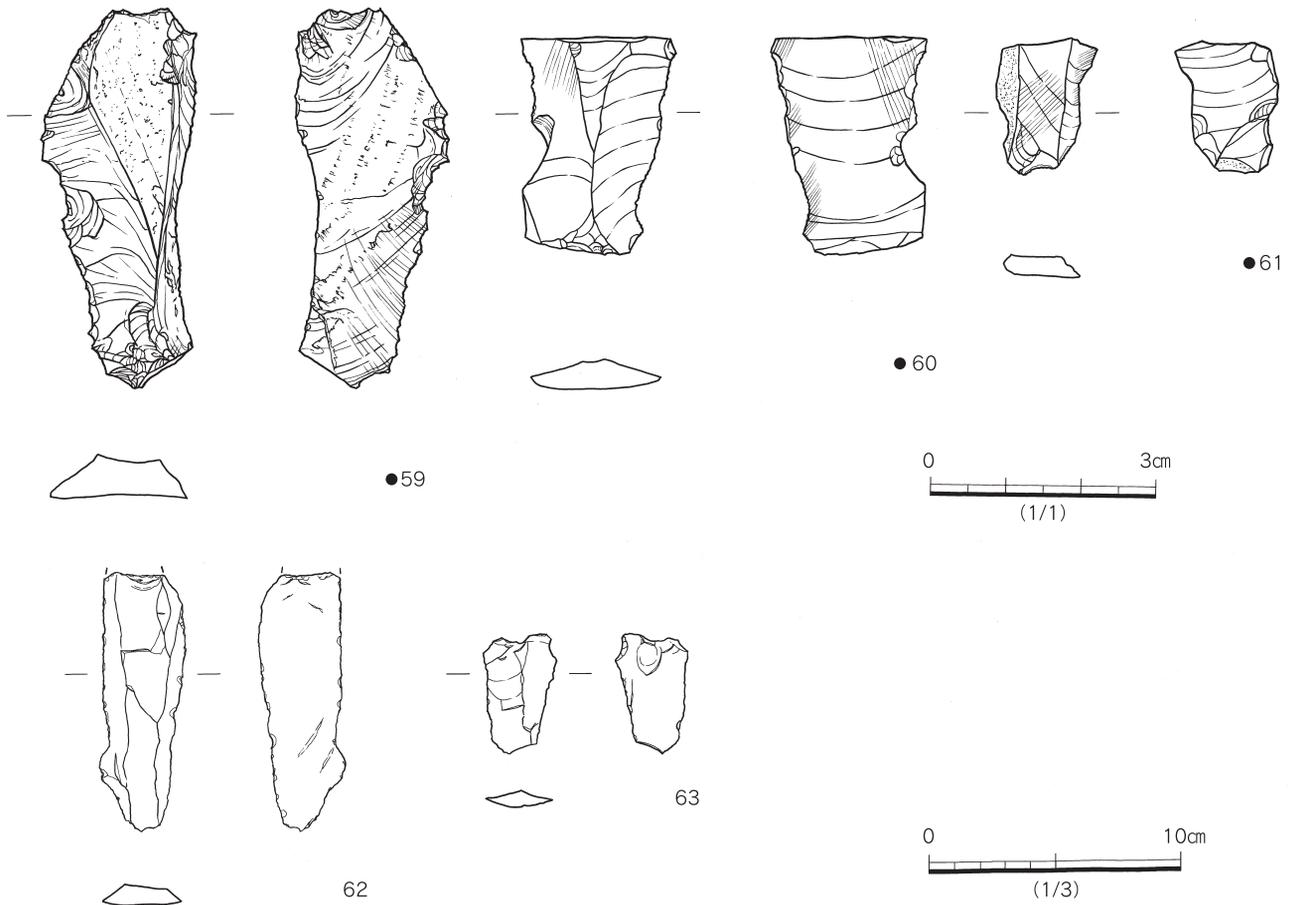
第157图 三雲石橋160番地3号溝出土遺物実測図2 (1/3)



第158图 三雲石橋160番地3号溝出土遺物実測図3 (1/3)



第159图 三雲石橋160番地3号溝出土遺物実測図4 (1/1)



第160図 三雲石橋160番地3号溝出土遺物実測図5 (●は1/1、1/3)

平面形が正三角形となる。主要剥離面の調整がやや粗い。50は頂部と脚部を欠損する黒曜石製の石鏃で、抉りがかなり深いタイプである。51はサヌカイト製の石鏃で、脚部を欠損する。主要剥離面を大きく残し、押圧剥離で刃部を形成する。52は大形の石鏃でサヌカイト製である。主要剥離面を大きく残し、押圧剥離で刃部を形成する。53は剥片で黒曜石である。54は縦長剥片の頂部を切断したもので、黒曜石である。55は黒曜石製のつまみ形石器で、ポジティブ面の大きく剥離させて、つまみの基部を切断している。押圧剥離でくびれを造る。56は黒曜石製のつまみ形石器で、両面共に細かな調整が入る。57、58も黒曜石製のつまみ形石器。両面共に押圧剥離で調整しており、つまみの基部を切断している。59は黒曜石の縦長剥片で、ネガティブ面に自然面を残す。ポジティブ面には頂部にバルブ、リング、フィッシャーの痕跡が明瞭である。60は黒曜石の縦長剥片の上下を切断したもの。61も縦長剥片で上部を切断した残欠か。ネガティブ面に自然面を残す。62は大形の縦長剥片で、サヌカイトである。縦長剥片の作出は黒曜石と同様である。63はサヌカイト製の石刃状剥片である。

(4) 土坑

1号土坑 (第161図)

調査区西側で検出された土坑で、長さ1.1m、幅1.0m、深さ0.3mの歪な隅丸方形を呈する。土坑内からは縄文土器が出土している。

出土遺物（第162図、図版27）

1～4は1号土坑からの出土。1は粗製深鉢の口縁部片で、外面で貝殻条痕を施す。2も粗製深鉢の口縁部片で、調整は1と同様である。3は黒曜石の剥片で、ポジティブ面にバルブ、リング、フィッシャーが強く残る。4は黒曜石の剥片である。

2号土坑（第161図）

調査区西端で検出された土坑で、調査区外に延びる。規模は検出できたところで、幅0.5+ α m、深さ0.3mである。土坑内から縄文土器が出土している。

出土遺物（第162図）

5は精製浅鉢の口縁部片で、口縁直下に1条の沈線を巡らす。

(5) ピット

本調査で検出されたピットのうち、掘立柱建物にならないピットについて出土遺物を報告する。

出土遺物（第163図、図版27）

1～3はP-1から出土した。1は粗製深鉢の口縁部片で、内外面に貝殻条痕を施す。2も粗製深鉢の口縁部片で、内外面風化により調整が不明瞭である。3の剥片は黒曜石で、ネガティブ面に縦方向の調整を行い、ポジティブ面にバルブを中心とする主要剥離面がある。4はP-5から出土で、布留甕の口縁部片である。5はP-8から出土した鋤先口縁を持つ甕の口縁部片。

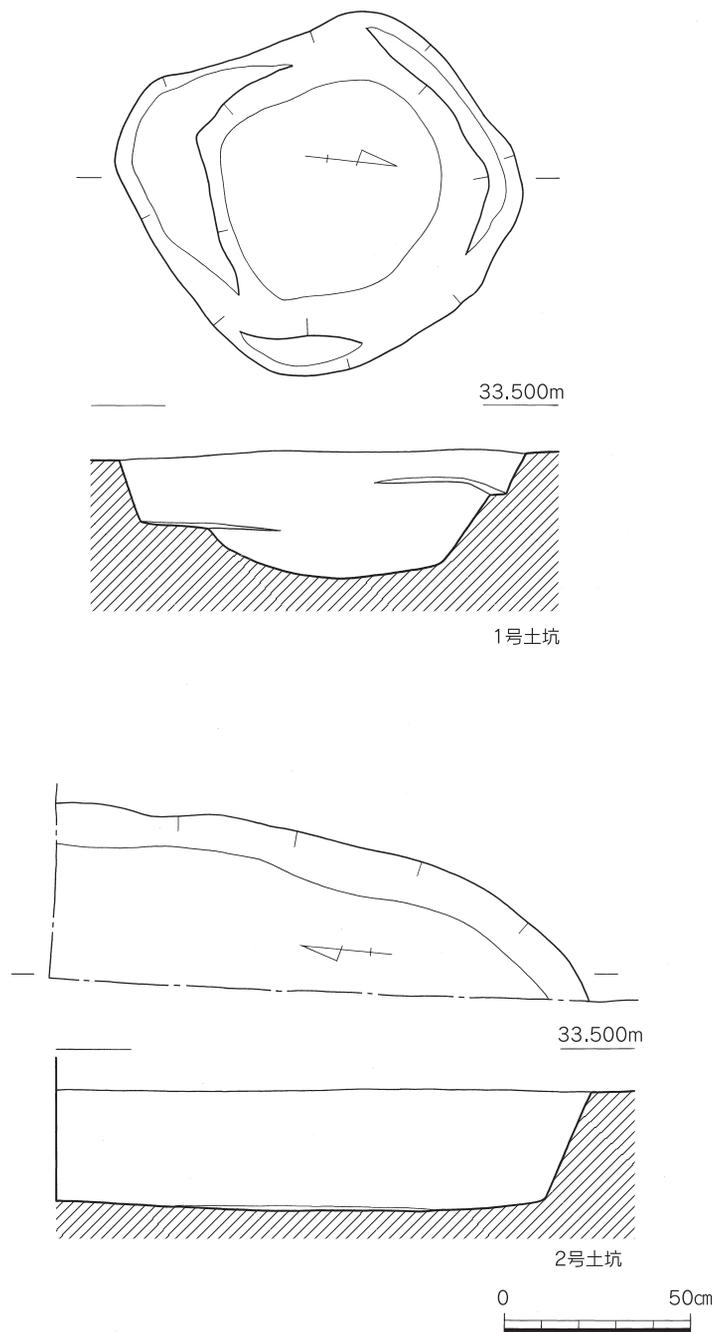
(6) 包含層

遺構面である黄褐色粘質土の上位に茶褐色土層が30cm程度厚く堆積しており、縄文時代後期中頃～古墳時代前期にかけての遺物が出土したので、報告する。

出土遺物（第164・165・166・167・168・169・170図、図版27・28・29）

1は精製浅鉢の口縁部片で、X字文が確認できる。その上位には6条の沈線を巡らす。内面の調整はナデ調整である。2も精製浅鉢の口縁部片で、X字文の中に1条の沈線を巡らしている。1と同じく、X字文の上位に4条の沈線がある。3は精製浅鉢の口縁部片で6条の沈線が確認できる。下位になるにつれて沈線の間隔が広がる。4は精製深鉢の頸部片で、2条の沈線の上位に連続刺突文を施す。5も精製深鉢の頸部片で連続刺突文の下位に沈線を巡らす。6は精製深鉢の底部片で、上げ底状を呈する。7は粗製深鉢の口縁～胴上位まで残存する破片である。内外面はアナダラ条痕を確認することができる。8は粗製深鉢の口縁部片で、内外面にアナダラ条痕を施す。9も粗製深鉢の口縁部片で、外面に条痕が確認できるが、全体的に風化が著しいため、調整は不明瞭となっている。10は素口縁の壺で、口縁部片である。内外面共に粗い刷毛目である。11は甕の口縁部片で、口縁端部に刻み目を施す。12は鋤先口縁を持つ壺の口縁部片で、1/8程度の残存である。丹塗磨研土器で、口縁上面にミガキ調整が残る。13は鋤先口縁壺の破片で、外面に暗文風のミガキを施す。口縁上面から頸部外面にかけて丹塗磨研である。14は鋤先口縁壺の口縁部片で、外面は暗文風のミ

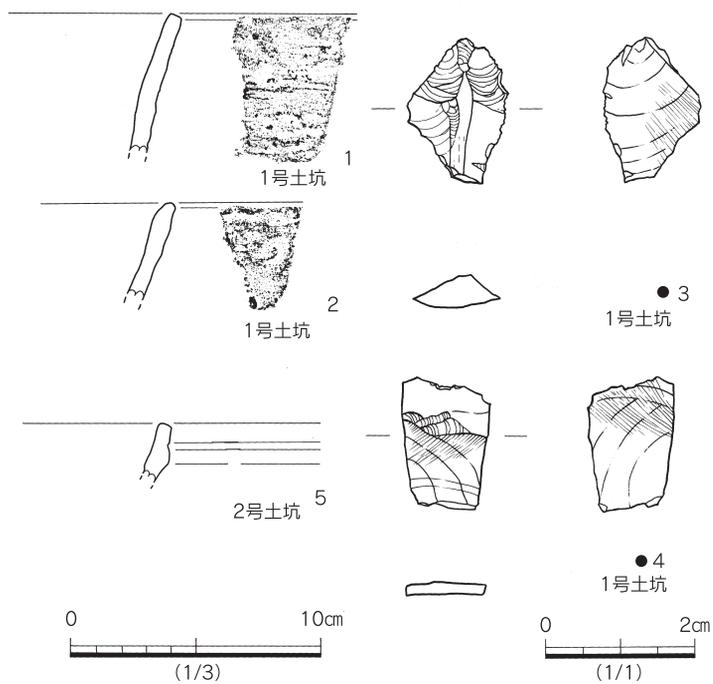
ガキを施している。丹塗磨研は内外面に行っている。15は内傾する鋤先口縁を持つ壺で、頸部外面に暗文風ミガキを施す。口縁上面、頸部外面に丹が付着している。16は口縁が内傾する甕で、外面は縦方向の刷毛目調整、内面は板ナデ調整である。17は壺の底部片で、平底である。底部内面は指頭圧痕が明瞭に残る。18は壺の底部片で、茶褐色土層から出土している。平底で、底部の成形は指オサエである。19も壺の底部片で、平底である。20は鋤先口縁を持つ甕で、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。外面調整は縦方向の刷毛目調整である。21は口縁部を欠損する甕で、外面は細かな刷毛目調整である。黒煤が底部と胴部にあり、使用痕跡を残す。22は甕の底部片で、平底である。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は刷毛目調整の後にナデを行う。23は外面の調整が22よりも粗い刷毛目調整を行う甕の底部片である。24は壺の底部片か。



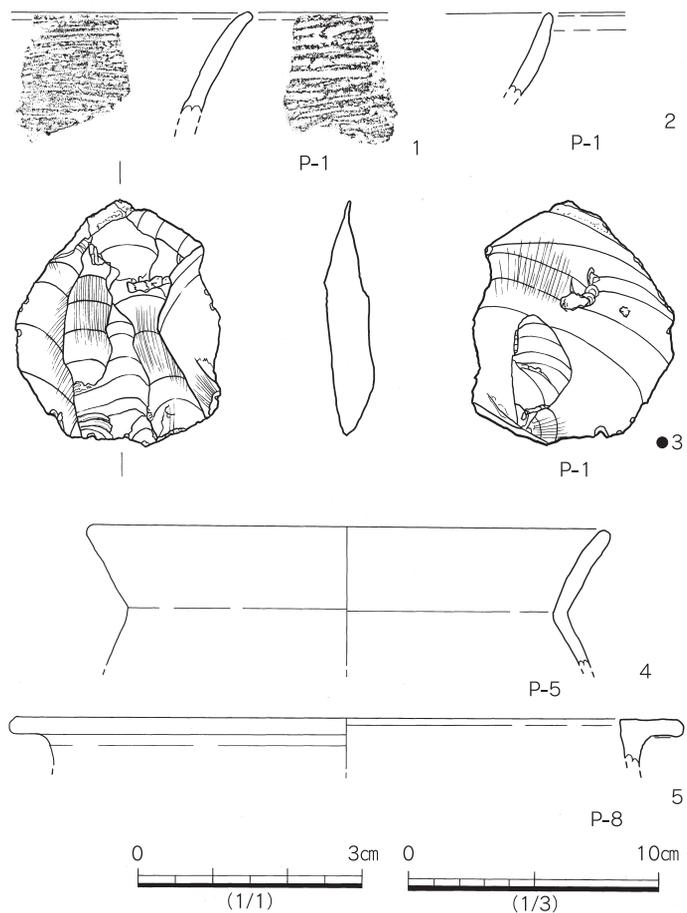
第161図 三雲石橋160番地1・2号土坑平断面実測図(1/20)

内面まで丹塗磨研を施すもので、焼成後の底部穿孔を行っている。祭祀用土器と考えられる。25は素口縁の壺で、口縁端部にX字の刻み目、頸部突帯に刻み目を施す。胴部内面はケズリ調整であり、弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。26も素口縁の壺で、頸部以下を欠損している。頸部と胴部の境に三角突帯がある。27は素口縁壺の口縁部片で、口縁内面上位に細かな横方向の刷毛目調整が見られるが、それ以下はナデ消している。28は小形壺の口縁部片か。内外面共に丹塗磨研で祭祀土器である。口縁下外面に暗文風のミガキが入る。茶褐色包含層からの出土。29は小形丸底壺で、底部を欠損する。風化が著しく調整が不明瞭である。30は蓋で、縦方向の刷毛目調整を施し、

その上位は刷毛目をナデ消している。31は丹塗磨研の高杯で、風化が著しいが、口縁上面や内面にミガキが残る。32は風化の具合から31と同一個体と考えられたが、接合するには杯部が足りないので別個体として実測した。高杯の脚部であり、杯部内面に丹塗磨研の痕跡がある。脚部外面はミガキを施す。33は鋤先口縁壺の口縁部片で、口縁が内傾しているが、口縁内面の段差をまだ残している。口縁外面は刻み目を施すが、内外面共に刷毛目調整をナデ消している。弥生時代後期中頃と考えたい。34は鋤先口縁壺の口縁部片で、33よりも内傾化し、口縁内面の段差もわずかである。口縁端部には斜方向の刻み目を施し、内外面共に刷毛目調整を残す。弥生時代終末期のもの。35は鋤先口縁壺の口縁部片で34よりも内傾化してなく口縁内面の段差もしっかり残す。口縁端部に刻み目、内外面共に刷毛目調整を残す。弥生時代後期後半。36は素口縁壺の口縁～頸部片で、頸部と胴部の境に台形状の突帯を1条巡らせる。口縁端部に刻み目を施し、頸部外面は風化が著しく調整不明瞭であるが、内面は刷毛目調整が良く残っている。37は複合口縁壺の胴部を欠損するもので、全体的に器表面が磨滅しており、頸部と胴部の境に

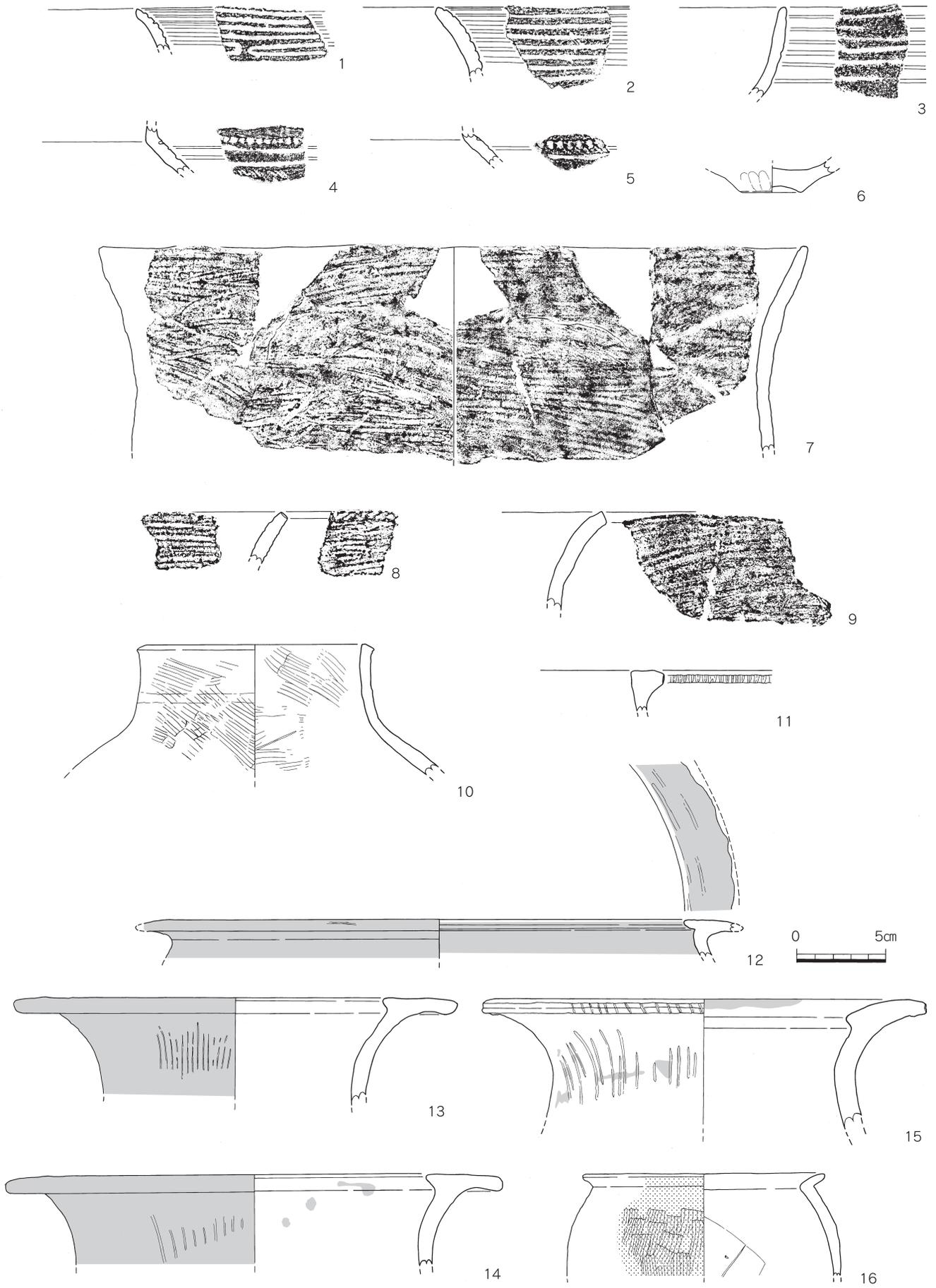


第162図 三雲石橋160番地1・2号土坑出土遺物実測図 (●は1/1、1/3)

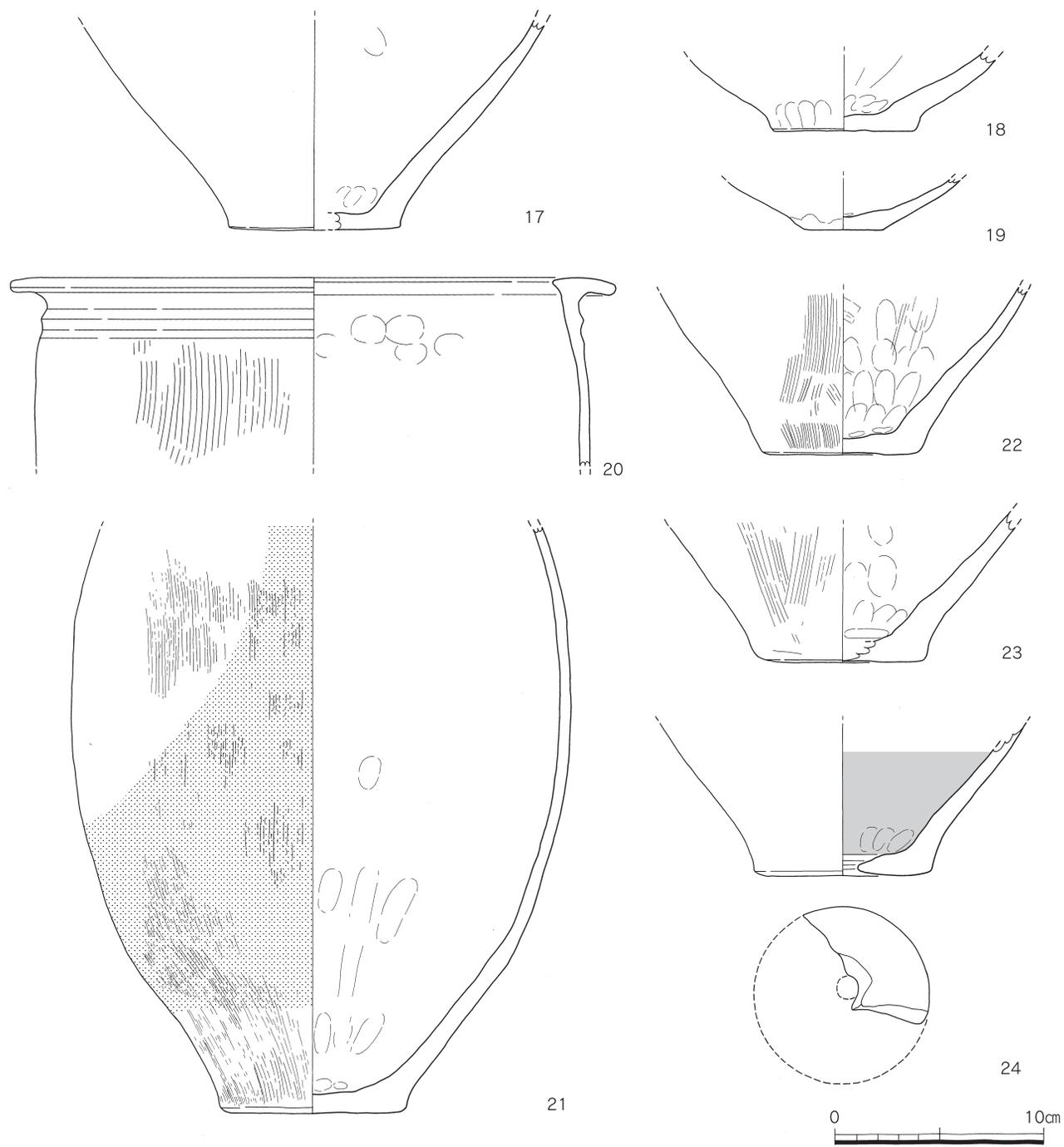


第163図 三雲石橋160番地ピット出土遺物実測図 (●は1/1、1/3)

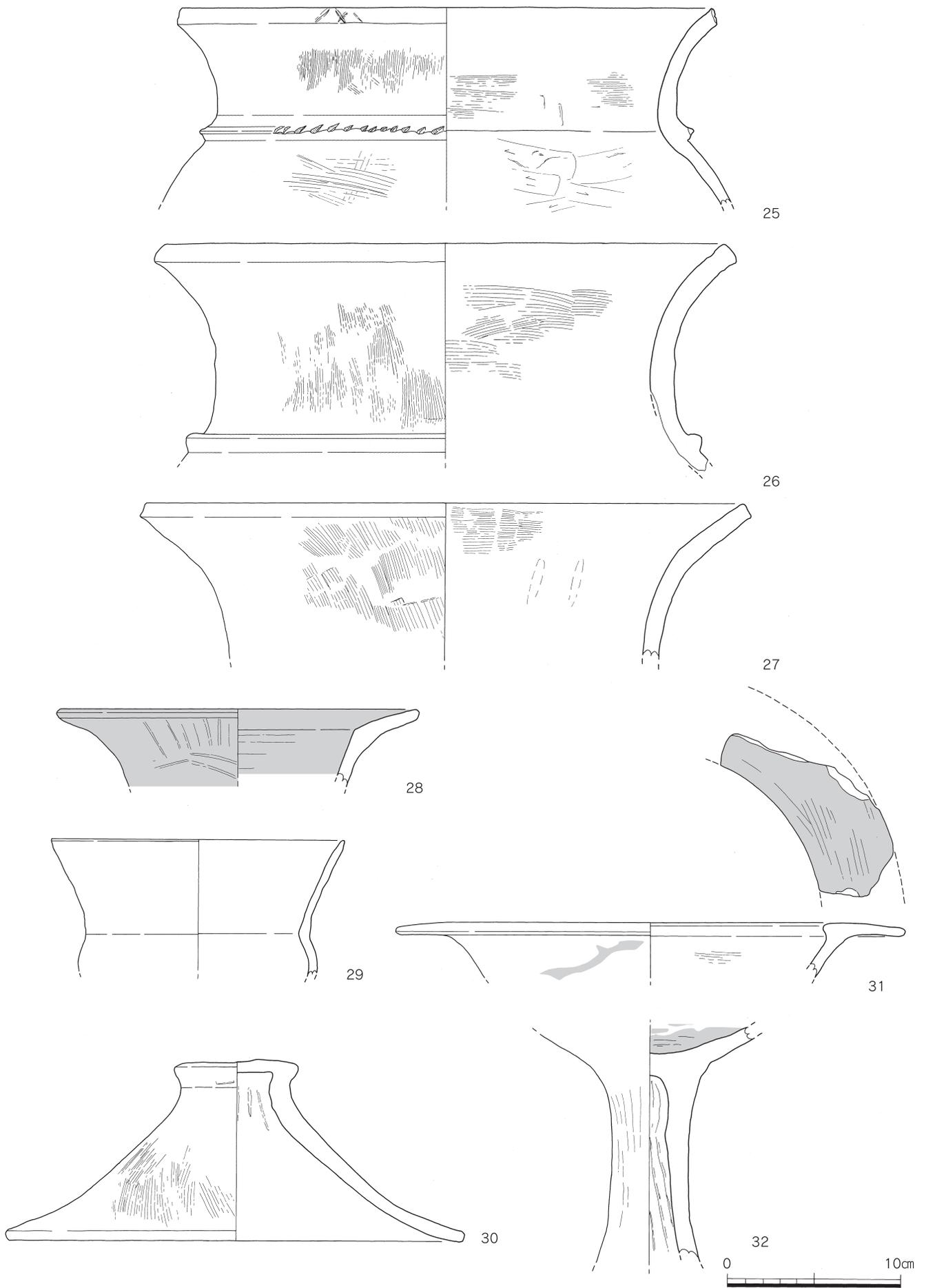
ある三角突帯も丸みを帯びる。外面は刷毛目調整を残したままにしている。38は複合口縁壺の口縁～頸部片で、口縁端部を欠損するが、直立気味に立ち上がる。頸部外面は縦方向の刷毛目調整を施し、内面も刷毛目調整が行われていると考えられるが、内面の摩耗は著しく不明瞭であった。39も口縁が直立気味に立ち上がる複合口縁壺で、内外面共に刷毛目調整をよく残す。40は口縁が外反する複合口縁壺で、口縁以下を欠損する。41は、くの字口縁の甕で、内外面共にナデ調整である。42もくの字口縁の甕で、口縁部片である。43は甕の底部片で、丸底に近い。風化が著しいため、調整は不明瞭である。44は甕の底部片で、平底であるが若干の丸みを帯びる。45は甕の底部片で、外面は板ナデ調整、内面は指オサエである。46は器台で口縁部が外反する。外面の調整は縦方向の刷毛目調整で、内面は主にナデ調整である。47は器台で、外面を指ナデ調整で成形している。口縁部を欠損する。48は器台片で、外面をナデ調整で成形する。49は器台の脚部片で、内外面共に指ナデ調整である。50は器台で脚部を欠損する。口縁部は上位で外方へと曲がり、内外面を刷毛目調整している。51は黒曜石製の石鏃で、平面が二等辺三角形を呈し、抉りが深い。52は黒曜石製の石鏃で平面形が二等辺三角形で、抉りが深い。53は黒曜石製の石鏃で、平面形は丸みを帯びる。両面共に脚部は主要剥離面を残し、最低限の押圧剥離調整で作っている。54は剥片鏃で、黒曜石製である。主要剥離面を残し、抉りの部分のみ押圧剥離調整を行う。55はサヌカイト製の打製石鏃で、抉り部分は細かな押圧剥離を行っている。56はサヌカイトの石鏃未成品で、断面が三角形である。主要剥離面を残し、押圧剥離をまだ行っていない。57は黒曜石の縦長剥片に押圧剥離を加えて、刃部を形成していることから、石刃と考えられる。58は縦長剥片で、黒曜石である。左側面は自然面が残る。59は黒曜石の縦長剥片に押圧剥離調整が行われる石刃である。60は縦長剥片で、黒曜石製である。茶褐色包含層から出土。61は縦長剥片の先端部を切断したもので、黒曜石製である。62も縦長剥片の先端部を切断したもので、黒曜石製である。63は打製石斧で、表面は自然面を残し、裏面は主要剥離面を残す。調整剥離で、握部、刃部を作る。64は磨製石斧で、頂部と刃部を欠損する。65は砥石で、両面の一部を砥面として利用している。



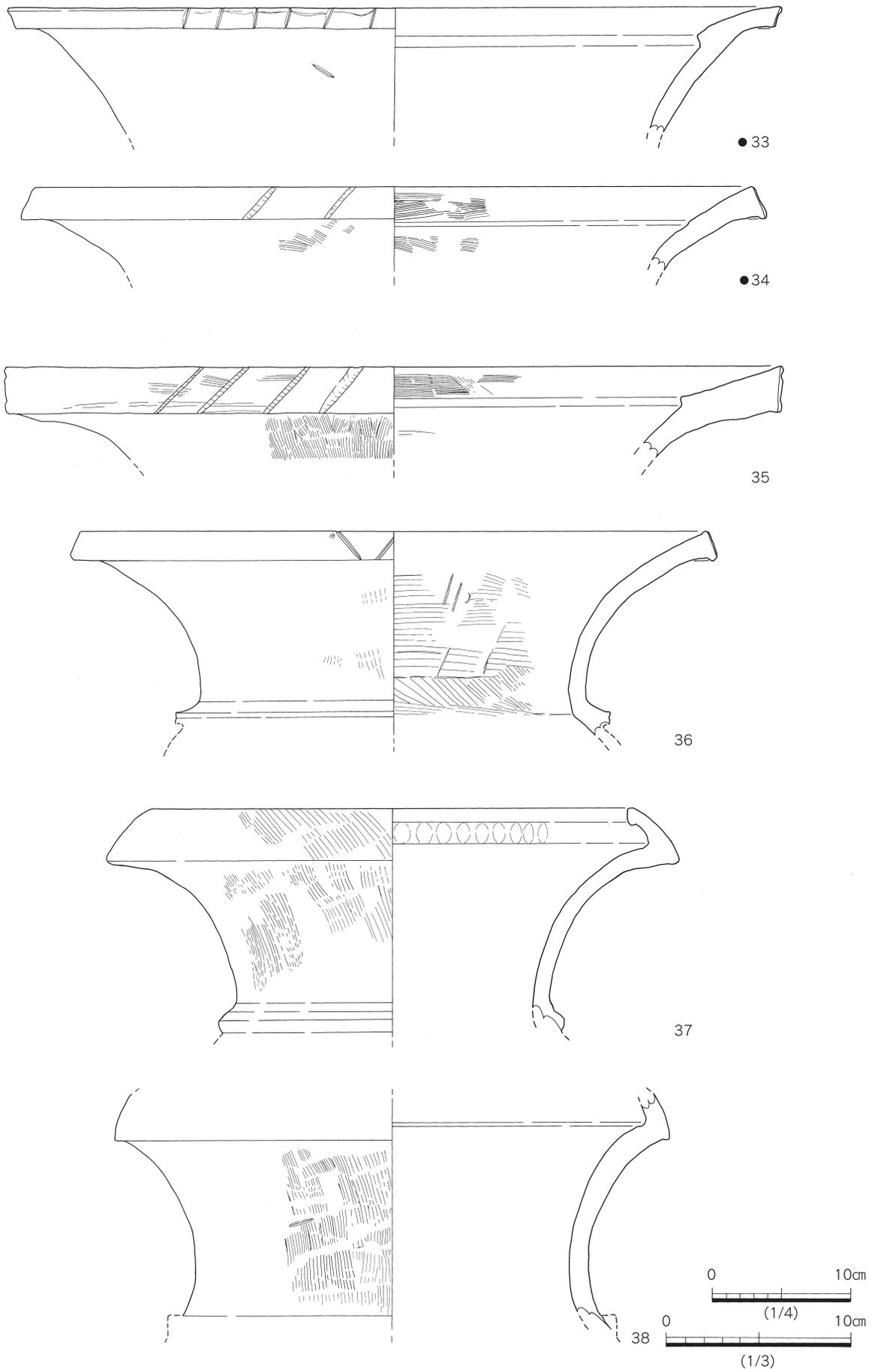
第164図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測図1 (1/3)



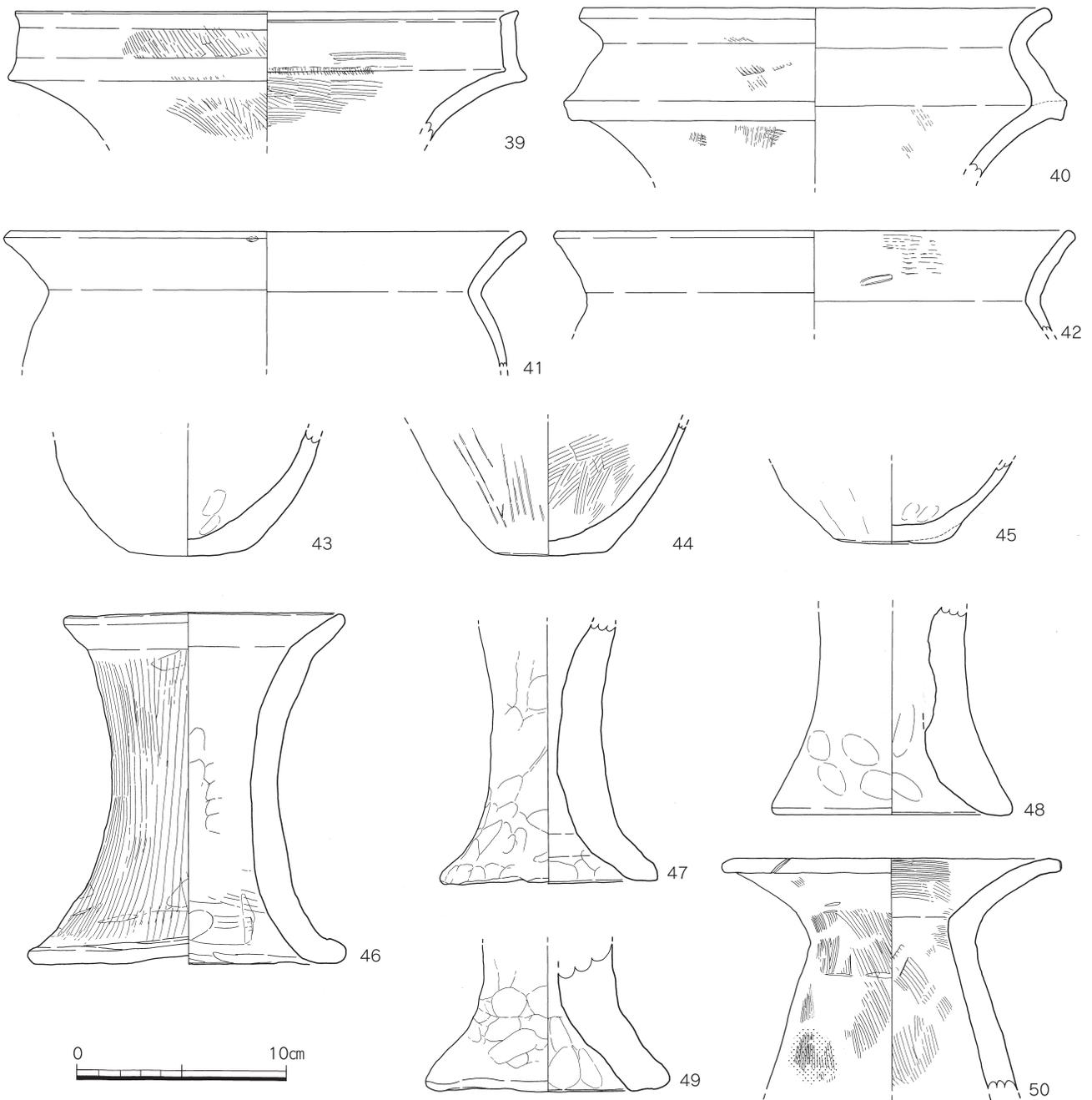
第165図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測図2 (1/3)



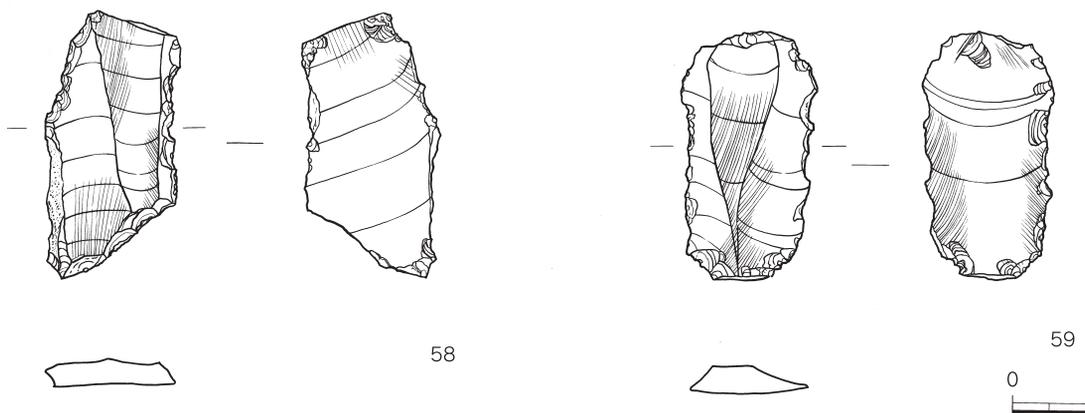
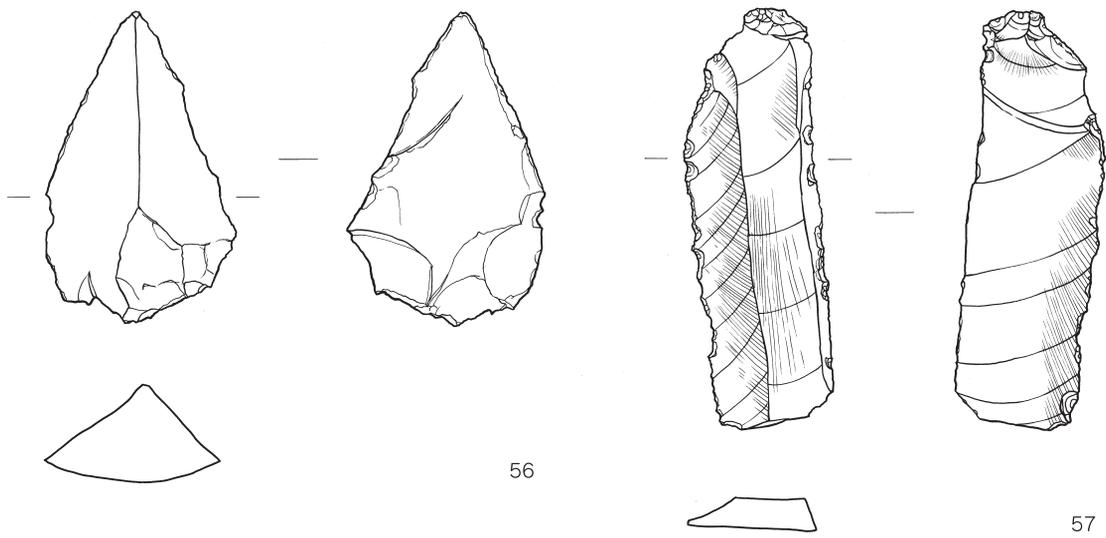
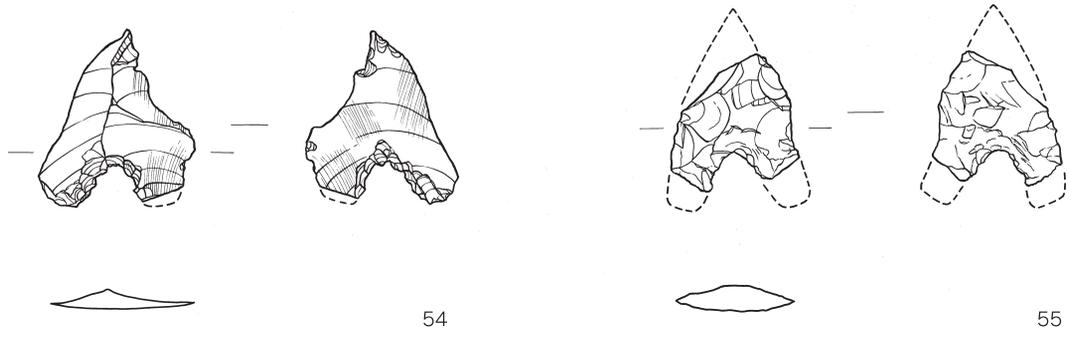
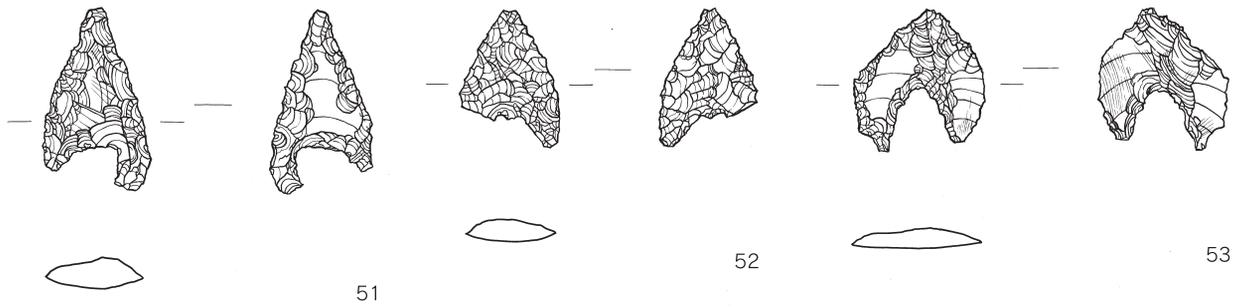
第166図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測図3 (1/3)



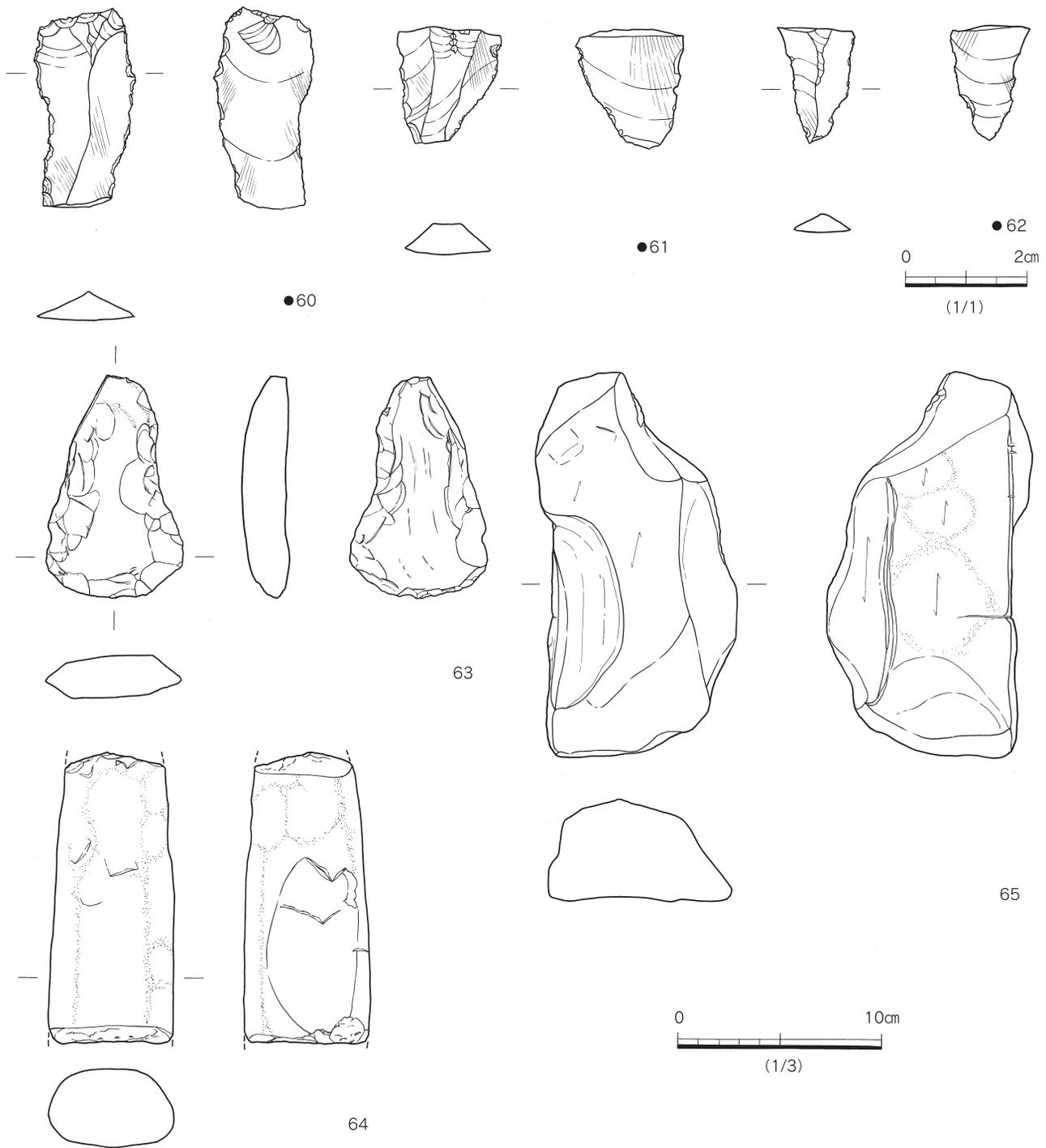
第167図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測図4 (1/3、●は1/4)



第168図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測図5 (1/3)



第169图 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測図6 (1/1)



第170図 三雲石橋160番地包含層出土遺物実測図7 (●は1/1、1/3)

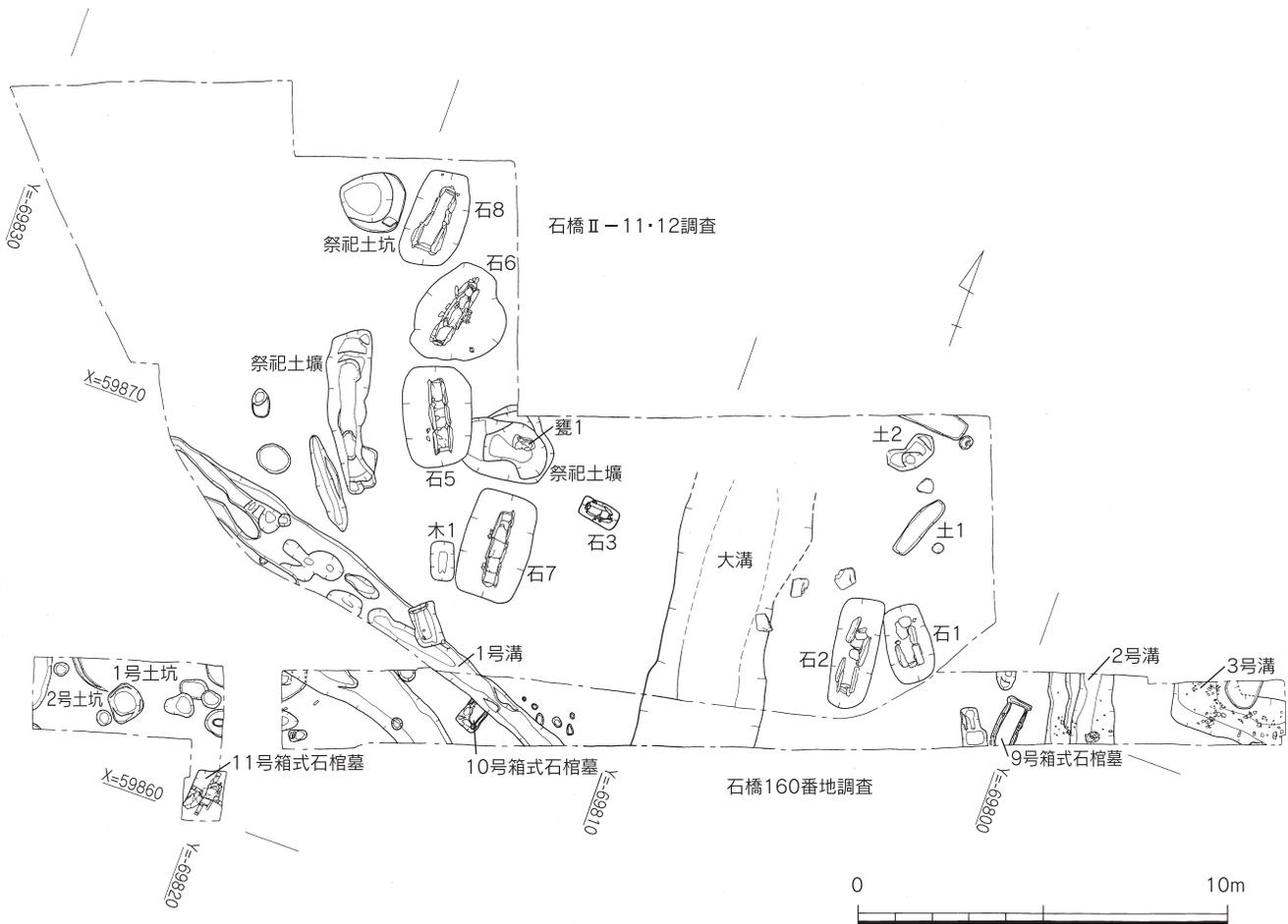
3. 小結

石橋地区160番地及び石橋Ⅱ-11, 12の遺構は、合わせて箱式石棺墓11基、木棺墓1基、甕棺墓1基、土壇墓2基、祭祀土壇3基、大溝1条、溝3条である。

この墓域は、窪地状の大溝が墓道となり、東西に群が分かれている。西群は8号箱式石棺墓～10号箱式石棺墓まで列をなし、5号箱式石棺墓から、硬玉製勾玉1、碧玉製管玉16、ガラス小玉7、短冊形鉄斧1、鉄鏃1、6号箱式石棺墓から鉄鎌1、11号箱式石棺墓から、ガラス小玉2が出土している。祭祀土壇からは布留期古段階の土器が出土しており、概ねこの時期に比定される。11号箱式石棺墓からは、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土しており、東群の中でも離れた位置にあることから、別群と考えられる。

一方、東群では、1, 2, 9号箱式石棺墓が存在するが、大溝と2号溝に挟まれた位置にあり、2号溝は弥生時代後期末に埋没していることから、これら箱式石棺墓も同時期か、これより古い時期を想定する。

したがって、この墓域では、弥生時代後期後半～末にかけて、東群から箱式石棺墓の造営が開始され、続いて、弥生時代終末～古墳時代初頭の11号箱式石棺墓の別群、布留期に西群の箱式石棺墓が造られていることが分かる。布留期には、端山古墳、築山古墳に代表される前方後円墳がそれまでの集落域に形成され、集落構造が変化するが、下位の集団墓では、弥生時代を踏襲した墓構造を継続しており、複雑な階層構造の一端を垣間見ることができる。 (江崎靖隆)



第171図 三雲石橋160番地遺跡全体図 (1/200)

第4章 まとめ

I. 番上土器溜りについて

三雲・井原遺跡は伊都国の王都と位置付けられる遺跡であり、糸島市教育委員会では平成6年より継続的に発掘調査を実施してきた。平成26年度から28年度にかけては、遺跡の中央に位置する番上地区の調査を行った。番上地区では、これまでに88㎡のトレンチ状の調査区から30点程度の楽浪系土器が出土していた（番上Ⅱ-5）。この楽浪系土器は北部九州や山陰の遺跡から1～数点出土することが多いが、番上地区のように狭い範囲から多器種にわたる楽浪系土器が出土することはなく、武末純一氏は、このタイプの出土傾向を三雲番上型として設定した（武末1991）。三雲番上型は楽浪郡から渡来した人々（楽浪人）の居住（滞在）の痕跡を示すもので、対外交渉に関わった渡来人による文字使用も予測されていた（武末1996）。

しかし、番上Ⅱ-5ではトレンチ状の調査区であったため、遺構の広がりやその性格の把握に限界があり、楽浪人が滞在した施設も近辺に存在すると想定されることから、その有無の確認のためにも発掘調査の必要性が高まってきた。そこで平成26年度には番上Ⅱ-5の北側（三雲332番地）、平成27・28年度には南側（三雲330番地）の調査を実施した。

その結果、三雲番上土器溜りの規模は東西38m、南北28mの平面が東西に長軸をもつ不整楕円形を呈するもので、面積は約835㎡である。調査終了後は遺構検出面に真砂土をかぶせて、現地で保存されている。深さは遺構検出面より1.4mであり、福岡県教育委員会が調査した番上Ⅱ-5調査区付近が最も深くなり、平面的にも土器溜りの中心に位置する。北側にあたる三雲332番地の調査では土器溜りに向かう明確な落ち込みは確認されず、南側の三雲330番地では明確な落ち込みが見られるものの、最上層にあたる黒褐色土層が10～20cmの厚さで広い範囲で見られ、そこに大量の土器や石器類が確認された。板石硯もこの層から出土している。

土器溜りは332番地10Bグリッドより弥生前期中頃と思われる壺の肩部片が出土しており、この時期から形成されたといえるが、確実なものはこれのみで、量的に増加するのは弥生時代前期末・中期初頭の時期からである。最上層からは弥生時代終末期の土器が出土しており、土器溜りの時期は弥生時代前期～終末期にかけて形成されたといえる。

なお、土器溜りの調査面積は約205.5㎡で（福岡県88㎡、332番地47㎡、330番地70.5㎡）、全体の約24.6%であるが、332・330番地ともに平面での確認が大部分をしめる。

II. 番上地区出土の楽浪系土器・三韓系土器について

糸島市は楽浪系土器が集中する地域として知られており、これまで集成的研究および、出土遺跡の性格付けが行われてきた（寺井2007他、武末2016他・森本2018他）。楽浪系土器は比恵遺跡など弥生時代中期後半段階から見られるが、出土数・出土遺跡が増加するのが弥生時代後期後半から終末期の時期である。特に三雲・井原遺跡番上地区の土器溜りからは、武末氏が三雲番上型とするよ

うに、広大な遺跡の一地点から多種多量の楽浪系土器が出土しており、『魏志』倭人伝の記述と併せて、楽浪郡や帯方郡からの使者の居住を示すものとして認識されている（武末1991）。ただ、土器溜りという包含層からの出土であるため、その所属時期が問題となっていた。今回の調査ではグリッドを設け、レベルを入れながら取り上げを進めていったが、弥生時代中期後半から終末期にかけての弥生土器が混在する中から出土しており、個々の時期特定は難しい。未掘部分が多く弥生時代中期後半に持ち込まれた可能性はあるものの、今回確認された楽浪系土器の大半は後期後半～終末期に廃棄されたと指摘できるにとどまる。今後は武末氏が試みたように、楽浪系土器の型式分類を行い、その新古を確認していく必要があるだろう（武末2016b）。

なお、楽浪系土器は土器溜りから48点出土している。出土点数の比較だけならば、原の辻遺跡では368点確認されており、番上地区よりも多いが、これまでも指摘されているように遺跡の各地区から分散的に出土している（古澤2016）。楽浪系土器の分散と集中という出土傾向の差が、一支と伊都における楽浪人との関わり方の違いを示している。

今回報告した楽浪系土器は小片が多く、福岡県教育委員会調査の番上Ⅱ-5調査区の状況とは異なる。器種は壺と短頸壺が多い。また、これまで古墳時代に入ると楽浪系土器の集中はみられなかったが（久住2007）、三雲330番地2次調査で唯一、遺構を掘り下げた古墳時代の住居跡から楽浪系土器が出土しており、調査の多寡による可能性も考慮する必要があるだろう。

三韓系土器は15点出土しているが、土器溜りからは出土していない。短頸壺が多い印象を受けるが、楽浪系土器の集中とは異なる様相を見せるのは、森本氏の指摘するとおりである。遺構は包含層からの出土が多く、遺構をほとんど掘り下げていない現段階では性格付けが難しい状況である。

Ⅲ. 板石硯について

日本列島における文字の受容が、いつから始まるのかについては、古くから関心が抱かれている研究テーマである。たとえば石母田正氏はマルクス・エンゲルスの段階区分に若干の集成と整理を加えて、日本の歴史を①野蛮の段階、②未開の段階、③文明の段階に区分するが、③の指標として挙げられているものが「文字の使用」であり、5世紀から確実な証拠が確認されることから、4世紀末～5世紀に文明の段階になるとする（石母田1962）。

大きな流れで現段階の文字受容をみると、まず、紀元前後に王や有力者の甕棺に副葬される連弧文鏡にある銘文などの存在から、物証的な文字との出会いがあり、その交渉の過程における文字使用も想定される。そのため、前108年の漢四郡の設置は、列島における文字受容の大きな契機となっている。その後、57年の奴国の遣使や107年の倭国王帥升の遣使、239年以降における卑弥呼の遣使などの記録により、文字の読み書きのできる人物の活躍が認められる。4世紀の後半とされる石上神宮の七支刀は朝鮮半島（百済）と日本列島間の交渉にも漢字が用いられたことを示し、5世紀になると稲荷山古墳鉄剣や江田船山古墳鉄刀の銘文にあるように列島内で文字を使った表記が確実にみられるようになる（松木2009）。

なお、江田船山古墳鉄刀の銘文末尾には「作刀者伊太和、書者張安也」という表記や倭の五王の

ひとりである讚による宋への遣使で、司馬曹達が派遣されたという記録などがある。当時、中国的な姓を名乗るものは、①倭国王とその一族（倭武、倭隋など）と②渡来系の人物に限られることから（吉村1996）、実際の対外交流に際し、文章を執筆し、中国に派遣されるのは渡来系の人物が主体であったといえる。したがって、番上地区出土の板石硯の使用者は、5世紀段階の状況や、楽浪系土器が集中する地点での確認であることから、主として楽浪郡や帯方郡などの中国系の渡来人であると推測される。

また、出土品に記されたものから文字受容に迫る研究もある（和氣2003）。しかし、1文字だけではデザイン的なものとしての受容とする見解もあり（平川2000）、決め手を欠くのが現状であるが、三雲番上硯の出土以降、事例が増えている板石硯の分布東限の広がりによっては再評価が進むと考えられる。

文字の使用には文房具が必要であるが、吉田恵二氏は硯が広く普及するのは漢代であり、量的に多数をしめるのが石硯であること。石硯のなかでも長方形板石硯が数も多く、普及範囲が広いことを指摘した（吉田1993）。のちに長方形板石硯の分類として

A類；横断面の形態から断面が長方形で外面全体を磨いて整形するもの

B類；断面が逆台形で外面全体を平坦に磨いて整形するもの

C類；断面逆台形で上面と側面上端のみを平坦に磨いて整形するもの

を提示し、A類→B類→C類の変遷を考える（吉田2003）。この分類に従うと、番上地区から出土した3点の板石硯は、平断面形態は別として、加工方法からみるとC類に該当する。なお、吉田氏は中国・朝鮮・日本における出土遺構の違いについても指摘する。現段階では、中国では墳墓から出土し、韓国と日本では集落からの出土である。

国内における板石硯の出土は、2001年の島根県田和山遺跡の出土を嚆矢とする。田和山遺跡は三重環濠のなかに掘立柱建物が確認されており、板石硯は弥生時代中期後半に埋没した環濠の中から出土している（岡崎2005）。板石硯は一辺のみを残す破片で、現存長4.1cm、現存幅3.3cm、厚さ0.8cmを測る。硯面は灰色で平滑、側面は斜研磨痕を残す。断面は逆台形を呈し、裏面は打ち欠いたままであり、吉田分類のC類に該当する。ただ、実測図の上下の割口は右側の割口よりも新しく、乳白色を呈する。石材は凝灰岩と報告されている。

2016年に三雲・井原遺跡番上地区330番地（平成27年度調査地点）で1例目、同年夏には番上地区332番地（平成26年度調査地点）で2例目の板石硯が確認された。その後、報告書刊行に至るまでの整理段階でもうひとつの板石硯が確認された。類例の増加に伴う再検討では、2例目の板石硯については、疑問視する見解もあり、今後検討を進めていく必要がある。

1例目の板石硯は弥生時代の対外交渉の窓口である伊都国の王都である三雲・井原遺跡で確認されたことから、2016年3月2日の新聞各紙朝刊で大きく取り上げられることとなった。そこで、報告書刊行前であったが、速報として、石硯と鑑定した武末純一氏と連名で速報的資料紹介を行った（武末・平尾2016）。

そのあと、福岡県内各地で資料の再確認が進み、翌2017年には筑前町中原遺跡で2001年に砥石として報告されていた3号住居跡出土石材が柳田康雄氏により板石硯であると指摘された（柳田

2017)。本例は最大長9.4cm、最大幅7.4cm、厚さが0.69cmを測る。石材は灰白色粘板岩質頁岩で、住居跡の時期は弥生時代後期初頭である。

また、同年11月には筑前町薬師ノ上遺跡で板状石製品として報告されていた石材が柳田氏と石橋新次氏により板石硯であると指摘された（柳田・石橋2017）。石材は砂質頁岩で、平面形態は短冊形を呈するが、上面は低い山形を呈する。両面ともに研磨されているが、片面のみに使用にともなう研磨痕が確認されている。全長15.3cm、最大幅6.3cm、最大厚さ0.9cmを測る。本報告では板石硯1について、生きている面を側面として、報告しているが、その面を下辺とし、薬師の上例と同様な平面形態である可能性も指摘されている（久住猛雄氏ご教示）。

その後、柳田康雄氏や久住猛雄氏らの継続的な資料調査により、北部九州を中心に確認事例が増加し、北部九州における拠点集落では一程度の板石硯の存在が意識されるようになってきた。また、これまで古墳時代の硯については検討されていなかったが、福岡市比恵遺跡143次調査で古墳時代前期の溝から板石硯が出土、報告され（柳田2018、朝岡編2018）、最近、福岡市西新町遺跡で5点の板石硯が確認された（平成30年11月23日西日本新聞朝刊）。このように弥生時代・古墳時代における板石硯の出土・再確認は今後も継続するものと思われる。

この状況を踏まえ、現段階における日本列島を中心とした文字との接触から文字社会への変遷を時系列にみていくと以下のとおりとなる。

前108年 楽浪郡などの漢四郡の設置 「歳時を以て来り献見すという」『漢書』地理志

貞柏洞364号墳から初元4（前45）年の楽浪郡県別戸籍簿木牘と『論語』竹簡出土

紀元前後 田和山硯、三雲南小路出土連弧文鏡など…列島における文字との出会いか

・ 勸島遺跡B地区カ-245号住居跡；板石硯

・ 茶戸里遺跡1号墓；筆・削刀・天秤権

57年 奴国の遣使 志賀島の金印「漢倭奴國王」

107年 倭国王帥升等遣使

184～189年 東大寺山古墳「中平」銘鉄刀

弥生後期～終末 三雲番上硯（「(伊都国は)郡使の往来常に駐まる所なり」）

239年6月 卑弥呼遣使

239年12月 卑弥呼への詔書 金印紫綬

240年 詔書・印綬を奉じて倭王に拝仮し、倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。

247年 張政等を遣わし、因って詔書・黄幢をもたらし、難升米に拝仮せしめ、檄を為りてこれを告諭す。

・ 西新町遺跡板石硯

・ 楽浪郡・帯方郡消滅（313・314年）

369年か 石上神宮七支刀（朝鮮と日本の中で漢字の利用）

5世紀 倭の五王の遣使

稲荷山古墳鉄剣、江田船山古墳鉄刀「作刀者伊太和、書者張安也」

- ・高句麗好太王碑（414年）、高句麗壁画古墳に年号などの墨書銘
- 6世紀 仏教經典の伝来など
 - ・韓国では6世紀代の木簡増加
- 6世紀後半 朝鮮半島の渡来人の影響で木簡使用開始（市2015）
- 7世紀前半 中国外交用文書作成、史書の編纂、冠位制度
- 640年頃 木簡のある程度の普及（市2015）…飛鳥・難波等の王都とその周辺のみ
- 7世紀後半 法典、貨幣、戸籍…天武朝に木簡の爆発的増加（市2015）
- 702年 「正倉院文書」大宝二年戸籍…日本における紙文書の最古遺存例

今後は、板石硯を介して想定される列島諸地域における文字受容がどこまでさかのぼるのか、また、硯の地域的広がりの確認、特に九州以東における広がり、古墳時代の板石硯の確認等がすすみ、その都度、上記で示した変遷も書き換えられていくものと思われる^{注1}。また、硯台や木簡・竹簡などの板石硯以外のものによる文字受容の確認も進められるだろう。

なお、5世紀段階の状況は不明な点が多いが、参考になるものとして、すでに吉田氏により紹介されているが、敦煌仏爺廟・湾頭層台1号墓出土例がある（福岡市美術館・西日本新聞社1985）。1号墓出土の板石硯は長さ9.0cm、幅6.4cm、厚さ0.7cmのもので、硯面には墨の痕跡が多く残る。この墓からは鎮墓罐も出土し、その胴部に「庚子六年正月／水未朔廿七日己酉／敦煌郡敦煌／東郷昌利／里張輔字／徳政身死今下／什瓶■人五／穀當■／重複地上生／人青烏子告／北辰詔令死／者自受其／殃罰不■／加齒移殃轉／咎遂與與他里／如律令」と朱書きで鎮墓文が記されている。庚子六年は西涼の年号で405年であり、5世紀初頭の中国周縁地域で用いられた硯の様相を示すものとして興味深い。

弥生時代における板石硯国内初出例となった田和山遺跡での発見から、三雲・井原遺跡番上地区における出土まで15年の期間を要した。しかし、本例の確認以降、上述したように北部九州で陸続して確認例が増加している。これらは三雲・井原遺跡における出土を契機とし、北部九州の主要遺跡に板石硯が存在する可能性を示すものとして研究者および自治体の文化財担当職員等に広く認識された結果といえよう。このように数年前まで抱かれていた弥生時代社会のイメージを大きく変えるひとつの要因として本書で報告した板石硯の出土があり、本例を含む一連の硯の確認とそれに付随する研究の進展は弥生時代研究における一つの画期として位置づけられよう。

IV. 鉄製品について

三雲・井原遺跡における鉄器は、2013年の集成段階で221点出土している。その中でも番上地区からは鉄斧、素環頭刀子、ヤリガンナ、鉄鎌、鉄鋸など38点が出土し、割合で全体の17%を占め（河合2013）、本遺跡内で最も鉄器が集中する地区である（河合2013）。また、鉄素材の可能性のある用途不明鉄器が一定量認められることも重要である。

本報告では三雲332番地で11点、三雲330番地1・2次調査で36点出土しており、番上地区からは

総数85点の出土となり、全体の31.7%という高い割合を占めるようになった。また、今回の調査では遺構の平面確認に留まる箇所も多く、より多くの鉄器が現地に保存されていることが想定されることから、番上地区における鉄器の集中がより明確になってきた。

鉄器は土器溜りや包含層からの出土が多く、時期の特定は難しいが、弥生時代中期後半～後期が主体で、一部、古墳時代前期のものが含まれる。確認された鉄器は鍬・鍬・鉄鎌・ヤリガンナ・U字形鋤先・刀・鉄斧などからなるが、特に多いものが棒状鉄製品である。棒状鉄製品は折れているものが多いが、長さが5～6 cm程度、幅、厚さともに1 cm未満、断面は方形もしくは円形を呈する。もちろん本調査区からも出土している鉄鍬の茎の可能性もあるが、やや肉厚であることや折れない棒状鉄製品も出土していることから、鉄素材の可能性が高い。棒状鉄製品については、村田裕一氏の検討があり、鍛打で成形できるもので、小型の鉄器の製作に用いられたとされる（村田2013）。

また、中小の板状鉄製品も複数出土している。これは岡崎敬氏が地金と指摘し、村上恭通氏も追認しているように鉄素材と認識されており（村上2007）、糸島市内では御床松原遺跡などで出土している（井上編1983）。そのほか、鉄素材の可能性も指摘される板状鉄斧と思われるものや直方体に近い鑄造鉄塊も出土しており、番上地区ではさまざまな鉄素材が持ち込まれたことが判明した。しかし、現段階では調査の制約もあり、鍛冶炉等は確認されていない。今後の調査の課題である。

なお、北部九州における鉄器生産は奴国域を中心に行われていたとする見解が主流であるが、番上地区の調査の結果、多様な鉄素材が確認されたことから、その入手の窓口のひとつが伊都国域であり、御床松原遺跡等の海浜の集落を介して、三雲・井原遺跡に集積され、各地に分配されていた可能性も考えられる。その具体的な姿の復元も大きな課題である。（平尾和久）

【注】

注1 平成31（2019）年2月22日の新聞各紙によると、柳田氏が潤地頭給遺跡、中原遺跡出土品に弥生時代中期中頃の板石硯が製作された痕跡を確認したと報道している。

【参考文献】

- 朝岡俊也編2018『比恵82』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1350集
- 石母田正1962「古代史概説」『岩波講座日本歴史1』原始および古代（1）
- 市 大樹2015「黎明期の日本古代木簡」『国立歴史民俗博物館研究報告』194
- 井上裕弘編1983『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集
- 岡崎 敬1956「日本における初期鉄製品の諸問題」『考古学雑誌』42-1
- 岡崎雄二郎2005「環濠内出土石板状石製品について」『田和山遺跡』松江市教育委員会
- 河合 修2013「鉄器」『三雲・井原遺跡』糸島市文化財調査報告書第10集
- 久住猛雄2007「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』53-4
- 白井克也2004「朝鮮半島の文化と古代出雲」『田和山遺跡国史跡指定3周年記念講演記録集』
- 曹 喜勝2003「絹と硯を始めとした楽浪遺物を通じて観た楽浪文化の成立と出雲地方への伝播」『楽浪文化と古代出雲』
- 武末純一1991「弥生時代の楽浪系土器と三韓系土器—瓦質土器を中心に—」『地方史研究』41-5

- 武末純一1996「邪馬台国への道」『考古学による日本歴史』5 政治
- 武末純一2004「遺物からみた楽浪郡と北部九州の交流」『海を越えたメッセージ～楽浪交流展～』伊都国歴史博物館
- 武末純一2016 a 「邪馬台国時代前後の交易と文字使用」『纏向発見と邪馬台国の全貌』
- 武末純一2016 b 「日本列島の楽浪系土器概観」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集
- 武末純一2018「対外交渉における文字使用」『伊都国人と文字』糸島市教育委員会
- 武末純一2018「日韓交流と渡来人—古墳時代前期以前—」『古代東ユーラシア研究センター年報』4
- 武末純一・平尾和久2016「〈速報〉三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢』76
- 寺井 誠2007「日本列島出土楽浪系土器についての基礎的研究」『古文化談叢』56
- 寺井 誠2009「一の町遺跡及び糸島地域出土の朝鮮半島系土器」『一の町遺跡発掘調査概要』志摩町文化財調査報告書第30集
- 比佐陽一郎2007「福岡市飯倉D遺跡出土鉄器の再検討」『九州考古学』82
- 平川 南1999「福岡県前原市三雲遺跡群の刻書土器」『考古学ジャーナル』440
- 平川 南2000「古代社会と文字のはじまり」『墨書土器の研究』
- 福岡市美術館・西日本新聞社1985『中国敦煌展』
- 古澤義久2016「原の辻遺跡の性格と他地域との関係」『靉島と原の辻を東海からみた東アジア交流の様相』
- 松木武彦2009「文字のビッグバン」『進化考古学の大冒険』新潮選書
- 村上恭通2007「鉄素材論」『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 村上恭通2007「鉄素材論の再検討」『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 村田裕一2013「棒状鉄器考」『やまぐち学の構築』9
- 森 貴教2018「石器生産と消費形態からみた北部九州弥生社会の特質」『石器の生産・消費からみた弥生社会』
- 森本幹彦2010「玄界灘沿岸地域における朝鮮半島系土器の様相2」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討』第59回埋蔵文化財研究集会
- 森本幹彦2018「玄界灘沿岸地域における韓半島系土器の様相—粘土帯土器・三韓系土器・楽浪系土器—」『土器・金属器の韓日交渉』
- 柳田康雄2017「福岡県筑前町東小田中原遺跡の石硯」『纏向学研究』5
- 柳田康雄2018「弥生時代の長方形板石硯」『倭・日本における漢字文化の受容と国家形成』國學院大學研究開発推進機構 第44回日本文化を知る講座
- 柳田康雄・石橋新次2017「福岡県筑前町薬師ノ上遺跡の石硯」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』
- 吉田恵二1993「長方形板石硯考」『論苑考古学』
- 吉田恵二2003「陶硯研究の現状と課題」『古代の陶硯をめぐる諸問題』
- 吉村武彦1996「六世紀における氏・姓制の研究」『明治大学人文科学研究所紀要』39
- 李 成市2015「平壤楽浪地区出土『論語』竹簡の歴史的 성격」『国立歴史民俗博物館研究報告』194
- 和氣清章2003「倭国における文字受容」『続文化財学論集』

第5章 科学分析

三雲・井原遺跡番上地区出土ガラス小玉の保存科学的調査

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

1. はじめに

三雲・井原遺跡番上地区で出土したガラス小玉について、デジタルマイクロスコープによる製作技法の観察と、蛍光X線分析による材質調査を行った。

近代以前のガラスは珪素を主成分とする珪酸塩ガラスであるが、近年の理化学機器を用いた調査の広まりによって、融剤や着色剤等から幾つかに分類され、それぞれの系譜や変遷が明らかにされてきている（奈良文化財研究所2006・肥塚2010）。また、ガラス製品の中でも数多く出土する小玉の類には、製作技法も複数存在することが知られている（大賀2002）。

2. 調査の方法

調査対象とした資料は当該調査区の包含層や住居跡から出土したガラス小玉7点と管玉1点である。遺構（資料）の時期は弥生後期と考えられる。今回の調査は、これら小玉の製作技法と、基礎ガラス、着色剤の推定を目的としたものである。調査には福岡市埋蔵文化財センターの装置を使用した。

デジタルマイクロスコープはHIROX社製KH-8700で、観察倍率は20～160倍が使用できる。観察は、表面の凹凸は落射光、内部の気泡や粒子の観察には透過光を用い、ガラス玉に残る気泡や不純物などの流れ、蝕像などを見て、製作技法を判別している。

蛍光X線分析は、試料にX線を照射し、試料に含まれる元素から生じる各元素ごとに特有のエネルギー値を持つ二次X線＝蛍光X線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。装置はAMETEK社製のエネルギー分散型微少部蛍光X線分析装置Orbisで、分析条件は次のとおり。

対陰極：ロジウム(Rh) / 検出器：シリコンドリフト検出器 / 印加電圧：20kV・電流値：1000 μ A / 測定雰囲気：真空 / 測定範囲0.3mm ϕ / 測定時間120秒

3. 結果

調査の結果は一覧表に示すとおりである。材質分析については、今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり、得られた元素の種類と相対強度から判定している。なお、材質的な分類は肥塚氏らによる研究（肥塚ほか2010）に従う。

淡青緑色の管玉は、風化により表層が失われているが、鉛とともにバリウムが検出されることから、鉛バリウムガラスに分類される。小玉は色調で青紺色（2点）と淡青色（5点）に分類されるが、いずれもカリウムが強く検出される特徴からカリガラスに分類される。青紺色は過去の分析事例とも併せて、マンガンや鉄を不純物として伴うコバルトによる着色が考えられる。淡青色は銅による着色が想定され、これには鉛も伴っている。

製作技法については、小玉類は概ね引伸ばした管ガラスを細分して加熱したものと見られるが、No. 5のように気泡が密集して流れが読みにくいものもあり、表中では疑問符を付している。

4. まとめ

今回調査を行ったガラス玉は、いずれも弥生時代に通有のものであり、資料の年代観と齟齬はない。

淡青緑色を呈する鉛バリウムガラスの管玉は、同じ糸島市内では三雲南小路（469番地）で1点と、平原遺跡でまとまった数の出土例があり、それぞれ分析も行われている（肥塚2000、比佐2002）。いずれも色調やエンタシス状の形態、表面が風化で失われている点などが共通する。鉛バリウムガラスの管玉には、均一な筒状を呈し、長さもそれほど長くないタイプのものが、福岡市上月隈3次調査や那珂川市安徳台遺跡の甕棺墓から出土している（比佐ほか2000、比佐2006）。これらは色調は濃緑色という点や、風化が進んでいるものは外形を残した状態で白化するなど、腐食の状況も淡青緑の管玉群と相違が見られる。埋蔵環境に起因する違いなのか、ガラスの成分の細かい点に原因があるのかは現時点で明らかにし得ないが、興味深い差異として指摘しておく。

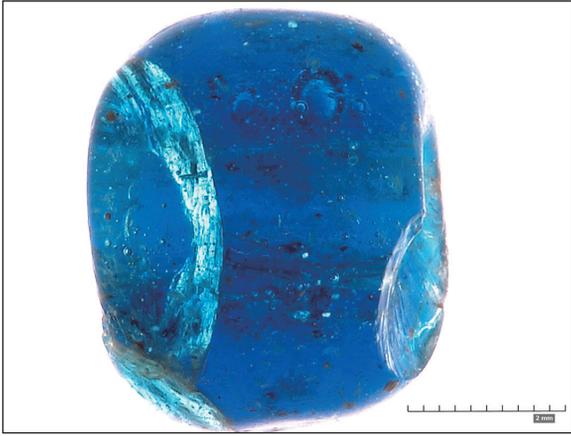
表：ガラス玉の調査結果

通番	地点	ラベル記載内容	資料名	色調	観察所見	分析所見
1	三雲番上330 1次	MB330 7-E包 小玉No10 2017. 01. 12	小玉	青紺色	気泡の多くは大きなものが少量、独立して散在。一部孔の長軸方向に平行して伸びる気泡や介在物が見られる。→引伸ばし	◎Si / ●K / ○Al、Ca、Mn、Fe / △Ti、Co、Cu →カリガラス (Co着色)
2	三雲番上330 2次	MB330 2次 9-G No14玉	小玉	淡青色	気泡は大小多数有り。一部、孔の長軸方向に平行して並ぶものが見られる。→引伸ばし。	◎Si / ●K / ○Al、Fe、Cu / △Ca、Ti、Pb →カリガラス (Cu着色)
3	三雲番上330 2次	MB330 2次 8-G No. 19管玉?	管玉	淡青色	表面は風化により失われている。蝕像は孔を取り巻くように緩やかに螺旋状に回るように見える部分もある。	◎Si / ●Pb / ○Al、Ca、Ba / △Fe、Cu →鉛バリウムガラス (Cu着色)
4	三雲番上332	MB332 東調査区包含層 (黒褐層) 2014. 11. 11	小玉	青紺色	非常に微細な気泡列や表面の蝕像が孔の長軸方向に並行する様子が見られる。→引伸ばし	◎Si / ●K / ○Al、Ca、Mn、Fe / △Ti、Co、Cu →カリガラス (Co着色)
5	三雲番上332	三雲番上 東調査区包含層 2014. 11. 21	小玉	淡青色	全体に歪で気泡は非常に多い。孔の長軸方向に平行して並ぶように見える。→引伸ばし?	◎Si / ●K / ○Al、Cu、Pb / △Ca、Ti、Fe →カリガラス (Cu着色)
6	三雲番上332	三雲番上 東調査区包含層 2014. 11. 14	小玉	淡青色	整ったドーナツ状の形状。気泡は大小が独立して散在するが、列を成すように見える部分もある。→引伸ばし?	◎Si / ●K / ○Al、Fe、Cu / △Ca、Ti、Pb →カリガラス (Cu着色)
7	三雲番上332	MB332 東住②玉 2015. 02. 17	小玉	淡青色	管状の形を残す。気泡は大小が独立して散在するが、列を成すように見える部分や引伸ばされたものもある。→引伸ばし	◎Si / ●K / ○Al、Ca、Cu / △Ti、Fe、Pb →カリガラス (Cu着色)
8	三雲番上332	MB332 西側調査区包含層 (黒褐層) 2015. 3. 2	小玉	淡青色	整ったドーナツ状の形状。気泡は大小が独立して散在するが、列を成すように見える部分もある。→引伸ばし?	◎Si / ●K / ○Al、Cu、Pb / △Ca、Ti、Fe →カリガラス (Cu着色)

記号は検出される元素の量を示す (◎>●>○>△)

【参考文献】

- 大賀克彦2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 福井県清水町教育委員会
- 肥塚隆保2000「平原遺跡出土ガラス遺物の調査と保存処理」『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集 前原市教育委員会
- 肥塚隆保2010「古代ガラスの科学」『月刊文化財』566号 第一法規
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦2010「材質とその変遷」『月刊文化財』566号 第一法規
- 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2006『埋蔵文化財ニュース』124 古代のガラス—考古科学的な調査・研究から—
- 比佐陽一郎・片多雅樹・肥塚隆保2000「上月隈遺跡群第3次調査ST007甕棺墓出土ガラス玉の保存処理及び自然科学的調査について」『上月隈遺跡群3—第3次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第634集 福岡市教育委員会
- 比佐陽一郎2002「三雲・井原遺跡出土遺物の保存科学的調査について」『三雲・井原遺跡II—南小路地区編—』前原市文化財調査報告書第78集 前原市教育委員会
- 比佐陽一郎2006「安徳台遺跡群出土ガラス製品の保存科学的調査について」『安徳台遺跡群—福岡県筑紫郡那珂川町大字安徳所在遺跡群の調査—』那珂川町文化財調査報告書第67集 那珂川町教育委員会



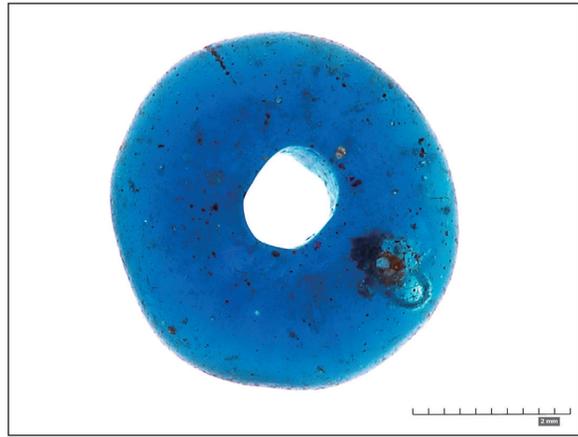
No.01



No.02



No.03



No.04



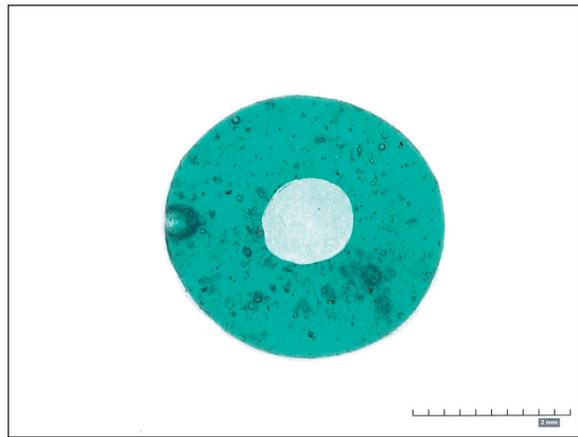
No.05



No.06



No.07



No.08

ガラス小玉のデジタルマイクロスコープ画像